HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

⑤

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

5

――――【残り28人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）
~~二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）~~
三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）
~~四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）~~
五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）
~~六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）~~
~~七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）~~
~~八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）~~
九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）
~~十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）~~
十　一　番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）
~~十　二　番　緒方　英二　（おがた・えいじ）~~
~~十　三　番　緒方　理奈　（おがた・りな）~~
~~十　四　番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）~~
~~十　五　番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~
~~十　六　番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）~~
十　七　番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）
~~十　八　番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）~~
十　九　番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）
二　十　番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）
~~二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）~~
~~二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）~~
~~二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）~~
~~二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）~~
二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）
~~三　十　番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）~~
~~三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）~~
~~三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）~~
三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）
~~三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）~~
~~三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）~~
~~三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）~~
三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）
~~三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）~~
~~三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）~~
四　十　番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）
~~四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）~~
~~四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）~~
~~四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）~~
~~四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）~~
~~四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）~~
四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）
~~四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）~~
四十八番　少年　（しょうねん）
~~四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）~~
五　十　番　スフィー　（すふぃー）
~~五十一番　住井　護　（すみい・まもる）~~
~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）~~
~~五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）~~
~~五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）~~
~~五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）~~
~~五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）~~
~~五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）~~
~~五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）~~
~~五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）~~
~~六　十　番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）~~
六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）
~~六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）~~
~~六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）~~
六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）
~~六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）~~
~~六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）~~
~~六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）~~
六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）
~~七　十　番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）~~
~~七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）~~
~~七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）~~
~~七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）~~
~~七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）~~
~~七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）~~
~~七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）~~
~~七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）~~
~~七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）~~
~~七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）~~
~~八　十　番　牧村　南　（まきむら・みなみ）~~
~~八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）~~
~~八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）~~
八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）
~~八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）~~
~~八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）~~
~~八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）~~
~~八十七番　みちる　（みちる）~~
八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）
八十九番　御堂　（みどう）
~~九　十　番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）~~
~~九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）~~
九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）
~~九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）~~
九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）
~~九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）~~
~~九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）~~
~~九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）~~
~~九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）~~
~~九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）~~
~~百　　番　リアン　（りあん）~~

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、挿し絵：しまさらゆめき

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）
板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の
表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するに
あたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせて
いただきました。

578 厭

あのあと、ガスッ、とまた音がした。
それは、何の音だったのだろうか。
もう、相沢祐一にはそれが何かと理解することなどできなかった。彼はそのまま、ゴツゴツとした岩が広がる岩場に、腰から砕け落ちた。

……ここは、どこだ？
よくわからない。目の前には、なにもない。音もない、風もない。ただ、真っ黒な世界。
そんな場所に俺は立っていた。
目の前には、〝あなた〟が同じように、立っていた。
『そなたは、これからどうしたいのだ？』
そう〝あなた〟は聞いた。
俺は〝あなた〟に、もう疲れた、もう休みたい、と答えた。
『そうか。このまま、あの女――茜のところにいくのか？』
あぁ、そうしたい。と俺は答えた。
『だが、それは叶わぬ』
と〝あなた〟は言った。
なんで！　もういやだ。もうすべてがいやなんだ。俺はここにもう居たくない。存在したくない。もうすべて消えてなくなってしまいたい。もう何も考える事もしたくないんだ！　俺はそう叫んだ。
『ならば、そなたは死ぬのか？』
あぁ。と俺は言った。
『無理だな。そなたは弱いから、死ぬことなどできないであろう』
無言の空間が続いた。
沈黙を破り、口を開いたのは〝あなた〟だった。
『ほら、おぬしの友人が迎えに来たぞ』

風を感じた。
……俺は、生きて……いる。

そう、相沢祐一は思った。
だが、なんで自分がこんなに生を実感しているのか、そして、何でこんなに心が空虚に満たされているのかを考えることはできなかった。
「おい、相沢っ！」
声が聞こえた。体が、びくん、と跳ねたような気がした。
ふと、目の前が明るくなった。
目の前には、いつも学校で会ってる腐れ縁の友人と、見た事のない、金髪の少女がいた。

579 俺達は……⁉

「よぉ、北川。目覚めに見る顔がお前だなんて最悪な朝だな……って、どこだよここ？　っていうか、痛てぇ⁉」
その言葉は北川にとっていつもの軽口であった。が、どこか違和感を感じさせるものであった。
「どうしたんだよ、相沢？　今時紐無しバンジーなんて流行らないぜ？」
そうして、北川は祐一が落ちてきた崖の上を見上げる。……崖の中腹の出っ張りのせいか頂上の方は良く見えない。
「……俺はその崖から落ちたのか？　くぅ⁉　痛てぇ……何だよ、何があったんだってんだ⁉」
「それは俺の方が聞きたいところさ。何でお前は突然頭上から降ってきたんだ？」
祐一は全身の痛みに顔を歪めながら、北川の質問に、
「知るかよ、そんなこと……くそっ、頭が痛てぇ……」
と答えた。
……こいつ、下手なところ撲ったんじゃないか？

「なぁ、相沢。俺が誰だか判るか？」
「……はぁ、何いってんだ北川？　お前と修学旅行のとき決行した湯煙大作戦は一生俺の記憶に刻まれてるぞ？」
「なら、こいつのことはどうだ？」
そう言って北川はレミィのことを指す。
「……初対面じゃないのか？　こんな印象深いお嬢さんを俺が忘れる訳が無いと思うのだが？」
「Oh！　ゆーいちさん。ワタシのこと忘れたですか？　So Sad デス」
そのレミィの言葉にも、祐一は首をかしげるだけだった。そんな祐一に対しレミィは北川の腕を掴んで声をあげた。
「ワタシ達は！」
それに併せて、北川も声をあげる。
「噂のカップル！」
「レミィと！」
「潤だっ！」
カップル。
その単語を聞いた瞬間に、
ずきり、と祐一の頭が痛んだ。
「……悪い、少し休ませてくれないか？」
だが、北川はその祐一の言葉を受け入れる訳にはいかなかった。
「すまない、相沢……」
祐一がよっぽどのドジで無い限り、ひとりで崖から足を滑らせて岩に叩きつけられたということは無いだろう。そう考えるなら、崖上から一望できるこの場所はとても危険な場所であるはずだからだ。
「俺達は、ここを離れなくちゃいけないんだ……おぶってくから、少し我慢してくれ」
北川が祐一を返事を待たずに背負うと、祐一は体の節々を襲う痛みに小さく悲鳴を上げた。病人を労れよな、と祐一は文句を言おうとしたが、北川の真剣な表情を前に言うのをはばかられた。
「近くの休める場所で休憩するから、それまで我慢

してくれ、相沢……」

580　ファンタジー

選択肢は三つ。
1．東へ向かう
2．西へ向かう
3．来た道を逆行する

「…………」
「…………」
私は凝視している。
少年も凝視している。
その瞬間を決して見逃すまいと、視線で射殺する勢いで見つめ続けている。

ぱたり。

「あああ～～～っ、今吹いたでしょ！　吹いたでしょ!!　ねえそうでしょ白状しなさいよ!!」
「はてさてお代官様あっしには一体なんのことととだだだだだかかかかかか」
「むきーーーーーーーーーーーっ!!」
襟元を掴んでがくがくと少年を揺らしまくる郁末ではあったが、彼はというと、のらりくらりとその追及をかわしている。
「ぐぇ」
あ、酔った。
何をしているかというと、単に小枝を立ててそれがどちらの方向に倒れるかを観察していたにだけに過ぎない。
で、何が問題かといえばちょっと話は遡る。
「――郁末」
「何？」
「道が無い」
「え」

ざーっ……ざーん。ざぱーん。
眼下に広がるはずの波打ちを見るまでも無く、聞こえてくるのは波の音。
「端っこまで来ちゃった……ってこと」
「否定は出きないねぇ」
はぁ、とため息一つ。私はがっくりと肩を落とした。
……お腹、空いてきたかも。
「まあ仕方が無い。別の道へ行こう」
と、少年は促す。
そこで突きつけられた選択肢が例のあれだ。
「じゃあせーのでどっちに行きたいかを指差そう」
何か面白いことを少年が口走っている。普段からこういうことを言う人間だっただろうか。
……仕方ない。
「「せーの！」」
びしっ。
と突き出された指の方向は、因果なことに双方とも真逆を向いていた。
……まあ。そんなこんなで何故か今回私たちは一歩も互いの意見を譲ろうとせず、決着は小枝の裁定に持ち込まれた訳なのであるが。いや、ただ単にどっちに倒れるかで方向を決めようって持ちかけられただけで。
『自分の運に自信が無いかい？』
『んなわけねーわよ』
……売り言葉に買い言葉。
「おおおおおおおおこりっっっぽぽぽぽいののは大おおおおなかかがすいているしょしょしょしょこだだだだだよよよよ」
「あぁーっ！　何ぃっ！　聞こえないわよ！」
少年が何かを喚いているが理解できない。もちろん、現在進行形で私が揺すっているせいだが。
そこで少年、私の拘束からさっと抜け出るとなにやらごそごそと鞄の中を漁りだす。そして中からコ

ッペパンを取り出すと、私の方へ差し出してにっこり笑って一言。
「僕の顔をお食べよ♪」
スパコーン!!
電光石火のツッコミが入った。
嗚呼、神様。どうして私の武器はハリセンでなかったのでしょう。
「全くもう…………はぐはぐ」
「ひどいなぁ、ちょっとしたジョークじゃないか」
少年は頭を押さえながら不平を言った。
「あなたのジョークは人を小ばかにしすぎなのよ……はぐはぐ」
「はあ、そうですか」
「そうよ。これに懲りて反省しなさい……はぐはぐ」
「……あのう、郁未さん」
「何よ。……はぐはぐ」
少年は急に立ち止まった。
「……？　はぐはぐ」
「歩き食いはいけないと思います」
「うっ」
思わず戦利品の美酒に酔いしれて。いや、そんないいものでもないけど、夢中になって齧っていたようだ。
「はしたないよ」
「うぅ、分かりました……」
しょんぼりとうなだれる私を尻目に、少年がどこぞを指差す。
「丁度いい、あそこで休もう」
「え？　どこどこ」
くるくると首を回す私。
「あそこだよ」
彼は苦笑して指を指した。
――白い小さな教会。それが、そこにあった。

「わあ……」
綺麗なところだと思った。もし、こんなところで結婚式が挙げられたらどんなに幸せだろう？　そう思って、私はうっとりとそれを眺めていた。
「……ん、どうかした？」
「うん」
不思議そうに彼が尋ねてくるが、教会の様相に心を奪われた私には気の無い返事しか返すことが出来ない。
「……ふふ」
でも。
少しの間、私の顔を覗き見て、何かに満足したように、彼は納得した。
「……じゃ、入ろうか」
「え……」
止まった。言葉がじゃない。思考がだ。
全く予想だにしなかったものを目にしてしまって、私は思わず……思わず……思わず……。
――白い教会は、血に汚されていた。七色の輝きを灯すステンドグラスは、滴った紅を引き立てて。噎せ返るような、鉄の匂いを振りまいて。それなのに、そこはとても静かで――。
それは紛れも無く惨状だった。そこで行われたことがどのようなものであったか……その想像がいかなるものであったとしても、真実からそう遠くないもののような気がしてならない。
凄惨だったから。その跡は。その傷は。
「何か、あったようだね」
少年が呟いた。
「そう……みたいね」
もしかしたら、そう返事をする私の唇は、震えていたのかもしれない。
私は無意識に少年の服の裾を掴んでいた。
「……行こうか」
「……うん」

私たちは、そこを出た。
安らぎなんて、どこにもない。だってここは地獄だから。そんな現実を突きつけられたようで、私の気は重かった。
誰かが、ここで殺しあっていたんだろうか。
……本当に、そうなんだろうか？

ふと、私は夢想する。
それは空が抜けるように高く青く透き通っている日のこと。沢山の緑に囲まれて、私は式を挙げている。真っ白なドレスに身を包み、透明なヴェールを頭に載せ、同じように白いブーケを両手にする。
そこは小さいけれど、小ぎれいな教会で。私はゆっくりとヴァージンロードを進んでいく。誓いの言葉はもちろんイエス。マリッジリングを指に嵌め、密やかに口付けを交わす。
参列者は少ないけれど、誰もが私たちのために拍手を捧げてくれていて。響き渡る鐘の音を背中にしながら、私と彼は教会を出て、そこには沢山の鳩が飛んでいて、私はそっと笑うんだ。

そんな幸せを願っちゃいけないのかな？

——二人は知らない。
ここで刻まれた悲しみを。
はかなく散っていった少女たちの思いを。
純粋な願いを。
血塗られた結婚式。
例え穢れていても、成し遂げたかった願い。

二人は知らない。
そして、もう誰も知ることは無い——。

581　ロボットということ

カタカタカタ……キーボードの音が鳴り響く。

017……018……019……。

「うーん、一番怪しぃのはこいつらか？」

モニターを眺めながら源五郎が呟く。

十七番、柏木梓。二十番、柏木千鶴。六十一番、月宮あゆ。一緒に行動していた三人が、同時に死亡している。他の参加者と遭遇した形跡も無いにもかかわらず、だ。

同士討ちも無い訳ではないだろうが、監視の届かない屋内での出来事というのも気になる。

「少し調べてみますか……」

その時、源五郎専用の携帯電話がけたたましい音を鳴り響かせる。

「……どうした？」

警備用のメイドロボが、自らコンタクトをとってくることは滅多にない。怪訝、あるいは険しいともとれる表情でそれを取る。

「……目標捕捉、施設ヘト近ヅキマシタ」

「ついにきたのか……御堂か？」

「至近距離ニ……019……040……083……一体ハ判別不能。少シ離レテ021……069……反対方向ニ092……サラニモウ一体生体反応……コチラモ個体特定ハデキマセン」

特定不能の生体反応……長瀬祐介か、七瀬彰か、大庭詠美か、長瀬一族のものか……そして、未知の死んだはずの人間か。

そして、特定できた番号。

「……柏木耕一に巳間晴香……そして坂神蝉丸か……」

苦々しく顔を歪める。

「……はあ……よくもまあこれだけ集まったものだ。丁重にお帰りしてもらえ。……ああ、なるべく殺さないようにな。ただし、施設に危険が及ぶなら――殺しても構わん」

「……了解シマシタ」

ツ――――――

通信が途絶える。

「ふう、さて、どうなることやら……」
もしもの時は受身ではいられなくなるかもしれないな……そう考えながら再び作業へと入った。

「……というわけだ」
軽く、お互いに状況を確認しあう。本当に、軽く、だ。
敵……と思われるロボットがいる前であまり長居するのも憚られた。
「とりあえずは一度離れよう……話はそれからだ」
『はい』
だが、それは叶わなかった。
「……目標捕捉。只今ヨリ行動ヲ開始シマス……」
「……何か言ったか？　あのメイドロボ？」
「……何か……言ったね」
耕一と、彰の台詞。
「……！　伏せろっ!!」
突如、蝉丸が叫んだ。
同時に、彰と耕一の頭を押さえつけ、地面すれすれにまで叩きつける。
「ぐぇ……」
ガァン……!!
三人……いや、正確には気絶している月代を含め四人の上を弾丸と思われるものが通過した。
「(゜Д゜)……ん？」
よけなくても、当たらない程度の場所を、通り抜ける。
「立チ去ッテ下サイ。ココハ禁止区域デス。……参加者ノ皆々様ハココニ立チ寄ラズげーむヲオ楽シミクダサイ」
メイドロボ特有の機械質な音声があたりにこだまする。
「気付かれた……？　いかん、思ったよりも攻撃的のようだ……」
まさかいきなり攻撃してくるとは……
「あ、あれはっ……」

木に突き刺さった飛んできたもの……
「矢……だな」
耕一が姿勢を低くしたままでそう呟く。
『ゆっくりと後ろへ下がれ……』
蝉丸が、手で二人にそう合図する。
月代を引っ張りながら、耕一。
「あいつは……なんなんだ？　禁止区域だと？」
こちらへ向けられたメイドロボの右腕の甲に、黒い穴が開いている。
あそこから、恐るべきスピードで飛び出した矢。
人が一人、充分に隠れられるほどの木にそれぞれ一人ずつ身を潜める。
「絶対に顔を出すな……」
(一度、撤退した方がいいな……)
耕一と、彰と、月代を順番に見やり、そう判断する。
一人は気絶、二人は大怪我をしているようだ。
「直グニ立チ去ッテ下サイ……後十秒、立チ去ラナイ場合ハ強制的ニ排除シマス」
「……」
「蝉丸さん、ここは……」
「ゆっくり下がれ……」
二人を手で制しながら、蝉丸が言った。
もし、わき目もふらず全速力で転進していたとしたら……四人共全員戦闘を回避できただろう。
だが、それを耕一達が分かるはずもなく……。
「九……八……七……」
(絶対に顔をだすな……)
ささやきながら、蝉丸。
耕一も、彰も、傷を負っている。素直にそれに従った。
それだけではない。蝉丸の声には、二人にそうさせるだけの有無をいわせないだけの雰囲気があった。
——しかも、耕一は月代を背負っている——
(あれは、ろぼっとなのか？)
(ええ、そうです)

（では、……遠慮はいらぬ……というところか）
蝉丸が、ベレッタを構えながら、戦闘態勢をとる。
「三……二……一……排除開始」
ガァン!!
蝉丸の隠れる木のすぐ横を恐るべきスピードで矢が通り抜ける。
ドン!!
すかさず、蝉丸が照準をつけてメイドロボを狙い撃った。
「ほんとにいきなり撃ってきたよ……」
彰もまたマシンガンを構え、そうぼやいた。
「(ﾟДﾟ)……むにゃむにゃ……騒がしいぞゴルァ」
耕一もまた背中で聞こえる寝言を聞き流しながら武器を構える。
「やれやれ……今度はロボットか……」
対象が人間で無いだけ、比較的楽に照準を構えることができた。
だが……
ガイーン……!!
「いかん……まったく歯がたたん」
メイドロボに命中した弾丸。
だが、それは奇妙な金属音と共に弾き飛ばされる。
「防弾チョッキ？」
「奴がロボットならば装甲が張られているのだろう。それより、奴の主武装はボウガンのようだな。君達が防弾チョッキを着ているといえど、まともに当たれば致命傷だろう」
「……そうですね」
彰が、自分の防弾チョッキを見つめながら、覚悟したように呟く。
「……そ、そうっすね……」
一方、耕一は自分の防弾服を見つめると、赤くなりながら呟く。
「笑えるなら、大丈夫。耕一君。そうだな、君の武器を使おう。いくら科学が進んだからといっても、その口径ならあの装甲を貫けるだろう」

「はいっ……」
「それまでは俺が奴を引き受けるっ！」
それを最後に、蝉丸が木から飛び出した。
「目標捕捉……発射！」
メイドロボの腕から、再び矢が射出されるが、蝉丸は再び木の陰へと身を潜める。
木の陰から木の陰へと体を移しながら、蝉丸は徐々にメイドロボのほうへと近づいていく。
恐るべきスピードの矢とはいえ、捕捉してからでは捕らえられない蝉丸のそのスピード。
(だが……これ以上は危険だ)
すでに、蝉丸が隠れ潜む木からメイドロボの間に障害物などない。
ドン！
蝉丸の弾丸が、服に覆われていないメイドロボの足に命中する。
ガイーン……!!
再び弾丸が弾かれる。

(……やはり、この程度の火力では装甲を打ち抜くことはできないか……)
ヒュン……!!
すでに、メイドロボは激しく移動を繰り返していた蝉丸に矢の照準を合わせている。
銃こそ効きはしなかったが、メイドロボの気をそらせる……ということだけはできた。
メイドロボは、今完全に耕一に対し、横を向いている。
「今だ、耕一君！」
叫び。同時に蝉丸が飛び出した。
「……捕捉……」
蝉丸の体をメイドロボの右腕が捕らえる。
「でりゃあっ……!!」
ガオーーン!!
耕一のそれ……中華キャノンが火を吹いたのはほぼ同時だった。
「――？　回避不能!?」

蝉丸の体に向けて矢を放つ直前――
メイドロボの体を、巨大エネルギーの濁流が飲み込んで、岩山の一角を激しく破壊した。
「やったぜ！」
耕一は痛む体のことも忘れ、ガッツポーズをとる。
「やりましたね、耕一さん！」
彰が、強張らせていた表情を解いて、笑いかける。
「これなら……」
「待て、耕一君……まだ動くなっ‼」
巻き上がる噴煙へと銃を構えたまま、蝉丸が戻ってくる。
木から、木へと、身を隠しながら。
「油断は、死を招くぞ」
諭すようにしながら、それでもそこから目を離さない。
「……」
爆発の中から、人の影。
「………えっ？」
「お、おい……ウソだろ？　まるで無傷じゃないか……」
白いスウェットスーツを露出させ、メイドロボが煙の中から何事もなかったかのように姿を現す。
「……耕一君、彰君……君達は逃げろ」
表情を変えないまま、蝉丸が呟く。
「ちょっ……」
「一度態勢を立て直したほうがいい。まともにぶつかっては勝ち目がない……いや、倒せる武器がない……と言ったほうが正確か」
(蝉丸さんは……？)
(心配するな、耕一君。俺は奴を引きつけるだけだ)
安心させるような笑みを浮かべ、蝉丸が呟いた。
(月代を頼むぞ)
「だけど……あんなとんでもない化け物相手に……」
――!?　そうか……」
耕一が、意を決したように叫ぶ。

「どうした、耕一君……」
「中華キャノン……もっと威力をあげる方法があります。先程の威力とは、比べ物にならない程強力な力が」
ネットで拾った情報ですが、確かなものです……と付け加えて。
「……聞いたことがあるような……ないような……」
彰も緊張の表情を崩さないままに横目で耕一をみやる。
「この中華キャノンの力を増幅させれば……あるいは……倒せます」
耕一の顔を、蝉丸は真剣に見つめた。
「……分かった……君を信じよう……確かにあのような危険なろぼっとをのさばらせておくわけにもいかない。それに先程気付いたことがある。奴にも弱点はある……ろぼっとという……な。絶対に無理はするな。まかせたぞ」
「ちょ、ちょっと……」
彰が混乱している内に、蝉丸は飛び出した。
施設の入り口へと向かって。
「コノ施設ニ近ヅクコトハ禁止サレテイマス！」
耕一達には目もくれず、施設に向かって走るメイドロボ。施設を守るメイドロボにとって、それは一番の重要事項であったから。
「耕一さん、一体何を……」
「威力増幅だ。彰君、君は足を怪我している。蝉丸さんはメイドロボを引きつけてくれている。これは、俺にしかできないことだ。……任せてくれ」
メイド服のスカートをたくし上げ、露出したブルマに中華キャノンを括り付ける。
「いくぞっ……」
耕一が、高らかに叫んだ。
メイドロボの右腕が上がりはじめる。
(機械ならではだ)

フェイント、といったものがまったくない。精密さゆえの正確さ。
（それは、ただの直線的な動きでしかない）
蝉丸は、気を練りながら、メイドロボの真正面に対峙する。
施設の入り口の前に仁王立ちするメイドロボ。
さらに、腕が上がって矢が発射される前に……
「目標捕捉……発射……!!」
その台詞と同時に蝉丸は体を宙に躍らせる。
ヒュン!!
蝉丸の立っていたその空間を矢が通り抜けた。
高らかに宣言して撃たれた矢をよけることなど、軍人として鍛え上げられた蝉丸には容易い。
（そして、次に発射されるまで約三秒……!!）
心眼で相手を見極めるという流派、影花藤幻流の使い手である蝉丸にとって、直線的かつ精密なその動きをかわすことは造作もなかった。
しかも、発射直前に宣言してくれるというプレゼントつきだ。
（これが……人間であれば脅威なのであろうな）
そう、あの御堂のように。
（結局、機械では強化兵には遠く及ばない……というところか）
再び矢をかわし、懐へと飛び込む。
「……!!」
今度は、メイドロボの左腕から黒い影。
「む」
シャキン!!
左手の甲の穴からは、剣の刀身が生えてきていた。
「排除……シマス……!!」
左腕を蝉丸の眼前に向けて振り下ろす、それは、生えた刀身が蝉丸の頭を捉えることを意味していた。
「むうん!!」
ガキン！
気合一閃、蝉丸の頭上で火花が散った。

「耕一さん……一体何を……」
「いいからっ……彰くん……きみはその娘を守ってやっててくれ……これは……今、俺にしかできないっ!!」
倒れている仮面の女、月代をちらりと見ながら、苦しそうにうめいた。
結界、その中で発揮された完璧なる鬼への衝動。そして、その反動で痛めつけられた体組織。
耕一の筋肉組織は、少々の運動でも悲鳴をあげていた。
「ぐおおおおっ……!!」
鬼の咆哮をあげながら、耕一は上下運動を続けた。
足が浮き沈みするたびに、キャノンの横に添えられた手が動くたびに、キャノンの低い駆動音が大きくなっていく。
同時に、耕一の歪む顔。
「こ、耕一さんっ……」
「し、信じろ……彰君!!」
ガクガクと足を震わせながら、耕一は中華キャノンのチャージを続けた。
(くそっ……なんて情けないんだ……蝉丸さんが……耕一さんが、こんなに自分を犠牲にしてまでも頑張ってるのに……僕は何をしてるんだっ!!)
月代をかばうように立つと、メイドロボにマシンガンをむける……が、結局何もできないまま彰は立ち尽くしていた。
心と、足がジクリと痛んだ。
「ねえ、あれ……耕一さんじゃないの……?」
「ほんとだ……耕一お兄ちゃんと彰お兄ちゃんだ……何してるんだろう……」
ちょうど、蝉丸とメイドロボの死闘からは死角の位置で、二人はその光景を目の当たりにした。
苦しそうに脂汗をかきながら上下運動する耕一と、その横でくやしそうに彰。
——ちなみに月代は寝そべっているので二人には

確認できなかった。
「い、行ってみましょう……只事じゃないわ……いろんな意味で」
「う、うん！」
あたりに気をつけながら、そっと七瀬達は行動を開始した。

ガキーン！
蝉丸の頭上で、刀が交錯する。
非業の死を遂げた参加者から譲り受けた毒刀。
「むうん！」
ガキン!!
そのまま力任せにメイドロボのそれを弾き返す。
「……!!」
バランスを崩しかけたが、それを持ち直すと、よろよろと後退しながらメイドロボの右腕が上がる。
矢が、発射される。
「はあっ……！」
「捕捉……発射……!!」
蝉丸の動きはまだ止まらなかった。
弾き返した刀を返し、そのままメイドロボの右腕へと叩きつける。
ゴッ……!!　ズシャッ!!
強靭なその右腕は傷一つ付きはしなかったが、叩きつけられた右腕からの矢は地面へと反れ、岩盤を穿った。
「……排除……シマス……」
ガキンッ！
息もつかせぬ連続攻撃、メイドロボが間髪いれずに横に凪いできた左腕の刃ごと、剣を叩きつける。
バキッ……!!　骨の折れるような音が響き、メイドロボの刃の破片が飛び散った。
「……!!」
機械にも感情があるかのように、わずかにその瞳に動揺が走ったように見えた。
「はあっ!!」

四連撃。最後の一撃は、右手の甲、矢の射出口に向かって突き入れられた。
再び破壊音。射出口に突き入れられた刃が、メイドロボの右腕の内部を深くえぐった。
「右腕発射口損傷……損傷率七十九パーセント……修復不能……」
機械音が、あたりに響く。
ヒュッ……！　一気に剣を引き抜くと、とどめと言わんばかりにメイドロボの後頭部に蹴りを食らわせた。
「ぐううっ……あと……すこ……し……」
手はまだなんとか動く。だが、足の方が限界だった。
（最後まで……もつか……？　俺の体……）
いや、もたせなくてはならない。自分を信じてくれたみんなのためにも。
ギューーン……！　既に中華キャノンの砲身が青く輝きはじめている。
「がんばれっ、耕一さんっ!!」
もはや、彰には祈ることしかできない。
メイドロボとの闘いは蝉丸がその力で圧倒している。
だが、メイドロボの機能を完全に止めるには……もうこれしか方法はない。
「がんばれっ!!」
「……なにしてんの、あんたら……」
突如、右方向からあきれたような声。
「誰だっ……………は、初音ちゃんか……隠れててくれ！」
マシンガンを向けかけた彰が、あわててその照準をはずす。
「彰お兄ちゃん？」
その、二人の切羽詰った言動と行動に戸惑いを隠せない初音。

「あたしは無視かいっ！　……って、ああっ……!!」
耕一達を追って現れた七瀬と初音、その二人がようやく目の前の死闘に気付く。
「な……こんなときにあんた達何馬鹿やってんのよっ!!」
七瀬の怒号が天をつく。
「(゜Д゜)うるせぇぞゴルァ……むにゃむにゃ……」
「ば、ばかなんてやってないっ……ちょうどいいところに……」
耕一の決意が揺らいだ。
(せっかくだから留美ちゃんか……初音ちゃんに……)
二人のチャージ姿を想像してみる。
……。
(できるかっ！　バカヤロウ!!　……男の俺が投げ出してどうするんだ!!)
少しでも楽になりたい――自分のその一瞬でも沸いた思いを耕一は恥じた。

だが……。
「危ないっ!!」
その耕一の心を遮るように――彰の言葉。
「なっ……ぐあっ……」
バキューン!!
そして突如、予想もしなかった所から沸き起こった銃声。
七瀬を突き飛ばした彰の体が、吹き飛ばされる。
その一瞬が、まるでスローモーションのように。
「なっ……彰君っ!!」
「あ、彰お兄ちゃんっ!!」
「(゜Д゜)……う～ん……えっ？　なっ……ここはどこなんだゴルァ」
彰と、七瀬の体が、地面を転がった。
「ぐふっ……」
腹を押さえて、うめく。
「ふふふ、役者がそろってるようですね……ひひひ……」

ちょうど、蝉丸とメイドロボとを挟むようにして現れたのは……長瀬源三郎だった。
口元からよだれをしたたらせながら……まるで麻薬中毒者のように。
「なんて事をっ……」
蝉丸が、銃声に気を取られた一瞬――
メリッ……
「がはっ……」
メイドロボの左拳が蝉丸の腹に食い込む。血が薄く舞った。
「……捕捉……」
メイドロボの左拳に残されていた約一センチ程の折られた刃の根元が血を滴らせる。勢いよく引き抜かれたそれが、空中に赤き川をつくり、地面へと落ちた。
（なんてことだ……よりによってこんな時に……）
腹を押さえながら、蝉丸がうめく。
（最悪の――展開だ――）

582　希望

最悪の展開が七瀬留美の目の前で展開されている。
まず自分から一番離れたところでは、銀髪の青年が、少女の姿をしたロボットと対峙しているのだが、彼の腹からは真っ赤な血がしとどに溢れていて、苦しげな表情で呻いている。メイドロボの拳には小さな刃。青年はあの刃物で腹をやられたのか。
一方、自分のすぐ傍では七瀬彰が苦しげな表情をしている。状況を理解するのに数瞬が必要で、自分を庇って彼が銃弾を受けたのだということを理解すると顔から血の気が失せる。ただでさえ怪我の重い七瀬彰の身体にこれ以上のダメージはあまりに深刻。意識はあるようだが次の瞬間にもある保証は無い。
更に柏木耕一が焦燥にまみれた表情で怪しげな動きをしているのを、長瀬源三郎の手の中の鈍色が狙っている。何やら必死な耕一にそれをかわす余裕は

見受けられない。何故耕一があのような動きをしているかは判らないが、何かの冗談でやっているのではないことくらい七瀬にも判る。あの動きが勝利には必要で、長瀬源三郎はそれを妨害しようとしている。そしてその妨害を止める術はない。

(大ピンチじゃない！)

大ピンチなのだ。

自分が動かなければならない。少し離れたところにいる柏木初音や仮面の少女は殆ど腰が抜けたような体で、行動を促すにはあまりに時間がなさすぎる。幸いにして武器はある。右手に鉄パイプ、左手に拳銃。今、自分が動けばこの劣勢を覆せるのだ。

なのに身体が動かない。おかしい程に弱気だった。

七瀬は一応武道をやっていた。あの銀髪の青年が優れた戦闘力を持っていることは一目で判ったし、その青年があああまでやられていることからあの少女型ロボットが想像を絶するほど強いことも判る。

勝てるわけがないと思った。

自分は確かに銃火器を持っていた人間に鉄パイプだけで勝った。けれど身体が動かない。逃げたくなる衝動。今からすべてを捨てて逃げてしまえば今は死なないで済むかと思う。

「――馬鹿ね、あたしは」

けれど七瀬留美は立ち上がって、誇りを胸に武器を、鉄パイプを握り締める。

自分を生かした友達のこと。自分が殺した男のこと。自分が戦った時間のこと。自分が生きた人生のこと。すべてを背中に背負って七瀬は立ち上がる。

七瀬留美は心の中で高く高く叫ぶ、

(あたしは、七瀬だ)

己のためだけに動く人間が乙女の筈がないし、保身のためだけに逃げる人間が七瀬の筈がなかった。

生命を捨てる覚悟で七瀬留美は立ち上がる。

そして殆ど同じ瞬間に七瀬彰も立ち上がる。

「惜しかった――実に惜しかったです。しかし、残

念ながらあなた方もこれで終わりです」
　見ているこちらの頭がおかしくなりそうなほど明るい笑みを見せて、長瀬源三郎は高らかに掲げた拳銃を柏木耕一に向けている。それは紛れもなく狂人の顔で、昔世話になった「おじ・長瀬源三郎」の面影は微塵もなくなっていた。
　眩暈のする頭でも判る。今、柏木耕一がやられたら自分たちの生き残るための希望の火は完全に消え失せる。管理者側を打倒するなどと威勢のいい事を言っておきながら、何も出来ないまま終わる。思った。女子供しか他にいない今、自分以外に長瀬源三郎を止められる人間はいない、と。
　口の中に鉄の味が充満する。顔などやられていないのにどうして血の味がするのかと不思議になったが、すぐに内臓から逆流しているのだと理解。身体が重くて重くて、精神を犠牲にしなければ立ち上がることも出来なかった。それでも彰は立ち上がる。
「彰くんっ⁉」
　同じ瞬間に立ち上がった七瀬留美の驚愕の声。そして七瀬がそれ以上何かを言うより先に初音たちの、そして耕一の傍に駆け寄り、
「彰お兄ちゃんっ！」
　初音の声を無視して、右手に握ったサブマシンガンの銃口を長瀬源三郎に向けて躊躇いもせず引き金を引く。
　ぱらららららら、ぱぱぱぱぱん、かちゃん。
　聞きなれた弾幕の音、土の撥ねる音、顔を汚す撥ねた土、そして弾切れの音。銃の反動で内臓が更に痛めつけられる。血を吐くのは必死に堪えたが、それまでだった。
　二秒で弾が切れた。そして無様なことに最後の攻撃は一発も当たらなかった。乱れ切った集中力と崩れ切った体力では、ある程度離れた的を狙うことなど、どだい無理な話ではあるのだ。
　だがそんなことは、彰だってよく承知している。それでもこの攻撃に意味はあると判って、彰は引き

叫んですぐ彰は生命の火を燃やして源三郎に向かって走り、自分の頭に向けられた拳銃に心が挫かれそうになりながら、それでも走った。頭の中が真っ白になって何もかも聞こえなくなる。銃声も聞こえない。初音の声も聞こえない。眼前の世界がモノクロームに染まって見える。銃口の深い深い黒が更に深く黒くなって、数瞬で自分の生命は燃え尽きるのだと再確認。
「うぁあああああああ！」
数秒を稼げば状況は変わる。そう信じよう。
叔父までの距離は二十メートル。一秒に三メートルしか進めない今の自分にはあまりに遠いが奇跡を信じろ。銃を捨て右拳を振り上げて、左の手のひらで顔を覆って無為で無力な壁を作り、最後の力を右足に込めたところで聴覚が戻り、
雄叫びが聞こえた。
勿論七瀬留美の雄叫びだった。
金を引いたのだ。
狙い通りだった。彰は「彼が狂っていること」を前提としてこの攻撃を行った。冷静な判断力を失っている長瀬源三郎ならば、本当に止めねばならない耕一よりも、武器を失って簡単に殺せる自分を少しだけ優先するかもしれない。耕一だって簡単に殺せることに気付かず、自分を狙うかもしれない。ゆっくりと長瀬源三郎はこちらを振り向いて嗤う。
「……まだ、生きていましたか、彰」
同じように彰も笑おうとしたが、頬を動かす気力さえ残らなかった。
耕一の、エネルギー充電の時間を稼げればいいのだ。それにこの、自分が死ぬまでの数秒で何か状況が劇的に変わるかもしれない。
最後の犠牲には自分がなろう。
「彰くんっ!!」
耕一の声、
「僕に構うなっ！　早く攻撃の準備をっ!!」

「でぇぇぇぇぇい！」
　長瀬源三郎は横から迫り来る七瀬留美を見ると少しだけ動揺したような顔を見せたが、
「せっかく甥と語らっているときに邪魔をするな」
　次の瞬間には七瀬の足下に弾丸を放つ。土の撥ねる音。七瀬の顔が泥で汚れる。それでも七瀬は怯まない。鉄パイプを振り上げて源三郎のゼロ距離に至り、力任せにそれを振り下ろした。しかし怪我をした体ではそれを満足に振るうことは出来ず、源三郎に悠々とかわされる。横にかわしてそのままバックステップで距離をとると、
「面白い娘さんだ。だが、その手に手に手に持った銃も銃も銃も使わないで私に勝てるとでも思ったら大間違いだ大間違いだ、大間違いだ」
　狂人めいた高い声で同じ言葉を繰り返す。そして源三郎は再びその銃口を七瀬に向け、引き金を引く。かわせる速度を遥かに超えた弾丸。当たり所が悪ければ一瞬で天国だ。折原や瑞佳の居る天国。
「あたしはまだ、そこに行く訳にはいかないのよ！」
　七瀬の矜持はそんな甘えを許さない。銃で撃たれた足はひどく痛む。だが、そんな状態にもかかわらず、信じられない速さで七瀬は駆ける。
「そんなに簡単に殺されてたまるかあっ！」
「そんなに簡単に死ぬのが嫌ですかあっ⁉」
　まるで無限に弾があるように源三郎は銃を撃つ。自分のすぐ傍をかすめる弾丸に肝を冷やしながら、七瀬は走り続ける。
　走りながら気付く。源三郎の背中越しに「希望」が見える。鉄パイプと扱いなれない拳銃と重い怪我を負った自分が、この男に勝てる希望が。「希望」は気配を完全に消して、そして七瀬留美の目に何かを伝えようとしている。
（――ＯＫ）
　七瀬は希望に縋ることにした。ポケットの中からナイフを取り出して、それを放り投げる。勿論長瀬源三郎はそれを軽い足取りでかわし、拳銃の引き金

を引き続ける。七瀬もすぐに足を動かしてその攻撃をかわす。
「当たりませんよおおお」
当てるつもりで投げたわけではない。七瀬はまた走り出す。こちらも反撃をしなければ。使ったことの無い拳銃を右手に持ち替え、そして走りながら引き金を引く。当然だがまるで見当違いの方向にしか弾は飛んでいかない。反動が大きくて走るのも難儀になる。だがそれでも撃たなければ。
「あはははは、拳銃を使うのは初めてですかぁ？」
初めてに決まっている。
源三郎は嗤いながら、手慣れた扱いで引き金を引いて自分を狙う。弾薬の交換も手早く、隙を殆ど見せない。髪を掠める。焦げたような熱が広がり、鉄パイプを捨てた左手で髪を押さえる。致命傷は無い大丈夫大丈夫大丈夫っ！　言い聞かせ七瀬は走る。
時間を稼ぐのだ。「希望」がチャンスを掴むまで時間を稼ぐのだ。意味の判らない行動をしている耕一が『何か』をやり遂げるまで時間を稼ぐのだ。
「余所見はいけませんねえええっ」
源三郎の声、弾丸が今度は、自分の耳元すれすれを通り過ぎる。鼓膜が破れたかと思う。だがひとつくらい鼓膜が破れても動くのに難儀は無い。戸惑うな！　唇を噛みながら言い聞かせて七瀬は走る。
幸運も長くは続かない。弾丸が僅かに七瀬の頬を掠めた。血が弾ける。
「うぁ……っ」
痛みよりも先に熱が全身を走る。痛みの熱ではなく怒りの熱だ。乙女の顔を傷つけるとは何事だ。
――生半では済まさない。
怒りを前面に出した顔で七瀬はゆっくりと足を止め、拳銃をポケットに放り込むと、先程投げ捨てた鉄パイプを拾って構える。
言うまでもないが、この表情は演技だ。
「おやおや、観念しましたか？」
「――乙女の顔を傷つけたわね、アンタ」

怒りに震えた声。これも演技だ。本当である。
「それは申し訳ありません、アイアン・メイデン。しかし、すぐ殺してあげますからお許しください」
「――撲殺してやるわよ」
このドスの聞いた声も演技なのだ。本当だ。
（本当よ。少なくとも半分はね！）
怒りの表情の下で七瀬の心は達成感に充ちた。
拳銃を構えた長瀬源三郎。鉄パイプを構えた七瀬留美。そして完全に気配を消していた「希望」。笑顔が漏れた。やっと勝利が目の前に見えたのだ。確かな「希望」が長瀬源三郎のすぐ背後に見える。
完全に気配を消した「希望」は、ナイフを右手に構えている。
その「希望」の名前は勿論、七瀬彰だ。

長瀬源三郎はまるで気付かなかった。自分のすぐ背後に気配が迫っていることに。半ば狂った頭ではそれも仕方ないと言えようか。柏木耕一を最初に殺していれば彼は勝利できたのだ。だがその勝利は、七瀬ふたりによって奪われた。
そのことにも気付かずに、狂ったような笑いを見せて源三郎は叫ぶ。
「終わりです、七瀬留美！」
「――終わるのはアンタよっ‼」
七瀬留美の叫びと同時に、源三郎の背中に痛みが走る。何かが背中を通ったような感触。刃物の痛みだと理解するのに一秒。
「だ、誰だっ‼」
振り返ったところで立っていたのは七瀬彰。源三郎は彼がここまで接近していたことに気付かなかった。殺気の一つも感じられなかったのだ。心の力が疲労で薄弱になっていたから気付けなかったのか。
「僕だよ、おじさん」
真っ赤に染まったナイフを手に、七瀬彰は真っ直ぐで凶悪な眼差しを源三郎に向けている。
「ちぃっ！」

源三郎は銃口を彰に向ける。まだ間に合う。一秒も経たない内に甥を殺せるし、一秒が経過する頃には七瀬留美も殺せる。痛みを堪えて銃口を彰の脳髄に向け、引き金を引こうとし、
「くらえええっ!!」
引く前に、今度は七瀬留美が走り寄って鉄パイプを源三郎の頭めがけて振り下ろす。今度こそ、その打撃をかわすことが出来ない。鈍い音がして源三郎の頭が割れる。
「うがあああっ!」
意識を根こそぎ持っていかれそうな打撃だった。しかしそれでも源三郎の狂気は意識を繋ぎ止める。未だ握り締めたままの拳銃を今度は七瀬留美に向けて振り返りながら叫ぶ、
「貴様ら——舐めやがっ」
叫び切ることが出来なかった。
彰の左の拳が振り返りかかった源三郎の頬に叩き込まれる。頬から顎にかけて打ち込まれた痛烈な打撃は喋りかけの源三郎に手ひどく響く。脳が揺れて狂気が崩れ落ちる。今度こそ源三郎は拳銃を取り落とし、身体もまた地面に崩れ落ちようとする。だが崩れ落ちることを彰が許さない。彰は源三郎の髪の毛を掴んで無理矢理身体を起こさせると叫ぶ、
「行け!　七瀬さんっ!」
「行くわよっっ!!」
七瀬留美は鉄パイプを投げ捨てていた。拳を強く握り込んで高く振りかぶる。鉄パイプを軽々振り回す乙女の、その拳が。
「や、やめ——っ」
止めるわけがなかった。
その体重と速度と腕力をひとつの拳に詰め込んで、七瀬は全力で拳を叩き込む。がつん、と鈍い音がした。骨が折れる音——鼻が潰れる音だった。
彰が掴んでいた髪の毛が全て抜けた。彰の指には抜けた毛が残り、毛の持ち主は二メートルもの後方に吹き飛んでいた。ふたりは止まらない。すぐに源

三郎に駆け寄る。
鼻血で真っ赤に染まった顔面になってもなお、源三郎は身体を起こそうとする。最後に残された狂気だった。
七瀬留美は踵を高く振り上げた。七瀬彰も同じように高く。七瀬留美の踵は先と同じ源三郎の顔に向けて。七瀬彰の足の裏は股間の急所に向けて。
――ほぼ同時に、真っ直ぐ振り下ろされる。
少し遠くにいた初音や月代ですら聞こえるような、凄まじい、肉と骨の潰れる音がした。悶絶の声すら出す間もなく、源三郎の意識は今度こそ完全に吹き飛んだ。
体力を消耗しすぎて息が乱れた七瀬彰に、同じように息を乱しながらも笑顔を見せた七瀬留美が肩を貸す。
「無理させてごめんなさい」
その顔を見て彰も少し笑う。
「いえ、大丈夫です。そちらこそ大丈夫ですか？」
「泣き言は言ってられないわよ。あたしは乙女で、七瀬なんだから」
冗談めいた口調の七瀬留美。七瀬彰はおかしくなって再び笑みを漏らす。
「僕も七瀬だから、泣き言は言えないね」
そしてすぐに真面目な顔になって彰は言う。
「――笑っている場合じゃなかった。蝉丸さんたちの援護をしないと」
「ええ」
「彰くん、留美ちゃんっ！　蝉丸さんが危ない、もう少しだけ、もう少しだけ時間を稼いでくれっ！」
先程から真剣に冗談のような動きを繰り返している耕一。だが、その股間につけられた大砲からは、尋常ではない圧が感じられる。それは確実に切札。
「判りました！」「判ってるわ！」
殆ど同時に叫んで、二人は再び走り出す。

583　紅と闇

「くっ……」
血が――
血が流れていく。
仙命樹の力が、上手く働いてくれない。
只でさえ弱体化している上に、今は日が照っている昼間――
傷が塞がるのが、遅い。
目の前に立った少女――のような〝もの〟は、暗い瞳を自分に向けた。
そこに光は無い。
――これが、〝ろぼっと〟というものか――
それを見て。
蝉丸は目の前に立つ〝もの〟の恐ろしさを――認識する。
からん、という軽い音。
少女の手に残されていた、僅かな刃が落ちた。
武器は失われた――？
ばちっ。
否。
その予想――或いは希望――を踏みにじるかのように、不吉な音が鳴った。
見れば。
少女の左手に、異様な気配を感じた。
右手は、奇怪な音を発しているものの――不吉な〝何か〟を感じさせることはない。
――電撃。
察知。
そして、その予想は――当たりだ。
思案も、対処も考える間も無く。
少女の左手が打ち出される。
咄嗟に身を引いた――
血の線が宙に引かれる。

「――標的、捕捉――破壊――」
不吉な言葉を呟きつつ、メイドロボは蝉丸に近付く。
小柄な身体を利用したそのフットワークは、傷付いた蝉丸を遥かに凌駕する。
横に回られた――
――逃げていては、埒があかないようだな。仕方がない。
地に着く。
それと共に、弾くように、駆ける。
少女の左手が空を切る。
一瞬の隙。
踏み込み――駆けた勢いを止め、左足を軸とする。
振り返り様に、右の脚を放つ――――！
がきぃっ！
鉄の音。
銃弾すら跳ね返すそれは、異様な程硬く。
しかし、正確に肘に放たれた蝉丸の一撃はメイドロボの左腕を高く、高く叩き上げた。
「――」
その顔は、無表情であったが――
それでも、やはり唖然としたのだろうか？
無防備な腹。
狙うはそこだ。
「ふっ――！」
強烈な踏み込みと共に放たれた拳は。
鉄が歪む音と共に、少女の身体を遠くに吹き飛ばした。
――だが。
「……くっ」
蝉丸の顔には、脂汗が浮いていた。
点々、と――血が落ちる。
既にその服すらも、紅く染められていた。
傷は、未だ治らず。
戦の場において癒す事もままならず。

その傷は――
確実に蝉丸の体力を蝕んでいった。
少女が、立ち上がる。
ぎりぎり、と奇怪な音を発していた。
――戦えるのか？
自問。
暗き眼を向け。
少女は、それを〝破壊〟すべく左手に電撃を纏う

――
――俺が戦わずして、誰が彼らを護ると言うのだ。
自答。
今為すべき事は、時間稼ぎ。
自分が少し前に立つ少女を倒す事は叶わぬだろう。
だが。
ここで闘う事が、勝利へと繋がるのなら。
多少の傷など、構わない。
自分は、軍人だ。
その為に在るはず。

だが。

「蝉丸さんっ――――！」

不意に、呼び掛ける声。
あの声は。
「いかん――来るなっ！」
蝉丸は、駆け寄らんとする、もう一人の戦士に静止の声を掛けた。

それが間違いだった。

ドンッ！
「がはっ……!?」
気付けば、少女の身体が目の前にあった。
いや――それが離れていく？
どういうことだ。
しかし、そこで気付く全身が痺れるような感覚。

しまった——蝉丸は気付く。
そう。
振り向いてしまったその隙に。
〝あれ〟を食らったのか。
——くっ！
空中で、身体を捻る。
全身を使い、衝撃を止め、そのまま駆け出す——はずだった。
不意に、ぐらりとその身体が揺れた。
当然だ。
電撃を食らって、無事でいられる筈がない。
一瞬で気絶しなかっただけでも、幸運と言えよう。
——くそっ、不甲斐ない……。
己の力不足を悔やみつつ。
——蝉丸の意識は、闇へと落ちた。

584　力の渦

カカタカタカタ……。
機械の檻に囲まれ、冷たい光を浴びながら。地から湧き出る、鬼の泣き声のような稼動音の中で、源五郎は調査を進めている。
十七番、柏木梓。二十番、柏木千鶴。六十一番、月宮あゆ。三人が死亡した建物に誰かを向かせることはできるだろうか。死体が無ければほぼ黒と見ていいだろう。
確か近くに配置されているのは——源五郎が兵隊のデータを読み込もうとしたとき。
ピッピピッピ……。
携帯が異常音を発しはじめた。この音は……ＨＭ—12の緊急コード、破損警告だ。
それを聞いて、肩の力を抜く。調査の腰を折られて、気抜けした顔をしてみる。

「まだまだ大丈夫だとは思うが……確認してみるか」
源五郎は破損状態をチェックしはじめた。なんといっても自分の身体よりもロボットが好きなのだから仕方がない。特にＨＭ―12型は、源五郎のお気に入りなのだ。
「ふむ……外皮コーティングの融解、右腕射出口破損、左腕短剣損傷……か」
煙草をひょいと咥え、二、三度ぷらぷらと遊ばせる。
なあに、まだまだ。
そんな余裕すら持って、源五郎は煙草に火をつける。ぷかぷかと煙を吐きながら考える。
「柏木耕一……それとも坂神蝉丸、か……？　生物とは、やり方次第で、そこまで達するものなのか……」
源五郎は〝人間のこころ〟というものを信奉する一方で、〝生身の身体〟の限界を感じ、失望していた。機械に依存する全ての人間は、人間のどこかに諦めを感じているのかもしれない。
興味を覚えて、別の端末に移動する。
「ちょっとばかり、片目を借りるよＨＭ―12……」

「がはっ⁉」
全員の期待に応え、未知の性能を持つロボット相手に戦い続けた武人が、遂に決定の一打を許してしまっていた。
「攻撃、成功……」
冷たく、事務的に。無感動な事実が述べられる。
くるくると回るように崩れ落ちる蝉丸。叫ぶ彰を後ろに残し、七瀬が駆け寄って抱きとめる。
「(｀Д´)せ……蝉丸っ！」
月代が蝉丸に被さる。
……不覚。
無意識にだろう、そう呟いて蝉丸は力尽きる。ロボットの刃に絡む血が、鮮やかだった。動脈をやら

れているのだろうか。
　月代に蝉丸を任せ、七瀬は一人、ＨＭ―12に対峙する。ひどく透明な瞳孔が、高らかに機械であることを主張していた。
（機械のくせに……）
　悔しさをぶつけるように、その眼を注視していた七瀬が、ぎょっとした。
　右眼がぐるん、と。左眼と全く違う方向に動いたのだ。その眼は後ろにいる彰、もしくは駈け寄っているであろう初音を捉えた。そう確信し、七瀬は焦りを覚える。押し寄せる危機感に、自然と汗が噴き出す。ふらつく身体に決意の鞭を打ち、闘争を続けるべく得物を握るその手に、力をこめる。
（機械のくせに……生意気なのよ！）

「えーと……なんだ？　装備充電中か。放電したな？　成功？　坂神蝉丸は倒したのか？　で……なんだ？　この坂神を引きずっているお面は？　それから……誰だ？　ああ、七瀬留美か？　ん？　なんだこいつは？　何やってるんだ？　柏木耕一か？」
　ぶつぶつ言いながら右眼のカメラを動かしていく。少しばかり常識を超えた、認識しづらい要素が多すぎる。
「んー……こりゃひどい怪我だな、彰くんか。巳間晴香は……こっちには居ないようだな……」
　更にカメラを動かす。ぐりぐりと右眼が自在に動く。視界の移動に伴い、源五郎はその眼の動きを見た七瀬と同様に、ぎょっとした。
「ん？　これは？　げ……源三郎さんか!?」
　泡を吹きながら地に伏す、源三郎の姿がそこにあった。
　ドガ！
　画像が揺れる。
「なんだ!?　くっ……これ以上は無理か！」
　仕方なく、統制を再度ＨＭ―12に戻す。

「HM―12、方針変更だ。やれることをやれ。殺して構わん。充電終了次第、獅子吼の使用も認める」
源五郎は方針を改めることにした。それは、自らもリスクを負わざるを得ない状況に陥ったと、そう覚悟した上での決断であった。

ちょうどHM―12の右側から。初音は、無謀にも体当たりしていた。
「初音ちゃん！」
七瀬が間に割って入る。普通なら許されぬはずの、迂闊な動きだったが、ロボットは反応しなかった。
「コマンド変更」
短く、ひとこと。何を意味するか解らない。だが不吉な予感を漂わせ、ロボットは静かに宣言した。
七瀬と初音の、目の前で。
「……くっ！」
恐怖に屈することなく、七瀬は両足を広げ重心を下げる。横から振り上げた鉄パイプを振り下ろす。
叩きつけるように打ち降ろされた、必殺の一撃。
しかし、それを弾くようにHM―12の腕が唸りをあげて振り回される。腰から上、三百六十度の回転。
七瀬と初音が煽りをくって転倒する。明らかに今までと異なる、人外の動きへの変化に、七瀬は戸惑いながらも叫ぶ。
「は……初音ちゃん、大丈夫⁉」
「う、うんっ！」
お互いの身を案じる二人をよそに、ロボットは蝉丸と月代のほうに正対していた。
「充電終了」
ただそれだけを告げて、HM―12は口を開く。いや、人間ならば顎を外す、と言った方が正しい。奇妙なまでに直立しながら、両眼の瞳孔が激しく開閉していた。
距離を測っている。七瀬はそう直感した。
唸りが聞こえる。開いた口からだろう。しかしそれは次第に大きくなり、やがて世界全体が鳴り響く

ような、異様な咆哮に成長していった。
コオオオォォォォォ……
地の音。
不気味だった。
噴き出す汗も乾ききり、瞬きすら忘れて走り出す。
(これ以上、死なせてたまるか――!!)
ひょおおおぉぉぉぉん!!
風の音。
理由はない。
ただ直感に従い、七瀬は意識のない蝉丸をひっぱり、投げ飛ばす。
「逃げなさい！」
月代に叫ぶ。自らも、横に飛ぶ。その咆哮に、間違いなく恐怖を感じていた。
……タイミングが、遅れた。
いくつもの不確定な要素の積み重ねの中で、七瀬はそれだけを確信していた。
(間に……合わないっ!?)

イイイイィィィィィン!!
切り裂くような無音に近しい高音とともに、七瀬は腕に痺れを感じ、得物を取り落とす。先ほどまで背負っていた岩は砂と化し、鉄パイプは半ばから塵と化していた。
それでも無事だったのだから……奇跡がおこったように思えた。
(かわした……の？)
ロボットが、転倒している。
見上げる七瀬の視界に。
太陽を背負って女が立っていた。
「良く解んないけど……相変わらず無様なヤツね」
日本刀を閃かせ。
にっこり笑って女は言った。
「助太刀、するわよ」
そこには晴香が、立っていた。
貸しだからね、と余計な一言を付け加えて。

五体のロボットを前に、源五郎は考えていた。
それは、施設を守るＨＭシリーズの全てだ。戦闘用の二体を信頼し、あまり警備は置いていなかった。
「見捨てるわけにも、いかないか……」
そう呟いて、彼女達を参戦させる覚悟を決める。
もちろん、戦闘用でもなくロクなプログラムも施されていない彼女達は、それほど強くない。防御力とて人間と大差はない。
「三体、裏から回れ。脱出口を使って構わん。初撃が命だと心得て、戦闘位置をサーチしながら行動しろ。最優先は七瀬留美、巳間晴香だ。殺してかまわん」
二体を最後の守備に残し、計略を仕掛ける。
「行け」
これが当たれば大逆転だ……そう祈りながら、源五郎は神経質に部屋を歩き回った。
しかし。
源五郎の期待は大いに外れる事になる。

「千鶴姉……これ、なんだろう？」
大きなファンが遠くに見える。今は止まっているが、動けば相当大きく空気を動かすのだろう。
「海底トンネルなんかで、圧力保持に使うファンに似てるけれど……」
小首を傾げて黒髪の女性が答える。
「うぐぅ……みんな、おんなじ顔だよぅ……」
足元には、三体のロボットが倒れていた。
出会い頭。
まさしく源五郎が調査中の、怪しい三人組に出会ってしまったのだった。

585 鉄

転倒した少女のロボット。
その頭部が、僅かに歪んでいる。
「案外蹴りでもへこむのね――」
そんなどうでもいい事を呟きつつ。

晴香はメイドロボの右を取る。
それに呼応するが如く。
七瀬留美はメイドロボの左を取った。
「気を付けて。そいつ、左手から電撃放つわよ――」
警告。
晴香は答えはしなかったが――無言のまま、日本刀を鞘に入れた。
正解だ。
鉄製の武器など、掴まれればそれまで。
銃の効かぬ相手、刀など使ったところで斬れる筈も無し。
だが。
――素手で倒せる相手でもなさそうね。
立ち上がったメイドロボの左手は、未だに不吉な音を立てている。
一瞬の停滞。
メイドロボは、右を見た。
七瀬を。
「ふっ！」
瞬間、晴香が駆けた。
メイドロボがその姿を確認すると同時に、七瀬が駆ける。
二方向からの攻撃。
流石に、片手では対処は出来まい。
「――破壊」
小さく、ぽつりと。
まるで駆動音の一つのように、その単語は吐き出される。
それで怯む晴香ではない。
繰り出された左手をひらりと避けると、その腹部に蹴りを見舞った。
吹き飛ぶ。その左手から、七瀬は、メイドロボの後頭部を打撃した。
敢え無く、メイドロボは顔面から叩き付けられる。
――それでも、壊れる事は無い。

「しぶといヤツね……！」
忌々しげに、七瀬がぼやく。
倒れたメイドロボが、脚を掴まんと繰り出す左手をひらりと避ける。
その腕を踏み、後ろへと跳んだ。
「殴って壊れる相手じゃなさそうよ」
「……かといって、銃が効くわけでもないわ。どうするつもり？」
こっちが訊きたい。
再び立ち上がるメイドロボは、微かに異質な音を立てつつある。
その身体が、歪み始めているのだ。
だが——致命的なレベルにまでは、至らない。
——ふと。
晴香の目に停まる物。
それは、誰にでもあるもの。
人であれど、ロボットであれど、それはあった。
だが、今は閉ざされていた。

つい先程までそれは凶悪な兵器であったが——連続して放って来ない事を見ると——
「……留美。あんた、距離を稼ぎなさい」
立ち上がったメイドロボに駆け寄りつつ。
晴香は、七瀬を名指しで呼んだ。
「距離って——逃げろって言うの？」
「いいから——こいつに〝あれ〟を使わせるのよっ！」
〝あれ〟。
メイドロボの遠距離からの攻撃手段と言えば——ボウガンが失われた今、つい先程使われた『獅子吼』以外に無い。
無論、二人は名前までは知らないが。
だが、何故あれを。
「冗談じゃないわ。あんた、あたしを殺す気っ⁉」
「——考えがあるのよ」
脚を払う。
もはや左手しか使ってこないメイドロボの攻撃は

単調過ぎた。
少し考えを巡らせれば。
蹴りや右手からのコンビネーションも使えた事だろうが――
生憎、そこまで考えられる程頭は良くないらしい。
メイドロボは、再び地に伏した。
「いいから、さっさと走りなさい！」
「――」
晴香は。
脚を払うが如く振るわれた左手を、これまた七瀬の如く避けると、叫んだ。
「――死んだら、恨むわよ」
そう言って、七瀬は背を向けた。
望むところよ――と返ってきた、ような気がした。
駆ける。
全力で。
だが、逃げるだけであれは使われるのか？

そんな事など分からない。
だが、賭けるしかないのだ。
勝つ為には。
その、晴香の「考え」に。
ある程度距離を開いたところで、七瀬は振り向いた――。
丁度。
下腹部に放たれた渾身の踵蹴りが、再びメイドロボの身体を仰向けに転がしたところであった。
振り向く――そして、駆ける。
しかし、それも半ば程で止まる。
七瀬は。
メイドロボと、晴香を挟んだ形で向かい合う事となった。
――使ってくるのか？
脳裏に、微かな不安。
晴香とメイドロボとの距離は、さほど大した物ではない。

遠くもなく、近くもない。
獅子吼を使う事なく、駆けてくる可能性もあった。
だが。
思惑通りであった。
メイドロボが、顎が外れんがばかりに口を開いた。
何かが、収束していく――頭に響く、きいいいぃぃいん……という音。
獅子吼は――〝遠距離に二人以上の人間がいる時に放たれる〟。
単調な思考回路。
それを読んだ上での行動であった。
――ここからは、本当の賭けね。
刀の鞘を抜く。
それを右手に握り。
「何があっても、動くんじゃないわよ」
そう言い放った。
「――あんた、まさか」
死ぬ気なんじゃないの……？

その問いに、晴香は僅かに微笑を浮かべ。
応えた。
「あんたより先に死ぬ気は無いわ」
そして、駆けた。

獅子吼発射まで、あと五秒――

駆ける。
鞘から抜き去った刀が、刃が、ぎらりと禍々しい光を放つ。

獅子吼発射まで、あと四秒――

間に合うかどうかなど分からない。
だが、無駄に戦い続けたところで敗れるのは必至。

獅子吼発射まで、あと三秒――

勝てぬ勝負などする気は無い。
だから、敢えて危険な賭けに出たまでのこと。
獅子吼発射まで、あと二秒――
刀を握り直す。
後少し！
獅子吼発射まで、あと一秒――
――。
――零。
どんっ。
「――チェックメイトよ」
呟かれた言葉は――人の物。

メイドロボは。
口を、喉を、刀で貫かれ。
その身を、びくりと震わせた。
そう、何もメイドロボの弱点は目だけではない
――彼女達が気付かなかっただけだが。
弱点は、いくらでもあるのだ。
眼も。
口も。
貫けば、人は死ぬのだ――。
しかし、機械に至ってはその限りではないらしい。
貫かれたにも関わらず。
それは、確かに晴香の方を向いた。
左手に走る電撃は、既に、左腕全体を包みつつある。
「しぶといやつね……」
ぽつりと、呟く。
もはや拳以外に頼る物など無い。
晴香が、腰を低く落とした――

その時。
「避けろぉぉぉおおおおおおおおおっ!!」
――絶叫。
振り向けば、先程から腰を振っていた妙な男の股間が。
青白い光を放っているのが見えて。
――それは、本能的な恐怖。
晴香は。
もはやメイドロボの存在すら忘れたかのように、脱兎の如く、駆け出した。
――そして、それは間違いではない。
メイドロボは。
再び、その身を震わせる。
壊れたかのように。
だから。
もはや、逃れる事など叶うはずも――――
無かった。

鋼鉄の少女は。
蒼く輝く、灼熱の光に包まれた。

586　マツリの痕

「ちんたらしてるウチに、全部終わっちまったってワケかい」
「……ふみゅ～ん」
教会に辿り着いた二人（と、動物たち）を歓迎するものは誰もいなかった。
残るのは、点々と続いた血痕など、戦闘とおぼしき跡のみだった。
しばし、途方に暮れる御堂と詠美。
「ち。ここでじっとしてても仕方ねぇ。気が進まんが、坂神の野郎と合流……」
「ねぇ、したぼく」
「あ？」
「あれって……お墓じゃない？」

詠美の指差す方向。それは教会の隅にあった。見れば、明らかに地面を掘った後がある。
「……」
無言で、その墓に近づく御堂。詠美は慌ててその腕を捕まえる。
「ちょ、そんな怖い顔してどうする気よ⁉」
「誰が埋められたか調べる」
御堂は淡々と応えながら、歩を進めていく。
詠美は引き摺られる格好になりながらも御堂の後をついていく。
「やめなさいよ。あんた、そんなことすると死んだ人に失礼だって」
御堂が、笑う。
「死人に失礼、か。死人を生み出す強化兵に対して意味の無い言葉だな」
「あそこに埋まっているのが、あの水瀬名雪と名乗った女なら誰かがあの女を殺したってことだ」
「そ、そりゃそうよ。自分で死んで、お墓に入る人なんていないんだから」
「わからねぇのか？　殺しておいて、墓に埋めてるんだぞ。あの女と関わりのある奴の仕業の可能性が高い」
「な、なんでよ？」
「知らない敵に襲われたら、お前、そいつを葬ってやるか？」
詠美はしばし考えて、ぶんぶんと首を振った。
「ああやって弔うってのは、その死んだ奴に敬意を払ってるんだろ。だとしたら、知り合いか、家族か、恋人か」
御堂は詠美の方へ向き直ると、吐き出すように呟いた。
「……つまりだ。相沢祐一が水瀬名雪を殺してるかもしれねぇってことだ」
「相沢祐一って、ゆういちって人の本名？　なんでなんで、そんなのわかるのよ？」
「馬鹿か。さっき放送が流れたとき、生存者の一番

最初に呼ばれただろうが」
「……ってことは、まだ生きてるってことだね」
果たして、その墓の中から見つかったのは二人の女性。
そして、一人は御堂の知る顔であった。
「……どうだった？」
掘り出した土を元に戻してる御堂に、詠美は近づいて声をかける。
「水瀬名雪が、いた」
「そう」
少し落ち込んだ様子で、詠美は言った。
「あ？　どうした？」
「ん。ちょっと。あの人、祐一って人にホントに殺されたのかなぁ、って」
ぽんぽん、と土を盛り付け、御堂は立ち上がる。
「さぁな。ひょっとしたら、あの女が死んだ後に相沢祐一がここにやってきて埋葬したのかもしれねぇがな」
「そ、そうだよねっ！」
「なんだ？　お前、ちょっと変だぞ？」
「変とはなによ！　したぼくのくせにいっ」
ふん、と御堂は続ける。
「いいか、もう一度言っておく。この島は狂ってる。その気になれば、親だろうが子供だろうが殺す奴だって出てくる」
詠美は何か反論しようとして、御堂の言葉に遮られる。
「甘い考えは捨てろ。てめぇみたいなガキが殺し合いに慣れてるとは思わねぇが、必要なときは誰でも殺すぐらいの覚悟が無ければ――死ぬぞ」
「ふみゅ～……」
目に見える程に落ち込む詠美。それを見て、ち、と舌打ちをする御堂。
「あー、なんだ。だが、お前はそうならないように頑張ってるんだろうが？　こんなことで落ち込んでどうする？」

しかし、である。御堂が墓を暴いたのは、水瀬秋子が眠っているかどうかを確認するためだけではなかった。
先程の放送で死亡者に名を連ねていた少女。――月宮あゆ。
その少女が、ひょっとしたら眠っているかもしれない、その確認のためでもあったのである。
あのガキみたく、発信機を吐き出して「死んだ」ってんなら良いんだがよ……。もし、本当に死んでいたら。
瞬間。御堂から殺気が膨れ上がり……そしてそれはすぐに収まる。
冗談じゃねぇ。なんで、俺がそんなことに激怒しないといけない？　あいつが死んだって、俺には何ら影響はない。
「ねぇ、したぼく？」
「……あ、なんだ？」
「ふみゅ……」
「行こうよ。こんなくだらないゲームのシナリオなんか破って捨ててやるんだ」
「……ふん。大した案も無いくせに、目標だけは一人前ってか」
「うるさいわね。あんたも協力しなさい！　大事な人を守りたいんでしょっ!?」
「ああ？　何言ってやがる？」
御堂は胡散臭そうな目を詠美に向ける。動揺はなかった……筈だ。
「この詠美ちゃんさまを守らせてあげる、って言ってるのよ。さぁ、存分に守って、守り抜いていいわよ」
「……おめぇ、やっぱ馬鹿だろ？」
御堂、ため息ひとつ。
「で、結局あの墓にはそれを置いていかなかったのか？」
「あ、うん。……これって、やっぱ祐一って人に渡

すほうが良いと思ったから」
「相沢祐一があの女を殺していたとしてもか？」
「……うん」
詠美が、頷いた。——好きな人の、側にいたいという気持ちは、誰だって同じだと思うから。
あたしも、和樹のところに何か置いていってあげたら良かったかな。——帰るときが来たら、もう一度だけ行くからね。……和樹。
そんなことを思いながら学生手帳をしまうと、詠美は御堂に尋ねた。
「あ、そうそう。動物たちは？」
「辺りを偵察させてる」
「あんた、そんなことも出来るの？　ホント、動物園の園長みたい」
そのとき、林の影から毛糸玉が飛び出してきた。
「ぴこぴこ〜っ！」
「っと。噂をすれば、だな。……行くぞ」
「うんっ！」

587　仰げば尊し

「……」
モニター越しに……青白い濁流に飲まれていく。
「……」
何も言わずに、ただそれを見ていた。
それが終わったとき、モニターに映るのは、中華キャノンを構えた耕一の姿。
断続的に砂嵐がモニターを覆い尽くす。
プルルル……源五郎の特殊携帯がけたたましく鳴り響いた。
ガチャッ……
「機能、完全破損……戦闘……不能……デス……」
「そうか……分かった」
短く、そう答える。
「もういい。あとで回収してやるからそのまま寝ているといい」

モニターの砂嵐が、増す。
元をただせば、源五郎の失策だった。
近距離戦闘のＨＭ―12、遠距離戦闘のＨＭ―13。
その強さは、二体がそろって無類の力を発揮する。
御堂を追わせ、ＨＭ―13が破壊された時から、負けは必然だったのかもしれない。
「誰もお前を責めはせん、もう、休め」
「ソノ命令ハ、聞ケマセン……」
「それ以上動くと……二度と復元できんぞ」
「ソレガ……戦闘型トシテ生マレテキタ私ノ……生キル目的デスカラ」
「……」
モニターが、進む。
一歩、二歩と。
耕一に向かって。
「分かった」
ＨＭ―12のメイン頭脳に残されたメモリー。
姉である、マルチの残した遠い記憶。

源五郎が残しておいたその本能が、メイドロボにそうさせたのかもしれない。
「ロボットに心は必要か……」
いつかの、青年との会話を思い出す。
「俺は、必要だと思っているよ」
モニターを見ながら、誰へともなくそう言った。
モニターを断続的に包む、その砂嵐の頻度が多くなっていって……。
あと耕一まで、五歩……四歩……三歩……。
そこで、モニターが完全に途絶えた。
ツ――――――――
携帯の向こうから響く無機質な音。
そして……。
プルルルルッ……。
再び、別の携帯が鳴り響く音。
ガチャッ……。
「はい……」
「源……五郎か……俺だ……源三郎だ……助けて

……くれ……」
「源三郎さん……あなた、自分で勝手に飛び出していったんじゃないですか？」
「そ、それはそうだが……頼む……助けてくれ源五郎っ……!!」
「と、言われましてもねぇ……」
「も、もう戦えねぇよぉ……鼻も折れちまったし……」
「源三郎さん、あなたも長瀬なら、自分で広げた風呂敷ぐらいは自分でたたんでいただけますか？」
「今の戦闘で腕の骨が折れたんだっ！　さらに背中を刺された……もう動けないんだ！」
悲痛な叫び。
「見てたんだろう？　ええっ!?　源五郎っ!!」
「入り口はすぐそこですよ。それだけ喋れる元気があるなら大丈夫でしょう？　……勝手に入ってきてください」
「ちょっ……げんご――」

プチッ……
「さて……と」
再びモニターを見つめる。既にそれは砂嵐が映るだけでしかなかった。

588　愚者達の行く末

結局、助かったのは自分だけだった。
里村さんはわざと自分の命を捨てた。
祐一はそれを追って、崖下へ飛び下りた。
この高さだ、落ちたら助からない。
残されたものは何だろう。
私は生きている。なつみさんは死んでいる。
死んでいる、よね。
祐一の荷物も、傍らにあった。
私達は、大馬鹿だ。

祐一を最期まで信じきらずに、自ら命を捨てた里

村さん。
どうして信じてあげないの？　あんなに真剣に、
里村さんを想っていた祐一を。
簡単に諦めて、くだらない自己犠牲なんて。
はい、馬鹿一人目。

それを追って、崖から飛び下りた祐一。
もう助からないのはわかってたはずでしょう？
あなたの思いはわからないでもない。
でもあなたが死んだら、里村さんの犠牲が無駄になるだけなのに。
はい、馬鹿二人目。

そして、なつみさん。
撃ったでしょ、里村さんを。
ねぇ、どうしてそこまでして人を殺すの？
そんなにボロボロになってまで、何で殺そうとするの。

私にはわからないよ。馬鹿だよ、あなたも。
……馬鹿、三人目。

あ、私もだ。
私も教会で、人を一人刺したんだ。
あはは……絶対に殺したりしないって誓ったのに、
何やってるんだろう？
馬鹿、四人目。
やっぱり私達は、祐一についていくべきじゃなかったんだ。教会で別れるべきだった。甘えてはいけなかった。そうしていたら、誰も死ななかったのに。
――私達は、みんな大馬鹿だ。

どうして、私だけ生きてるんだろう。
生きている。生きている以上、前に進まなきゃ。
でも、ちょっと疲れたから、休みたい。
休みたい――。
「ぴこぴこっ！」

何か音が聞こえた、そんな気がした……。

589　ゆめのあと

夢を、見た。

みゅーをうめにいって、そこであったひとたち。
こうへいさん、みずかさん。
みゅーがいなくなって、さみしくて、こうへいさんの学校へいった。
みずかさんは、笑ってあたまをなでてくれた。
こうへいさんも、あきれ顔だったけど、学校にいくことをゆるしてくれた。
せいふくももらって、しばらくあの学校へかよった。
こうへいさんには『おとうさん』のようなきびしさとやさしさがあった。
みずかさんは『おかあさん』みたいだった。

ななせさんは、なんだかんだでかまってくれて、『おねえさん』みたいだった。
たのしかった。
ハンバーガー、いっぱい食べた。
じゅぎょうに出た。
ななせさんのかみのけで、あそんだ。
かえりみち、いっしょに歩いた。
もとの学校にもどると決めたときも、笑顔でおくってくれた。
ぜんぶ、たいせつな、想い出。

かえりたかった。あのころに。
もどりたかった。あのばしょに。
だけど――

夢から唐突に、瑞佳さんの姿が消える。
夢の世界が、黒く、染められていく。
瑞佳さんはもう、いない。

このわけのわからないゲームとやらのせいで、命を落としたのだ。
もう、あの頃に帰れない。
もう、あの場所に戻れない。

復讐なんて真似はしない。
そんなことをしても、瑞佳さんが戻ってくるわけじゃないのだ。
それに、誰かを傷つければ、また悲しみが増える。
そんなことに意味はないのだ。

どこまでも冷静に頭が回る。
感情に任せてしまえば、流されてしまえば、どれだけ楽になれるだろう。
でもそれは、きっといけないことなのだ。
今だから、この頭だから、理解できた。
そう、『理解』できてしまうのだ。

だが、咄嗟にとってしまう行動というのも存在するわけで――

自分の手には、刀が。
教会で人を刺した、その記憶がリアルタイムに再生される。
私が刺した人。
その顔が振り向く。
血にまみれて、笑っていた。

「いやぁぁっ！」
私は目を開けた。
夢を、見ていた。
そして今、最初に映ったのは。
恐い顔。
その顔が、言った。
「目、覚めたか？」
「きゃぁぁぁぁっ！」

私は思わず、その人を殴りとばしてしまった。

590　夢現

ここは、夢の中……なんだな。
そんな風にも思いながら。
ゆらゆら……ゆらゆら……揺れる俺の体。
ただ、闇の中で漂っていた。
遠くで、北川と、名も知らぬ外人女の声が聞こえる。
多分、そこが現実だ。
すまん、北川、もう少しだけ寝かせてもらうぜ。
……そういや俺って、ここで何してたんだっけ？
確か……悲しいことがあった気がするな……どんなことだっけ？
頭が痛い……思い出せない。
この頭の、心の痛みは夢か現か。
どこかにピクニックでも来てるんだっけ？
ああ、そうだよな……それなら辻褄が合う。
……ってことは北川と二人でか？　……イヤすぎだな、それは……。
しかも北川は知らないバイリンガルまでナンパして……。
くそ、香里に言いつけてやろうか……。
ってゆーか北川と二人でこんなところにピクニックに来ることがそもそもおかしい。
いや、北川には悪いが男おんりぃで山にピクニックなどと……言語道断だ。
……そうだよなぁ……たぶん名雪や香里も一緒に来てると考える方が妥当だ。
北川のことだ。
「おい、香里、相沢や水瀬達と一緒に旅行に行くんだが、お前も一緒にどうだ？」
なんて切り出すに違いない。かと言って香里が素直に承諾するとは思えないけどな。
だが、栞をうまく言いくるめればきっと香里も首

を縦に振るに違いない。
その役目は……やっぱり俺か？
それに……そうだとしたら舞や佐祐理さんも誘って、そうだよな、俺。
あゆ、真琴あたりは何も言わずとも、
「私も行く！　置いていったら殺すからね祐一！」
「うぐぅ、ボクも行くよ！」
とか言ってるよな、絶対……
北川はこういう企画を組ませたら、その行動力は天下一品だ。穴掘り以外にも得意なことはあったんだな。うむ、さすがは俺の親友だ。
でも、本当にそうか？
……なんかすごく悲しいことがあった気がするけど……駄目だ、思いだせん。
……まあ、いいか。あとで北川から聞けばいいさ。
……寝よ。
――俺の心を包み込む悲しみで、胸がつぶれてしまわないように。

「ジュンー、重くないデスか!?」
「頑張るベシ、俺！」
「というヨリ、ユーイチと一緒に荷物を運ぶというのは無茶ではナイですカ？」
「相沢が起きたら運ばせるから大丈夫だーー！　ハアハア……」
さすがに、ギャグで返す気にはなれない。
「ハア……ハア……」
とりあえず、崖から離れて数十分。
「まあ、こいつにもいろいろあったんだろうな」
背に祐一を、手に大量の武器を持って、北川は歩く。
自分達の元々の荷物に加えて、祐一の周りに散乱していた荷物を回収したお陰で、まるで弁慶のような出で立ちだ。北川が持ちきれない軽い小物は、すべてレミィが抱えている。
無理に持つ必要はなかったのだが、殺傷力のある武器を放置するのは危険だ……と考えてのことだ。

本当は祐一には歩いて貰いたかったのだが……死んだように眠ってしまった。先ほど話した印象だと記憶喪失になっている可能性もあるかもしれない。
（着々と、進んでいるんだな……クソ食らえなゲームが……）
北川にこみ上げる嘔吐感。
一番許せないのは、やはり、ゲームの主催者。
（こんな俺にも吐き気のする『悪』は分かる。『悪』ってのは自分自身の為に弱者を巻き込む奴のことだ。まして女の子まで……奴等がやったのは……それだ）
別に北川とて正義感を振りかざして行動していたわけではない。ただ、自分の置かれた状況でよかれ……と思っていることをやっているだけだ。
それでも、このゲームを正当化して許してやろう……などと言う気は毛頭ない。
（あのＣＤ……どんな意味が隠されているんだろうな……実はただの変哲もないゴミＣＤでしたー……だったら笑うぜ、俺は）
それこそ道化師だよな……。
（やっぱ情報が欲しいや……なんとかしないと……な）
「ハアハア……ジュン？　どーしたの？」
「ドキッ……いや、なんでもないって」
「……？　そーデスか？」
今の一瞬、息を荒げるレミィを少し色っぽいな……などと思ってしまった。
（神様、母さん、こんな潤めをお許しください……）

591　DEAD OR ALIVE（前編）

「こんなとこで……いいか？」
森の中。茂る草木は潮風を浴びてしなびているように感じる。
「わりといい物件だなぁ、ここは」

茂みの中、どっかりと腰を下ろす。
おぶっていた祐一を背中から降ろし、地面に横たえる。
森の入り口、視界の向こうには果てしなく広がる大海原。
「ああ、今の俺達の欲している世界が……あの海の向こうにあるぅっ……!!」
「海の男にでもなりたいのですか、ジュン？」
「いや……そうではなくてだな……」
たまにこの金髪の少女は、未だ自分の置かれている立場を理解できていないのでは……などと邪推してしまう。
「ただ、帰りたいな……と、それだけさ」
ただ、平和だったあの日々が、ひどく懐かしく感じる。
（まだ、三日しか経ってないんだよな……）
「Ｏｈ！　ジューン……Homesick ですか？　……元気出してくれないと私も悲しいデス……」
「か、母ちゃ〜ん……って、違う」
（本当に分かってんのか、この娘は……）
ハア……大きく溜息をつく。
まあ、ここなら、周りから見つかりにくく、周りの状況を確認しやすい。
少々の話し声など、潮騒の音に消されてしまう……落ち着くには割と適した場所と言えた。
「お、おい……何してんだっ？」
「ん？　何って……膝まくらだヨ」
祐一の頭が、レミィの白いとも健康的ともとれるつややかな太腿の上に乗っかっている。
「……だ、駄目だっ……」
「……？　何でデスか？　枕もなくこんなトコで寝たら頭痛くしちゃうヨ。移動中、私楽してたカラ、このぐらいはしないと……適材適所ネ♪」
「いやっ、待て待て……そんなうらやまし……ごほん、ごほん……もとい、婦女子にそんなことはさせられん……。これが我が北川家の家訓でな……だか

ら……俺がやろう」
「ワオ、ジュンってばフェミニストね。感激しちゃうヨ！」
まさか、うらやましさからくる嫉妬とは口が裂けても言えない。
祐一の頭の上方にまで移動すると、そっと祐一の頭を自分の膝に乗せた。
（くっ……俺の膝に男が乗ることになろうとは……この北川潤、一生の不覚っ……!!）
「なんか、苦虫を噛み潰したような顔してるデス……」
「えっ？　いや、そんなことはないよ？　ははは、男にも女にも優しい男、ジェントルマン北川潤と呼んでくれ」
（くそ、よくよく考えてみればなんで俺が相沢にここまでしてやらにゃならんのだ……。人がヒイヒイ言いながら移動中も背中でグゥグゥ寝くさりやがって……）
「おーい、相沢〜、お・き・ろ〜！」
ペシペシ……頭を、平手で叩く。
「う〜ん……あと三寸だけ寝かせて……」
「単位がオカシイデス……」
「三寸経ったぞ〜」
「じゃあ、あと五寸……」
「経つか！　このアホッ!!」
ベキッ……北川の拳が祐一の脳天に突き刺さった。
「痛いじゃないか……北川……か？」
「他の誰に見える」
「謎の不知的生命体X」
「誰が宇宙人だ、誰がっ！　しかも『不』ってなんだ！」
「そのまんまだ……」
「くそっ……まあ、いいか……それだけ軽口が叩けるなら安心したよ。……結構心配したんだぜ？……これでもな。とりあえず膝から降りてくれ」
「うおおっ、何故俺が北川の膝の中で愛を語らって

るんだっ？」
「語り合ってないっ！」
「……で、何故俺はここにいる？」
祐一の言葉。
「ん……まあ……いろいろあってな……っていうかお前どれほどのこと忘れてるんだ⁉」
「いや……ここ、海の近くの森の中か？」
「島デス」
「島……？　どこのだ？　……しかも……このアメリカンな女性は誰なんだ？」
（いかん……全部……忘れてるのか……？　この島であったこと……）
無意識に、北川の顔が曇る。
「じゃあ……水瀬や、香里のこともか？」
レミィに、黙ってろ……というように目配せしながら、ゆっくりと、そう言った。
祐一の向こうで、軽く首を縦に振るレミィ。
「名雪達も来てるのか？　そうだよな、俺とお前と二人で旅行なんて寂しいもんな……」
「旅行って、お前っ……！」
北川の顔が、引きつった。たぶん、いろいろな……複雑な意味で。
「……ふう……まあ、仕方ないか……とりあえず、自己紹介はしよう」
いろいろ、言ってやりたいことはあったが、なんとかこらえる。
「この娘はガルベス宮内。通称ガルベスだ」
「ガルベス……か」
「Ｏｈ！　私ガルベス……」
「まあ、とりあえずレミィって呼んでやってくれ」
「一文字もあってないじゃないか」
「細かいことは気にするな」
「私、大雑把な名前ネ……」
「で……だ」
北川の顔が、真剣なものに戻る。

「北川？」
　というか、祐一がこれほど真剣な北川を見たのは初めてであるかもしれない。
「お前の記憶を呼び戻す……」
「できるのか？」
「さあ……」
　口調は、あまり変わらなかった。
「聞きにくいんだが……昨日の夜……お前と一緒にいたあの聡明で可愛らしい少女は……どうしたんだ？」
　椎名繭。まだ、放送では呼ばれていない名前。
　言いよどみながら……まずは遠まわしにそう切り出した。
「……誰だ、それ？」
「駄目じゃん」
　しょっぱなからつまずいた……レミィを覚えてない以上、繭を覚えていなくてもおかしくないのかもしれないが。

「てことはお前……昨日のこと何にも覚えてないのかっ？」
「……いや、なんていうか……イメージがぼやけて……」
「じゃあ、最近の出来事で覚えていることはっ⁉」
「朝～朝だよ～、朝御飯食べて学校行くよ～」
「なんだ……それ？」
「目覚ましだな」
「変な目覚ましだな……」
「ああ、名雪が直々に録音したお手製の目覚ましだ。すこぶる眠気が増す」
「……………」
　北川の、手が震えた。
「まあ、いつもの登校前の光景なら覚えてるが――？　どうした、北川」
「……」
　無言で、立ち上がる。
「ジュン……？」

北川の気持ちを察してか、不安そうな顔で見上げる。
それを、大丈夫だ……と、無言で手で制する。
「どうした？　北川……」
「お前、本気で言ってるか？」
「……？」
「本気で、それを言ってるのかって聞いてるんだ」
低い、声。
「……ああ、俺が覚えてるってのは……その辺だけど……」
北川のその無言の迫力に、頭を一個分後ろへとずらす。
「本当に本気なのか？」
「くどいな……一体どうしたん――」
バキッ……!!
「――っ!!」
祐一の体が右へと吹っ飛んだ。
「……ジュン!?」

立ち上がりかけたレミィをもう一度手で制する。
「いきなりなにすんだっ！　この野郎っ!!」
一瞬の放心。その刹那、両手で反動をつけ勢いよく立ち上がる。
「このっ……!!」
そのまま北川の胸倉を掴みあげ、眼前にまでたぐり寄せ、睨みつける。
「……このやろうっ!!」
「……」
北川も、目をそらさず祐一を睨み返す。
祐一の口元から、血が一筋垂れた。
「言い訳もなしか、この野郎っ!!」
バキャッ!!
祐一が、北川を殴り返す。
「ぐぅ……」
「なんとか言えよ、北川っ！」
バキッ……。
胸倉を掴みあげた手を離すこともないままに、再

度、殴りつける。
それでも、北川が祐一から目を逸らすことはなかった。
「……いいかげん目を覚ませ、相沢」
「なんだと？」
目と鼻の先、一センチの距離でのにらみ合いが続く。
男達のぶつかり合いに、レミィはただ何もすることなくそれを見つめている。
「お前は、逃げてるんだよ！」
「なんだと……」
「都合のいいことだけ、ホイホイホイホイ忘れやがって……思い出せっ！　思い出せよ相沢！」
「いきなり殴られて……はいそうですか……なんて言えるかっ!!」
ベキ……もう一度、北川の左頬を殴りつける。
「……ペッ！」
口に溜まった血を、北川が横へと吐き出す。

その時も目を逸らすことはなかった。
「俺達は……逃げちゃいけないんだよ！　香里や、水瀬の為にもっ!!」
「……どういう意味だよ……」
「言葉通りだ。ある意味、お前は……すべてを踏みにじってるんだ」
「……」
「本当に忘れちまったのかよ……おい……なんとか言えよ……」
「……」
「なんとか言えよ、相沢っ！」
「……本当に……忘れちまったのかよっ……！」
「きた……がわ……？」
北川の胸倉を掴んでいた手が、下げられる。
（一体……なんのことだ……名雪……？　香里……？　この島で……何が……あったんだ……？）

恐い……恐い……
誰もいない……
真琴がいない、相沢さんもいない……
祐介さんもいない……
私は、……私は……
ワタシハ……
海辺の森を彷徨い歩く。
私の、あったはずの右手が、私の、強く祐介さんと結ばれていたはずの右手が……ない……
「どうしたの……？　私」
右腕を胸に抱きながら、歩く。
忌まわしい右腕が、私の視界に入らないように。
『……本当に……忘れちまったのかよっ……！』
突如、聞こえてきた声。
なんの声だろう……私は……導かれるようにそこへと向かった。

592 The Long Goodbye

戦闘ロボを辛うじて撃破した僕たち――いや、今回の僕は殆どがただ見守るばかりで、大したことは何一つしていなかったのだが――は、気絶した蝉丸さんの意識を呼び戻し、簡単な自己紹介を済ませた。
そして、これからの事で頭を悩ませていた。
『このまま通路の奥に進むべきか、否か』
管理者側の態勢が整う前に、このまま侵入したいというのが全員の気持ちだった。
けれども、無傷、或いは傷が少ないという状態なのは七瀬さん――いや、留美さんか――と巳間晴香さん、そして初音ちゃんの三人だけだった。
しかも初音ちゃんに戦闘は期待できない。
……というか、僕は戦闘なんかさせたくなかったし、そこは耕一さんも同意見だろう。
それ以外の者は皆、何かしら、決して軽くない傷

を負っていた。
耕一さんも僕にあんなことを言っておきながら、実は随分と体調に不備をきたしていたし、蝉丸さんの傷も思ったより深かった。本人の談では塞いでいれば数時間で治るということらしいけど……。
僕も、今回は防弾チョッキ上から受けた弾丸だけとはいえ、累積した疲労が抜けきらない。それに致命傷こそ無いものの、血も随分と失っているし……。
それからもう一人、仮面の女の子も、確かに怪我は無かったけれど、蝉丸さんがもう一度眠らせていた。
詳しくは話してくれなかったけど、仮面が何か良くない働きをしていて、起きていると本人の負担になるのだという。
とにかく、このまま先に進むのには、どう見たって支障がありそうだった。
気持ちの上ではこのまま先に進みたくても、この奇妙な共闘団体に必要なのは、とりあえず一度退いて態勢を整えることだった。
「……あのね、市街地の方にね、マナさんていう、女医さんがいるんだよ」
という初音ちゃんの言葉により、一行は市街地を目指すことになる。
道中、現状の確認などがそれぞれ行われた。
留美さんが教えてくれた、高槻が死に際に遺したという言葉。
高槻は、『この島の地下ドックに潜水艦がある』と教えてくれたのだと語った。
しかも、あの下衆野郎の言葉を、留美さんはなぜか信じたいのだという。
僕には理解できなかったけど、蝉丸さんが地下から響く音を聞いていて、もしかしたらそれが地下ドックなのかもしれないと言っていた。その施設には、既に一人の少年が向かっているらしいことも、蝉丸さんの口から語られた。

蝉丸さんの言葉が高槻の言葉の真実味を増しているけど、ならば何故、あの高槻がそんな事実を言い残すのか……。
　僕には本当に分からなかった。
　それから蝉丸さんの持っていたパソコン。これには何か情報が入っているかもしれないけれど、二人とも使い方が分からなくて満足にいじっていないらしい。
　休息をとるならば是非中を見てみたい。
　しかし、何よりもあれだけ強力なものに守られていた、例の施設。
　中には脱出の鍵になるようなものもあるのかも知れない。
　爆弾の起爆条件や、管理者側によるゲーム参加者の監視法のことなど、様々な意見が飛び出し、僕も何度か意見を求められた。
　その度に僕は、当たり障りのない返事を返すだけだった。

　怪我と疲労で頭が回りにくくなっているのも確かだったけど、自分にはその原因がはっきりと分かっていた。
　状況確認の一番最初に行われた、生存者と死者、そして、殺(や)る気になっているかも知れない人間を特定していたときのことだ。
　直後は皆、それぞれの抱える想いで無口になっていたけれど、すぐに次の話題へと進行を見せた。
　しかし僕はまだ、それを引きずっていたのだった……。
　僕の歩みは少しずつ遅れ、今では集団の最後尾から更に一歩離れて道を歩いていた。
　初音ちゃんにもしばらく放っておいて欲しいと言った。
　それで初音ちゃんは今、僕の少し前を耕一さんと歩いている。
　何回か放送を聞き逃していた僕にとっては、とても重要なことだった。

初音ちゃんのお姉さん達が生きているということは、とても嬉しいニュースだった。
だけど、僕が気にしていたのはそれではなくて。
……冬弥と由綺が、もう死んでいたなんてな……。
僕が一番の感慨を覚えたのは、やはり親友である二人の死亡確認だった。
しかも二人の命は、実に十二時間以上も前に失われていたのだ。
生きているみんなの為に頑張った、爆弾の起爆装置の設置されていた施設。
死と隣り合わせの戦闘の中、思い浮かべたのは初音ちゃんと、冬弥と、由綺のことだった。
みんなが生き抜くための礎になれれば、そう思っていた部分もあったのに、あの時に思いを馳せたその二人はもう既に亡くなっていたのだ。
あれで、万が一、初音ちゃんもこの世の人でなかったなら、そして僕が死んでしまっていたなら、とんだピエロが、一体できあがるところだった。

自嘲の笑みがうっすらと口元に浮かぶ。
二人の死が哀しいからって、そんな考え方はいけないんじゃないか、彰。
今、ここにいるみんなの役にも立つことをやったわけだし、祐介達だって生きてる。
……そうかもしれないな。
ああ、あの二人もこの仲間に呼べれば良かったけれど、あれから時間も経った。場所を移してるかもしれない。
しかし、あの冬弥達が死んでしまったなんて……。
二人は最後まで愛し合っていたのだろうか。
二人は苦しまずに死ねたのだろうか。
二人はあの世で仲良く暮らせるだろうか。
……先に逝った、美咲さん達と一緒に。
二人は……。
僕は、今更ながら気付かされた。
過去の良き日々の再現は望めないと思っていなが

ら、これから先を冬弥達とこの辛い過去（今はまだ現在だけど）を共有しながら何とかやっていくつもりだったことに。
その望みはすっかり失われてしまったのだ。
冬弥達の死によって、このゲームに連れてこられた僕の知り合いは、全員が永久に失われたってわけだった。
かつての自分の、日常を構成していた人、ひと、ヒト。
全員がもう、この世にいないなんて……。
仮に叔父と生きて会うことがあったとしても、二人の関係はもう、修復出来そうになかった。僕や祐介に同情し、このゲームを止めて欲しいと願ったかもしれない叔父。
でも、みんな死んでしまったのだから。
あの日々は帰ってこないのだから……。
でも、僕はここで絶望するわけにはいかなかった。
祐介に、初音ちゃんに話した自分の言葉の、その責任はちゃんととらなければならないから。
『確かに今まで僕らが思い描いてきた日常はもうこの手に還らない……。そう、だけどね、初音ちゃん。日常は、そこを日常なのだと思えば。きっと、そこが日常なんだよ』
それは、都合のいい言葉だったかもしれない。
だけど、あれは初音に言うのと同時に、自分に言い聞かせた言葉でもあった。
仮にこの島を生きて出られたときには、そんな風に考えて生きていこうと……。
美咲さん……。
由綺、冬弥、はるか。
そして英二さん、理奈さん……。
僕はあなた達のことを引きずらないで生きていこうと思う。
しかし、生涯忘れることもしない。

その為にもまず、このくそったれの島から脱出しなければならないが、それも今や終盤にさしかかっているると思う。
島からの脱出を為すために、仲間が集まりつつある。
集団で行動する以上、僕の行動は自分だけの責任では済まなくなってきているんだ。
だから……。

だから、彼ら、彼女らとの共通の目的を果たすまで、ほんの少しの間だけ、僕はあなた達を忘れることにする。

目的に向かって、僕の頭脳が最良の判断を下せるように。
……その深い悲しみで判断を誤らぬように。

『ごめんね、美咲さん……』

さよならは言わない。
本当のお別れはもう遠の昔に済ませてしまっている。
それに、これは長い別れではない。
僕が自分の役割さえ果たすことが出来れば、その後にはまた、みんなを思い出すだろう。
過去の良き日々に、思いを寄せながら……。

『残り　28人』

——さよならをいうのは、わずかのあいだ死ぬことだ。

そんな言葉がある。
しかしだ。……ならば、死者に送る別れの言葉は、いかなる意味を持つのだろうか。
単純に、永遠の別れと考えるべきなのだろうか？

そんな疑問をかつての彰は持っていた。
しかし、実際に彰が触れた死とは。
『永遠の別れ』であり、また、
『別れではないもの』であった――

593　悔恨

あれから、少しばかり経った――
祐介は、天野美汐の背後、約十五メートル程離れた位置を、静かに、歩いていた。
怯えた人間は妙に勘が良い。
バレると後が厄介だが、いざという時遠いのも厄介だ。
このくらいが、すぐ駆け寄れるから丁度良いだろうか？

――。

自分が発見してから一時間程度だろうか。
突然悲鳴をあげて、彼女は目を覚ました。

――。

それから。
彼女は、寝転んだ場所からふらりと立ち上がり。
歩き始めた。
当てがあったのかどうか。
自分を捜す為なのかどうか。
それとも――自分を、殺す為か？
それなら、彼女は自分の武器を握っている筈だろう？
いや、不意打ちということで素早く出して撃つのかも――

――どうでもいいか。

そう。
殺されたとしても、構わない。
その上で、自分は彼女と共に居るのだから。

――出来れば、隣に居たいけど。
それは叶う筈も無く。
ただ、護るのみ。
護るのみ。

しばらくすると、潮の香りが漂ってきた。
海が近いのだろう。

――海か。

あの、明け方の海辺を思い出す。
今朝の事だ。

――――。
――ああ、あの頃は、まだ。

時折、思う。
あのまま、あそこに居られたなら、と。
無論、それは逃げだ。
分かっている――否、分からされた。
逃れる事など叶わぬのだと。
自分は。
ただ、ひたすらに。

現実を見ないようにしていたのではないか？

この血生臭いゲームを。
辛く、哀しい戦いを。
何処かで誰かが殺され。
誰かが血を啜り生き残ろうとしている。

そんなゲンジツヲ――
現実を。
見ないようにしていたのではないか。
その代償は、大きかった。
今、持っている『右手』。
それだ。

――嗚呼。

手を失うなら、自分であった筈。
どうして。
彼女は、ただ。
怯えていただけなのに――

――。

償えるなどとは思わなかった。
だけど。

放っておける筈は無いのだ。
約束した――
「護る」と。
既に護るべきだった人達は失われた。
今は、もう。
彼女だけ。

依然として、彼女はふらふらと歩き続けている。
誰かに出逢ったらどうするつもりなのだろうか。

――ましてや。

それが、マーダーであったなら？
距離は十五メートル――全力で走って何秒だろうか？

――。

――大丈夫。
護りきれる。
今なら、覚悟があるから。
――そう。

もし、彼女に危害が及ぶなら――

――……本当に……忘れちまったのかよっ……！

――聞こえた。

誰かの声。
そして、前を進む彼女もそれを捉えたらしい。
歩く方向を変えた。
進み出す。
そして自分も。

――あの声の主は、誰だ？
心当たりは無い。
少なくとも、彰ではない。
――。

まぁいい――銃を握る。
汗ばんだ手に、確かな重み。
そうだ。
そうさ。
もし、彼女に危害が及ぶなら――

僕が殺す。

594　幕間　――虹――

戦いが終わるまでの時間はもう数える必要もない、と彼らは考えている。しぶとくも生き残った彼らは今、安全な場所に移動しているところだ。
せっかくだから、戦闘の終わった少し後のことをここに記しておこう。

七瀬彰と柏木耕一はふたり並んで大地に寝転んでいる。眩しい太陽の輝きと透き通るような空の色に見惚れて、微動だもせずにいた。疲れ切った身体と心を癒すその眩しい光の下で、ふたりは動けないでいた。ふと彰が耕一の方を見ると耕一も同じように彰の方を見ている。思わず笑みがこぼれる。
達成感という名前の笑みだった。
「――これで終わるんですよね」
笑みがこぼれる。
「終わるさ。終わらせたんだよ、俺たちが」
笑みがこぼれる。
「耕一さん。――本当に、ありがとう」
笑みがこぼれる。
「言っただろ？　二人で戦えば生き残れる、ってさ」
笑みが、こぼれる。
「二人じゃ危なかったですけどね。ここに来た人たちすべての力で僕たちは生き残れたんだ」
「団結の力、だな」
笑みがこぼれて、次の瞬間には笑い声がこぼれた。
ふたりは寝転んだまま拳と拳をぶつけ合う。残念ながら美酒は無いが勝利を祝う乾杯の狼煙だ。二人の腕の作るアーチが虹のように見えた。そんな風に見えるのも少しだけおかしくて笑い声が大きくなる。

七瀬留美と巳間晴香が親の仇でも見るかのような目で互いを睨みつけている。電撃でも飛び交ってい

るかのように張り詰めた空気である。言葉の一つもなく睨み合う姿は、知らない人間が見たら脅えて小便を漏らしてしまうかもしれないほど恐ろしい。
勿論その静寂はすぐに破られる。ちなみに最初に声を発したのは、地面に座り込んでいて立ち上がれないままの七瀬の方だった。
「久し振り」
狂おしい皮肉を込めた声である。知らない人が聞けばおろおろして逃げ出したくなるような声だった。
「ええ。――まだ生き残ってるとは思わなかったわ」
晴香の方も負けてはいない。その声の持つ重圧は、気の弱い人間なら一瞬で潰されるほど恐ろしかった。
「減らず口を叩くわね、あんたも」
「あら？　別に悪気はなかったのよ？」
けれど実のところ、この二人の睨み合いは知っている人が見れば大して恐ろしくはないのだ。
「あんたに殴られた頬、まだ痛いわ。まったく、手加減ってものを知らないんだから、この腐れアマは」
「へーえ。あたしはこれでも手加減したつもりだったんだけどね。――それにしてもあんたは優しいわ、すっっっっっっごく手加減してくれたんだもん。あたしはもう全然痛くないわ。ありがとね」
「……っ、ふん、まだ真っ赤なその頬でよく言うわ、あんた。あら、それとも元々そんな真っ赤なお猿みたいな顔だっけ？　ごめんねえ」
もう全然恐ろしくないだろう。こんなのただの仲のいい友達同士の戯れ合いだ。次に飛び出す言葉がどんなものかすぐに想像がつく。ちなみに今度は晴香が先に言った。
「――冗談よ。あんたの顔なんてもう見たくも無かったけど、それでも生きていてくれて嬉しいわよ」
「――あたしもよ。あんたが生きていて良かった。もう一回くらい殴ってやらないと気が収まらないところだったし」

ふたりは、互いが失った友達について、何も言葉を交わさなかった。そして交わすべきではないと思う。今はまだその時間ではない。
笑みがこぼれる。次の瞬間には笑い声がこぼれる。晴香は七瀬に手を差し伸べる。その手を取って立ち上がった七瀬は、眩しく輝く太陽の下で虹を見たと思った。錯覚に決まっているけれど、勝利のもたらした希望の虹である、と信じたい。

ちなみに、本当に恐ろしいことになっているのは実はこちらである。
「(´•ω•`)蝉丸～っ」
どうすればいいんだ。
柏木初音は少し離れたところで仮面の少女と銀髪の青年を見ている。近寄りがたい、というのが本音である。その仮面はナニですか。突っ込んではいけないことなのだろうが、当方の支給武器はハリセンである。心を鬼にして突っ込むべきなのかも。
「(´;ω;`)どうしようどうしよう蝉丸～っ」
「くぁ……っ」
ってそんなことを言っている場合ではなかった。
銀髪の青年は腹から大量に血を流して呻いている。遠目でも判るほどその傷は深い。応急処置だけでもしなければいけないが、仮面の少女は青年の横でおろおろとうろたえるだけで何も出来ないままだ。
「(´;ω;`)蝉丸、死んじゃ駄目だよぉっ～」
自分が動かなければならない。初音は慌てて駆け寄って、自分より少しばかり年下と思われる少女を必死に宥める。
「大丈夫だよ、大丈夫！　わたし、街からお薬持ってきてるし、包帯とか消毒液も持ってきたんだ！　だからその、泣かないで！」
肩を抱いて宥めると、少女は泣き止んだ。しゃくりあげて「ほんとに大丈夫？」と繰り返す少女に大丈夫だよと声を掛け続けながら、初音は鞄の中からタオルや包帯、傷薬といった応急用の医療セットを

取り出す。まず血を拭って傷のほどを見なければならない。白いタオルを手に青年に近寄ったところで、
「ち、近付くな！」
　突然その青年が大声を上げるではないか。あんまり大きな声だったので思わず初音は飛び退いた。三秒ほどの思考停止の後、初音は疑問の言葉を投げる。
「ど、どうして？　怪我してるじゃないですか？」
　初音だけでなく、誰もが抱く当然の疑問なのである。しかし、初音が知る由もないが、この疑問の解を持つのは坂神蝉丸その人だけであり、その解は少し言葉にしづらいものなのであった。
　彼の血を浴びると欲情する。
　この説明をするのが面倒で気後れするものだと思ったのだろう、蝉丸は一転静かな声で、
「――大声を出してすまなかったな。ともかくその布を俺に貸してくれ、俺が自分でやる」
　とだけ言った。よく判らないが、早く処置をしなければならない。疑問を押しつぶして初音は頷く。包帯とタオルを手渡して、少女を宥めることに専念する。少女は仮面の下でまだしゃくりあげている。
　意外と傷は深くなかったようだ。溢れた血の下には深そうな刺し傷があったが、タオルで拭うと血は粗方止まっていた。
「消毒して包帯は巻きますね。一人では巻きにくいと思うし。……それとも、まだ近づいちゃ」
「――いや、頼む」
　彫りの深い顔立ちの少し怖い印象の有る青年は、しかしにこりと笑うと自分の手に身をゆだねる。初音はすぐに青年に近づいてガーゼに消毒液を染み込ませて傷口を拭く。呻き声が上がるかと思ったが、青年は苦しそうな顔をしただけで声はあげなかった。簡単に消毒を済ませると新しいガーゼを当て、包帯をくるくると巻く。少し血が滲んでいるがまあ大丈夫だろうと思う。
「(;ω;)ありがとう～っ」

「すまないな、少女」
青年は身体を起こして、にこりと笑った。
「いえ。……よし、これで終わり！」
完璧とはいえないが、応急処置としては充分だろう。この後どこかでちゃんとした治療を受ければいいのだ。
もう戦いは終わったのだから。
「(ﾉ∀`)うわあああん、ありがとう〜っ」
少女の、というか仮面の、少し不思議な泣き笑いに笑みを返しながら、自分に出来ることは意外とあるのだと思った。傷ついた七瀬留美や七瀬彰、柏木耕一といった人たちを少しでも癒す役目がある。
そんな風に初音が考えていると、ふと月代がこんなことを言った。
「(´ω`)わたしよりずっと小さい女の子なのに、わたしよりずっとしっかりしてるよお」
「本当だな、月代。お前と来たら泣いてばかりで」
「(´•ω•`)そんなことないよお」
……ずっと小さい女の子？
すぐには言葉の意味が理解できず、理解できたときには既に、
「他の奴らの様子も見てこなければな」
「(´•ω•`)うんっ！」
彼らは自分の傍にはいなかったので反論のしようもなかった。初音は胸の底で燻るすごく悲しい感情に身を焼かれそうになった。
「うぅ……わたし、そんなに小さいかな……」
しかし気にしている場合ではない。初音もまた立ち上がり、救急箱を抱えて傷ついた皆のところへ走る。希望と言う名の虹の橋を渡り、安息の未来へ向けて走り出す。
ともかく。彼らは今、生還に向けて歩き出している。皆が笑顔だ。希望に満ちた笑顔をしている。戦いは終わったのだ。後はこの島から、希望の虹の橋を渡って脱出するだけなのだ。そう思って笑顔を見

せている。
これから先に待ち受ける苦難のことも知らず、ただ笑顔でいる。

595　DEAD OR ALIVE（後編）

（なんの……ことだ……？）
頭が――痛む。胸が――締めつけられる。
（俺は――どうしてここにいるんだ……？）
北川が、祐一を睨みつけて。
（俺は――）

――七年前、心を閉ざしたあの、冬の日の赤。
――そして、今、俺は何を……？
『ゆう……いち……』
――まこ……と……？　なんで……倒れて……

名雪と、秋子さんの姿がゆっくりと重なって――赤くなって……
そして、亜麻色の髪のおさげの少女――

「えっ……えっ……？」
胸が、痛む。上手く、息ができない。
「どうしても……駄目なんだっ……なんでだ……北川っ!!」
「相沢……」
「思い出したくてもっ……痛い……教えてくれっ……ここは……どこだっ！」
「……」
「俺は……何を探してるんだっ……あゆ？　名雪？　真琴？　栞？　舞？　それとも――」
「……」
「教えてくれっ！　北川っ!!」
北川の、肩を強く掴んで。

「……」
北川は、そこで初めて祐一から目を逸らす。
「それだけは、駄目だ。お前が、自分で思い出さなきゃ、駄目だ」
「……俺が？」
「俺にはお前が何をしていたか……何でそうなっちまったのかは分からない。だけど……」
北川が、再度、祐一に向かい合う。今度は、睨みつけるではなく、真っ向から、真剣に見つめる。
「それだけは——お前が自分で思い出さなきゃ駄目なんだ！」
「き……たがわ……？」
祐一の、胸が締め上げられる。
「おれは……」
ガサッ……
「なんだっ？」
ここから割と遠くない茂みが、作為的に揺れた。
その音が潮騒の音に紛れて響く。

（誰か来るっ‼）
声をひそめ、祐一を半ば無理矢理に座らせる。
（レミィ、下がれっ！）
運んでいたバッグから、銃——コルト・ガバメントを取り出しながら北川が囁く。
（ラ、ラジャーです！）
レミィもまた、刀を取り出して、揺れる茂みの逆方向へと移動する。
「な、なんだ……どうした北川っ⁉」
（しっ……声を立てるなっ……顔もあげるな……じっと伏せてろ……今は黙って従ってくれ……もし敵なら……）
——敵？　敵だって？　今、北川は敵……と言ったのか？
（なんだ……一体……それ……銃……⁉）
（もう、四の五の言ってる暇はない……一度しか言わないぞ……これは……殺人ゲームだ……死にたくなかったらお前も隠れてろ！）

（えっ？　えっ？）
祐一の手に投げ渡される銃――里村茜の持っていたサイレンサー付きの銃だ。もっとも、今の祐一はそれを知る由もないが――

この三日間、北川が会った人物は三人。
まだ、殺人ゲームだということを認識できなかった頃に、宮内レミィ。
レミィと立て篭もった小屋に詰問してきた、信頼できる親友、相沢祐一とそのお供、椎名繭。
いずれも、北川がなんらかの理由で心を許せる相手だけだった。

浩之から始まって……数多くの死体を見てきた。
それは、北川が殺人ゲームだと認識するに充分な現実。
護をはじめ、数多くの知り合いが死んだと告げられた事実。
そして――もう祐一を除けば北川にとって、もう生き残りの中に心を許せるような知り合いは――いない。
（今まで誰にも遭遇しなかったことのほうがおかしいんだよな……）
結論。今、向かってきている人物は、ゲームに乗った敵である可能性が、高い。
そうでなくても、生きる為に殺す――と結論付けた奴だっていてもおかしくない。
最初から下手にフレンドリーに近付いて、いきなり撃たれて殉職――なんてたまったもんじゃない。
（そうでなくても……レミィと、状況を把握できてない相沢がいるんだ……）
慎重に、相手を探る。

ガサガサ……さらに茂みが揺れた。

（なんだ……今、北川は敵……といったのか？

……それに……北川の持つ銃とこの銃……本物じゃないのか⁉)
「動くな……誰だっ‼」
祐一の混乱が覚めやらぬ内に、北川は揺れる茂みと対を成す木の陰に移動し、そう呟く。
「……っ⁉」
驚いたような声。
その声が、女だということが認識できる。
「こっちに、攻撃の意思はない……分かるかっ?」
チラリ……
意を決して、木の陰から片目を出す。
(って、うちの学校の生徒じゃないか……しかも一年?)
一瞬で見て取れた。見慣れた学校の制服。リボンの色は間違いなく一年生のものだ。
それよりも……胸に抱いた右腕が――脳裏に一瞬で焼きついた。
「あまの……天野じゃないか!」
突如、叫びながら祐一が立ち上がり、天野――と呼ばれた女生徒に駆け寄った。
「お、おい、相沢……!」
北川の隠れる木の横を通り過ぎ、前へと踊り出る。
「……あい……沢さん……?」
女生徒の、少し震えたような声が漏れる。
「相沢の……知り合いか……」
初めての敵との遭遇……と思われる事態に、大げさに神経質になりすぎていたのかもしれない。
(少し、軽率だったかもな……)
北川は、頭を掻いた。
「ふう……」
伏せていたレミィにも、安堵の表情が宿る。
頭が……ひどく痛む。
頭の中におぼろげに浮かぶ戦慄のイメージ。
血に染まった、赤。いつか見た光景。

――ゆ、祐一、大丈夫？　この子が悪いんだよ！
祐一を殺そうとしてたから……――
――でね、途中で『みゅ～』て言ってばっかりの女の子に会うの。その子はまだ子供だから、真琴はその子のお姉さんになってあげたの。木の実をあげたり、変な人に襲われたときは真琴が守ってあげたりしたんだから！――

「天野っ……！」
張り裂けそうな赤――そしてかすれる声。
「天野……まこと……は……？」
気が付いたら、口に、ついていた。その名を。
「いやっ……!!」
「それに……その右手……おい……天野っ……!!」
女生徒の様子が、おかしい。
「おい、相沢……？　天野……さん？」
先程、祐一が口についた名を、北川も口に出す。
その女生徒は、明らかに――何かに怯えていた。

美汐の足が、一歩、二歩、と後ろへ下がる。
「いや……入ってこないで……」
ガクガクと足を震わせながら、美汐が声をしぼりだす。
『天野……まこと……は……？』
――まこと……いやっ……まことはもう……いないの……
――悲しい……つらい記憶……
『それに……その右手……おい……天野っ……!!』
――わたし……の……みぎて……もう……ない……の……？
――わたしの中に入ってこないでっ……！
――これ以上私を壊さないでっ!!
「いやっ……！」
「天野っ！」
祐一が、美汐の肩を掴んで、揺さぶる。
こんな、美汐の取り乱した……錯乱した姿に、祐一もまた取り乱していた。

「おいっ、相沢、落ち着けっ!!」
北川の声が、遠くで聞こえる。
「いやっ!!」
「天野っ……」
祐一の手を振り解いて、その勢い余って背中からその場に倒れる。
「天野……一体……」
ガサッ……
一瞬だった。
今度は、誰も気付かなかった。
バキィッ………!
ただただ、祐一と美汐のやりとりに目を奪われていただけだったのか……
それともそうでなくても気付かなかったのか。
それほど……唐突に、祐一が派手に吹き飛んだ。
「ガッ……!」
北川が、祐一を殴りつけた時よりも、数倍あたりに大きく響き渡る音。

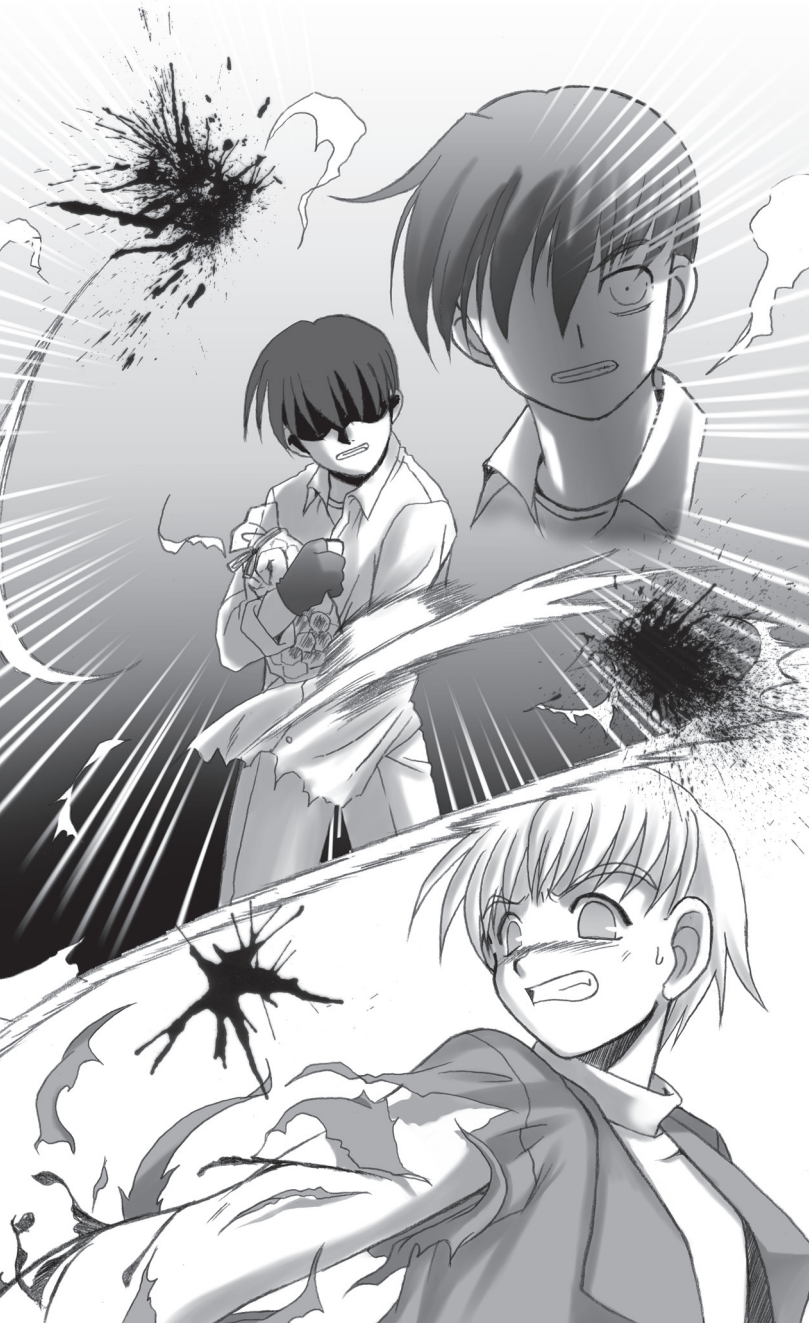
「……相沢っ!?」
倒れた祐一と、その逆に位置する男の影。
「……」
(誰だっ!?)
右手で銃を水平に構え直しながら、北川が呻いた。
背中を向けたまま──美汐と正面に向き合ったま……と言ったほうが正しいのかもしれない──ちらりとこちらを見やる男。年は北川達とそう相違無い。
「いきなり……なにすんだあんたっ!!」
その男の目は、どこか異常な、何かを感じさせる目で。
(なんだ、こいつは……こいつはゲームに乗った奴なのか!?)
男が手に武器を持っていないことを確かめながら、ぐるりと回りこんで祐一の方へと向かう。
銃は構えたままに。
(それに……なんだあの手はっ……!)

武器こそ手にはしていないが……右腕に携えられている袋のそれは……
（人間の……手!?）
それに気をとられた時、きらりと何かが光った。
「えっ……？」
「ジュン！」
レミィの叫び。
（なんだっ……？）
本能的な恐怖……北川の、右腕の周りにまとわりつくそれ。
右手から、超高速で伝染する、圧倒的な恐怖。
「うわあああっ！」
レミィの叫びがあったとはいえ、それを感じ取れたのは北川にとって幸運であったのかもしれない。
ゾリッ……！
勢いよく手前に引き抜いた右手から、鮮血が迸り、その場を赤く照らした。
「ぐぅっ!?」

ただ、熱い……という感覚と共に、北川が後ろに一歩、二歩とよろける。
カラカラッ……
その感覚で取り落としてしまったコルト・ガバメントが男の足元にまで滑って止まる。
空中に残るその日の光に輝く糸を、男が手前に引き戻す。
赤く垂れる血と共に、何か長い布みたいなものが巻きつくように付着していた。
「痛ぇ……」
それは、北川の右腕の——皮。
なに……今の……祐介さんが……右腕を……刈ろうと……祐介さん……？
狂気が、電波が、伝染する。
私の右手……その男の人の右手……あなたが持っている右手……私も……刈るの……!?
思考の混乱の最中、祐介が薄く笑った気がして……

「いやああああっ‼」
その場から……逃げた。
そうしないと、信じていた何かが、壊れてしまいそうだったから。

「……」
男が足元に転がってきたコルト・ガバメントを拾い上げ、構える。
祐一にでなく、北川にでもなく、宮内レミィに。
「……！」
北川が、横目でレミィを見やる。
「……」
先程まで持っていた刀ではなく、銃――電動釘打ち機――を両手に、狙いを定めている宮内レミィの姿があった。
「や、やめろっ……」
右腕の痛みをこらえながら、北川が叫ぶ。
その時……

「いやああっ！」
沈黙を守っていた美汐が、来た道の方向へと駆け出した。
「……！」
男が、一瞬そちらに気を取られる。
「フリーズッ！」
ビシュッ……！
五寸釘が、勢いよく発射される――が、男は瞬時に転がってそれをかわす。
確認してから転がったわけじゃない。まさに刹那の出来事だった。
「……！」
転がったそのままの勢いで起き上がると、ゆっくりと、こちらに銃を構えながら、後退していく。
「フリーーズッ！」
レミィの再三の叫びにも止まらずに、男は銃を構えたままに奥へと消えていく。
やがて、その姿が木々の間に見えなくなった頃、

全速力で駆け出していった。
美汐の、消えた方向へ――と。

「ジュン！　ユーイチ！　大丈夫？」
レミィが、心配そうに二人を眺める。
「あ、ああ、大丈夫だ……心配しないでくれ……」
と言いつつも、右腕の肘から先……手首までの部分が真っ赤に染まっていた。
(皮が……ほぼ全部持っていかれてやがる……いち ち……)
ビリビリッ……自分のシャツを左腕で勢いよく破ると、それを右腕に巻きつけ、縛る。
「北川……なんだ……今のは……？」
殴られた頭を激しく振りながら――祐一の戸惑いの声。
「分からん……たぶん……ゲームに乗ってしまった奴なんだと思うが……」
きつく、強く縛りながら北川。

傷こそひどいが、出血はさほどでもないらしい。
縛り上げたシャツが真紅に染まるまでには到らなかった。
「ゲームって……なんだよ……」
「……」
右手の具合を、強く握ったり開いたりして確かめながら、黙ってその言葉を耳に通す。
「殺人ゲームって……この銃はなんだっ！　真琴は……真琴は……死んだ……のか？」
先の祐一の、頭の中に浮かんだイメージは、それだった。
「……」
ただ、何も言わず、祐一を見つめる。
かけるべき言葉は、見つからなかった。
「ふざけるなっ！　殺人ゲームなんて……ふざけるなよっ!!　馬鹿野郎!!」
「相沢……」
「うるさい！　俺は……俺はみんなを探す！　北川、

手伝ってくれ！」
「……」
それにも、答えることができなかった。
「ユーイチ……」
「なんでだ……なんで黙ってるんだ？　まさか……みんな――なんて言わないよな⁉」
「……相沢……」
「くそっ、俺は……俺だけは……みんなを探す……きっと生きてるっ！　当たり前じゃないかっ！　あゆも、名雪も……真琴も、舞も……栞も……佐祐理さんも……みんなみんなっ……‼」
「おい、相沢っ‼」
突如、祐一が駆け出した。森の向こうへ向かって。
降り続く雨の中、空き地で待つあの寂しい瞳の少女も……だけど、その彼女の名前と、その姿だけは、もやがかかったように思い出せなかった。
「そして――もっ‼」

「ジュン！」
レミィが、手荷物を片手に叫ぶ。
「分かってる……今のあいつを一人にはできないだろ！」
左手でバッグを下げ……傷ついた右腕で大口径マグナムを構えながら。
北川達もまた祐一の消えた方向へ向かって走り出した。
――僕もまた狂っているのだろうか――
天野さんを守るために……ためらいもなく他の参加者に手をあげる……
いや、ここに来た頃は最初から手をあげていたじゃないか……。
それは、狂っていたとは言えないのか？
あの時は、叔父に会うため、そして生きるため……大切な……漠然とした何かを守るために……。

そして、今は、もう近づく資格などない僕が、それでも天野さんを守るために。
大切な、形あるものを守るために。
いいじゃないか。昔から狂っていたとしても。
いいじゃないか、たった今、狂ってしまったとしても。
僕が狂うことで大切な、本当に大切だと言える人を守れるなら、それでいい。
守りきれるなら、狂ってしまってもいい。
僕の、選んだ道だから。

――ああ、電波が心地いい。

596　逃亡者

嘘だ！　嘘だ！　嘘だ！
みんな生きてる！　そうに決まってる！
俺はただひたすら走った。
後ろから聞こえてくる北川の声が遠くなっていく。
周りの景色が無くなっていく
聞こえるのは自分の息と足音
感じるのは手に持った銃の重み
頭の中はぐちゃぐちゃで
まともなことは何一つ考えられない
浮かび上がってくるイメージ
――口から血を流す真琴――
――血に塗れたナイフを持った名雪――

違う！　違う！　違う！
認められない！　認めるわけにはいかない！　認められるわけがない！
だから俺は走る。
余計なことを考えないために。

不意に視界が戻った。

気がつけば地面に倒れ込んでいた。
体を動かそうとしても指一本動かない。
俺はゆっくりと目を閉じた。
次に目を覚ましたときにいつもの目覚ましの声が聞こえてくることを願って。
「結花～、この人まだ生きてるよ！」

597　愛の消毒大作戦

世界がぐらりと歪んだ。
足が、パタリと止まった。
視界からは、相沢祐一の姿が消えていた。
目の前には、黄色い髪の、女の子。
心配そうに、俺のほうを覗き込んでいた。
「ダイジョウブ？」
彼女、宮内レミィはそう言ってるような気がした。
「あぁ、俺は大丈夫だ」
なんて、強がって答えようと思ったけれど……ダメだ。
息が、苦しい。
手が痛い。
腕は、真っ赤、だ。
握っていた、マグナムが、地面に落ちた。
どさり、と音がした。
大丈夫じゃないな、俺。
心の中でそう呟いた瞬間、北川潤の意識は落ちた——。
目がさめると、柔らかいものの上に、俺はいた。
「ジュン！」
レミィの顔が目の前いっぱいにあった。
「おわっ！」
少し驚いた。
「ジュンが目を覚ました！　ワタシとってもウレシイ！　ジュン！　もう起きないかとおもったよ

「一応、化膿しちゃダメだから、消毒しといたヨ……」
レミィは顔を赤くして、言った。
と、消毒？
ここにはオキシドールもヨードチンキも、赤チンもない。
ってことは……。
頭の中で考えると同時に、北川の顔も赤くなった。
「それじゃぁ、ちょっと水くんでくるヨ！」
そう言ってレミィがさっと立ちあがった。
ゴスッ
頭が地面に落ちた。
物凄く、痛かった。
腰から上だけ、上体を起こして、俺はレミィが帰ってくるのを待つことにした。

ー！」
どうやら、俺はレミィの膝枕で眠っていたらしい。
流石にこのままだと、恥ずかしいので立ちあがろうとした。
「ジュン、ダメだよ！　もうちょっと寝ていなきゃ！」
眉をつりあげ、レミィは言った。
とりあえず、今は言うコトを聞いていたほうがよさそうだ。
というか、ホントは動けなかった。
ケガをしていた右腕を見た。
腕には葉っぱが茎でまきつけられていた。
レミィがやってくれたんだろう。
「レミィ、これありがとな」
腕を指差して、北川は言った。
「エヘヘ……これが限界だった」
レミィは、少し照れて、笑った。
「十分だ。レミィがやってくれたんだからな」

598 reins of power

……まるで、牛歩だった。

僕はいい。死跡を見るのにはもう慣れている。問題は隣にいる彼女。郁未はどんな気持ちでいるのだろうか、と。

語る言葉も捜すことができず、俯いたまま口をつぐんで、一歩一歩を噛み締めるように歩く。そこに秘められた気持ちはなんだろうと思索する。

だが、それでも前に進んでいる。歩みの速度が遅くても、進む歩幅が狭くても、確実に彼女は進んでいる。

それは彼女の強さであるかもしれないし、弱さなのかもしれない。

これが三日前だったなら、

彼女は一体どんな反応を見せたんだろう。

……別に惨状を見るのに慣れているわけじゃないし、慣れようとも思えない。見知らぬ人間の死の跡だけを覗いて涙できるほど善人でもない。むしろあるのは嫌悪感。むっとするような臭気から逃げ出したいという本能的な悲鳴。それなのに何か何か気になってしょうがないのは多分、なんとなく感じてしまった気持ちの残滓に心が引っ張られているだけなんだろう。

悪いことじゃないよね。だってどうしようもないから。

――フラッシュバックする母親の死体

気が付いたら道が広がっていた。そんな大した距離を歩いたとは思えないけれど、とりあえず森を出たようだ。

で、余計なものまで目に入ってしまった。

「ひっ⁉」

思わずびくついて少年にすがりつく。片手で口元

を押さえて、もう一度確認を試みる。
　累々たる死体、それはかつて私たちが忌避し、今現在打倒すべく向かっていたもの。
「――高槻」
「……高槻」
　見覚えのある死体だと思ったが、当たり前な話だったわけだ。だが、いかに奴が惨憺な姿で死んでいようとも、それ自体は自業自得としか言い様がない。ただ、彼女の驚きの理由は別にあったんじゃないかと思う。
「どういう……こと？」
「……」
　全くもって不可解だったことだろう。
　――同じ姿の死体が何体も並んでいるのは。
「クローン……らしいね。前に聞いたことがある」
　そう、僕はこの話を昨日葉子から聞いた。聞いたは聞いたが……いざ目の前にすると、なかなかインパクトがある。死体のせいもあるが。
「この顔が目の前に何個も並ぶのを想像すると、反吐が出るわね……」
　いつもより郁未は毒舌だった。だが、奴を知っているものにとっては無理も無い反応なのかもしれない。死しても尚罵倒されるだけの悪行を、この男は積み重ねていたのだから。
　……いや。
　それは僕も同じか。
　顔が粉々に粉砕されかけているものがあるが、どうやらマシンガンの掃射を喰らったようだ。はっきりいって正視に耐えるものではない。よく郁未はこれを見ていられると思う。
「うぐぅ」
　……そうでも無いようだ。つらそうに口元を押さえ顔が青ざめている。

「郁末」
郁末はつらそうな表情でこっちを向いた。
「もう、ここいる必要は無い。……行こう」
彼女を促す。いずれにしろ死体など見ていて気持ち良いわけが無い。僕たちはそこから少しばかり離れていった。
「……ねえ」
「なんだい？」
少し気分が良くなったのか、郁末が歩きながら僕に話し掛けてきた。
「……目的、無くなっちゃったね」
僕はそれにすぐ返事をすることが出来なかった。
だが。
「……いいさ」
高槻は殺されていた。僕たちと同じように考える人が、確実にいることが分かった。ならば、それでいい。クローンの技術がどの程度のものかは分かったものではないし、本体の高槻はのうのうと生きているかもしれないし、まだクローンも残っているのかもしれないし、もしかしたらこの先高槻と会うことがあるのかもしれないが。
「後は、生きている人間を集めてこの島を脱出すればいい」
――それなら、その時考えればいい。
「……そうだね」
「ああ」
郁末は何か言いたげな……ああ分かってる。彼女はまだ自分がやることがある。でも、それをあえて忘れたふりをしている。……僕と、同じように。
僕たちは知らない。もうゲームは加速し続けていることを。手綱を握られる必要も無く、あとは坂を転がっていくだけにすぎないことを。お膳立てはもう終わっていることを。舞台は整いつつあることを。
もしかしたら知っていたかもしれない。
やっぱり忘れた振りに過ぎないのかもしれない。

そして。
——僕の限界もすぐそこに迫っていたことを。

599 Re-Birth

「や、やっと、着いたぁ」
外傷よりも疲労が濃い耕一は息も絶え絶えに言った。ここまで歩いてこれたのかが不思議なくらいだ。
「っていうか、あんたが勝手に抜け出さなければこんなにボロボロにならなかったでしょうが」
置いてきぼりにされた留美が、すかさず突っ込む。
「いや、男にはやらなきゃいけないことがあるんだ。たとえ苦難の道でもな」
「なにを馬鹿なことを」
留美はそう言って、耕一と彰を見やる。
殺人ロボットと源三郎との戦いで消耗してしまった一行は基地を目の前に戦略的撤退を余儀なくされ、葉子とマナが待つ市街地へと戻った。
彼らを出迎えたマナはさらに大所帯になったことに驚くと共に、誰一人欠けることなく戻ってきたことに安堵した。
だが、無事である、という言葉からは程遠い。
特に、
「うわ、この人、まだ生きてるの？」
彰の容態は特にひどかった。
根拠地にしていた町にたどり着いたとき、緊張の糸が切れたのか、彰は倒れた。
「お兄ちゃん！　彰お兄ちゃん!!」
あわててすがりついた初音の肩を蝉丸がつかむ。
「動かさない方がいい、傷に障る」
ビクッと震えるように初音は彰から手を離す。
「彼をとりあえずベッドに寝かせたい。それで傷の具合を見たいので服を脱がせる。あと、ハサミを貸してくれないか？」

「……こっち。救急箱もその部屋よ」
蝉丸の言葉にマナは奥の部屋を指し示す。
「うむ、すまない」
マナを先導に蝉丸は彰を抱えて運んでいく。
「手伝いがいる。申し訳ないが何人か来てほしい」
体力を消耗しきってさっそく寝込んだ耕一と葉子がこの家で休んでいると知らされた晴香以外はその後についていった。

蝉丸は血が付着し無理に剥がすことができないところは布の周りをハサミで切りとり、そして一枚ずつ服を脱がしていった。
彰は誇張ではなく満身創痍であった。
（これだけの傷を受けながら、よくも……）
改めてその体を確認して蝉丸は内心舌を巻いた。
右太股に銃創があるだけではなく、甲も半分以上無くなっている。頭に巻いた包帯は赤くなり、腹には大きな青あざが二つあった。
その他、小さな傷やヤケドは数える気にもなれなかった。
なにより、血が付いて茶色く変色した右足と既に用をなしていない後頭部の包帯がかなりの血を失い消耗していることを物語る。
（彰お兄ちゃんが大変なことになっている。なのに、私は何もできない）
初音は痛々しい彰を見守りながら、自分の無力さを歯がみしていた。
「すまないが体を拭くのに湯か、無ければきれいな水が欲しい」
「それじゃあ、私が！」
蝉丸の言葉にはじかれたように、初音は台所に走っていった。自分も怪我をしているにも関わらず。
しばらくして、初音はやかんいっぱいにお湯を入れて部屋に戻ってきた。
「お湯、持ってきました」

「すまない、そこに頼む」
　蝉丸は先ほどマナが探してきた洗面器を指し示した。初音はそれにお湯を注ぐ。
「これぐらいの熱さでいいですか？」
　洗面器にうっすらと湯気がのぼる。蝉丸は指を少し入れてちょうどいい温度なことを確認し、うなずいた。
　お湯を注いでいる間、改めて傷の酷さを見て、初音は胸が締め付けられる思いがした。
　こんなになるまで戦っていたのか、そう思うと目の辺りにこみ上げる物が来た。
（お兄ちゃん……）
　初音はまばたきをして、それを抑えようとした。
だが、
　カンカラカン
「えっ？」
　初音は、ふと我に返る。
　音がした方を見ると、手に持っていたはずのやかんが床に転がっていた。
「ご、ごめんなさい……」
　何回も頭を下げる初音に蝉丸は言った。
「疲れているようだな、早く休むがいい」
「……」
　そして、蝉丸は留美と月代に添え木になりそうな物を探してくるようにと伝えた。

（私は何もできない）
　真っ暗な部屋に初音は膝を抱えて座っていた。
（彰お兄ちゃんを助けることも。ううん、もしかしたら足を引っ張っているだけなのかもしれない）
　誰もいない部屋。一人でいると気が滅入ってくる。
（お兄ちゃんは私を守ってくれた。お兄ちゃんは私を励ましてくれた。お兄ちゃんは私に希望をくれた、なのに、なのに……）
　初音は小さい体をさらに縮ませる。
（私にできること、私にできること、私にできるこ

と……)
　疲労と眠気はあるが、それにも増して初音は自己嫌悪と焦燥に苛まれ、休むこともできない。
　そんな終わることがない自問自答を続け朦朧としてきた頭に、ふとどこからか声が聞こえたような気がした。
(あ……よ)
　初音は辺りを見回すが誰も見つけることができない。
(ある……よ)
「だ、誰?」
(あるよ……リネ……ト)

　彰の手当は終わり、その部屋には誰もいなかった。
　初音は静かにドアを開けると音も立てずに中に入っていく。遮光され、暗い部屋だったが不自由なく、彰の方へ近づく。
　彰の体の半分以上が新しい包帯で巻かれていた。
　蝉丸は適切な応急手当を施したが、失血は補いようがなく、不規則な呼吸音が未だ彼が死線をさまよっていることを表していた。
(お兄ちゃん……)
　初音は苦しげな彰の寝顔を見て、
(くるしいよね、いたいよね、おにいちゃん……)
　枕元にあった救急箱からハサミを取り出し、
(でも、もうだいじょうぶだよ……)
　自分の腕に突き刺した。
(これで、また元気になるよね……)
　そして、滴る血が、
　彰の口の中に入っていった。

600　捧げるもの

　乾ききった礫(れき)沙漠のように、荒涼とした丘の上で。
　揺らぐことなく林立する、大岩の下で。
　あたしたちは、移動の準備をしていた。

「それじゃ、行こうか」
びゅうびゅうと騒ぎ立てながら、隙間を抜けて行く風音にのせて、誰かがそう言うのを、あたしはぼんやり聞いていた。
「……こいつ、どうするの？」
長瀬源三郎とかいうオヤジが、岩陰で倒れている。死んではいないのだろうが、話に聞く痙攣すら治まり、激しかった呼吸音も既にない。隣でささやかに咲く野花が、いかにも不似合いだった。
「なんなら……あたしがやっても、いいよ」
自らの吐瀉物に顔を埋めて動かなくなった男の傍らに立ち、刀を携えて尋ねる。
「放っておいても、いいんじゃないかな。いろいろ聞きたかったんだけど……その様子じゃ、無理だと思うし」
彰とかいう青年が答える。傍らに小さな女の子を侍らせて、それでようやく立っているような、満身創痍の彼に言われると、あえて殺すのも気がひける。
（でも、甘いわね——）
あたしは……目的のために、殺せる。
尋問……いや、拷問みたいな汚れ仕事だって、やれる。自分の鋭利な決意を、世間の倫理に鈍らせるようなことはしない。
（名もなき兵士達を。たくさん、たくさん——殺したから、ね）
ねえ良祐。あんたは、こんな風に死んだの？
智子、あかり、それにマルチ。あんた達は、こいつを許せる？
由依、あたしどうすればいい？
天を仰いで、皆に尋ねる。
——答えは、ない。
死人は帰ってこない。
応えてくれるのは、唸りをあげる風だけだ。
眼を、口を、強く閉じて、ゆっくりと息を吐く。

「そ」
　たっぷり時間をかけて息を吐き、あたしはさんざん迷った挙句、短い答えをよこした。
（みんな、これでいいかな？）

　一行がぞろぞろと歩き始める。
　あたしも群れの片隅に身を置くように、遅れて歩き出そうとしたところで、大事なことを思い出す。
（ああ、あたしとしたことが、忘れるところだった）
　そのまま、かちんと刀を引き抜き、風を切るように草花を薙ぐ。風にのって流れる花を拾い上げ、軽く束ねると、群れから逆行するように歩く。
　その先には、戦闘用ＨＭ―12があった。
（マルチ。あんたの――妹だよね）
　あまり原型はとどめていないけれど、解る範囲で整えてやる。幸い腕はだいたい残っていたので、胸の辺りで手を組ませ、花を持たせてやった。
（妹のオイタは、止めておいたからさ。だから――のんびり寝てていいよ）
　右手に刀を持ったまま、左手で軽く拝む。
（――さよなら、マルチ）

　振り向くと、大きく遅れたあたしを待つように、遠くに立つ影がひとつあった。
「晴香」
「……ああ、七瀬。ごめん」
　七瀬が髪を切ったせいで、少しばかり認識が鈍る。しばらく二人で黙って歩いていたが、やはり聞いてみることにした。
「……ね」
「ん？」
　視線を交えもせず、お互い遠くを見ながら会話する。
「もしも、あたしが死んだらさ。……ああして、花でも添えてくれるかな？」

微笑を浮かべて、言ってみる。七瀬はちょっと驚いた顔をしたけれど、すぐに真顔になって答えてくれた。
「……そうね。花くらいは、探してあげるわ」
そしてニッと歯を見せて笑い、言葉を続ける。
「もう髪に、余裕はないからね」
あははは、と。
二人笑う声が、風に乗って。
遠く遠く、視線の遥か先へと、流れていった。

601　人でなくなるということ

ドックン……
なにかが聞こえる。
僕の耳に振動が伝わってくる……。
「初音ちゃん!!　なにを！」
パシィッ
僕の近くに人がいる。複数。
「だって……。このままじゃ彰お兄ちゃん死んじゃうよ！」
耕一は血を流す初音の腕をつかみ、自分の方に引き寄せる。
「なんてバカなことを！」
耕一も知っていた。次郎衛門の話。自分の前世の話だ。瀕死の次郎衛門を助けるエルクゥ。その方法。
「バカじゃないもん！　わたしは彰お兄ちゃんを助けるの！　今まで助けてもらってばっかり……。わたしはいつも役立たず……。そんなのもう嫌なの！」
初音はもがいて耕一の手を振り払おうとする。
「離してよ！　離してくれないんだったら耕一お兄ちゃんなんてキラ」

初音の頬を耕一が……叩いた。初音の体が地面に転がる。
「え……ぐ……」
泣き顔で振り返る初音。しかし口から出かけた言葉はそこで失われた。
耕一の……苦虫をかみつぶしたような表情。
「彰君は男だ……」
その言葉に初音の表情が変わる。
「あ……」
「もしも鬼の力を得て……それを、制御できなかったら」
怯えへと……。
「初音ちゃん。俺はね。この島で一度、鬼に変身したんだ……」
「えっ？」
力は封じられているはずなんじゃ？
その問いは表情にでた。
「俺は死にかけたとき、初音ちゃん達四人を守る力が欲しいと強く思った。鬼の血の力。ひたすら力を求めたんだ」
初音はなにも言わない。言えない。
「結界とやらは『人間の操る人外の力』は封印できているみたいだが……」
彰に視線を移す。
「『鬼の操る人外の力』には完璧ではないのかもしれない。もし彰君が鬼に目覚めたら……」
（血を……吐かせる……か？）
今からでも間に合うかもしれない。
彰を前に耕一は思案する。
しかし鬼の血でもないことには、彰が死ぬ可能性が高いことは誰の目にも明らかであった。
「もし、彰お兄ちゃんが理性を鬼に支配されるようなら……」
立ちあがった初音は、胸の前で拳を握っている。
何かを決意したように。
「その時は……」

「初音……ちゃん？」
「鬼になる前にわたしが……」
彰の方を向く。
「あなたを殺します。そしてわたしも……」
それはエゴ。なんで人で無くしてまで生き残らせたのか、と彰は怒るかもしれない。
「それでも私は……。彰お兄ちゃんにこのまま死んで欲しくない！」

ドックン……

彰の中に何かが生まれる。
しかしそれはまだ、硬い檻に閉じ込められている。
そう。硬く、そして時にはもろい『理性』という名の檻の中に……。

602　おじさんへ

ええっと、あゆだよ。
おじさん、元気でがんばってるかな？
ボクは、元気だよ。
梓さん、千鶴さんといっしょにがんばってるよ。
も、もう……お荷物じゃないよっ！
ほんとだよっ！

……ねえ、おじさん？
ボクね。千鶴さんが戻ってきて、みんなで学校出てからね。ずっと、考えてたんだ。
秋子さんって……おじさんは知らないだろうけど……秋子さんってひとがいるの。強くて。怖くて。
ボクを……連れて行こうとしていたんだよ。
それで梓さんも、千鶴さんも、ボクのために戦ってくれたんだ。

でもね。
そのときボクは……何もできなかった。
だって、怖かったんだよ。
だれかに殺されるのも。
だれかを……殺すのも……。

おじさんも、戦うよね。怖くは、ないの？
ボクは……怖いよ。
秋子さんの叫び声、一生、忘れられないよ……。

……うぐぅ。

そのあと、色々あって。
ボク、死んだことになってるよね。
心配してくれてたら、ごめんね。
みんなで学校を出て、最初にお墓のところに行ったんだよ。遠くにいたけど、煙がもくもくし始めたから誰かいるもしれないと思って、みんなで走ったんだ。そしたら、墓地だった。誰も、いなかったけどね。
あちこちから煙が出ていてね。地下室の大きいやつ？　みたいのが、ここにあったんじゃないかって。
ボクも、そう思ったよっ！　かくれんぼと一緒だよね。

そのあと、森に入ったのかな。
そこで、お爺さんに会ったんだよ。おじさんよりも、お年寄りだったよ。

「千鶴姉……誰か、いるよ」
最初に気が付いたのは、梓だった。
気配はひとつ。木の幹にもたれかかるようにして、ぐったりと座り込んでいる。
大柄な男。耕一さんよりも、更に大きい。そのひ

とは知人だったが、参加者ではなかった。
「⁉　……あなた、お屋敷の執事さん？」
声を聞いて、老人が片目を開ける。
「む……あんた……鶴来屋の、お嬢さんか……」
鶴木屋のある敷地から、いくらか離れた所にある、別荘地最大の〝お屋敷〟の執事。地元代表のひとりとして、千鶴はこの老人と面識があったのだ。
「耄碌（もうろく）、したものだよ……」
がはっ、と咳をする。もはや吐血か喀血か判断すら出来ない。胴体は、血塗れだった。いくつもの穴が穿たれ、これでよく生きているな、と思うほどの血が流れている。呼気は血の湿り気を帯び、どう見ても耄碌とかいうレベルの問題ではない。
「一体、誰に⁉」
千鶴は老人に手を貸して、気道を確保する。
「なあに……哀れむことはない。この下らぬ戯事を仕組んだ者どうし、仲間割れしたに過ぎんのだ」
自嘲をこめて語る老人に、梓が表情を固くして、腕を組んだまま尋ねる。
「どういう、こと？」
高槻の更に上に存在する長瀬の存在。その所業。老人の口から語られる、彼らの絶望的な狂気の沙汰に、千鶴達は言葉を失った。
最後に彼自身の戦い、そして敗北が語られた。
「長瀬源三郎、ですか……」
千鶴が思い出すように、老人を撃った男の名を呟く。
「……腐れ縁、かしらね」
自宅の戸口に、飄々と、しかし貼り付くように立っていた、地味な男の姿が目に浮かぶ。
「なあ、鶴来屋のお嬢さん」
千鶴を現実に引き戻すように、源四郎が声をかける。
「わたしを長瀬ではなく、来栖川の執事と呼ぶのなら……心残りは芹香お嬢様だけだ。この老いぼれを哀れんで、源三郎を追うのは、やめた方がいい。妙

な薬を使っていて……あれは、獣と変わらぬ」
「執事さん、あたし達のこと、知っているんだろう？」
横合いから梓が遮るように尋ね、そして宣言する。
「獣が怖くて……鬼はやってらんないよ」

……そして娘達は去っていった。
わたしの最期が近いことを、知ってはいたのだろう。しかし、わたしが求めるものが孤独な死である事も、理解していたのだと思う。
「本当に、いいのかい？」
そう言って一度だけ確認すると、鶴木屋の娘達は、振り向くこともなく去っていった。小さな娘だけは、いつまでも悲しそうにこちらを見ていたが。
……それすらも、慰めになった。
「……お屋敷の、執事さん……か」
ははは、と低く笑おうとしたが、代わりにごぼ、と血がせり上がってくる。脳にまわる酸素が希薄になってきているのだろうか、思考も視界も薄れていく。
「来栖川の人間として、最期を迎えることができるとは……」
そして無音の世界に包まれる。
「……わたしは、果報者だな……」
そのまま平衡を失い、どさりと横に倒れた。
言葉は、自分に言い聞かせるようなものであったが。
源四郎は満ち足りていた。

ねえ……おじさんは、怖くない？
あのお爺さんみたいに、一人で、誰もいないところで、どこか解らないところへ旅立つなんて。
そんなこと、ボクにできるのかな？
今はみんなと一緒にいるけれど。
いつか、一人になる日が来るのかな？

ほんのちょっと前までは。
いつまでも、今のままだなんて信じていられたのにね。世界は、ボクを押し流しながら変わっていくんだね。だから、ボクも変わらなきゃいけないんだよね。

……ね、おじさん？
ボク、がんばるよっ！

そうやって、あゆが思考を締めくくった、まさにその瞬間。源四郎の情報を元に、岩場にある施設を捜す千鶴達の目前に立ちはだかっていた岩が、ゆっくりと浮き上がるように持ち上がり、三体のロボットが姿を現した。
「『只今ヨリ作戦ヲ実行シ、排除シマス』」
慌てて岩陰に隠れていた三人は、素早く死角に回り込む。
「あゆ、頭引っ込めろ！」
「うぐぅ」
ロボット達は、そのまま千鶴達に気付く事もなく、足早に駆けて行く。
「……物騒なこと言ってたね」
「始末しましょう……わたしが右に回って、梓が左からね。あゆちゃんは……撃てる？」
「無理しなくていいよ？　アレの場合、〝殺す〟わけじゃなくて、〝壊す〟だから気は楽だと思うけどね」
突然自分に話を振られて、あゆは少なからず動揺した。しかし見た目には、それほどの時間を要することもなく、彼女は銃を構えて言った。
「う、うんっ！　ボク……がんばるよっ！」

長瀬源四郎　死亡

603　言霊

手が震えていた。
左手のみだ。
いつの間にか握られていた右手は、何とか震えは起きないでいる。
郁未に気付かれる事も無い。
無論、冷え性というわけではない。
緊張しているわけでもない。
いや、むしろそんな理由であった方が良かったかもしれない。

——崩壊が始まっていた。

少年の内には、不可視の力が宿っている。
不可視の力の始祖としての、強大なる力。
これに比べれば、郁未の力も模造品と言っても差し支えない。
故に、障害が生じるのだが。
結界。
これによって封じられた力は、確かに少年の内に在る。
だが、それをいつまでも封じていられるわけにはいかないのだ——。
暴走を始めつつある力は。
時に血の衝動を引き起こし。
限界を超えた力を無理矢理引き出す。
抑える事は出来た。
——己の身体を削る事で。
そう、外に溢れ出さんとする力が、己の身体を傷つけているのだ。
少年は、汗をかいていた。
それは、実に、実に珍しい光景であった。
「——郁未」
声を掛けた。

何となしに空を見回していた郁未が、顔を向ける。
「何？」
「もし、僕が死んだらどうするつもりだい？」
あまりにも唐突な問い。
少年にも、何故そんな事を訊いたのか良く分かっていなかった。微かに潜む、死への恐怖がそうさせたのかもしれなかったが。
郁未は、若干虚を突かれたような顔を見せた——すぐにそれは、少し怒ったような顔になった。
「あまりそういう事は言わない方が良いわ」
「どうして」
「言霊っていうのがあるでしょ」
右手を放される。
郁未は腕を組んで少年を睨んだが、少年は密かに安堵した。身の震えを気付かれる事が無くなったから。
「死ぬとか殺すとか、そういう事ばっかり言ってると本当にそうなるの」
それから、郁未は。
少し哀しげに目を伏せる。
「私は——あなたに、死んでほしくないから」
心持ち暗い声で、そう言った。
それを聞いて。
少年は、拳を握り、手の震えを打ち消した。
改めて思ったのだ。
僕は、まだ死ぬわけにはいかない、と。
「——そう、だね」
呟くと、いつも通りの笑顔を見せた。
それはまさしく、いつもの少年の笑顔。
郁未も、ようやっと笑顔を返した。

——そこで耳に届く、悲鳴。

郁未の顔が強張る。
少年は、冷ややかな顔を森の奥へ向けた。
「——近いね。気を付けた方がいい」

警告。
郁末は、無言で頷いて返す。
その手には、既に包丁が握られている。
少年は、その手に何も握ってはいなかった。
だが。
辺りに、微かに漂う何か。
不可視の力――。
行き場を失った強大な力を、ほんの僅かに引きずり出す。濃艶な血の気配が漂った。
それは、これから起こる何かを思わせる。
やがて、草を踏み鳴らす音。
誰かが、近付いてきている。
誰か。
足音は、軽く、妙に安定さが欠けていた。
女。それも錯乱している。
恐らくはマーダーではなかろう。
――少年の察知は見事的中した。

少しして、草木の中から飛び出してきたのは、少女。
少女の名は、天野美汐――

604　記憶の彼方へ

『君、朝、あの空き地で、何をしてたんだ？』
『…………』
『こんな雨の中で、ラジオ体操でもしてたわけじゃないだろ？』
『ラジオ体操です』

それが彼女との出会い……いや、彼女はクラスメートだったわけだから、厳密には違うのだが。
それからの一年は、確かに楽しかった日々。
俺と、茜と、詩子と。
本当に、楽しかった。心からそう思う。

気がつけば、雨の似合う少女、里村茜のことを本当に好きになっていた。
それは、初恋というわけじゃなかったけど。『初恋は実らない』とよく言われているから、それはそれでいいのかもしれない。
俺が、彼女と雨を巡り合わせたくないと思うようになったのはいつからだったろう。

『待っている人がいるんです』
『あいつ、傘持っていなかったから』
『濡れると風邪をひくかもしれないから……それだけです』

それでも時は巡って。留まっていたかった時間も流れていって。後悔を残したまま、俺は旅立った。
そして、この島で俺は彼女と再会した。

『ごめんなさい……生きて償っていけなく……て』

『──ごめんな……さいっ……！』

それが、最期の言葉。
償う……？　それは俺の台詞だ。茜が、茜だけが、罪を背負う必要なんかない。
俺が、茜を追い詰めた。あとは、あいつ……だな。
俺は一体何をするべきなのだろう。大切な人達が俺の前から消えて……大好きだった人が俺の前から消えて……俺は、一体何ができるのだろうか。

『……私が待たなければ、誰が彼を待つというのでしょう』
『……私が、待ち続けなければ、今までの私は、何だったのでしょう』

確かにそう言った。
すべてを失って、今俺が一番やりたいこと。
ああ、俺は、そいつに会いたいのか。

俺は、茜がずっと待っていた、あいつに会いたいのか。
そうだな、俺が、代わりにずっと待っててやるよ、あの空き地で。……必ず、生きて帰ってな。
生き残ったら武器のテイクアウトは可能なんだろうか？　それだと楽でいいな。
帰ってきたそいつに、鉛玉をぶち込むことができるからな……

俺がやりたいことを為すがために、生きて帰るのが大前提。
俺が、今まで考えたこともなかったこと。
ゲームに、乗るか反るか。
生きて帰れるなら、どちらでもいい。
茜も……あゆも、名雪も……みんなみんな……いなくなったんだから。
他にやりたいことなんて、なくなっちまったんだからな。

「ぐ……ぅ……」
目が覚めれば、見知らぬ天井。湿って腐りかけているかに見える、木の天井。
（ここは……どこだ……？）
どうやら、小さな古びた小屋……のような殺風景な部屋だ。また、寝ていたらしい。いつこの小屋に辿り着いたかなんて、分からない。
（ひどく……つらい夢を見ていた気がする……）
未だズキズキと痛む頭を触ろうとした……が、
「て、手が動かない……」
ギリギリ……何かが締め付けられる音。
（縛られてる？）
後ろ手に縛られている。
（……）
一体、何が起こったのだろうか。
「あ、目が覚めた……良かったぁ……」
気の抜けたような声。
寝転がったままの祐一に見えたのは、ピョコンと

立ったアンテナのようなピンクの寝ぐせ。
「二人ともっ、相沢さんの目が覚めたよ！」
「……」
状況がよく分からない。
「あ、ほんとだ。……生きてる？」
「死んでるように見えるか？」
「まあ、そりゃあ、見えないけど」
生意気そうな茶髪のショートカットの女が話しかけてくる。
「……これは、どういうことだ？」
よく、状況がつかめない。一体自分が何をしていたのか。覚えてもいない夢と、現実とをごっちゃにして、ミキサーにかけられたような感覚。
(要するに、頭が悪い、だ)
違う。
(気分が悪い、だ)
「いきなりそんな格好にして悪いけど、まだあんたのこと信用できないから悪く思わないでね。あんたの武器も預かってるから。分かるでしょ？　殺人ゲームなんだから。あらかじめ言っておくけど、私たちにやる気はないから」
早口でまくしたてる。
「殺人……ゲーム……？」
ようやく、頭の中でその単語の意味を理解する。
そうだった。北川と言い合いになって、天野に会って。謎の男に襲われて……そして……大切な人達が死んだ……などと信じられずに走ってきたんだった。
「俺も……殺す気かっ⁉　……くそっ！　くそっ！」
悔しさと、恐ろしさで、みじめな位足が震えた。
「だから〜……物わかりが悪い人ね……本当になんでこんなのが生きてるんだか……」
生意気な、女だ。
(もしも俺が殺人犯なら、真っ先に殺すタイプだ)
「ふざけるなっ！　なんで俺がこんな扱い受けなき

ゃならないんだ！」
「……信用できるまで」
「……」
「まあまあ、結花……とりあえず自己紹介しようよ。信用も何も……そんな態度じゃ私達が先に信用失っちゃうよ」
信用……できるかどうかは置いといて、今までのやりとりで祐一の胸の中の恐怖心はいつの間にか薄れていた。
「むう～……私こういう男嫌いなのよね……」
（俺だってお前みたいなガサツな女嫌いだ……）
結花、と呼ばれた生意気な少女をとりなしたアンテナ少女が改めてクルリと祐一に体を向けた。
「私の名前は、スフィー＝リム＝アトワリア＝クリエールよ。簡単にスフィーでいいわ」
外国人らしき少女が流暢な日本語で名乗る。ピンク色の髪の毛とぴょこぴょこ動くアホ毛が気になるが、ガサツ女と比べたら随分と可愛らしい。
「……」
そして、今まで二人の後ろで沈黙を守っていた女性が来栖川芹香、と短く名乗った。
その雰囲気はどこか神秘的に感じられる。
「んで、私は江藤結花。堅苦しいのは嫌いだから結花でいいわよ」
ガサツな奴が最後にそう告げた。
「んで、ガサツ女……」
「結・花・よ！」
とりあえず、この中でガサツ女と呼ばれたら自分、程度の自覚はあるらしい。
「まずこの縄をほどけ」
「ほどけ？」
「……ほどいてくれ」
「イヤ」
（このアマ……）
「あんたなんか信用できないもの……とりあえずあんたのことが聞きたいわ」

「俺か……俺は相沢……ってそういえばなんでお前ら俺の名前知ってた？　さっき俺の名前を——」
「ああ、これに載ってたから。写りの悪い顔写真付きでね……いや、写真のほうが写りいいかも……」
失礼な事を口走りながら、俺の顔写真のついた本を見せつける。
「とりあえずほどいてくれ……俺にはやらなきゃならないことがあるんだ」
「やらなきゃならないこと？」
「人を探している。大切な人達だ」
「……あなたの言ってることは嘘かも知れないでしょ？」
「……殺人ゲームなんてふざけるなよ？　……俺は信じない」
「あんたバカ？　三日間もこの島にいて……せめて現実は見なさいよ！」
そんなこと言われても覚えてないんだから仕方が無い。頭がまた痛む。

美汐に出会った時に思い出された感覚……血の海に浮かぶ真琴の姿が思い出される。
祐一は激しく首を横に振った。
「殺人ゲームが……というより、俺は大事な人達を失ったとは信じたくないだけだ。いや、絶対に生きている」
あゆも、名雪も、栞も舞も、そしてみんなも……真琴だって、俺の創りあげた幻覚に違いない。
祐一は、強くそう信じる。
「それって、逃げてるだけよ……」
「見たことも聞いたこともない……信じてくれなくても構わないが、俺はここ何日かの記憶が飛んでしまってる。そんな状況でそんなこと……信じられるかっ！」
「だったらなおさら逃げじゃない……つらいことから逃げて……私達だって信じたいわよ！　できることならって……でも、その為に忘れるなんて最低のことだわ。絶対に」

「……」
北川と似たような台詞。それが、祐一の癪にさわる。
「お前に俺の何が分かるんだ！」
売り言葉に買い言葉。
なんで記憶を失ってしまったかなんて祐一にも分からないが……信じる為に忘れたなんて思いたくもない。
「あんたのことなんて知らないし知りたくもないわ！　私達だって……口には出さないけどずっと辛いのよ！　……ごめんスフィー、私もう我慢できないっ！」
「結花……」
「私は大切な幼馴染を失って……スフィー達は大切な妹を失って……それでもずっと悲しみを心の奥にしまって……口には出さないだけで、ずっと、ずっと我慢してるのよ!?」
「結花！」
「私達だって……ずっと、辛かったんだからっ……！」
「結花……」
泣き崩れる結花をなだめながら……
「ありがと……私も、芹香さんも、おんなじきもちだよ？　もう泣かないで」
芹香と、そしてそう言ったスフィーの目にもまた大粒の涙。
「ごめん、ね……言わないように……泣かないようにって、ってたのに……ごめんね……」
「……」
芹香がそっと、結花の頭を撫で続ける。
「私も……結花とおんなじ意見。忘れちゃ駄目だと思う。絶対に。思い出さなきゃ前になんて進めない。進んだと思っても、それは横に走ってるだけだよ」
スフィーが結花の代わりと言わんばかりに、祐一と向かい合う。
「だけど……うん……。信じることは大切だって思

うよ。私も、心のどこかでけんたろや、リアン、綾香さんや舞さんや佐祐理さん……みんなみんな生きてるって……そう信じるだけで強くなれる気がするもの」
今まで、そのやり取りを、黙って聞いていた祐一の顔色が変わる。
「舞!? 舞って……まさか、川澄舞のことか!?」
祐一の顔色が真っ青になる。そこで、舞の、佐祐理の名前が出たその意味を。
「えっ……そ、そうだけど……」
「嘘だろ!? 舞が……佐祐理さんが……そんな……嘘だ……」
「……」
芹香が、唇を噛み締めるように言った。
『舞さんと佐祐理さんは、敵に襲われて……私たちと離れ離れになって……』
「なんだよ、それ……くそっ……俺は、こんなところで何してんだよ……畜生っ……」
「……」
「悪いけど……少しだけ一人にしてくれないか?」
「……」
芹香が、まだ嗚咽を漏らしつづけている結花を肩に抱きながら、ゆっくりと小屋の外へ出る。
そして、スフィーがそれに続く。
スフィーが扉に手をかけながら、言った。
「信じることは大事だって思う。だけど」
一度だけ、祐一を見て。
「信じてるだけじゃ前には進めないんだよ」
ガチャッ……扉がゆっくりと閉められた。
(真琴……舞……佐祐理さん……)
実感が湧かない。当然だ。何も知らないのだから。
(俺だって、思い出したい……俺は、何をしてきたのか……何をしたかったのか……)
だけど、あゆ達……いや、真琴達だって絶対に生きてる……と信じることだけはやめたくなかった。

605　彰のないしょ

どれくらい眠っていたのだろうか？
目が覚めたときには周りに誰もおらず、包帯でぐるぐる巻きにされた身体をベッドに横たえていた。
自分はいったいどうなっているのだろうか？
ただ、渇きと餓えだけが僕の身体を支配しているようだ。
この身体の餓えと渇きはなんだろう？
食欲があるわけでもないのに、何かをたまらないくらいに欲していた。僕はそれを満たす術を思いつかず、ただ見知らぬ天井を眺めていた。
そのとき、ガチャリとドアが開き、部屋に誰かが入ってきた。僕は首だけを横にして誰なのかを確認しようとする。
「あ、彰お兄ちゃん！　目を覚ましたんだね。それとも起こしちゃったかな？」
不安そうな顔で僕に近づいて来たのは初音ちゃんだった。僕は心配をかけさせまいと首をゆっくりと横に振る。
「そう、よかった……」
初音ちゃんは僕の血で真っ赤になった包帯を片付け、僕の額の上にある濡れたタオルを取り替えてくれている。
「彰お兄ちゃん、具合はどう？　気分とか悪くない？　痛いところとかない？」
初音ちゃんが真剣に僕の目を見ながら聞いてくる。泣き出しそうなその表情に僕の中の何かが高められていく。それに気付かないふりをして僕は大丈夫とゆっくり呟く。
『ドクンッ』
それと同時に僕の心の中の何かが蠢く。
「ねぇ、彰お兄ちゃん。のど渇いてない？　お水持ってこようか？」
僕のほうを優しく見つめながら言うその言葉に僕

は頷いた。
「待っててね。すぐ持ってくるから」と言って初音ちゃんは水を取りにいこうとしたが、ガクッと何かに引っ張られた様に静止する。
初音ちゃんは不思議そうに僕の方を見る。それもそのはずで、初音ちゃんを静止させたのは他の誰でもなく僕自身だったからだ。そして、初音ちゃんの体をぐいっと引き寄せると、初音ちゃんが「どうしたの？」と言おうとしていたその口唇を僕自身の口唇でふさいだ。口腔を乱暴に舌で犯していると、ぴちゅ、くちゅといった卑猥な水音が部屋中に響いているのがわかる。ぷはっと息が漏れ、唇を離すと同時に僕ははっと我に返る。
僕は今何をした？
初音ちゃんの純真でやわらかい唇を薄汚い欲望によって犯したというのか？
そんな⁉　こんなことするつもりなかったのに‼
「あ、彰お兄ちゃん？」
初音ちゃんが顔を赤くしながらうつむき加減に僕を見る。
「そ、その、いいよ。彰お兄ちゃん我慢できないんでしょ？　それは多分私のせいだと思うから……」
初音ちゃんが髪の毛をかきあげながら僕の胸に寄り添う。
初音ちゃんが何を言ってるのかわからない。
僕が無理やりキスしたことを怒っていないのだろうか？
そんなことより、いいってなにが？
何をしていいんだ？　誰のせいだって？
そんなことを考えていたつもりだったのだが、僕はいつのまにか初音ちゃんを押し倒していた。まるで違う誰かが僕の体を操っているかのように、理性とは正反対の行動を起こしてしまう。
「んっ！」
僕はまた初音ちゃんの唇を吸っている。
初音ちゃんの唾液で自分の渇きを潤すかのように、

何度も何度も彼女を舐めまわす。
「あ、あの、彰お兄ちゃん」
　名前を呼ばれて僕は初音ちゃんの上着をたくし上げようとしていた手を止める。
「そ、その、痛くしないでね……」
　その言葉に応じるかのごとく、彼女の耳たぶを甘噛みする。しかし手の方は荒々しく彼女の上着を脱がせていた。初音ちゃんの声は聞こえているのだが体の方が言うことを聞いてくれない。
　僕は乱暴にまだ発育途中の胸の先端にある桜色した小さな突起物にむしゃぶりついた。
「ひゃ、んん……」
　初音ちゃんは耐えているような声色でうめく。右の胸を舌先で弄びながら、左の胸を指先でいじくる。そうするうちに、それは小さいながらもその存在を主張する。
「ふあ、あ、あきらおにいちゃぁん」
　初音ちゃんが艶かしい声をあげる。ふと顔を見やると初音ちゃんは目に涙を浮かべている。いじらしいその表情がたまらなく自分の心を締め付ける。
　なぜ、僕はこんなことをしているのだろうか？
　まだこんなに幼く、あどけなさの残る少女に対して……。
　しかし、そんな心とは裏腹に自分の男性たる象徴は今か今かと主張を続けている。我慢できずに初音ちゃんのスカートに手をかける。それをするりと脱がすと白い下着が顔をのぞかせる。
「あ、あんまり見ないで……」
　初音ちゃんが恥ずかしそうに手で顔を隠しながら呟く。その下着の上からスリットにあわせて指を動かすと、初音ちゃんの体がビクッと跳ねる。そのかわいらしい反応を見ていると、もう少し優しくしてあげたいと思うのだが、相変わらず僕の体は言うことを聞いてくれず、その指の動きは激しさを増すだけであった。
「ん、んんっ！　んあっ！」

初音ちゃんは声を押し殺している。
そうだな、外には誰かいるかもしれない。いつ誰が入ってきてもおかしくはないだろうに、僕は何をやっているのだろうか？
しっとりとしたものが指に確認できる。
初音ちゃんのものなんだろうか……
初音ちゃんはハァハァと息を切らしている。かわいらしい胸が上下している。
ついに僕は最後の一枚に手をかける。
腰を持ち上げ、それをつかみ一気に引き下げる。
まだ、誰の目にも触れたことのないと思われる秘所が今僕の目の前にある。
「あ、ああ……」
初音ちゃんは恥ずかしさのあまり声も出ないみたいだ。僕は両足を持ち上げその部分が露になるようにして、顔を近づける。初音ちゃんは何をされるか理解したのだろうか、
「あ、だ、だめ！　汚いよぉ！　もうずっとお風呂入ってないし……」
と、かよわい両腕で僕の頭を押さえる。
初音ちゃんに汚いところなんてないよ。と言葉にしようと思ったが、それが音声に変換されることはなく、僕はその手を引き剥がし、その部分にくちづけをする。
汗のせいだろうか？　少ししょっぱい味がしたような気がするが、そんなことは気にせずに僕はその部分を丹念に舐る。初音ちゃんは声を出さないように自分の口に手を当て我慢している。
とてもいじらしく感じた。
止めてあげたかったが、僕にはどうしようもない。体が言うことを聞いてくれないのだ。
本当にそうなんだろうか？
これは僕の願っていたことではないんだろうか？　僕の中のどす黒い欲望が今体現されているだけなのではないか？
初音ちゃんを一度もそういう対象として見なかっ

たと言い切れるのか？
　自分がいやになってくる。
　今ここで自分を殺して止めてやりたい。
　しかし、そんな考えとは別のところで僕の体は動いている。
　いつのまにか、僕は初音ちゃんの足を持ち上げ、今まで自分の目の前にあったものに屹立した自分自身のそれをあてがっていた。いわゆる正常位という格好の初音ちゃんと僕。初音ちゃんの身体が震えている。
　僕は何をしているんだ？　やめろ、やめるんだ！
　そう心の中で叫んだ瞬間、初音ちゃんの中に僕の先が入っていった。
「ん、んあ、や、やあ……」
　プツンという彼女の初めての音が僕の心と身体に響く。この音は僕と初音ちゃんにしか感じることができない。初めての音は僕のものになった。
「いた、い。痛いよぉ……」
　初音ちゃんの声が僕の心を蝕む。
　僕は今、この世で一番純真なものを汚している。
　結合している部分からは純潔の証が下のシーツを赤く染めていた。
「あ、彰お兄ちゃん。ごめんね、ごめんね」
　初音ちゃんが僕に対して謝る。
　なぜ!?　僕は今初音ちゃんを犯しているというのに……謝らなければならないのは僕のほうであって初音ちゃんではないじゃないか。
「私のせいでこんなこと……」
　やめてくれ！
　初音ちゃんのせいな訳が無い！
　僕の心の弱さがこんなことをさせてるんだ！
　僕は自分が許せない！
　腰を動かしている場合じゃないだろう！
　そんな自己嫌悪とは裏腹に腰を振る速度が上昇する。結合部から聞こえるジュプ、ジュプ、という水音もテンポが上がっていく。はぁ、はぁ、と息づく

僕の呼吸。ギシ、ギシ、とベッドの軋む音。
　そんなノイズに紛れてかすかに聞こえる音。
「私、彰お兄ちゃんのこと好きだよ」
　その言葉を聞いたとき、僕の中で何かが弾けた。
そして、僕は初音ちゃんの胎内で白い欲望を吐き出し、果てた。
「僕も初音ちゃんのことが大好きだよ」
　その最後の言葉だけははっきりと口に出すことができたような気がした。いや、何も言えなかったかもしれない。もしかしたら彼女にはその声は届かなかったかもしれない。それでも、僕の気持ちは変わらない。
　初音ちゃんの頬に触れる。自分の体の自由が戻っていることに気付いた僕は彼女の身体を抱きしめようとするのだが、気が遠くなってしまい、それは叶わなかった。
「ごめんなさい、彰お兄ちゃん……」
　意識を失う前に見たものは涙を流しながらそう呟く初音ちゃんの姿だった。

606　会談

『さて、貴様ら。この島のことをどう思う？』
『それはどういう意味だ？』
『何かおかしいとは思わないか？』
『そうね、明らかに以前に人が住んでいた気配が感じられないわ。恐らくこの殺人ゲームの為に用意されたと考えるべきね』
『馬鹿な！　そんな馬鹿げた話があるか！』
『いや、俺もそう考えていた。このゲームには間違いなく裏に何かある』
『一体この馬鹿げたゲームに何が隠されていると言うんだ？』
『それは俺にもまだ分からない。何しろ情報が無さすぎる』

「ぴこ、ぴこぴこ。ぴっこぴこ？」
「にゃ～にゃ～？」
「シュウ、シュウ。シュウ」
「カァーッ！　カァー！」
「ぴいこ、ぴこぴっこり。ぴこぴこぴこ」
「にゃ～うにゃ～にゃ～」
「ぴっこぴっこ。ぴこぴっこり」

「ったく、うるせぇ獣どもだぜ」
「ねえ、したぼく」
「げぼく」
「わたし、思うんだけど」
「げぼくだ」
「うるさいわねっ！」
「いい加減覚えやがれっ！」
「ふみゅーん……げぼくぅ」
「下僕じゃねえっ！」
「どっちなのよっ！」
「うるせえ殺すぞアマ！」
——それは、繭が目覚めるまでの、ほんの僅かの出来事だった。

607　生徒手帳を捧げて

「ご、ごめんなさい……」
「ちっ、別にいいけどな」
強化兵である御堂にとって、いくら不意をつかれたとは言え、目の前の少女の一撃など効きはしなかった。
とは言うものの、出会い頭に殴られていい気のするものではない。
殴られた原因が自分の顔にあるとも知らず、御堂は舌打ちをした。
「で、早速だがお前は誰だ？　どうしてこんなところで居眠りこいてた？」
「答えてもいいけど……」

薊はそこで、一旦言葉を切った。
「あなた迂闊じゃない？　初対面の相手に武器も構えないで。もし私が銃でも隠し持ってたら、あなたおしまいよ？」
薊が警告を投げかける。
だが御堂は、軽く受け流すだけだった。
「甘いな。俺はお前が動くのを見てからでも充分対処できる。その気になれば……」
御堂の手が動く。
次の瞬間にはその手にはデザートイーグルが握られており、その銃口は薊に向けられていた。
「わかったか？」
「そう。わかったわ」
顔色一つ変えずに言う。
本当にやる気になっている人間ならば、薊は気絶している間に殺されているはずだったからだ。
相手の迂闊さを警告したのだが、どうやらその必要はなかったらしい。

「ならもう一度だ。お前は誰で、こんな所で何をしていた？」
それから、薊はひとしきりのことを言った。
自分の名前。誰を探しているのか。どういう信念で動いているのか。
そして、教会での出来事、崖での出来事も。自分の知る限り、全部。
「はぁ、そんなことになってたのかよ」
開口一番、おもわずそんな言葉が漏れた。
「そんなことって、何か心当たりでもあるの？」
「水瀬名雪と名乗るイカレた女に会ってな。連れの提案でそいつの後を追ってたんだが、なるほどねぇ」
「そうだったの……」
「おまけにそいつに止めを刺したのが祐一って野郎で、そいつはどこぞの女と一緒に崖から落ちたと」
あいつが知ったらなんて思うだろうか、と、御堂は心の中で口に出した。

「じゃ、もうお前に用はねぇ。とっととどっか行っちまいな」
冷たく言い捨てる。
「はぁ!? 人に訊くだけ訊いておいて、自分のことは何も言わないっての!? 最低ね、オッサン!」
繭が怒るのも無理はない。
「オッサンじゃねぇ、俺は御堂だ、覚えておけ!」
「うるさいわよ、オッサン」
「っ! このチビガキ……! まぁいい、俺はもう行くぞ」
そう言って、御堂は歩き出した。
「なんでついてくる?」
後ろを歩く繭に、そう問いかける。
「偶然でしょ。私は教会に向かって歩いてるの。誰もオッサンの後なんか追ってないわよ」
「さっきからオッサンオッサン……いい加減にしねぇとブチ殺すぞ!」
「あぁ、そう。じゃ、やればいいじゃない?」

カチャッ。
無言で銃を構える。
視線が交錯する。
その二人の間を、風が通り抜けていった。
木々の葉がそれに合わせて静かに謳う。
無言の対峙の中で、先に動いたのは御堂だった。
「ちっ……」
銃を下ろして、再び歩き出す。
ここに来てからの自分は、どうしてこうも甘くなってしまったのだろうか。
間違いなく、一人の少女の影響だった。
もっともそのことを、御堂は自覚していなかったのだが。

教会に着いた。
御堂はドアを開けようとして、何かを思い付いたように振り向く。
「チビガキ。一つ頼みがある」

「チビガキ言ってるうちは、きいてあげないわよ」
御堂は無視して続けた。
「お前から聞いた話を連れに話す。だが祐一って奴があの女を刺したことは、伏せておいてくれ」
「何よそれ」
しばしの沈黙の後、言う。
「人間に夢見てるお年頃なんだよ」
「……」
「いいな？」
藺は答えずに、こう返した。
「何があるのか知らないけど。あんた、顔に似合わず優しいのね」

優しい？
馬鹿馬鹿しい。
士気が下がるのを避けたいだけだ。

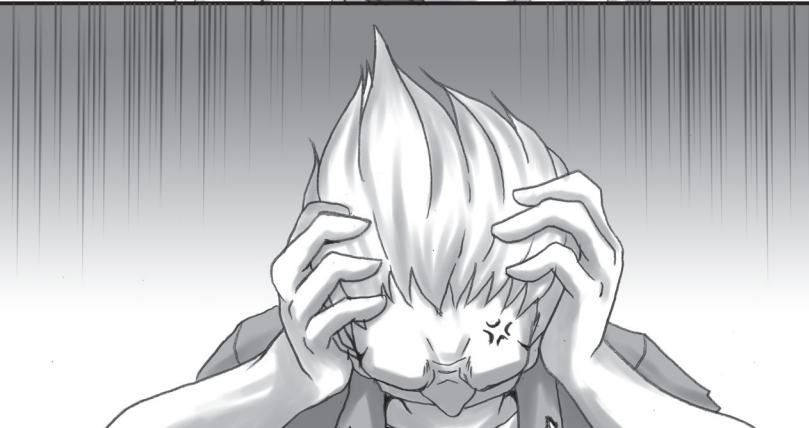
教会のドアを開ける。

「おっそーーーい！　この、したぼく！」
けたたましい声が鳴り響いた。

互いに自己紹介をし、藺は教会での一件を詠美に話した。無論、祐一が秋子を刺したことは、伏せたままで。
全ての話が終わり、詠美はつぶやいた。
「そう。結局死んじゃったんだ……」
生徒手帳を取り出して、しみじみと見つめる。
「これは、やっぱりここに置いていった方がいいみたい……」
てくてくと外に歩き、秋子の墓へ。
生徒手帳を捧げて、静かに祈る。
戻って来たとき、詠美は、元気だった。
いつもの笑顔に、ほんの少しだけの涙をたたえて。
「で、お前は何をしに来たんだ？」
「忘れ物を取りに来たの」

詩子と秋子の荷物を回収する。
その際に御堂は詠美に何故拾っておかなかったのかとツッコミを入れた。
詠美はふみゅーんと言うだけだったが。
「これでよしと。って、何これ？」
繭は詩子の荷物に入っていたＣＤを取り出す。
「あ……」
それを見た詠美も自分の荷物からＣＤを取り出し、見せた。
「……」
「……」
「……」
「これも何かの縁っ！」
詠美が言う。
御堂はただただ、頭を抱えるだけだった。

608　触れ合わない、二人の手

――二十数分後。
二人の手は呼び合うかのように伸びていたが、未だ触れ合うことなく、地に堕ちたままだった。
その十数分前。
少年の威気に気圧された郁未は、振り返ることもせずにその勢いのまま全力疾走していた。一刻を争うと思い、近道とばかりに森の茂みを突っ切っていく。それが幸か不幸かは分からないが、郁未は早々にそこで予想もしなかった人物と激突した。その相手は、思わぬ状況の変化に対応しあぐねていた長瀬祐介その人であった。思わずうめき声を漏らしたものの、即座に立ち上がると郁未は軽く詫びを言って立ち去ろうとした。時間は無い。だが彼女は呼び止められ、そして問いかけられる。それは予想外の、あるいはもはやそれ以外は考えられなかっただろう

内容の詰問である。即ち、負傷している女の子はどうした、と。そこに込められた微弱な殺意に気付くよりも早く、郁未はそれが誰を指しているのかに気付いた。

　時間が無い。郁未には選択肢すらも無い。郁未は逆に問い返す。私の名前は天沢郁未、あなたの名前は？　祐介はその妙に毅然とした態度に思わずたじろぎ、その後ぼそっと、長瀬祐介、と答える。そう、祐介さんね、分かった。そう言うが早いか、郁未は祐介の右手を掴んで走り出した。祐介は郁未の次の言葉を前に、抵抗はおろか明確な反応を見せる暇すら出来なかった。――その女の子が大変なのよ、と。

　教会まで到達した郁未と祐介は手分けして水道を探していた。むせ返るような血の残滓にひるんでいる余裕は今回は無かった。故に、郁未にはその惨状を見た祐介がどの様な反応を見せたのかも確認できなかった。医療用具も無かろうかと欲を出してみたが、流石にそこまでのものは無さそうだった。

　水道そのものはすぐに裏手の方で見つかった。水が正常に流れることを確認した後に郁未は水筒を取り出し水を汲み始めた。その折、好奇心に駆られて問いを発した。あなたと彼女の関係は、と。

　祐介は無言だった。すると郁未は右手を開いて彼にかざした。開いた手の平が汗でひどく汚れていた。私だけのじゃ無いわよね。郁未は祐介に言い放つ。すると恐る恐る祐介は右手を開く。確かに濡れている。走行の疲労だけでは、こんな濡れようはするはずなかった。認めざるを得なかった。郁未のそのパフォーマンスを、あなたはその子のことがとても大事なんでしょ、と言う無言の問いかけを。

　兄弟？　と郁未は聞いてみた。祐介は無言だった。

　恋人？　今度はそう聞いてみた。またも祐介は無言だった。郁未は思わず首をかしげた。

　水が汲み終わったので、蛇口を閉めて立ち上がった。再びあの場所に戻る前に、郁未はもう一度だけ聞いてみた。

でも、好きなんでしょ？　答えの言葉はやはり無かった。

——そのかわり、今度は頷いたのが見えた。

二人で急いで彼女の元へ戻った。戻った矢先、その惨状に郁未は言葉を失った。すっかり顔から血が引いて青ざめた彼女と対照するかのように、その右半身の方に濃紅の血溜りが出来ていた。思わず郁未は水筒を取り落とした。祐介は無表情だった。さっきはこんなんじゃなかったのに……。郁未は無意識に唇を噛む。いや。少年は彼女が現れてすぐ私を遠ざけたのだから、私の記憶など当てにならない。むしろ、彼はそれが分かっていて私にそうし向けたのではないかとすら思う。

長くない。彼女から発散される強烈な死の匂いは、どんな希望も奪っていった。言葉が出ない。郁未も祐介も、呆けたように立ち尽くす。辺りの静寂が余計にその死の響きを強くする。それは彼女の吐く不自然な呼吸。ひゅうひゅうごうごうと鳴り響く苦轟。祐介は力なく彼女の名前を呼んだ。彼女からの返事は無かった。

郁未は取り落とした水筒を拾い上げると、急いでそれを彼女の口に注いだ。木を背に座っていたその姿勢を崩さないように、慎重に彼女の顎を押し上げると、注意して水を注ぎ込んだ。だが水は思うように口に入っていかない。郁未は即座に水筒の水を自分の口に含むと、そのまま彼女に口付けをする。自らの口を通じて彼女に水を送るのだ。二、三度それを繰り返す。依然、彼女に正常な意識は戻ってこない。意識不明ではないが、激しく混濁しているようだ。そして再度水を送りこんだとき、彼女はそれを全て拒否するかのごとくその全てを吐き出した。激しく喘いで、その反動で前のめりに倒れこむと、彼女は苦しそうに痙攣し始めた。

……もうダメだ。郁未の目にも、誰の目にもそれはもはや明らかだった。こんなときに少年は何をや

っているんだと、すがるような思いで郁未は顔を上げた。立ち尽くしていた祐介は郁未の視線を受け止めることもできずにぽつりと口を開いた。
……何か、僕に出来ることはあるだろうか？
前にしゃがみこんでいた郁未は苦しそうに、本当に苦々しそうに言葉をひねり出した。
……せめて楽にしてあげられれば。

拳銃を構えた僕は天野さんに照準を当てると、一撃で彼女を穿てるように狙いを定めた。その時、僕は初めて祈ったんだ。それまでお世辞にも信じたなんてことが言えなかった、神様なんていうものに。頭の中で思い描くことと言えば、常に世界にひびをいれる爆弾のことばかり。そんな僕が初めて、自分以外の人の為に、いるかいないかも分からないようなそんな不安な存在にすがった。心の中で祈りを捧げて……そして引金を引いた。かちり、と乾いた音がしたのに一瞬遅れて、鮮烈な銃声が響いた。だけど、目の前に生まれるはずであった新しい血の海が目に映らなかった。銃弾が、逸れた。あれほど狙いを定めたはずなのに、何で外れるんだよ。僕は心で吐き捨てるよう毒づいて、そしてその後にとめどなく頬を濡らす何かが流れていることに気付く。ああ……僕は泣いているのか。虚勢の裏で、今まさにやろうとしていたことに怯えて、ああそうさ、彼女を撃つなんて、例えそれが正解であっても出来るはずが無い。神様は……僕の中の神様はそれを知っていたんだ。僕は顔を覆って嗚咽した。――そして気付く。荒ぶっていた彼女の吐息がいつのまにか耳を澄ましても聞こえない。どこかへ消えてしまった。姿はあるのにいなくなってしまった。彼女は死んだ。
僕は哭いた。

郁未がその事実に気付いた時には既に鋼線が彼女の自由を奪っていた。その糸が辿る先にはもちろん祐介の姿があった。郁未を縛した祐介は噴散する殺

気を郁未に向けてにたっと不気味に口元を歪ませた。郁未は祐介の突然の豹変に驚きを隠すこともできない。
問う、いきなり何をするのかと。
答う。守るべきものは無くなってしまって、後に残ったものはそれ以外だけだ。殺す。壊す。破壊し尽くす。ここに残された人々も、彼女を殺したこの世界も。
郁未にはその言葉が理解できた。悲しみの深さも、その必然性も。
訊く、だから私を殺すのかと。
返す。無言の頷きで。糸の端を握る祐介の両腕の震えが言葉よりも如実に語っていた。
郁未は涙を流す。後ろで哭いている祐介が既に尽くしてしまった分を補うかのように涙を流す。そして一言彼の名前を呼び上げる。それを遮るかのごとく、その名を呼ぶなと祐介が絶叫する。まるで名前それ自体が呪怨であるかのように激しく頭をかきむしり、そして握った線端に力をこめる。束縛の強まりと共に疾った痛みに郁未は思わず呻きをあげる。
その時、後ろから肩を掴んだ誰かが祐介の注意を引いた。驚いて振り向いた祐介が見たものはその人物の顔ではなく正拳だった。強烈な打撃に祐介が倒れた拍子に握りが緩み、郁未の束縛が少し解けた。
少年は振り抜いた手も省みずに言い捨てた。
お前は何をやっていたんだ、と。
そして戦いは始まった。……いや、その表現は正しくはそぐわない。戦いと呼ぶには原始的すぎるそれの優位は祐介が一方的に握ったまま離さない。暴力性をむき出しにした祐介は叫びを上げながら少年を殴り続ける。その猛攻は少年をも圧倒している。
お前も僕の邪魔をするのか！
時折言葉に現れる憎悪の形が郁未の胸に堪えた。祐介と共に居たのはほんの一時、儚い縁ではあったかもしれないが、彼には人を慈しむ心があることを郁未は知っていた。だからこそ、目の前の惨状は直

視するに耐えなかった。
　既に精神が身体を凌駕し、その精神も絶望に染まりきっている。正に恐るべき猛襲としか言い様が無かった。どこにこんな体力があったのか、どこにこんな気迫があったのか、思わずそれを問いたくなるほどに激しい攻撃だった。拳の一振りごとに爪は割れ皮は破け骨は軋み、叫びの余り唇を切って血を吹いても、一向に祐介に静止という言葉は見られない。狂ってる……人よりも何重にも重厚な狂気を郁未は祐介の背中に垣間見た。郁未はそれを表現するに最もふさわしいというべき電波という言葉を知らなかった。それは少年にとっても同じであり、彼の当惑の原因となっていた。ただ……似ていた。祐介が吐き出す怨念がかつて自分が持っていたそれと酷似していた。――そして同時に、今現在自分を蝕んでいく暗黒とも。
　切れ目の無い攻勢の最中、不意に祐介が体勢を崩す。少年はその瞬間を見逃すことなくバックステップで間合いを取ろうとしたが、祐介は倒れつつありながらも少年の下半身を掴んで食い下がった。結果二人は一緒に地に倒れたが、状態は後退しかけていた少年の方が不利だった。祐介は大声で叫びながら少年に乗り上げると、その勢いのままに彼を殴りつける。一撃、二撃、三撃、一向に鳴り止む様子が無い。二人は土の上で激しくもがき、その度に微かに土煙が上がる。泥が飛び跳ね石がぶつかり、その競り合いはまさに泥仕合の様を呈しかけている。たまりかねて少年が彼の拳を掴むと、そのまま二人は膠着した。
　祐介はまるで圧し潰す勢いで歯を噛み締めている。ぎりぎり……ぎりぎり……、そんな音が聞こえて来そうなほどに、強く強く噛み締めている。その時、少年の目が祐介の瞳を覗く。すると、そこから溢れた絶望が電波に乗って伝播する。殺意が伝わる。憎悪が滲みる。
　……何かがチリチリと少年の頭を灼くと、思考が

一時停止した。拳が緩んだ瞬間に祐介の束縛は打ち破られ、彼の拳が初めてまともに少年の頭を捕らえた。少年の意識が暗転した。

――次の瞬間、ドクンと鼓動が響いたかと思うと、祐介は少年のボディブローで吹き飛ばされた。

　少年は吼えた。

　一方で郁未はピアノ線の束縛の思わぬ難儀さに這いつくばったまま苦闘を繰り広げていた。慎重な行動が要求されている。先程焦って立ち上がろうとして髪を数本持っていかれしっかり肩にも痕が着いた。背部の方も線が肉に食い込んでいて痛い。早く解きたいが、線が変な風に絡まってしまっている。ゆっくり、ゆっくり。郁未は両手を前方にずらしていき、指で糸を弄られるように体勢を変えつつあった。

　線から抜け出せそうになった頃に視界に入ったのは、吹き飛ばされる祐介の姿だった。その拍子に彼のポケットから拳銃が飛び出して、そのまま転がっていった。

　祐介は自分の身に何が起こったのか一瞬理解できなかったが、横たわった地面を認識して、自分が反撃を受けて倒れたことに気付いた。ただ鮮烈な衝撃が走ったことだけしか、印象としては残っていない。相手は何か強力な攻撃を繰り出してきたのだろうか。祐介には、目の前の人物に一体どんな異変が起こったのか、皆目見当がつかなかった。

　指先に力が篭り、ざりっと土を握り締める。……大丈夫だ。戦闘を続けるのに支障は無い。それさえ分かれば十分だ。それ以外の価値判断などもう僕には意味が無い。もはや自分はどこまで傷ついても構わない。ただ、目に映る一人一人を傷つけて殺していけばそれでいい。僕が倒れ動けなくなる最後の瞬間まで、それを繰り返していけばいい。こんな世界は糞喰らえだ。神様なんていなかった。彼女は苦しんだんだ。苦しんで、そして死んでいった。彼女を殺したこんな世界は、もはや存在する価値すらない。

だから僕がぶっ壊してやる。木っ端微塵に破壊して、僕が世界に復讐してやる。
祐介は再び立ち上がって少年へと襲い掛かった。
——堕ちていこう。彼女に会える、その場所まで堕ちていこう。地獄だって構わない。彼女がいればそれでいい。大丈夫、君を一人になんかしない。もし彼女の居場所が天国で、僕がそこに入れなかったとしても……僕は必ずたどり着く。天使でも悪魔でも、邪魔するのものは皆殺しにしてでも、僕は辿り着いてみせる。
そうして彼が組み付いた瞬間、瞳に暗黒を灯した少年がまるで飢えた獣のごとく祐介の肩口に噛み付いた。牙を突きたて肉を突き破ると、彼の生き血を啜り上げた。祐介の絶叫が、辺り一帯に木霊した。

——その数分後。
眼前を過ぎった銃弾の感覚で少年は目覚めた。何が起きた……完全に前後不覚していて分からない、それに加えて激しく頭痛がする……。後ろを振り向くと、硝煙がくすぶったままの拳銃を携えた郁未が呆然と立ち尽くしているのが見えた。口の中には自分のものでない人間の生暖かい血液の味がじわっと広がっている。これは、一体どういうことなんだ。僕が探していた男は、郁未を襲っていた男は、どうなった？
祐介は倒れたままの美汐のもとへ、おぼつかない足取りで少しずつ……少しずつ近づいていく。彼の踏み出す一挙手一投足ごとに、地面に赤い滴りが落ちる。口からもコポッと喀血が溢れてくる。だが、彼は腹の傷を厭おうなどとは微塵もしない。捧げる両手は常に彼女の方へ向いている。——その僥倖は、美汐のまだ微かに残る息吹が祐介にも届いたこと。
——だが、果たしてそれは救いだったのか？　一歩、また一歩近づいていき

彼女に到達する前に崩れ落ちた。

――その二十数分前。
現れた少女を目の前にしてその異様な様子に驚くよりも早く、少年は判断を下した。水がいる、今どうしても必要だから、道を引き返して取って来てはくれないか。確か教会に水道があったはずだろう。そういう内容を郁未に伝えた。郁未は唐突なその指示に一瞬驚きを見せたものの、すぐにそれに反発した。先ほど見てきた惨状が彼女の頭に過ぎり、その行動を鈍らせる。だが少年にはそんな言葉は通じなかった。
いいから。
そう一言で切り捨てた。そこに何か目に見えない威圧を覚えて、郁未はその言葉に従うよりほか無かった。郁未はちらりと少女のことを一瞥する。その姿はまるで霧がかかったかのごとく儚く仄かであるように思われたのは、単に私の思い込みに過ぎないのだろうか。その疑問に答えを出すこともできずに、郁未は走ってその場を去っていった。

その場には二人だけが残された。少年は郁未の背を見送るや否や、すぐ行動に移る。両手を上げて、戦闘の意思を持っていないことを示しつつ彼女に近づく。少女の方には反応が見られないが、攻撃の意思があるようには感じられなかった。無論、それはこのジェスチャーの効果では無いだろう。彼女は不自然に息を切らせて俯いている。
座った方がいい。少年は彼女に囁いた。腫れ物を扱うように慎重に近づき、そっと彼女の肩を支え左肘に手をかけた。その瞬間、突然少女はまるで感電したかのようにびくっと震えて崩れ落ちる。まずい。少年は思う。即座に彼女の脇に腕を通し抱き寄せるようにその体を支えた。
――存在しない右手で支えることなど出来ない。勢いで触れたささやかな彼女の胸から、それよりもさらに密やかな鼓動が彼の胸板を通して伝播する。
「……君、その出血じゃ、もうすぐ死ぬよ」
そう口火を切らざるを得ないことが少年は歯がゆ

かった。
「……知ってます」
　そのもはや独白に近い語りかけに、彼女は驚いたことに返事を発した。そんなことを言われるんじゃ無いか。そんな不思議な確信が、少年にも少女にもほんの一瞬前の時から等しく予感としてあった。

　失血がひどい。意識も朦朧。今は常温より熱があるが、もはやそれすらも終わって一気に熱は失われる。淡々と羅列される記号が憎らしい。彼女は依然無言。ただ息を吐くだけ。答える意思の所在も、口を開く可不可も分からない。走ることなど問題外、歩くことすらつらいはず。それなのに何故こんな無茶を――。

　何か口走ったらしい。何と言っただろうか。何か致命的なことを言ったような気がする。思い出せない。体が重い。せっかく怖い夢から逃げ出したというのに。もう散々。視界が悪い。彼を直視できなくなったと思ったら、一緒に世界まで閉じてしまうの？　……やっぱり

私は一人が怖いんだ。目
を瞑ろうと思ったって、
実際にそれがなされようと
したら、途端に恐ろしくなっ
て。もう、いいや。そう思った
ら不思議と気持ちは落ち着いて。
その理由は、何かを諦めてしまった
からだって、何故か知っていた。でも
それが何かどうしても思い出せない。力
がすっと抜けて、私は私が誰かに支えられ
ていて、それに気付いて
……それでも
私を助けてくれる人はただ一人しかいない。

少女はゆっくりと顔を上げる。
「……ごめんなさい、祐介さん」
　瞳は焦点が合っていない。存在しない右手で、まるで愛しい人の髪の毛を優しく梳くように少年の頭

をかき抱くと、聖母のごとき微笑を浮かべた。

少年は思う。少女が、その見えない右手で本当に抱きたかったのはどんな人間だったのだろうか。

そっと体を自らから離して、少年は少女のことを寝かそうとした。だが硬い地面に完全に寝かすのは逆に上手くない。木を背に彼女を持たれかけさせる。その折、不思議なものを見るような表情でこちらを見てくる少女の姿が少年には痛々しかった。記憶の混濁の進行は早く、少年は説明を試みたが、少女の理解が得られている自信は全く無かった。衰弱も激しい。これ以上は喋らせるのも危険だろう。郁未を待っていることしか無いのか、何か自分に出来ることは無いのか。少年は思い立って、もう一度だけ尋ねてみる。他の誰にも聞こえないようにするかのように、少年は彼女の耳元でやおらに囁いた。

――笑顔で彼女は頷いて見せた。

少年は人を探しにいった。彼女の最後を看取るべき人物を探しにいった。だが数分後、響き渡った銃声に戦慄を覚えてその足を止めた。

十数分後。

自分は果たして生きているのか死んでいるのか。もはや正常な判断力なんていうものは雲散霧消していた。

これが現実だとしたら、目の前で狂ったように拳を振るい続ける彼は本物の彼なのだろうか。まるで獣のように哭しながら馬乗りで誰かを殴り続けている。こんなことをする彼は本当に彼なのだろうか。

空っぽの胃がきゅっと私を締め付ける。ああ、苦しい。

――過ぎる。私は誰かに抱かれていた気がする。そしてそれは祐介さんであった気がする。

――過ぎる。私は誰かに口付けされた気がする。そしてそれは祐介さんであった気がする。

虚ろだ。記憶すら正しく並ばない。もはや夢と現の区別もつかない。

これが現で無いのだとしたら、目の前で何かに噛み付かれ絶叫する彼は悪夢なのだろうか。
助けたい。そう思って手を伸ばしたら、指先に拳銃がぶつかった。恐る恐る指先だけの感覚でなぞる。その硬く不可解な存在に、本来感じるはずの違和感も通過して、私は触れた。それがまるで当然であるかのように私は引き寄せて、握り、持ち上げた。
……おもい。確かに、おもい。この〝おもい〟は少なくとも嘘じゃないだろう。
私は狙いを定めた。立ち上がろうにもそれすら出来ない。だから座ったままで引く、これは最後の一引きだ。私の力を結集した、本当に最後の一滴だ。せめて、これが祐介さんの助けになってくれることを願う。出来ることなら二人で一緒に帰りたかった。でもそれが叶わないなら…………………悩む必要なんて無い。
アクシデントで生まれた恋は長続きしない、なんて話があるけれど、でも、少なくとも私の命が尽きるまでは続いてくれました。私の恋は——他に比べられるものなんて無いけれど——最高でした。
そして、美汐は心で祈りながら引き金を引いた。
銃弾に込められた想いは間違うことなく放たれた。

——その不幸は。
彼女が捉え得た対象は祐介以外の何者でもなく。
その照準もまた、祐介でしかなかったこと。

郁未が拳銃を取り上げるべく駆け寄るよりも速く、銃弾は祐介の腹を真っ直ぐに貫いた。

その数分後。
前後不覚の少年に出来ることはもはや何も無かった。その瞬間に追いつくことの出来なかった郁未にも又できることは何も無かった。捧げる両手を彼女に向けてしかし醜く震え留まるその哀れな彼の姿を注視する、それ以外には何も無かった。

果たして、そこに何か救いはあったのか？
依然、二人の手は呼び合うかのように伸びていたが、未だ触れ合うことなく、地に堕ちたままだった。

609　最後の夢

これが最後の夢なのだと思う。
希望も夢も失った僕の見る、
自由も恋も失った私の見る、
これが最後の夢なのだと思う。

真っ赤な血を吐き出しながら痙攣していた長瀬祐介の身体からゆっくりと震えが消えていく。そして、ぼろぼろの身体でゆっくりと地面を這い始める。その真っ黒な深い重い眼差しを見て、黒い少年は心根から驚愕する。ただの気の狂った男にしか見えなかった襲撃者の、しかし何か、カタチのないものに執着した正常で清浄な強い眼差しに、少年は心から驚愕する。魂の燃え尽きる最後の最後の瞬間の凍えるような力の露出を見て、自分が何か重大な間違いを仕出かしてしまったような、そんな感に襲われる。
赤く汚れた身体で、泥にまみれ、時折血を吐き、苦痛に表情を崩し、痙攣し、それでも這い蹲って手を伸ばすのを止めない。諦めることを許さない、尊い魂の最後の燃焼だった。
長瀬祐介は諦めていない。天野美汐を守ることを。
彼はどうして死なないのだろう？　少年と天沢郁未は思う。あれ程の傷を受けてなお、熱に充ちた眼差しを掲げ、這い蹲る力が残るのだろう。もう彼女を守ることなんて出来やしないのに。
――考えるまでもないことだった。
その芋虫のように無様な姿を、二人は笑うことも止めることも出来ない。二人は解っているからだ、誰にだってその命の蝋燭を燃やし尽くしてでも守りたいものがあるのだということを。郁未にとっての

少年、少年にとっての郁末。長瀬祐介にとってはそれが天野美汐なのだ。彼は這う。仰向けに倒れたまま、苦痛の表情のまま目を閉じる天野美汐の元に。既に死んでしまっているか、そうでなくても死出の旅に今にも旅立とうとしている少女の元に。

たぶん僕は、とうの昔に死んでいたのだと思う。遠い昔にだ。それだけは間違いのない事実だと真っ直ぐ言える。それでは果たして僕はいつ死んだのだろうか、とふと考える。この島に来る前から死んでいたのか、それとも島に来た瞬間に死んだのか、あるいは月島瑠璃子が死んだ時に同時に死んだのか、ずっと守ると誓った筈の天野美汐と離れればなれになってしまった時にか、叔父を殺した時にか。

それとも実は、彼女を失った今初めて死んだのか。

——死の定義は人によって違うだろうが、僕にとっての死とは結局のところ精神の死だから、とにかくその内のいつかに僕は死んでいたのだろう。もう長いこと僕は生きていなかった。そしてたった今、肉体的にも僕は死んだ。風穴の空いた心臓から流れる血はとうに枯れてしまったし、酸素も脳に回っていないからまともな言葉が浮かばない。

それでも僕は惨めに這っている。血液が与えられてない脳味噌はまともなことを考える力さえ保ってくれてないけれど、僕はずるずると這っている。剣の如き真っすぐな思念が僕の身体と魂を貫いて、死んでいた筈の身体に無駄で無為で無様な奇跡を起こしている。

その力は僕の意志ではないのかもしれないと思う。神様と表現するべきであろう残酷な万能者が休むことを許さないのだ、そんな風に考える。——だとしたら、どうせあと何分も持たないんだから、早く寝かせてくれればいいのにと思う。僕は思う。苦しみに苦しみ抜いてそれでも無理矢理与えられるこの時間は夢なのか、現実なのか。どちらでも構うものか。

今僕に必要なことは、夢と現実の違いを考えることではない。とにかく這うのだ。無様に、無様に。
意味もない思考に突き動かされ、僕は這う。そう、全く意味を成さない御伽噺が頭の中で暴れている。這っているのは確かに僕が遠い昔に捨てた筈の意志の力のせいだし、神様なんてものはどこにもいない。僕は這う。天野美汐という僕の大切な人のところへ。きっともうすぐ遠くに行ってしまう大切な人の横へ。
そうさ。守りたかった人の手を握りたいと思ったから、守れなかった人の横で眠りたいと思ったから、僕は必死に這っている。痛みを失い始めた。感覚器までが壊れ切った、肉体の死までも通り過ぎたところに僕はいる。壊れ切った言語中枢は意味のない言葉ばかりを紡ぐ。死ぬ間際なのに意味のない言葉しか紡がないこの脳味噌が狂うほどに憎い。
もう何が出来るわけでもない。もう君を守ることも救うことも、何も出来ない。血を流して苦しみ続ける君の痛みを和らげることさえも出来ない。

それでも僕は這う。僕自身のエゴのためだけに。そうして、漸く、君の横に辿り着く。僕の意志の力が起こした奇跡は、君の手を握ることを許してくれた。ちっぽけで仕方がない空しい奇跡だ。僕は必死に顔を上げ、君の顔を見る。苦しみに充ちた君の顔をみて、どうしようもない絶望が圧し寄せて来たけれど、僕はそれでも上手く動いてくれない腕を必死に伸ばし、天野美汐の手を取った。
思う。
こんな奇跡、無い方が良かったのかもしれないね。

身体の色々なところを走る激痛で目が覚めた。
目が覚めたところでふと思い出す。自分は死んだ筈なのだ。手を失って、血を失って、そして、いろいろな物を失って、死んだはずなのだ。意識が真っ黒になって途切れた瞬間まで覚えているのだ。だが身体中を激痛が走るだけで自分は生きている。理由

がわからなかった。
　気付く。自分は今、柔らかなものの上で寝ている。記憶が途切れる前は固い土の上に倒れていた筈だ。そして気付く。自分は柔らかな布団の上に横たわっている。私は身体を起こして、ここが何処であるかを確認しようと周囲を見回す。狭いけれど片付けられた部屋の中だと判り、どうして自分はここにいるのかと考えているところでドアが開いた。
「――天野さんっ！」
　ドアを開けたのは長瀬祐介だった。あの地獄のような島で、ずっと一緒にいた人だ。
　私はこの時点で半ば気付いていたのかもしれない。ここはもうあの地獄の島の外である、と。
「長瀬、さん？」
　それでも私の警戒心はその認識を簡単に認めなかった。自分は既に死んでいて、ここは天国だと考える方が幾分可能性が高いと思う。呆然とした声で祐介の名前を呼ぶ。覚醒したばかりのぼんやりとした視界の中で、彼の顔は涙やら涎やら鼻水やらでぐちゃぐちゃになっていた。
「良かった……っ。もう目を覚ましてくれないかと思った――っ」
　必死に顔を拭いながら、祐介は私の手を取る。私の左手を握り締める彼の両手は燃えるように熱かった。この熱だけで、私はここが紛れも無い現実なのだと確信できた。
「長瀬さん、その、」
　祐介の言葉が確信を事実に変える。
「僕たち、あの島から生きて帰れたんだよ！」
　夢ではないかと思う。けれど私の身体を走る痛みも、私の手を握る祐介の熱も、確かに現実のものなのだ。私は呆然と彼の手を握り返すばかりだった。
　手首から先がなくなった右手には包帯が巻かれていて、その傷痕が、全部が現実であったことを強く訴える。私は呆然としている。
「ここは僕の部屋だよ。傷があらかた治ったみたい

だから、病院からこっちに連れてきたんだ」
　祐介はそう言って、ゆっくりと事情を話し始めた。

　あれから——私たちが殺されたと思ったすぐ後に彼の従兄弟の七瀬彰やその仲間が駆けつけ、あの少年達を殺したのだという。彼らがあの島での最後の狂気で、彼らの死で全ての戦いが終わったのだという。彼らにやられて瀕死だった自分達はそれでも辛うじて息はあり、すぐに手当をされたのだという。そして、私と長瀬祐介が意識を失っている間に島からの脱出の手段が見つかり、こうして無事に帰って来れたのだという。そして自分は、一ヶ月も意識を失ったままだったらしい——あの島での出来事からもう一ヶ月も経っていた。
　生き残った人たちはそれぞれの生活に戻り、傷痕を必死に癒しながら、大切な人を失った悲しみに堪えながら、それでも強く生きている。長瀬祐介は淡々とそう語った。
　そして自分だけが足踏みしていた、と祐介は言う。
「……足踏みってどういう意味ですか？」
「君が起きるのを待っていなくちゃいけなかった。その時間が足踏みさ」
　私、天野美汐の頭は多分それほど悪くはない。少なくとも人並みの理解力はあるから、彼が何を言いたいか、全てをその一言で理解した。けれど私の口は動かない。言いたい言葉がなかなか出ない。
　死ぬほど苦しい目にあって、
「それは、」
「今度こそ、君を守らなくちゃいけない。僕は君の身体を傷つけて、君の心を傷つけて、それで放っておけるような最低な人間じゃない」
　死ぬほど悲しい目にあって、
「長瀬さん」
「僕が足踏みしていたのは、君と一緒に歩き出したかったからだよ。君を置いていくことなんて、僕には出来ない」

死ぬほど痛い目にもあって、
「これから君は世間の好奇の目に晒されるかもしれない。けれど、僕が君を守る。君とずっと一緒にいたい。一緒に暮らそう。君に傍にいて欲しいんだ」
最後に私の前に現れたのは、ヒカリだった。
けれど私はその幸せを前に言葉を失っていた。それは『嬉しすぎて声が出ない』とかそういうものでは決して無い。私が感じていたのは、幸せになることへの恐怖だった。
全てが現実だった。それが意味することは、私が大切な友達を失ってしまったことも意味していた。私の友達――沢渡真琴は死んだ。あの島で、残酷な意志のせいで死んでしまった。
私は思ってしまうのだ。これからの人生で彼女のことを忘れることは絶対に無いだろう。そしてその傷痕を癒すことなど一生出来ないだろう、と。
多分心の底で思っていたのだ。帰れるわけがない、自分は真琴と同じ地面に骨を埋めるのだろうと。だから私は戸惑っている。自分がこの安全で平和な場所に戻ってきてしまったことに。
「私、は」
こんなキズモノの自分といては、長瀬祐介が幸せになれないと思った。陰気な顔しか出来ない自分が更に陰気になるのだ。彼のことを癒してやれるとも思わない。だから私は彼の誘いにすぐに頷けない。
私が何も言わずに目を逸らすと祐介は呟く。
「――真琴さんのこと？」
長瀬祐介は自分の迷いを瞬時に見抜いた。悲しそうな顔をする祐介に、私は小さく頷いた。
「私は――真琴のことを一生忘れられないと思います。これから先にどれだけ幸せなことがあっても、あの島で起こったことを一生忘れないと思います。私は――シアワセになれないと思います。こんな私といたら、長瀬さんもシアワセになれない」
祐介が握ったままの左手から、彼の体温が伝わってくる。この手を離さないでいたら、彼の傍にいた

ら、もしかしたら、希望の虹の掛かった未来へと行くことが出来るのかもしれない。けれど握っていてはいけないのだ。幸せな未来など有り得ないのだ。
私はやんわりとその手を解こうとした。けれど祐介が強い力で離さない。
「長瀬、さん」
祐介は真っ直ぐ私の目を見つめ、その手の温度と同じくらい暖かな笑顔を見せて、こう言った。
「――僕だって、彰兄ちゃんが言っていた事を鵜呑みにするつもりじゃない」
あの島で出会った祐介に似た青年の言葉を、私ははっきりと記憶している。何しろ、私にとってはほんの少し前の出来事なのだ。
「日常なんて何処にでもあるからすぐに見つけられるなんて僕は思わない。たとえ見つけたとしてもそれは昔あったものとは全然違う。確かにあの島に来る前、僕たちに日常はあったよね。変わるはずのない日常が、僕にも君にも。絶対に忘れられない大切な日常だ」
祐介は私の手を離さない。
「僕と一緒にいたところで、新しい日常なんて見つけられないかもしれない。だけど、だからこそ、僕は君と一緒にいたいと思うよ」
祐介は私の手を離さない。
「僕は誰より君の悲しさを知ってる。そして君も、僕の悲しさをきっと誰より知ってくれている。僕は出来るなら、君と同じ歩調で、同じ道を歩いていきたい。幸せになんてなれなくてもいい。君に傍にいてもらわなくちゃ、僕は壊れてしまうと思う」
祐介は私の手を離さない。
その手の力はもう弱くなっていて、振り払おうと思えば簡単に振り払える。けれど私は振り払うことが出来ない。どうしても、出来ない。
「一緒に、いてほしい」
私は彼の熱を感じながら、小さく頷いた。私、天野美汐はもう二度と長瀬祐介の手を離さない。

――もう離さないことに決めたんだ。

そして、時間が流れた。

私達の暮らしは当然、順風満帆という訳にはいかなかった。苦しいことはあったし、好奇の目もあった。人殺し、外道と陰口を叩かれながら働いた。苦しくてとても幸せとは言えない世界だった。真琴のいる場所に行きたいと思うような出来事も何度かあった。それでも私は生きた。私たちは生き抜いた。それなりに何かを守りながら生き続けた。

――生き続けて三ヶ月の時間が流れ、季節が冬になり、やっと好奇の視線が薄れてきた頃だった。

仕事から帰ってきた祐介がふと「買い物にでも行かないか」と誘ってきた。街に出て気付いたのだが、今日はどうやらクリスマスだったようだ。彼は陰気なままの自分を少しでも楽しませようとしてくれたのだろうか。申し訳ないと思う。

街には雪が降っている。ちろちろと閃光のように輝く白は、コートの上からでも私たちを凍えさせる。その凍える世界は、自分が数ヶ月前に住んでいた街と同じように綺麗だと思った。

どこにいても雪は綺麗だと思う。こんな風に凍える季節の中で、私は真琴と会い、言葉を交わし、友達となったのだ。空を見上げ、そして堪えられなくなってすぐに私は目を閉じた。

クリスマスだけあって街は華やかで、幸せそうな人たちでいっぱいだった。それでも人がそれほど多くない街なので、多少はゆったりとした感じで繁華街を歩くことが出来る。雑踏をゆっくりと歩く。

祐介は私の表情の変化に気付いたのだろうが、それでも何も言わなかった。何も言わずに歩いて、結局彼が口にしたのはなんでもない言葉だった。

「もうすっかり、冬だね」

早いね、と言って祐介は笑う。私の左手を優しく握り締め、ゆっくりとした足取りで私を牽く。

「それにしても寒いねえ。コンビニで肉まんでも買って食べようか？　いや、これからレストラン行くわけだからアレだけどね」
　振り向いて苦笑いする長瀬祐介の顔を、私はまっすぐ見ることが出来なかった。
　帰ってきたから一度だけ、すごくつらいことがあった夜、真琴のことを彼に話したことがあった。肉まんが好きなこともその時話したと思う。
　それからずっと彼は私に気を遣って色々なものを無視してきた。彼女の好きだったもの、彼女の周りにあったもの、色々なものを無視して過ごしてきた。
「……おなか、空いてないかな？」
　これは、彼の精一杯の気持ちなのだと思った。
　三ヶ月ずっと一緒に歩いてきて、私の傷を守ろうと癒そうとしてきた長瀬祐介は、この日になってやっと、私の心の傷の中に一歩足を踏み入れたのだ。
　この一歩で、今までただ生きてきただけの私たちが、何かを掴むことが出来るかもしれないと思った。
　初めて、幸せになれるかも知れないと思った。
「――はいっ」
　そして私はそれを受け入れる。

　肉まんを頬張りながら私たちはコンビニの傍のベンチに腰掛けている。ふと私は、ちょっとした冒険をしてみようと思った。
「祐介さん」
「何？　天野さん。……っ!?」
　返事をした祐介が、違和感に気付いて慌てふためく顔をする。私が彼のことを名前で呼ぶのはこれが初めてだったのだ。
「天野さん、って呼ぶのは今日でお終いです」
「……!?」
　戸惑っている。当惑した彼の顔を見るのはすごく面白い。――こんなことを言いつつ、私の顔も真っ赤になっていたりするのだけど。
「これからは、美汐、って呼んでください」

「うぁ……」
次の台詞は正直素面ではとても言えない台詞だけれど、今日はクリスマスだ。この甘くて白い雰囲気に酔ったつもりで言ってしまえ。
「呼んでくれないと、——もうキスしてあげません」
言ってしまうと心が遠い思い出の日の青空のように晴れた。私は悪戯っ子のように笑う。顔を真っ赤にして、久し振りに心の底から笑う。
「——分かったよ。……み、美汐ちゃ」
照れくさそうに言いかけた祐介の唇を私は塞いだ。ベンチに座っていたので背伸びをする必要もなかった。距離の無い世界で私たちは愛を交わす。
ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪
通行するたくさんの人たちがやたら冷やかすが、そんなの私たちには関係ない。柔らかな、暖かな祐介の唇にもっと触れていたかった。長い長い抱擁を交わし、息が切れるまでずっと彼を離さないでいる。
唇が離れると、私以上に顔を真っ赤にした長瀬祐介が心底慌てふためいた顔で不満を並べる。
「こ、こんな人通りの多いところで……っ」
「私は別に構いませんよ。恥ずかしかったですか？私とキスするの」
意地悪そうに言うと、祐介は俯いてぶつぶつと何かを言う。
「べ、別にそういう事言ってるんじゃないよっ、天野さんがっ——」
「——美汐、です」
私は彼の手を取って立ち上がる。クリスマスの夜はまだ始まったばかり。幸せのかけらが降ってくる夜はまだ、幕を開けたばかりなのだ。
幸せは、幕を開けたばかりなのだ。
これからは私は、彼と多くの夢を紡いでいこう。
「————————————ありがとう、祐介さん」

彼女の口から「ありがとう」という囁きが漏れた。
僕の手と天野さんの手が、僅かに残った熱を共有する。閉じ掛かった瞼の隙間から、僕は確かに見た。
天野さんが、少しだけ嬉しそうな顔で笑ったのが。
死に至る深い眠りの中で、確かに彼女は、笑った。
だから僕は、心底から、――良かった、と思った。
今の僕に辛うじて許された弱い弱い電波が届いて、
天野さんに、束の間の素敵なゆめを見せることが、
素敵な未来を見せることが出来たのだろうと思う。
帰ることが出来たならば、確かにあった筈の日常。
なんて、無様な奇跡だろう。ただ微笑わせることしか出来ない、束の間の夢しか見せられない、奇跡。
こんな奇跡なんて、いらなかったなら、ごめんね。
ああ、今度こそ僕の生命と意志と、恋心が終わる。
感じる熱。ほのかに暖かく柔らかな、小さな手だ。
ずっと離さずいたかった、大切な大切な優しさだ。
好きだったよ。天野さん、僕は、君が好きだった。
心の底から守りたかったんだよ、――美汐ちゃん。
最後の夢を目の前にして最後の雫がひとつ零れた。
僕は、最後の力を振り絞り、広がり続ける青を見上げようと顔を上げ、しかし眩暈が世界を包み、暗転していく意識の中で、声にならない言葉を呟いた

――――閉幕。

五番　天野美汐　死亡
六十四番　長瀬祐介　死亡
【残り26人】

610　歪曲

パァァアン――
そんな音が、聞こえてくる。
もはや聞き慣れた音。この島で、幾度となく聞いた音。

その音に、往人は歩む足を止めた。
「――近いな」
呟く。
三つ、重なって聞こえていた足音は全て止まっていた。無論、往人に聞こえる以上は近くにいる者には全員聞こえている。晴子も。そして観鈴も、その音に足を止めていた。
「――また」
観鈴が、口を開く。
「また、誰か、撃たれたのかな……」
沈痛な面持ちで。
暗く、沈んだ声で、そう呟いた。
もう、死は見慣れてしまった。
その島のあちこちに転がる死骸――。
目の前で、腕が飛ぶ光景すら見ているのだ。
だからこそ、辛いのに違いない。
「……けったくそ悪いわ」
隣に立った晴子が、ぼやく。忌々しげに。

――ァァアアあっ――
続けて、響く奇声。
晴子は、さらに顔を顰めた。
「行こか――気分悪なるで」
そう言って、観鈴の肩に、優しく手を置く。彼女なりの配慮。
――観鈴は、俯いたまま、答えない。
「観鈴？」
往人が声を掛ける。
それと同時に、観鈴は、きっ、と顔を上げた。
使命感を帯びた――そんな顔。
二人に、嫌な予感が走る。
「わたし、行ってくるっ――」
――悪い予感とは何故そうも当たるものか。
森の奥に向かって、二人に、顔を見ずにそれだけ言った。
「ちょ、観鈴っ――!?」
晴子が咄嗟に出した手を、避ける。

そのまま、その手にシグ・ザウエルショート９㎜を握り、駆け出した。
「観鈴っ！」
返事は無い。
振り返りもせずに、そのまま奥へと消えて行く。
――無論、少し遅れて二人も駆け出した。
「何やってんだあいつは……」
走りつつ、ベネリＭ３ショットガンに弾を入れる。念のためだ。
「……ホンマや、捕まえたら一発殴らなあかんわ」
そう言って、傷を抑えていた左手で拳を握った。
その両手には、何も握られてはいない。

――。

どうして走っているのか。
二人を置いて、何故突然走り出したのだろう？
足は震えている。
勢いだけで飛び出したわけだが、銃を握る手も震えている。
恐らく、撃つ事など到底、無理だ。
だが。
足は止まらない。
止める気も無い。
――嫌だった。
このゲームが。
殺し合いが行われる事が――
自分を護る為に、往人が誰かを殺そうとする事が――
そして、自分の為に、母親が傷付いた事が――
どうして、こうならなければならない？
何故、殺し合いなどする。
――分かってる。
そんな事は、誰にでも分かる。
恐怖。
恨み。
そして、生き残るという欲望。

それらが、血の惨劇を引き起こしている。
自分は、殺せない。
だが、殺す事が出来ないからこそ、何か出来る事があるのではないか？
そう思った。
だからこそ、走る。
手遅れになる前に。
……無論、それだけではない筈だ。
走りながら、思う。
——もう、足手まといになるのはこりごりだ、と。
銃を握る。
確かな重みを持ったそれが、僅かに勇気を与えてくれるような気がした。
そして木々の間を抜けていく。

「——」
「——」

無言。
最後の繋がりを求めて、堅く手を握った二つの死体。
少年は、悲壮な顔を。
もはや光を灯さぬ瞳を、遠い空へ向けて——泣いていた。
それでも、少女は、微かに笑っていた。
死の直前に何を見たというのだろう？
無論、彼らには知る由も無い。
「——この島に居る以上は」
少年の声。
「殺さなくては、生きる事が出来ない。他の誰かの命を奪って、自分だけが生き残る」
拳を握る——
腕が震えているのは、崩壊によるものだけではあるまい。
その一見静かな表情の内に潜むのは——怒り。
「ふざけた話さ——」

締めくくる。
郁末は、返さない。
——二人は、もはや目の前で死んだ彼をただの殺戮者とは思っていなかった。
否。この島に居る全ての殺戮者もそうだ。
彼らは、この島の被害者。
狂った島の中で。
何かの理由の為に、他の誰かの命を奪っていく。
悲しみを巻き起こし。
そして最後に、己もその中で死ぬ。
彼は。
きっと、本当に、彼女を——
「——埋める？」
提案。
ぽつりと呟かれた郁末の言葉に、少年は無言で頷いた。
本で穴が掘れるわけがない。

無論、包丁でもだ。
適当に、大きめの枝を包丁で叩き折る。
郁末はそれを少年に投げ渡した。
「傷、大丈夫かい？」
——郁末の服には、あちこちに切れ目が作られていた。
ピアノ線。
切れた事で助かったものの、あれで無事でいられる筈も無い。
服の切れ目から、微かに血が滲んでいるのが見えた。
「大丈夫——舐めれば治るわ」
かつ、と枝を叩く音。
「その時は、手伝ってもらうわよ？」
「——やれやれ。良い趣味してるよ」
苦笑気味の、溜息。
それは、暗い、暗い雰囲気を吹き飛ばそうとするようで。

――そして、随分と儚いものだった。
かつ、と枝を叩く音。あと少し。
かつ。
――ばきん。

「……っ」

人の声。
咄嗟に、振り向く。
――少女が居た。
その手に、銃を握り。
左手で、口を抑え。
そして、愕然と、その目が見るのは。
二つの死体。
――違う。
違うんだ!
二人は、そう叫ぼうとして。
だが、それよりも早く。

さらに二人の人物が、森の影から現れる。
「観鈴っ――」
現れたのは、男と、女。
――あれは。
ずっと前に――このゲームが始まった頃に、少しだけ言葉を交わした人物。
確か、国崎往人という名前だった筈だ。
共に連れている女は、知らない顔。
国崎は、少年の顔を見て、僅かに眉を寄せ。
それから、少女の様子に気付いたようで。
少女の見ていたそれに、目を見開いた――。
――ああ。
どうせなら、蝉丸さんだったら良かったのに――。
何でこうなってしまうのか、といった顔で。
少年は、そんな事を思った。

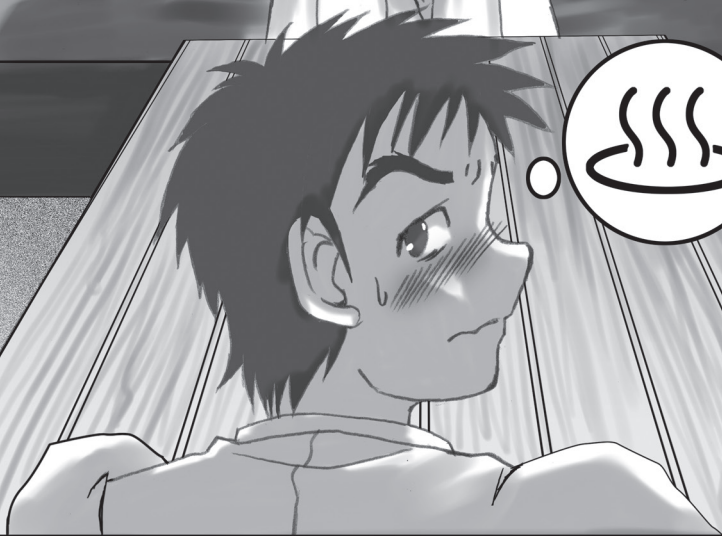
611　男二人。史上最大の作戦

「外から見た感じだと施設はこれぐらいの大きさだと思うのだが」
蝉丸さんがペンで基地のだいたいの形を描いてみる。
「まぁ地下がどうなっているかは分かりませんけど、確かに……」
トン、トン、トン……
俺がその施設の外周三箇所を指でたたく。
「ここが俺達の見つけた入り口。裏のこことここ辺りに脱出口がありそうな雰囲気ですね」
自分なりの推理。的確なポイントだと我ながら思う。蝉丸さんの表情が驚嘆のそれになる。
「君は一般人だろう？　なかなかの推理力だ。私が考えていたのと変わらん」
「はは……。臆病なだけですよ」

リビングルームに男二人。作戦会議は続いていた。
ん？
そう言えば……。
「蝉丸さん。晴香さんは今何してるか知ってます？」
一人だけ、自分が行動を把握していない人物がいるのに気づいた。
「彼女なら、ドラム缶見つけたからドラム缶風呂をする、とか言って外で準備していたぞ」
は？
「ド……ドラム缶風呂っすか!?」
「うむ。少々危険だとは思うのだがな。やはり婦女子は気になるらしい」
確かに最近皆風呂に入っていない。常に活動しているので汗はだだっかきだ。
婦女子と言わず、男の俺でもそろそろ気になる。
「ふむ……そうだな。施設うんぬんよりそっちの方を決めるのが先決かもしれないな。男としてやらぬ

わけにはいくまい」
蝉丸さんはもう一枚紙を取り出し、この家のだいたいの形を絵にする。
「耕一君。君ならどうする？」
え？　そんなこと言われてもなぁ……。真面目な顔で尋ねられても……。
　確かにマナちゃんや初音ちゃんはともかく、晴香さんあたりは覗いてみたい気はするな～。
ぐっ……。いかんぞ男耕一。そんな情けない行為を初音ちゃんにでも見られてみろ。
「お兄ちゃんのエッチ～!!」ばしっ！
　ぐらいは食らうかもしれん……。しかしこっちには戦闘・隠密のプロ。蝉丸さんがいるわけだし、ちょ～っと俺の好奇心もムラムラ～と……。
「そうですね。こことここ辺りが最適なんじゃないかと……」
　自分なりの推理。的確なポイントだと我ながら思う。しかし蝉丸さんの表情が落胆のそれに変わる。

「残念だ耕一君。そこでは遠すぎる。確かに視界は確保できているが、部屋の中からというのは決定的にまずい」
え？　だってそれ以上近いと、確かに楽しいけど見つかる可能性が……。
「特に最重要警戒地点のこの繁みから彼女らが襲われた場合。対処に大きく時間がかかってしまう。他の参加者が長距離射程武器を持っていないとも限らんしな。耕一君は攻めは得意でも、警護には向いていないのかな？」
え？
……。
…………。
……………。
しまったーーーーーーーーー!!
一人だけで不謹慎な想像していたのかぁぁぁ!!
先生、すっごく恥ずかしいじゃないかーーー！
不謹慎な俺を許しておくれよ初音ちゃん……。

――カタン

俺の魂を現実に連れ戻した、廊下からの物音。
出てきたのはマナちゃんと月代ちゃん。
「あ、彰くんの様子はどうだった？」
当然の問いにビクッと体を硬直させるマナちゃん。
「ああ、あ、げ……元気。元気なんじゃないかなぁ……？　あはは、あははははは……」
「ふむそうか、なら良かった。だがもう少し休ませて体力を回復させておきたいな」
「体力を回復……ねぇ……、余ってんじゃないかしら（ぼそっ）」
？
さっぱり要領を得ない。
しかし俺にはもうひとつ疑問がある。
月代ちゃんの仮面ってなんなんだ？
(;´Д`)

612　精神戦

ジャキン！
往人がベネリM3ショットガンを構え直し、少年を問い詰めた。
「お前がやったのか？」
その問いに、少年は言葉を選びながら、慎重に答えた。
「仕方なかったんだ」
事実を――話す。
「いきなり襲われたんだ。そこの男が持っている糸のような武器で」
往人はなにも答えない。いや、答えられなかったといった方が正しいか。
（……くっ……どうする？）
彼の頭の中はフル回転してこの状況を打開する策

を考えていたのだ。
ゲームの序盤にあった少年には、やる気は感じられなかった。
だから住人はベレッタを少年に渡したのである。
だけど、今はどうか。
確かに今の少年と話した限りでは。やる気にもなっていないようだし、気が狂ってしまったという印象も感じられなかった。
しかし、それでも最初に感じた得体の知れなさや、結局最後まで名前を明かさなかった胡散臭さは住人の心の中からは拭えなかった。
（くそう……）
ベネリM3を持った手に汗が走っていた。
（さて……どうしたものか……）
一方で、やはり少年も窮地に陥っていた。
（国崎さんだったよな……、あんな武器まで持ってたのか……）

チラリと、偽典に目をやる。
（あの銃には……この本も効果が薄いな……）
銃弾を一回の射撃で一発しか出せない銃ならいざ知らず、マシンガンやショットガンの類には何枚も紙を使わなければいけない。
効率も悪く、あっという間に紙も無くなってしまう。
更にこの場合、一度に大量の紙をばらまかなければいけないので、下手をすると弾き損じた弾が自分に当たる可能性もある。
（潜水艦のときのように、最初に撃ってきたのをうまく反射させるしかないけど、果たして彼にうまく当たるかどうか）
話し合いで解決できればいいのだが、きっかけを出す糸口が見つからない。
下手なタイミングでそんなことを言えば変な疑いをもたせてしまう。
（ああ、まいったなぁ……）

彼もまた、動けずにいた。
時間にして数分。だが彼等には何十時間にも思える時間が過ぎていく。
互いに相手の思考を読み取ろうとし、打開策を考える。
それは正に、精神戦。

613 逮捕

真っ暗な夢のトンネルを抜け、僕は軽い頭痛と共に目を覚ました。確認する。見たところここは天国ではないようだ。地獄でもないようなので僕は無事に目を覚ましたということなのだろう。目を覚ましたのはまったくもって良い事だ。もう二度と目覚めなくてもおかしくない程の怪我だった訳だから、こうして再び現実に戻れたことはまったく良かった。
体の調子もすこぶる良い。少し寝ただけなのに、傷の痛みが半ば消えかかっている。霞んでいた視界も正常に戻っている。壁にかけられたカレンダーの小さな文字も明瞭に見える。ステキな目覚めである。笑い声まで漏れそうな程に気持ちがいい目覚めだ。
まあ、正直申し分ない目覚めなわけである。
僕、七瀬彰はこうして無事でいる。
しかし。
どうも不可思議な事がある。誰でもイイから教えてください。というか教えてもらわないと僕の精神の平衡が保てない感じがする。生憎周りに他に人がいないので、神様にでも聞くしかない。
神様教えてください。

何故、初音ちゃんが裸で、同じく裸の僕と、同じベッドの中に、いるのでしょう、か。

「——今寝たと思ったのに、すぐ目が覚めたね。もう大丈夫なの？」
初音ちゃんの声だと理解するのに十秒。

待て。
待て待て待て待て待て待て待て待て待てぇぇぇっっ!!
初音ちゃんの裸。薄い胸。白い肌。細い腰に細い肩。そして赤く染まった頬。僕の腕に回された彼女の腕から、彼女の柔らかさと熱が強く伝わってくる。
さて。この状況をどのような視点から捉えれば別の解釈が出来るのだろう。僕の足りない脳味噌では、この状況の示す可能性がひとつしか浮かばない。
「……もうっ……彰お兄ちゃん、そんなに見ないで……服、着るから」
「。」言葉が出ない。
そう言って初音ちゃんはさっさと下着を付け、ベッドの横に置いてあった上着を着込む。真っ白な肌がピンク色に染まっている。立ち上がって露わになったシーツには赤いもの。血の他には見えない。
顔面から血の気が引く。顔の血が身体の別の部分に集まっていく。別の部分とは勿論心臓で、早鐘のようにばくばくと音を立てる心臓に、僕は心底驚愕する。ここまで心臓が働くのは生まれて初めてだ。
やっと言葉が出る。
「——初音ちゃん」
言うと初音ちゃんは心底申し訳なさそうな顔で、
「ごめんね。わたしのせいで、お兄ちゃんに」
そう呟いた。意味が判らなかった。意味は判らなかったが自分がやったことは完全に思い出した。思い出しました。わはははははははははは、はは。笑えない。全く笑えない。
僕は遂にやってしまったのだ。しかも小学生を。犯罪者だ。完全に犯罪者である。
「ごめんっ!　初音ちゃんっ!」
な、なんて事をしたんだ僕は!!　たぶん時間にして十五分ほど前、僕は、自分の勝手な欲望の昂りを、この目の前の幼い少女にぶつけてしまったのだ。
明瞭に覚えている。初音ちゃんの肌も、初音ちゃんの唇も、そして初音ちゃんのその優しい声も。

「ううん——彰お兄ちゃんは、悪くないよ」
初音ちゃんは、本当に申し訳なさそうに笑う。
僕はそんな初音ちゃんの声も頭に入らず、腐った脳味噌で自分の愚かさをなじる。
僕は確かに初音ちゃんが好きだったよ。この気持ちは好きだっていう気持ちだよっ。けれどそれはあくまで守ってあげたい対象としての気持ちだ。つまり妹か娘みたいに思っていたからであって、父性愛的なものであったのであって、断じて、断じて性欲の対象として見ていた訳じゃなかった筈なのだ。それがなんだ。僕はバカだ。勝手に欲望を吐き出しているこの自分は。僕はバカだ。一回死んだ方がいいと思う。死んであらゆる種類の苦痛を一万年かけて与え続けそれを一万回繰り返して魂まで消滅するのがいいと思う。さて、僕はただ一時の欲望を吐き出しただけで今は別に彼女に何もしたくないかといえばそれは嘘になる。こうして目が覚めた今でも、正気に戻った今でも、僕は初音ちゃんを抱きしめたいと思っている。唇を重ねたいと思っているし、肌を重ねたいと思っている。彼女とずっと一緒にいたいと思う。なんてことだ！　僕は小学生に欲情するような少女性愛者だったというのか！　十三歳未満との性交は同意があっても強姦罪になるんだぞ⁉　そもそも、合意なんてあったか？　二十歳の僕はもう少年法は適応されない。僕は歴とした犯罪者だ。いや、既に複数殺人を犯している訳だから今更か。
でも——ああ、僕は初音ちゃんが好きだ。初音ちゃんを心底愛している。僕は愚か者だ。法律が許さなくても、この気持ちは偽りたくない。
ここまでを五秒のうちに考え、自分をなじり、そこで自分の本当に愚かな部分に気付く。自分が犯罪者だろうがなんだろうが今はどうでもいい。僕が今本当にしなければならないことは、
僕の気持ちを初音ちゃんに伝えることだ。
男の腕力で、強引に純潔を散らされた彼女に、言わなければいけない言葉があるじゃないか。

ベッドから身体を起こし、僕は言う。
「――好きだよ。初音ちゃん」
やっと言えた、と思う。
彼女とこの島で一緒に戦って、生きてきた少女に、僕はずっと癒されてきた。彼女がいたから僕はこうして壊れないで来れたのだと思う。
彼女を目の前にしてこの言葉を言うことが出来て、僕は生き続けられた運命に感謝する。
「わたしもだよ、彰お兄ちゃん」
心底で嬉しそうな顔をして初音ちゃんは笑う。
「大好きだから、抱いたんだ。それだけは間違いない。本当に、ありがとう。君がいるから、僕は生きていこうと思えるよ」
「――うん」
「決して、一時の欲望に溺れたんじゃない。確かに僕はさっき少しおかしかったかもしれない。けど、どんなに僕は狂っても――君じゃなければ、あんな事はしなかった。絶対に」
ベッドから立ち上がり彼女を抱き寄せる。一線を越えてしまった事をもう二度と後悔する事はない。好きなのだ。心底から好きなのだ。彼女の体温を全身で感じながら僕はにこりと笑う。
「大好きだ」
ならば、たとえこの子が今まだ小学生でも構わないではないか。必ずこの娘を守る。そして一緒に帰る。そして彼女を一生守り続けよう。彼女が僕の生きるための光なのだから。
「十年後、必ず結婚しよう。君が大きくなって、結婚できる歳になったらね。ずっと一緒にいよう」
にしても、なんて馬鹿な事を言っているんだ僕は。プロポーズか。今時小学生同士でもこんな陳腐なプロポーズは交わすまい。まあいいさ、と少し照れながら僕は頬を掻いて、
異変に気付く。

僕の胸の中の初音ちゃんが突然僕を押しのけ、少し怒ったような目で僕を睨んでいるのだ。
「……？」
「彰お兄ちゃん？　……わたし、高校生だよ？　結婚だって後少しで出来るようになるんだけど」
僕は取り敢えず、首を傾げてみた。何を言っているんだろうこの小学生は。寝言は寝て言わなくちゃ駄目なんだぞ初音ちゃん。
「マジ？」
「マジだよ」
マジかっ!!
——沈黙。完膚なきまでの沈黙だった。
沈黙を嫌ったのは、勿論沈黙を生み出した僕の方であった。
「と、と、とととにかく。耕一さんのところに行こう。今の状況を知りたい」
彼女の手を取って部屋を出ようとすると、彼女は強い力で手を払いのける。振り向いて彼女の顔を見るともう駄目だった。彼女の心底悲しそうな顔は自分の心をえぐる。そりゃそうなのだ。きっと初音ちゃんは自分が小学生だなんて思われていたなんて思っていなかった筈なのだ。
初音ちゃんは少し、自嘲気味に笑って、
「——そっか、ずっと間違われてたんだ……」
はぁ、と息を吐いた。勝手なことだが、その様子があまりに可愛く映った。僕は死んだ方がいいと思う。自虐しながら僕はまた彼女を抱きしめる。
決してミスを誤魔化すためではない。断じて違う。
「彰、お兄ちゃん」
「間違ってはいたけど、だからって、僕の気持ちが少しでも変わると思う？」
そう言ってもう一度その唇を塞ぐ。彼女の柔らかな肉に触れながら、何処か安堵を覚えている自分を見つける。僕は彼女のためなら犯罪者にだってなるつもりはあった。だがしかし、高校生ならば刑法百七十七条は適応されない！　……と思う。堂々と彼

女と逢瀬を繰り返すことが出来るのである。なんだかんだで逮捕されるのは嫌だった自分に自己嫌悪である。僕はやっぱり死んだ方がいいかもしれない。

　唇を離して、赤く染まった初音ちゃんの頬を撫でている時、僕は自分の身体の変調を自覚する。身体がほんのりと熱い。それは心地の良い熱さで、生命の奔流とでも表現すればいいのかとも思う。失われていた力がそれ以上の形で戻ったような感覚だ。
　まだこの島には幾多の危険があるだろう。その危険から彼女を守ることが出来るだけの力が戻った、そこまで僕は思う。彼女のナイトとして僕は生き続けるのだ。

「それじゃあ耕一さんたちのところへ行こう」
「うん」
　そうして初音ちゃんと連れ添って部屋を出る。ドアを開けようとしたところでおかしな音がした。何事かと思ってドアの外を見たが何も無い。天井裏か床下で大きなネズミが暴れたのかもしれない。気にせず僕たちは廊下を歩き、
「おはようございます。無事目が覚めました」
　耕一たちがいる部屋に入って、僕は少し大きな声を出して挨拶をした、
　のだが。
　その部屋の何処かおかしな雰囲気に気圧されて、僕は言葉を失った。
　まず観月マナが僕たちの顔を見た途端に溜息を吐く。やけに大きな、聞こえよがしな溜息だった。
「はあぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
　溜息の後には負けたぁ、負けましたぁ、という呟き。はて。何に負けたのだろう。
　次にお面を付けた少女——三井寺月代が、
「(;´Д`)初音ちゃんすごい……負けたぁ」
　などと呟いている。
　全ての状況が僕には理解できた。そして勿論僕の

横の初音ちゃんも完全に理解しているだろう。
……ばれている。
初音ちゃんの顔を見る。真っ赤っかである。スイカの実のように真っ赤である。一方僕はと言えば青ざめた顔をしているに決まっていた。身体中の血が心臓に向かって流れて、皮膚が自分のものとは思えないという奇妙な感覚に襲われる。きっとスイカの皮みたいに真っ青な顔をしているに違いない。
心臓が早鐘を打つ。
彼女たちが知っているということは、だ。耕一さんや七瀬さん、晴香さんや蝉丸さんも知っているのか？ 僕と初音ちゃんの関係の変化をッ！
駄目だった。もう今すぐ部屋を飛び出して逃げ出したかった。いや逃げるわけには行かないのだ。彼女を守るためにはここを離れるわけには行かないし彼女と付き合っていきたいという趣旨を保護者であると思われる柏木耕一に告げなければいけない。それでも僕は逃げ出したかった。元来僕は度胸がない人間なのだ。
「お、起きたか」
だが、耕一は穏やかな口調で、何も知らないかのように笑うばかりだった。
「ま、何にせよ無事で良かったよ」
思う。まだ柏木耕一は何も知らないのか。どっと安堵が背中を走る。冷や汗で湿った背中が気持ち悪い。いつかは初音ちゃんとのことをしっかり話さなければいけないが、今その難を逃れられたのは幸いであった。
「にしても、俺も疲れてるのかな——さっき変な幻聴が聞こえてさ。少し休んだ方がいいかな」
——っつ。
「うむ、俺もだ」
耕一の横に座る坂神蝉丸もそう言って頷く。修行が足りぬ、などと呟いている。
——幻聴の正体が何かなんて決まっていた。
逃げ出したいよ。

とどめは遅れてきた七瀬留美であった。
「あ、な、七瀬くん、お、起きたのねっっっ!!　わ、わ、割と、元気そう、元気そうじゃない？　よ、よ、良かったわーっっ!!　あ、あ、あはははははは」
穴掘って入りたい。そしてその上に土をかぶせて僕を永眠させてください。

614　本格的な侵入

あたし達は入り口らしき何かに突入するかで悩んでいた。
「どうする、千鶴姉」
「この三人で行くのは不安ね、ばれちゃってるから奇襲はもうできないし」
「一旦戻ろうか」
「それが賢明なようね」
と思ったら、怪しげなおっちゃんが後ろにいたわけよ。
「お前ら、何やってる」
「千鶴姉」
「わかってるわ」
「あ、おじさん！」
気の抜ける一言だったよ、どうやらこのおっちゃん、あゆの知り合いらしい。
「たまたまテメェを見かけたから来ただけだ」
「柏木千鶴です。私達、メイドロボと戦うはめになって……」
「あれぇ？　楓ちゃんのお姉さん？」
さらに話の腰を折るように女の子が二人出て来たりで。いったい何故こんなに人が集まるんだろうね。
「おい、この長髪の娘はテメェの知り合いか？」
「したぼくには特別に教えてあげるわ。楓ちゃんから伝言を預かってたのよ……今ではそんなに意味の無い事なんだけど。爆弾の秘密の事。あと私が楓のお姉さんに頼ると良いとも言ってたわ」
「爆弾は確かにもう私達には意味が無いわね。でも

ありがとう。私たちを探してくれたんでしょう？」
「雑談してるヒマがあるのか？　ここから突入するか考えてたんだろ。早くしねぇと相手の準備が出来ちまうぜ」
てなわけで図らずも援軍を迎えたあたし達は敵施設（と思われるところ）へと侵入したわけよ。

615　分断

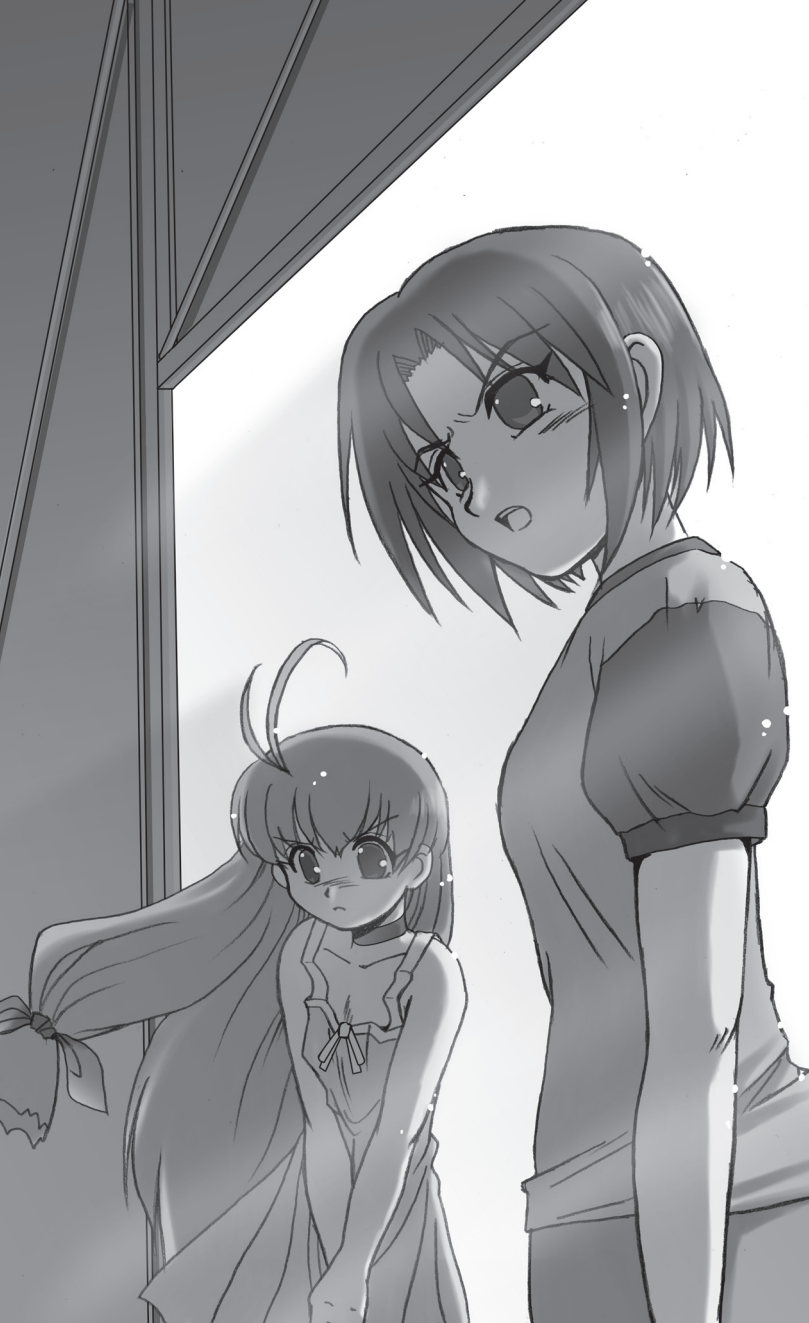
風が吹いていた。
さらさらと風の揺れる音だけが流れていく。
——静かだ。
森の中、仰向けに倒れたまま北川は思う。
右腕は、まだ痛い。表面だけ引き裂かれたかのような傷が、肘の上から手首まで広がっている。
表面は、とりあえずシャツで縛り直してある。
だが、当然ながら後々消毒が必要になるだろう。
傷口が腐るのだけは勘弁だ。
一応レミィが舐めた、と思いたい。
違う。
舐めたかもしれないが、それでは消毒にはならない筈だ。
気分的な消毒にはなったが。
鳥の鳴き声。
木々のざわめき。
そして——近付いてくる足音。
起き上がる。
咄嗟に、右手に握られた大口径マグナムを向けた。
北川が見たのは——ピンク色の触覚？
何だそりゃ。
「動かないで——」
がちゃり。
鉄の音。
触覚少女の手には、確かに銃が握られている。
突然撃つような真似はしないらしい。助かった。
正直、片手でこの銃が撃てる気はしない。

外して。その後、頭が吹っ飛ぶのが目に見えるようであった。
その上、だ。
「スフィー……？」
触覚少女の後ろから、声。なるほど、スフィーという名前か。後ろから、もう一人、少女が姿を現す。気の強そうな女の子。
しかし、赤く泣きはらした様な目――
おいおい、せっかくの美少女が台無しだぜ？　お嬢さん。
二人目の少女が、北川の存在に気付いたらしい。まるでウサギのような目を、きっ、と細める。その手に銃を握った。
デザートイーグルか――。
「誰よあんた――」
ひやりとした空気。
どうも、この娘はヤバそうだ。銃を向けているのは得策ではなかろう。

降参のポーズを取ろうとして――一度、止める。口を開いた。
「なぁ――両手を上げても撃たないでくれよな？」

「それで、お前も捕まったってわけか」
「捕まったとは失礼だな！　俺はお前みたいに縛られちゃいないぞ」
「似たようなもんだろ」
暗い空間。
湿気。カビくさい空気。
古びた小屋の中に、二人の男の姿が在った。
「あんだけ叫んで走ってってたのにな。いきなり捕まってたら世話無いな」
へっ、と皮肉げに、北川。
「こいつらが相手じゃなかったなら助かったんだがな」
憮然とした様子で、祐一。その両手は、未だに縄

で縛られたままだ。
祐一の台詞に、結花が睨み付ける。
「――うるさいわね。黙ってなさいよ」
「うるさくしたつもりは無いぞ」
「うるさいっつってんのよ。猿ぐつわでもかまされたいの？」
「良い趣味してるな――」
ゴッ！
「痛ぇ！」
「……やっぱ殺そうかしらこいつ」
「ゆ、結花……」
参ったな、といった様子でスフィーが口を開く。
どうもこの二人の相性は宜しくない。
口を開けば拳が飛ぶといった感じだ。
それは、北川がここに来てからも変わってはいない。
「はー……」
溜息をついたのは、北川。

もう一人の少女は、ただ、静かに佇むのみ。
近くにレミィの姿は無い。
――捕まった時に、それなりに仲間が居る事は主張した。
結果はこれだ――要は、信用できないという事だ。
武器も全て奪われている。
ある意味、正しい選択とは言える――
生き残りを賭けたゲームの中で、多数の来訪者を歓迎するとは思えない。
それに、万が一、敵であったとしても。
捕虜を使えば、生き残る可能性も増える。
だが。
――レミィ。
何処に居るのか。
あれから少し経ったが、彼女は北川が居ない事に気付いたのだろうか？
目の前の少女達は、また散策の為の準備を始めて

いる。
一応、レミィの事に関して触れておいた。彼女達が見つけてくれれば助かるのだが。
――まぁ、後はレミィが下手な事しなきゃいいんだけどな……。
その自信までは無い。
出るのは、先程スフィーと名乗った触角少女。
そして、滅多に口を開く事の無い、魔法使いのような格好をした少女。コスプレだろうか？
それにしても、北川はまだ彼女の声を聞いた事が無い。
――で。結局残るのが結花という名の少女である。
今のところ、北川は彼女に殴られた事は無い。
どちらかと言えば（祐一よりは）優遇されていると言える。怪我の為だろうか。
「じゃ、行ってきます」
「……」
準備は終わったらしい。少女達が、戸を開く。
明るい光が差し込んだ。眩しい。溶けそうだ。
「私は、こいつらを見張ってるから。大丈夫、下手な事はしないわ」
はは、と苦笑するスフィー。
そうして彼女は戸を閉めた。
差し込んでいた日差しが、消えた。

616　七瀬のないしょ

蝉丸と耕一は施設襲撃の作戦会議中であった。
「……む」
ペンで施設の近くの地形を描いていた蝉丸。彼の突然の反応に耕一は首をかしげた。
「どうかしました？」
「い、いや、なんでもないと思うのだが」
「……？」

よく分かんない人だな、と耕一。
蝉丸もよく分かっていなかった。
当然である。
——何故。
何故このような時に〝喘ぎ声〟が聞こえるのか。
随分と血を流したせいで、気の疲れでも現れたか。
それとも、本当に誰かが——。
——まさか、な。
空耳に違いない。
そう思うことにする。
蝉丸は、今も微かに聞こえる『その音』を無視しつつ地図を描き続けることにした。

しかし、気が散って仕方がない。

氷まくらの交換に来た七瀬は、扉越しに怪しい雰囲気を感知した。
激しい、物音。そして呼吸音。
(……ま、ままま……まっさいちゅー……?)
そうだ、これは……間違いない。
真っ最中、だ。
(ちょちょ、ちょ、ちょっと、何してんのよ……)
氷まくらを抱きしめて、顔を赤らめたまま呆然と立ち尽くす七瀬。
いつの間にやら近くに晴香が来ていることさえ気が付かない。
「七瀬？　何してるの？」
「は!?　ははは晴香!?　ななな何でもないのよ!?」
猛烈に慌てまくる七瀬。
「……何でもないって事ないでしょ。声裏返ってるわよ。普通に話しなさいよ？」
「い、いいから今すぐ立ち去るのよ！　乙女と明るい家族計画の名にかけて、ここを通すわけにはいかないわ！」
弁慶よろしく戸口の前で仁王立ちする七瀬。

「な、なにムキになってんのよ……（家族計画って何よ）」
「いいから！　行くわよ！」
晴香の背を押して、そのまま部屋を離れていく七瀬。
「文句があるなら選びなさい！　馬に蹴られるか！　アタシに殴り殺されるか！　あなたには二つに一つしかないのよ!?」
「ハァ？　……わかんないヤツね……（馬って何よ）」
憑かれたように捲くし立てる七瀬。
そして妙に興奮した七瀬が、晴香を突っ張りで外へと押し出した。
「ほらほら！　お風呂の準備中なんでしょ！」
「え、ええ……」
……氷まくらは、のぼせた七瀬が全て溶かしてしまったそうだ。

「耕一君」
「なんです？」
振り向くと蝉丸はこめかみに手を当て、首を振っている。
「済まんが場所を変わってもらえないか？　……疲れているようだ」
「ああ……構わないけど……」
「……む」
耕一の反応に蝉丸は首をかしげた。
「どうかしたのか？」
「い、いや、そうじゃないんですけど」
「……」
君も疲れているのだな、と蝉丸。
耕一もそう思っていた。
当然である。
――何故。
何故このような時に〝喘ぎ声〟が聞こえるのか。

変身後遺症のせいで、幻聴でも聞こえたか。
それとも、本当に誰かが――。
――まさか、な。
空耳に違いない。
そう思うことにする。
耕一は、今も微かに聞こえる「その音」を無視しつつ作戦会議を続けることにした。

しかし、気が散って仕方がない。

「……」
「(´ー`)……行ったわね」
七瀬たちと入れ替わるように扉に立つ少女が二人。マナと、月代。期待に目を輝かせて、戸口に張り付き、覗いてみたりする。
「わ……」
「(゜Д゜)……」

思わず言葉を失う。
再び声を取り戻すのには、たっぷりと時間を要した。

「す……進んでるわね……」
「(´Д`)負けた……」
その頃には、激しい敗北感に苛まれていたという。
微妙なお年頃、である。

「蝉丸さん」
「どうした？」
振り向くと耕一はこめかみに手を当て、首を振っている。
「すみませんけど、また場所を変わってもらえないでしょうか？　……疲れてるみたいなんで」
「……」
「あの……蝉丸さん？」
「……」

……軍人は、冷徹だったという。
「外から見た感じだと施設はこれぐらいの大きさだと思うのだが」
会議は進む。

617　侵入

メイドロボたちが出てきた、換気口の偽装岩の下で。あたし達は怪しいおっちゃん率いる、怪しい一団と遭遇した。このおっちゃん、あたしを負かすほど強いんだけど……何度見ても怪しい。
まず、いきなりここに現れたのが怪しい。
次にツレの動物達が怪しい。
とどめに顔が、何より怪しい。
「う、うるせえぞ女！」
あ、ごめんごめん、声に出してたよ。
さて。御堂と名乗る、このおっちゃんに監視がついていることを考えると、出入り口付近に腰を据えて、あまつさえ口論するのは、あまりに危険な行為だった。
だからあたし達は、おっちゃんの言う通りにさっさと入り口へと突入したんだ。もともと換気口なだけに、通路は急で……というかすぐに垂直になっており、備え付けの梯子を使うため仕方なく、いや幸いにして、怪しい動物達には外で待機してもらうことにした。
梯子の前で、全員が輪になって立ち止まる。迷うことなく先頭を買って、おっちゃんが降りようとする。
「待ちなよおっちゃん」
「なんだ女」
忌々しげに凶悪な表情で睨みつけてくる。いや、これが普通の顔なのかもしれない。
「とりあえず、おっちゃん最後な」
「なんでだ」
そう言って恨みの篭ったような、不服そうな顔を

する。いや、これも普通の顔なのかもしれない。
口論するのも無駄なので、スカートのすそを軽くつまんでヒラヒラさせながら説明してやる。
「あたし達の服、スカート短いんだよ」
「したぼく、スケベ」
「人間として最低ね」
「ぐ……くっ……しししし仕方ねぇ、後詰めは俺が、やってやる」
おっちゃんは怒りからか照れからか、顔を赤くして折れた。いや、高血圧なのかもしれない。
そして……詠美に、繭。おっちゃんの連れ二人とは、気が合いそうだった。

虎の子であった、戦闘用HM―12の最期。
源五郎は、もはや何も映しはしないモニターの前で、倦怠感に身を苛まれていた。警護のメイドロボ二体に維持を任せ、放心したまま長らく座り込んでいる。

……何度か通信が入ったが……メイドロボに休息中と言わせて居留守を使った。

「なんと、裏から御堂か……これまで、かな……」
先ほどレーダーが御堂を捉えた。当然通気口にカメラなどないが、三体のメイドロボからの返事がない事を考えると、おそらく御堂にやられたのだろう。
明らかに現状が芳しくないことは理解しているが、何もやる気が起きなかった。廃人のように動かぬ主人に対し、メイドロボは普段と同じ調子で、淡々と現実を述べる。
「正面口から侵入者です」
「……何？　誰だ？」
さすがに源五郎も、乏しい気力を振り絞り、重い重い腰を上げた。端末を変え、施設入り口のカメラ画像をオンにする。
「……生きていたのか……」
醜く鼻血を滴らせたまま、よろよろと這いずる長

瀬源三郎をモニター越しに確認すると、源五郎は大きく溜息をついた。入ってくればいいと言った手前、何もしないわけにもいかない。
……今の状況で入ってくるのが、助かる道とも思えないのだが。
「キミは入り口まで行って、手を貸してやり給え。それからキミは医務室からキャスター付きのベッドを運んで、迎えに行ってくれ。治療を終えたら戻ってきて、維持作業を続けるように」
メイドロボ達へ簡単に指示をすると、再び源五郎は座席に沈み込んだ。

空気の通り道は、人間の通行を優先して考えてはいない。足場は悪く、道は暗い。巨大なファンの隙間を抜け、何枚ものフィルタの脇を通り、ようやくあたし達は人間用の通路に入ることができた。
遠くから風の音が、奇声のように耳に貼り付く。そのシリアスな共鳴音に混ざって、怪しい動物達の妙な鳴き声も、かすかに聞こえる。
(ぴこぴこ～……)
(しゃー……)
(クワァ……)
(にゃー……)
(敵陣突入のＢＧＭがこれだなんて……っていうかドナドナ？)
隣で千鶴姉もコメカミに手を当てている。
「ふみゅーん……埃だらけじゃないのよぅ」
上で詠美がこぼしている。あゆの「うぐぅ」といい、おっさんのツレは、変な口癖の娘ばっかりだ。ちょっと同情してもいいかもしんない。
隣で繭が、あたしと同じようにあきれ顔で上を見ている。
……まともなのも、たまには居るようだ。いや、ホントにたまたまだろうけど。

施設に注意を戻す。

……どうやら、人の気配はしない。千鶴姉と二人で、少し周囲を窺ってみたけれど、人影はない。危険がないのを確認し、みんなの所に戻るのと、おっちゃんが降りてくるのは同時だった。
「あらよっ、と」
音もなく着地するやいなや、おっちゃんが感心したように口を開く。
「それにしても……幽霊が三人とは驚いたな。結局のところ、一体どういう仕組みだったんだ？」
あたしではなく、千鶴姉の方を向いていた。
「そういうあなた方こそ……詠美ちゃんは、一体どうしたんです？」
全員ぞろぞろと歩きながら、千鶴姉も不思議そうに尋ねる。おいおい千鶴姉、おっちゃんと普通に話してるんじゃないよ。おっさんが感染るよ。
「ああ、こいつゲロ吐きやがったんだよ。たぶんそん時に発信機みてえなモンを吐いたんだと思ってるんだが……」
廊下の角で警戒しながら、おっさんは小声で答える。なんだ、おっさんのくせして、意外と切れるじゃないか。感心したよあたしゃ。
誰もいないのを再度確認し、千鶴姉とおっちゃんは情報を交換しあった。そういや千鶴姉は、地元の会合でおっさんの相手をするのが実に上手かった。オヤジ殺しってやつなのか。耕一もおやじ臭いし、つじつまは合う。
「さっきから、うるせえぞ女っ！」
「あ、梓！　一言余計でしょ！」
あ、ごめんごめん、声に出してたよ。
「おい千鶴さんよ……一言だけなのか……」
おっちゃんが悲しそうな顔で千鶴姉に尋ねる。いや、お腹が痛いだけかもしれない。
「現実は、厳しいものよ」
ああ繭、あんたも厳しいね。

いつしか千鶴姉とおっちゃんの情報交換は、状況

「お前ぇが、いなけりゃな……」
あ、ごめんごめん、声に出してたよ。
「ねえ、したぼく。これ何よ？」
そこで詠美が何かを発見する。
「げぼくだ」
「げぼくね」
おっちゃんと繭が訂正する。
「……下僕じゃねえっつうの！」
自分で訂正しながらおっちゃんが逆ギレしする。
〝下僕〟のことなんだね、と理解しつつ長くなりそうなので、途中で間に入る。
「あーはいはい、訂正はいいから。千鶴姉、おっちゃん、これ配電盤じゃない？」
巨大なパネルには、いくつものスイッチ。電球が点灯しており、機能していることを示していた。全員で、食い入るように配電盤を見つめる。医務室、倉庫、マザーコンピューター、ＨＭ給電所、冷蔵室

予想に変わっている。
「……じゃあ何か、コイツ吐いたはいいが即バレちまってるかもしれねえのか」
千鶴姉の予想と経験に対して、いくつか質問したあと、おっちゃんは締めくくりに尋ねた。
「はい……想像の域は出ないんですけれど。杞憂でなければ、たぶん擬死だとばれているでしょうね」
「ははは、空からの監視に対して杞憂とは、上手い物言いだな」
おっさんが笑う。無気味な笑いだ。
千鶴姉は、さらりと流して答える。
「そういうわけで御堂さん。ここから出る時は、お先にどうぞ……わたし達は後から出ますので」
「ああ、解ってる。だが残念だな。知り合いを除けば、この島に来て出会った相手と、初めてまともに話せた気がするぜ……」
やるな千鶴姉、おっちゃんの信頼をゲットだ……オヤジ殺し、おそるべし。

……いくつか気になる名前がある。
部屋数から推測するに、施設自体は小ぶりなようだった。隣にある施設見取り図に興味を移し、場所を確認する。純然たる軍事施設ではないのだろう、兵士の詰め所のようなものは見当たらなかった。
『第四通気口換気扇』のランプが消えているのを、あゆが発見する。
「さっき通ったの、ここかな?」
そう言ってスイッチに手をやるあゆを、おっちゃんが制止する。
「コラ待てってて。獣どものところに戻れなくなるだろうが」
凶悪な顔に似合わぬセリフを吐いたりする。
「おじさん?」
あゆがニコリと笑って、おっちゃんに話し掛ける。
「なんだガキ」
「おじさん……やっぱり、やさしいねっ」
「う……うるせえっ!」
おっちゃんがそっぽを向く。
なんてことだ! あゆはオヤジ好きなのか!?
そういや廊下に降りてからずっと、おっちゃんにベッタリだ。
……あゆ。怪しいオジサンについて行っちゃダメだって、ガッコで習わなかったのか?

618 疑う事、信じる事

「あ、あのっ!」
その声に、互いの動向に最大の注意を払っていた住人と少年、二人に目を奪われていた晴子、郁未が一斉にその声の主を見た。
静寂を破ったのは――観鈴だった。
一斉に反応した全員に、観鈴は驚いたが、言葉を続ける。

「あ、あなたがたは、やる気になってるんですか？」
少し言葉を詰まらせ、手足を震わせながら観鈴は聞いた。
「観鈴！　お前はだまっ――」
「往人さんは黙ってて！」
声を大きくし、観鈴が叫ぶ。
その声は、この島に来てからに来てから――いや、普段の生活でも全くといっていいほど声を荒げない観鈴の大声だった。
――前にも聞いたな、今の観鈴の言葉。
その言葉を聞いた往人は、何故か反論できず、一瞬、そんなことを考えていた。
「どうなんですか？」
もう一度、観鈴が聞く、今度は、ハッキリと。
「え？　あ、うん。一応、やる気にはなってないよ。僕も、横にいる――天沢郁未って人も。君達は、どうなんだい？」
少年は答えた。顔に明らかな戸惑いを見せながら。
当然だろう。
この緊迫した状況で、そんな質問を出来る人間など、そうは居ない。
「私達も、やる気にはなってません」
もう、観鈴は震えてはいない。
凛とした表情と、しっかりした声で観鈴は言い切った。
「だからって！」
再び新たな声、その主は――郁未だ。
「ハイそうですかって、簡単に信用できると思っているの？　お嬢ちゃん」
少年はともかく、郁未からは、観鈴への猜疑の視線が露骨に現れていた。
(まあ……当たり前か)
往人は思う。
誰だってこんなとこじゃ、人を疑ってしまう。

他人を信じられない。信じることが出来ない。
（お袋のときがそうだったな。俺を信用させといて、どっかに行っちまった。思えば、あの時から、俺はこんな性格になっちまったのかもな）
更に、思う。
（だから、俺は心から誰かを信用できない。誰かを信じて、裏切られるのが怖いんだ）
それは、往人の心の中にある悲しみ。
深く、深く、彼に根付いたもの。

そんなことを考えている時、郁未の声が往人を現実に引き戻した。
「大体あなただって、銃を持ちながらそんな事言ったって――」
「なら、これでいいんですか？」

ヒュッ！

その瞬間、その場にいた全員が目を見開いた。
観鈴が持っていたシグ・ザウエルショート9㎜を郁未に投げ渡したのだった。
それは、この状況では最も無謀な行為。
相手に殺してくれと言っているようなものである。
だが観鈴はそれを躊躇いなくやった。
「観鈴！」
ベネリM3を少年と郁未に向けつつ、往人は観鈴に近寄った。
「バカ野郎！　お前、自分が何したかわかっているのか!?」
往人の大声が周辺に響き渡る。
「ちょっ、ちょい居候！」
近寄った晴子が往人をたしなめるが、そんな言葉は往人の耳には入ってはこなかった。
「さっきもそうだ！　お前一人のせいで、みんな死ぬかもしれないんだぞ！」
観鈴は黙っている。

「大体お前はお人よし過ぎる！　そんなんじゃいまに――」
「往人さん」
観鈴がいきなり往人の言葉を遮り、
「人を信じなきゃ、ダメだよ」
まっすぐに往人の目を見ながら、言葉を続ける。
「往人さんの言ってることは正しいと思う。それが、ここでは当たり前かもしれない。でも、私はそれだけじゃダメだと思う。みんなで生き残るんでしょ？だったら、そんな風に疑ってばっかりじゃ、誰も仲間に出来ないよ。みんな死ぬのが怖いんだよ、私だって怖い。死にたくないもん。殺しあうのだってそう。本当はみんな弱くて、他人を信用できないだけ、だから殺しあっちゃうんだよ」
急に、往人の体に重みが加わる。観鈴が抱きついてきたのだ。
「だから、もっと信じてみようよ、この人達も、他の人も」
「みすず……」
「みんなで帰ろうよ、あの街に。ね？」
「ああ……」
往人は強く頷く。
往人は、もう少年と郁未を見ていなかった。
その時、少年も戸惑っていた。このゲームであんなことを言える少女に。
（あれが……本当の強さってやつなのかな？……）
ふと、そんなことを思う。
力では決して、得る事の出来ない強さ、それが、観鈴にはあった。
それは少年と郁未に、足元にあるシグ・ザウエルショート９㎜を忘れさせるものだった。
しかし、それに気付いた郁未が銃を拾い上げる。
「やめ――」
「わかってるわよ、もう向こうに敵意がないことぐらい」

いくらかふてくされた様子で郁末は三人を見る。
「ちょっと！　そこの三人！」
何故か機嫌が悪い、郁末であった。

「居候！」
「ん？」
観鈴と抱き合ったままの往人に晴子が声を掛けた。
「どアホ！　いちゃついとる場合か！　前見い！」
「しまっ……」
今の状況を思い出し、慌てて二人の方を向いた。

ベキッ！

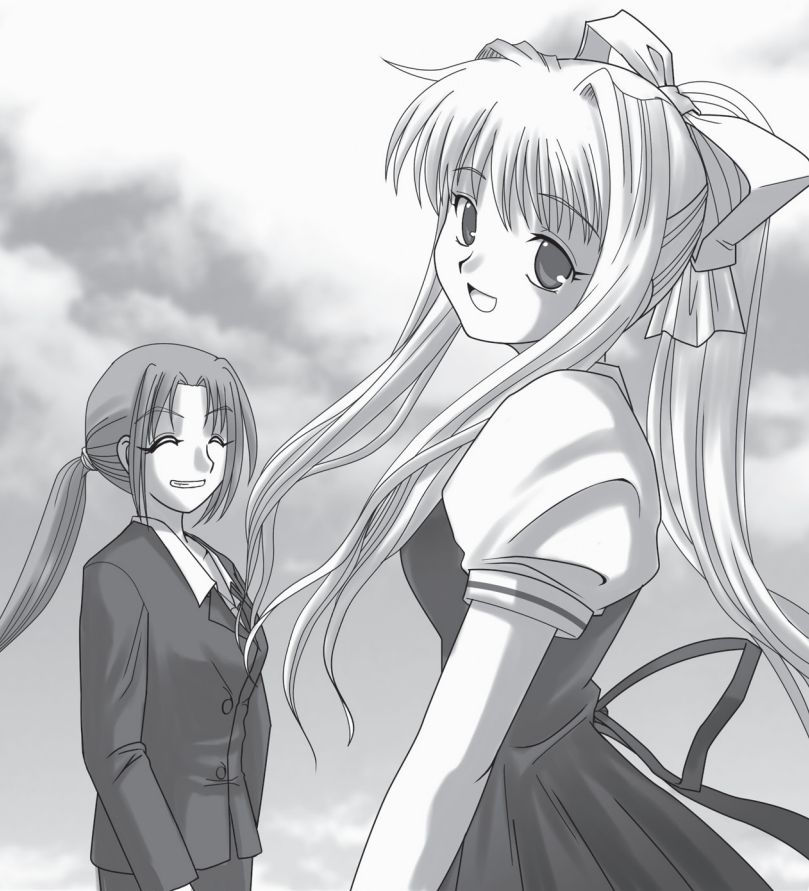
ちょうどタイミングよく、往人の顔に黒い塊が直撃した。
「痛う……くそう！」
往人は痛みをこらえつつ、二人の方にベネリＭ３を構えた。
「アホ、よく見てみい、向こうサン、とっくにやる気はないで、ウチが前見いって言ったのは、投げ返された銃に気をつけろってことを言ったんや」
「なに……」
よく見ると落ちている銃は確かに観鈴が投げた銃だ。
当の二人はというと。
「ひどいですねぇ国崎サン、投降した相手に銃を向けるんですか？」
「ったっく！　イチャイチャしてるからせっかく投げ返してやった銃にあたるのよ！」
とっくに手を挙げていた。
つまり——降参ということである。
「ね、往人さん、向こうも分かってくれたでしょ」
（……なんか……釈然としないな……）
往人にしてみれば、観鈴のぬくもりを感じている間に、気が付くと二人が手を挙げていたのである。

納得しろという方に無理がある。
「とりあえず二人とも手、下げや」
何故か晴子までもが納得していた。
（観鈴のおかげ、か）
結局、そう自分に言い聞かせ、心の中の自問自答を終わらせ、二人に声を掛けた。
「晴子の言う通りだ。とりあえず手、下げていいぞ」

619　漢と乙女の狭間で

（まさかあそこであんなことをしていいらっしゃいますましとは！）
かなり日本語の扱いかたを間違えた七瀬がここにいる。
漢字のテストで満点を取った美少女の言動ではない。……あれは、カンニングしたのだが。
（ええっと彰くんはあれはアレで大丈夫そうだから……。よ、葉子さんの介抱を……。そう。……そう！　私の乙女として怪我人の介抱＆手当てを‼）

ポーーーーーーーーー……

「やっぱり綺麗ね……。葉子さんって……」
ベッドに横になっている葉子を見て思わずもれた。
七瀬が目指す乙女とはちょっと違うかもしれないが、なんというか『お嬢様』としての美しさがある。
気品に溢れていると言えばいいのだろうか。女の七瀬でも見とれてしまう。
しかし、あの気の強そうだった女性が可愛い寝顔で横たわっている。
表情は……。傷が痛むのだろうか時々うめく。そして汗を結構……。
七瀬は持ってきていたタオルで葉子の汗をぬぐい始めた。
（なんというか、怪我して動けない女性を献身的に

介抱？　これこそ乙女のなせる技よね！）
上半身をはだけさせて拭くときは、流石にちょ～
とだけ照れる七瀬。
ふとさっきのことが頭をよぎった。
彰君が初音を無理やり押し倒す。
（いや、同意があったみたいだから無理やりじゃないんだけど……。弱い立場の女の子を押し倒すっていうか、悪戯っていうか～それはやっぱりまずいんじゃないかな～。てっ……て……っていうか、なんであんなことしてんのよ！）
彰が初音を強引に押し倒している情景を想像してみる。
（いやそれはそれで嗜虐心がくすぐられる……かな……？）
ちらりと葉子を見る。
ぽーーーーーーーーー……
（はっ!?）
「だめーーーーーー！」
七瀬、小声で絶叫する。
「ど……どこにこんな乙女がいるのよー!!
ダメダメ！　普通が一番。そうよ……！　普通が一番なのよー！　やっぱーあたしぃー普通の乙女みたいなー！　うわっ、これ超かわいくない？　ちょーかわいいモジャー！」
「ん……ふぁ……」
葉子は暗闇の中を走る。追われているというのに自分には武装のひとつも無い。
「足が止まっているぞぉ」
パァン！
音と同時に足元に着弾した。
驚きでバランスを崩し倒れる。
高槻は、高く、高く笑った。そして、言った。

「服を脱げっ！　ストリップだ！」
「ふ、ふざけないでください！　そんな事」
パァン！
仰向けに体勢を直した葉子。
その顔のすぐ横に着弾。
「――まあ、良い。どうせお前は無力だ。強引に犯して殺すのも一興だ」
高槻が上にかぶさってくる。
葉子が固く目をつむる。

自分の脚をなでまわしてくる男の手。
(あれ？)
サワッ……
(気持ち悪くない……)
ゆっくりと目を開ける。
目の前の男が高槻ではなくなっている。
葉子にも良く分からない。良く分からない『やさしい誰か』に脚を撫でられている。

(なんか良くわかんないけど……。気持ちいい……)

「ん……あ……」
ふきふき……。
「んっ……」
ふきふきふき……。
「あ……あ………」
ふきふきふきふき……。
葉子の脚の汗をふき取る七瀬。
拭くたびにかえって汗が出てきている気がしないでもない。
「葉子さん……。これじゃきりがないわよ……」
「やっ……あ……」
葉子の目が開かれる。
ぽーっとした半開き状態で七瀬を見つめる。頬は赤い。

（！！！？？？！！？！？）
ドタンッドカシャカシャカシャカ‼
七瀬はベッドから勢い良く転げ落ちると、しりもち体勢のまま部屋の入り口まであとずさった。
（絶対違う！　今、絶対乙女じゃないことしてたーーーーー！）
「よよよ葉子さん起きたのね意外と元気が出たみたいだし良かったわねあたし皆に報告してくるね！」
ガチャッバタン！
そこにいたのは元凶っぽい男、七瀬彰。
「あ、な、七瀬くん、お、起きたのねっ！」
リビングルームになだれ込んだ七瀬が言う。
「わ、わ、割と、元気そう、元気そうじゃない？よ、よ、良かったー」
（落ち着けー、落ち着けあたし。落ち着かないと性格が乙女じゃない方向にっ……そう、落ち着くの。落ち着いて冷静さを取り戻すことこそが天上界への扉を開くカギをうんたらかんたら）

「風呂できたわよ」
「うむ……それでは女性達に先に入ってもらうとしよう。念のため複数の方が良い。最初は……晴香君と留美君で入ってくれ。月代たちはあとで三人だ。見張りは俺達がするから。後ろは気にしなくていい」
（え……）
「落ち着けない……」
――「乙女」と「漢」はよく似てる……――
――だがそんな事はどうでもよかった……――

620　僕たちの失敗――花咲く旅路

私が水汲みから戻ってきたとき、ジュンの姿はそこになかった。荷物は山賊に荒らされたかのように、ことごとくひっくり返されてめちゃめちゃにされていて、私が覚えている限りの武器や食料も持ち去られ、ただもずくの山だけが散らばっていた。気がつ

くと私の腕から川で汲んできたペットボトルの容器がどさどさっと落ちて、緩く栓をした一本から流れ出した水が私の足元を濡らしていた。
　靴下の中に入り込んできた水が、どうしようもなく気持ち悪くて、嘔吐しそうになった。
　こうして、私の財産は釘打ち器ともずくとＣＤだけになった。他には何も、誰もなくなってしまった。
　どういうことだろう。手に入れたいと思ったものはいつだって、手の間からこぼれ落ちる水のように消え落ちてしまうだろうか。
　私のような人間は事実を認める事に対してただ臆病で無力だ。そしていつまでもこだわり続けて自滅してしまうのだろうか。いくら考えても答えが出そうになかった。

　だから。

　だから、今、この場限りで欲しい欲しいと指をくわえて身体を震わすことはやめにした。そう思うこともやめにした。
　私がジュンに言ったことを彼はまだ覚えているだろうか。あの時私は大変な思い違いをしていたのだと思う。あの麦藁帽子が本当に欲しかったら、谷底に飛び込んでつかみ取ればよかったのだし、本当にヒロユキを求めるのならば、すべてをかなぐり捨てて彼を探せばよかっただけなのだ。
　結局、麦藁帽子は谷底で朽ち果て、ヒロユキは心の底から彼を求めて愛したアカリと一緒に、私がいくら手を伸ばしても届かない場所に旅立った。
　そう、おそらくアカリは手に入れることができたんだと思う。彼女はこの世でたった一つの大切な物を手に入れて死んでいったのだと思う。あの笑顔は本当に自分が手に入れたかった物をつかむことのできた人間しかできない笑顔だった。

　私は現在日本の高校生をやっているけれども、髪

はブロンドで瞳が青いハーフだ。マージナルマンの私が浴びる無数の好奇の視線。その度に嫌な気分を味わい、目を閉じて顔をそむけてきた。相手との距離を計ることばかり考えて、辛い思いをしてきた。

だから私は家を出るとまず自分を薄い膜で覆っていた。その膜は半透明で、誰にも見えない。私にも見えない。ただ、私だけがその存在を感じ取る事ができる。この膜だけが今のところ、私を守るすべてだ。

この膜は、いわれのない悪意や、押し付けがましいだけの善意や、そしてくだらない失敗から守ってくれる。それは文字通りの境界だ。ブロンドの髪と青い瞳を持つ〝ニッポン〟の高校生の私にとってそれがどれだけ役に立ったか分からない。

けれど、ときおりこの膜は縮んだり伸びたりして私を必要以上に大きく見せたり小さく見せたりする。そして様々な形をとって私を翻弄する。だからずいぶん得もしたけど損もした。

もしかしたらこの膜はすべての人が持っているのかもしれない。私には見えないからそれがわからない。もしヒロユキやアカリやジュンがこれを持っていて、そしてもう少し上手な使い方があるのなら、是非とも教えて欲しかった。私にはそれが必要なのだ。

けれど、私の周りには誰もいなかった。

だから、私は走ることにした。

ラジオでヒステリックにがなり立てるユースクエイカーのように、私はジュンの名前を何度も何度も叫びながら走った。足が地面につく度に、水を吸い込んだスニーカーの中がぐちゅぐちゅと不快な音をたてたけど、私は気にしないで走り続けた。草が深くて何度も足を取られそうになったけど、私は走り続けた。

走って叫んでいると、目が堪らなく熱くなって、やっぱり熱いなにかがこみ上げて来て走るのがとて

も辛くなったけど、私は足を止める事をしなかった。
　ジュンを探し出して、私が必死で考えたことを彼に伝えることができたとき、そして彼が私を抱きしめてくれて、頷きながら私の話を聞いてくれたときにはじめて、今まで私の心を捕らえて離さなかったあの麦藁帽子も、きっとまた私の所に還ってくるのだと思う。
　その時私は、本当に求める物を手に入れられるのだろう。

621 北川シリアスモード

「なぁ、北川」
「何だ、相沢」
　突然相沢が声を掛けてきた。
「腹、減らないか」
「そうだな、確かに腹減ったな」
　そう言えばこの島に来てからほとんどもずくしか食っていないような気がする。
「お前何か食べ物持ってないのか？」
「あいにくと持ち物は全て没収されちまった」
「そうか」
　全く縛られているのに食欲が沸くなんてこいつは大物だな。そんなことを考えながらも俺はレミィの事が気になっていた。
　果たして無事なんだろうか？
　殺人鬼が蠢くこの島に彼女を一人にしてしまったことは俺の人生最大の失敗だったと言えるだろう。

　崖の上から降ってきたヤンキー。
　それがレミィ・クリストファー・ヘレン・宮内(通称ガルベス）だった。
　俺の支給品のもずくをむさぼり食われたよなぁ。
(もっとも俺一人では到底食いきれなかっただろうが)
　まぁ、それでも彼女の天真爛漫さに救われていたのは事実だ。

突然殺人ゲームに参加させられて期待して開けた荷物はもずくだった、これでへこまない人間はいないのではないだろうか。
彼女と出会えたことによって少しだけ不安が解されたことは間違いないことだった。
それからはレミィと一緒に行動していた。
そしていろんな彼女の姿を見てきた。
『おかあさんといっしょ』の事でからかったら泣き出してしまった。あのことは北川潤、一生の不覚であると言える。
婦女子を泣かせてしまうとは男の風上にも置けない行為だった（勿論風下にも置けないがな）。親友が死んでしまったと、彼女が知ったときの事は今でもはっきりと覚えている。
悲しそうな声、悲しい決意をした顔。
そう、あの時からだろう、
彼女のことを意識し始めたのは。
レミィに恋愛感情を抱いているかどうかは正直分からない。
ただ、守りたいと思った。
守ってあげたいと。
俺は香里の事が好きだった。
それでも告白することすら出来ず側にいるだけで満足していた。
でも、香里は死んでしまった。
このクソッたれなゲームに巻き込まれて。
結局俺は香里の事を守ることすら出来なかった。
だからこそ俺はレミィの事を守りたいと思った。
香里を守れなかった分まで。
だが、結局俺は彼女のことを一人にし、俺は相沢と一緒に捕らわれている。今の俺に出来ることと言えば、ただ彼女の無事を祈るだけだ。
なんて無様な。
これじゃ香里の時と同じだ。
俺は心底自分のことを情けなく思った。

「おーい、北川。何ぼーっとしてるんだよ」
「何騒いでるのよ」
「いや、北川の奴があっちの世界に逝ってるから呼び戻してるんだよ」

622　偽善

少し前までは強かった風も、今では弱い。
それに流れていくように、何かの音。
土を掘る音。
木々の向こうに、木の棒を持った二人の男。
三人の女の姿がその向こうに。
そして——死体は彼らの隣に。
「これくらいかな」
そう呟く少年の手に握られているのは、先を尖らせた木の棒。
先端は土にまみれて茶色く染まっている。
「墓と分かれば良いだろう。わざわざ、こだわる必要は無いな」
同じく土にまみれた棒を放り捨てる往人。
額が汗に塗れていた。
少年は、棒を捨てると遺体を抱え上げた。
祐介。その目は既に閉じられている。
続くように、往人が少女の遺体を持った。
大きめの穴が一つ。その中に、下ろす。
寄り添うように眠る二人——
少年は、目を閉じた。
——黙祷。

「——偽善、だな」
少しして、往人の言葉に少年が目を開けた。
「自分が殺した奴の冥福を祈るのか？」
「——」
非難じみた言葉。
——実のところ、己への皮肉でもあった。

人の事は言えない。それは往人自身が分かっている事だ。己の為に——或いは、誰かの為に、何度か人を殺めた。
躊躇った事は無い。
ただ、それでも——
自分が殺した者の姿に。
死に際の、悔恨を残して逝く者の姿に。
——〝情け〟が顔を見せた事があった。
それは、偽善だ。
そんな自分への憤りが、不意に顔を表しただけの事。
八つ当たりに、過ぎない。
「——確かに、偽善かもしれない」
目を開けた時のままの顔で、少年は返す。
「僕が墓を作ったところで彼が喜んでくれるとは思わないよ。それでも、僕は——。何も思わずに殺せるやつには、なりたくないからね」
「…………」

そんなものは、エゴだ。そう言い切ってしまう事は出来た。
だが。
往人は、口を開かなかった。
開くことが、できなかった。
少年は、墓の横でしゃがみ込むと、祐介の手を握る。
少し離れてしまった、二人の手を、繋ぎ直す。
——その時。
何となく、祐介の顔が、笑ったように見えた。
「これからどうするかでも決めておくか？」
近くに置いたベネリM３を拾い上げながら、往人。
「五人も居るんだ。何か出来る事くらいあるんじゃないのか」
「——そうだね」
偽典を拾い上げ、少年が返す。
その足で三人の居る所に向かった。

――途中、振り向く。
「さっき、君は」
往人も足を止めた。
「僕が目を閉じている間に――目を、閉じていたのかい？」
「――」
数秒、沈黙。
止めていた足を動かした。
答えは、無い。

623　心の傷の行く先は

昼間っから、風呂など頂いてみたりする。風呂上がりにはキンキンに冷えたビールが最高っ！　……じゃないわ。乙女なわたしにはフルーツ牛乳あたりがお似合い。
こんなささやかな娯楽でも、この島では最高の贅沢なのかもしれない。ドラム缶を湯船に使っているので、なかなかに恐ろしいのが珠に瑕だけど。
この島に来て以来……いや、瑞佳が倒れて以来、これほど安心できたことは無かったと思う。鼻歌なんか歌いながら、あたしは薄汚れた愛用の制服をたたみ、タオルを服代わりに裸足でぺたぺたと歩く。
小さな手ぬぐいで、可能な限り汚れを落とし、短くなった髪を洗う。
いよいよ湯船を攻略よ、と気合を入れて立ち上がり、おろした髪を上のほうに無造作に束ね……
……束ねようとした手が、空を切る。
そうだ。今では、お風呂に入るたびに髪を上げる必要もない。洗ったばかりでありながら、自分の〝変化〟を忘れている。けれど、忘れていた〝変化〟を思い出せば、喪失感が身を包む。
ためいき、ひとつ。
……そんなちょっとした喪失感は、実際失ったものと比べれば微々たるものなんだけど。

足の指先で、ちょっと行儀悪く具合を確かめて、すとんと湯につかる。暖かさが、疲れた身体に染み入り、思わず、はあっと息をつく。

そのとき、お隣さんから声がかかった。ようやく口を開いたな、と思った。

「ねえ、七瀬」

特に何の感動もなく、黙々と作業を進め、先に湯船に到達していた晴香。無表情に何かを考えていたのは、解っていたから。

「……なあに？」

だから誘うように、意思を込めずに促してみる。

「あたし……ここを離れようと思うの」

「え……」

ざば、と音を立てて、晴香は湯船から上がる。珍しく視線を合わせず、迷いもあらわに晴香は呟いていた。

——ここを離れる？　それは、蝉丸さんや耕一さんたちの庇護の下から離れる、ということだ。それほどの危険を冒して、一体どうしようというのか。

「潜水艦。……あなた、信じてるんでしょう？」

息が止まる。

だから無理をして、大きく息を吸い、そして吐く。

あの高槻という最低な、そして極めて憐れな人間の、最期の言葉——の、ひとつ前。

『潜水艦が、この島の付近の何処かにある筈だ。それを、捜せ』

その言葉を、思い出してみる。

ええ。

あたしは、信じている。

だから、晴香の目を真っ直ぐ見て、答える事ができる。

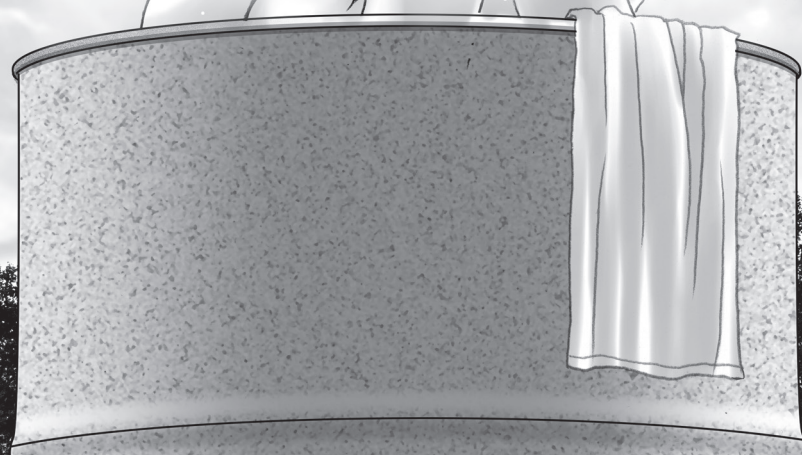
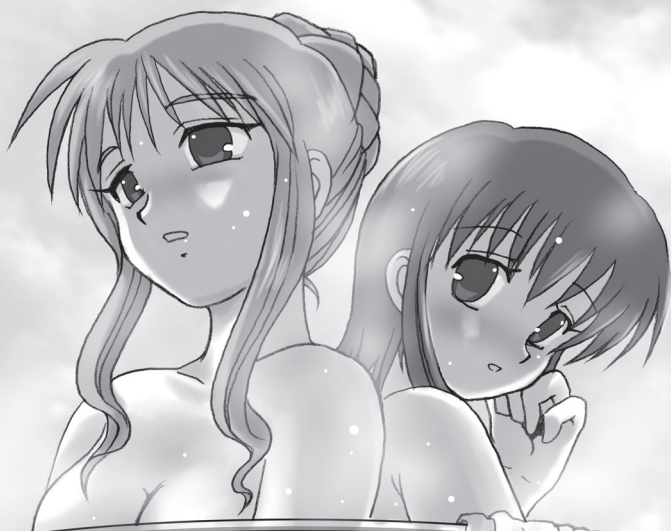
「信じて、いるわ」

しかし返ってきたのは、意外な答だった。

「あたしはね……信じていない」

「……」

だったら、何故？
その疑問を、慌てて飲み込む。今は晴香の言葉を待つべきだ。
「あたしの……人生は。あたしの人生は、高槻という男ひとりに踏みにじられたようなものだから。ここに来る前も。ここに来てからだって、そうよ」
悲しみと怒りが、複雑に交じり合った、暗い感情がくすぶっている。
「あたし自身の純潔。ここで出会った仲間。ここに来る前からの仲間。あたしは高槻のために、たくさんのものを失っているのよ」
ああ……なんということだろう。
最初の放送から、何かの因縁があるだろうということは解っていた。
――しかし、ここまでとは。
あたしはしばらく言葉もなく、ただ晴香の告白を聞いているだけだった。ようやく言葉が切れて、あたし達は目を合わせる。

「だったら、何故？」
溜めていた言葉を放つ。ちょっとした間があいて、返ってきた答は、これまた意外だった。
「七瀬……あなたを、信じているのよ」
晴香は照れ臭そうに、そっぽを向いて誰に言うともなく、さらりと風に流した。
――全て、解った。
高槻や主催者への憎しみも。蝉丸さんや耕一たちと、あまり話さないのも。少しはましとは言え、他の女の子達と話したがらないのも。
心の傷の……全てが、見えた気がした。
眩暈がする。長湯をしすぎたかもしれない。そんな関係のないことを思いながら、あたしも湯船からあがり、返答を待つ。
晴香の隣までぺたぺたと歩いた。
「……解った。一緒に、行こう」
手をさしのべると、晴香がそれをガッチリ掴んで言う。

「七瀬……ありがと」
なんだか湿っぽいな、そう思ったから。
あたしは、にっこり笑って付け加えた。
「これで貸し借りなし、よ？」
たぶん、余計な一言だったけど。
……二人笑えたから、それでいいじゃない？

癒えない傷など、ありはしないのだから。
今はこれで、いいじゃない？

624 奴

「あ、長瀬様」
管制室に入った途端に、兵士たちの声と視線が俺に集中する。軽い目配せでそれに応え、部屋の中央に用意された椅子に深く腰掛ける。正面を向くと、目に入ってくるものは、モニター越しの島の風景。
森、草原、住宅地。川に海、時折参加者。時折死体。
そう、ここは監視施設。
この島全体に設置された無数の監視カメラの映像を、全て映し出している唯一の場所。
……全く。よくもまあ、これだけのものをわざわざ用意したものだ。改めてそう、思う。
自分も含め、本当に我々は気狂いの集まりなのだ、とも。
下に降りて来て、その思いはいっそう強くなった、とも。

俺が下に降りてきた理由は、「体内爆弾を爆破させることはもうないのだから、参加者どもの反乱で減った兵士の分を手伝ってやってくれ」といったもの。
勿論それは単なる建前で、実際のところは、御老にしつこく反抗した俺や源一郎の存在そのものが疎ましかったのだろう。

手元に置いておいては、いつ反乱を起こすか分かったもんじゃない、と思ったのかもしれん。御老にとっては、俺はこの地上で参加者の反乱にでも巻き込まれて犬死にするのが理想的、というワケか。
いいさ。罰は受けてしかるべきだ。俺たちはそれだけのことをした。ただ単に俺が少し早くそれを受けるだけの話。

そして俺は、再びモニターと向かい合う。参加者に反乱の兆候はないか。今この瞬間にどこかで戦闘が起こっていないか。今この瞬間、誰かが息絶えてはいないか。
そう。俺の仕事は、殺し合いの様子をじっと見守ること。これ以上無い、世界一悪趣味な仕事だ。
その殺し合いに、彰も、祐介も、加わっているのだ。
もし彰や祐介が、名も知れぬ誰かに殺される姿を見たら、その時、俺はどう思うだろうか？
そいつを憎むだろうか？　殺してやろう、と思うだろうか？
憎まれるべきなのも、殺されるべきなのも、俺であるはずなのに。

……そして、『その時』は、来た。

島中に設置された集音マイクは耳ざとくその音を掴み取ったし、島中に設置された監視カメラは目ざとくその姿を映し出していた。
それを認識したその瞬間、俺の中の世界は歪んだ。モニターを凝視することなど、出来る筈もなかった。
とても立っていられない。倒れるように椅子に腰掛ける。視線が定まらない。蛍光灯がぼんやりと揺れている。
だが、その瞬間まで、俺の眼は悲しいくらいに、

正常だった。
六十四番、長瀬祐介は、確かに、命を落とした。
「また死んだか、やれやれ、醜いもんだねえ」
声。
「これであと何人だっけか？　……二十三……いや、二十二人か？」
知っている、他人の声。
「全くよぉ、早く終わらないもんかねえ」
同じ部屋にいる、兵隊二人の声。
「まあ、最初の四分の一程度まで減ったんだ。もう少し、ってとこだろ」
名前は知らないし、知りたくもない。
「それはそうと……美味いなこのコーヒー」
……それは、俺が自分のために淹れたコーヒーだ。お前らに飲ますためのものじゃない。
「確かに、こりゃ美味い」
下品な音をたてて、兵隊どもが俺のコーヒーを口につける。
……そうか。美味いか。
当然だ。俺の淹れたコーヒーなのだから。
いつからだったろうか？
ひょっこりと遊びに来た祐介が、俺の淹れたコーヒーを「苦い」と言わず、「美味しい」と言ってくれるようになったのは。
「やっぱり、いつ来てもここのコーヒーは美味しいです」
そう言って穏やかに微笑む祐介は、もう、居ない。
祐介と彰がこのゲームに参加することに対し反発したのは、俺と源一郎だけだった。
他の長瀬共は、「これも運命だ、諦めろ」などと、理解不能な事を平然と言ってのけた。
納得できる筈もない。俺たちは執拗に、執拗に抗議し続けた。

そして、そんな俺たちに対して他の長瀬共が取った手段は、『説得』という名の『脅迫』だった。
誰だって自分の命は惜しい。
かといって、俺たちが犠牲になれば彰や祐介が助かる、というわけでもない。殺され損。
俺たちは、折れるしか無かった。二人の腹には起爆装置を設置しない。
それだけが、俺たちの抗議の成果だった。

そして、彰は重傷を負い、祐介は、死んだ。

誰が悪い？　と訊かれれば、俺が悪い。
すべては、俺の力が足りなかったせいなのだから。
だが。
納得できるか、と言われれば、別だ。

今から俺が起こす行動は、間違いなく間違った行動であり、エゴ以外の何ものでもない。

結果的に、この島が、そして俺が祐介を殺したというのは、疑いようも無い事実なのだから。
結局はこうなるだろう、という諦めのようなものも、確かに抱いていた。
だが、それでも。

俺は……

防弾チョッキを着込み、拳銃に手を伸ばす。手に取ったそれは、想像していたよりも重く。
これならば人を殺せる、という実感のようなものがじわじわと湧き上がってくる。
「長瀬様、どちらへ――」
兵士がひとり、駆け寄ってくる。
……そうだな。
決行するにあたって、俺もひとつ決意を固める必要がある。
戻りたくても、戻れなくなるように。
おもむろに、銃口を駆け寄ってきた奴に向け、身

構えられる前に、引鉄を引く。
　思っていたよりも軽い音がして、思っていたよりも強い反動があって、思っていたよりもあっけなく、その兵士は額に穴を開けて死んだ。
「な、なにを――！」
　もう一人の兵士が叫び、腰に提げた銃を構えようとする、その前にそいつにも銃弾をプレゼントする。
　呆気なかった。
　呆気なく、この部屋で動く生物は俺だけになり、呆気なく俺は後には引けなくなった。

　なぜかたまらなく可笑しくなり、口元が歪んだ。

　振り返り、山のように並べられたモニターの中、そのひとつを見る。
　決して映りの良いとは言えないその画面の中には、一軒の民家。
　複数人が輪となって協力態勢を作り、今はそこで暫しの休息を取っている。
　……その中に、彰もいる。
　どうやら、あいつはこの島で死ぬより大切なものを見つけたようだ。
　見た目は兎も角、信頼出来る仲間もいるようだ。きっと、心配ない。そう思わないと、俺はここから一歩も動けない。
　俺のすることが終わったその後に、運良く俺が、そして彰も生き長らえているようなら……そうだな、脱出の手伝いでもしてやるか。
　どうせ俺は遅かれ早かれ消される。そのくらいの罪の上塗り、屁でもない。
　とは言っても、結局彰には信用されず、殺されるかもしれないな。それでも、仕方ない。間違いなく俺は罪人であり、彰や、このゲームに参加してしまった者たちは、そんな俺を裁く権利がある。

　もうひとつ、モニターをチェックする。

映っているのは、五人の参加者の姿。
もしかしたら、仲間割れを起こして、互いに殺しあうかもしれない。
だが、奴だけには死なれてもらっては困る。
奴は――俺が、殺す。
長瀬であること。監視者であること。どうでもいい。
この扉を出たその瞬間から、俺もまた、このゲームの参加者の一人になるのだから。
そして、今俺の頭の中にあるビジョンはひとつ。
奴が苦しみ、のた打ち回り、助けを請いながらも哀れに死んでいく、その姿のみ。
それさえ見ることが出来れば、俺のこの人生など、いつ終わっても構わない。
奴にも、祐介と同じ苦しみを味あわせてやる。
さあ、行こう。
奴の未来を、奪いに。

監視所の重い扉を開く。
そこから先は、血に塗れた戦場。

――もし彰や祐介が、名も知れぬ誰かに殺される姿を見たら、その時、俺はどう思うだろうか？
――そいつを憎むだろうか？　殺してやろう、と思うだろうか？
――憎まれるべきなのも、殺されるべきなのも、俺であるはずなのに。

殺した奴を許すことなど、できるはずもなかった。
身体じゅうが熱く煮えたぎっているようで、細胞の一つ一つが、奴を殺せ、奴を殺せと命令する。
奴――そう、名前のない、『少年』の姿を。
しっかりと、この眼に焼き付けて。
俺は、戦場へと、その足を踏み入れた。

625　サミット

「……で？　これからどうするんだ？」
「決まっている。爺とガキと女だけで敵の本陣に突入なんて無茶だ。後を追うしかねぇだろ」
「同感だ。紳士として婦女子や老人をいたわるのは当然だ」
「なるほど……。おい、新入り、お前はどうだ？」
「……興味無い」
「何だと？　テメェ真面目にやる気あんのか⁉」
「おい、よせよ。こんなところで仲間割れか⁉」
「争いはやめたまえ。新入り君、君は協調性という言葉を知らんのかね？」
「……知っている、一応は……」
「ほう、なら何故そんなに消極的なのだね？　我々は仲間だろう？」
「……みんな、知らないんだよ……仲間なんて……本当は……薄っぺらい関係なんだ」
「……」
「……」
「……」
「まぁ、何があったか知らねぇが、残りたけりゃ残ればいい。俺は行くぜ」
「俺も行くぜ。なぁ鳥、ちょっと手ェ貸してくれねぇか？　登るのは得意なんだが、降りるのはどうも苦手でな……」
「いいでしょう。我々は仲間だ、助け合うのは当然。手はないですが足なら……」
「いでででっ！　爪立てるなよ！」
「おっと、失礼……」
「じゃあな新入り、お留守番ヨロシクな」
「……」
毛糸玉と猫と鳥は深い闇へと吸い込まれていった。
一人、残された白い蛇はそれをただ、じっと見つめていた。

626　朱　――AKA――

重い沈黙が辺りをずっと支配していた。
その場の五人は腰を下ろしたまま、先程から一言も発していない。
沈黙は金なり、という言葉があった気がする。黙っているだけで金になるのなら、今頃俺たちはウッハウハだな。
ラーメンセットも食い放題だ。セットのライスをチャーハンに替えるという贅沢も思いのまま。
などと諺を曲解しながらも、国崎往人は目の前の二人からは視線を逸らさない。
いや、逸らせなかった。
先程、二つの死体を弔いたいという少年の申し出があった。
往人はそれを断ろうとしたのだが、横に座っている少女――神尾観鈴のお願いにより、渋々同意する羽目になった。
往人は思う。
観鈴は純粋過ぎる。この世の中に悪意が溢れていることを知らない、いや信じられない。
それは、吐き気がする程に悪意が渦巻くこの馬鹿げたゲームの中でも揺らぐことはなかった。
それが、彼女の長所だとしても。今は、命を落としかねない短所になってしまっている。
彼女を守り、生き残る。願わくば、その純粋さを失わないままで。
――では、今はどうすればいい？
ラーメンセットの妄想に、腹の虫が鳴る。
それに反応してか、観鈴が、にははと笑った。
頬を朱に染めながらも国崎往人は考える。
――生き残るために、最善の方法を。
「観鈴」
沈黙を破ったのは、往人だった。

「なに、往人さん」
「ラーメンセット、ひとつ」
心なし嬉しそうに話す観鈴に、往人はそう注文する。
「え……？」
「しかも大盛りだ。早く頼む」
ぽかん、と口を開ける観鈴。
「うー……でも、材料も道具もここにない」
観鈴は困ったように唸る。
「ならば出前だ。晴子、西来軒でも昇竜軒でも波動軒でもいいぞ。さっそく頼んでくれ」
「頼めるか、アホ」
あっさりツッコミが返ってきた。
両腕の傷が痛むだろうに、その辺のお約束はきちんと守ってくれている。芸人の鑑だ。
往人は、やれやれとため息を吐きながら言った。
「ならば仕方ない。観鈴、晴子。食事に行くぞ」
『……え？』
晴子、観鈴だけではない。その場にいた少年、郁未も声を上げた。
「どういうつもりだい？」
少年が尋ねる。
「どうもこうも無い。腹が減ったから飯を食いに行くだけだ」
その言葉の真意を理解したのか、少年はしばし考えてからこう言った。
「わかった。じゃあ、僕たちはここにいるよ。今は食欲があまり無いんだ」
その言葉に、往人は少し眉を顰めたが、ぶっきらぼうに返した。
「そうか、すまないな」
そのやりとりを見ていた晴子が、じゃ、決まったなとばかりに立ち上がる。
「観鈴、行こ。ウチの腕の怪我もどっかでちゃんと診ないとあかんし」
「う、うん。……じゃあ、また後で」

観鈴は立ち上がると、ぺこりと頭を下げる。
「じゃ、居候。先にいっとるで」
「ああ、ラーメンセット、用意しておいてくれ」
吐き気がするような白々しい台詞の応酬に、顔を歪めながら往人は言う。
それでも、晴子と観鈴が一定の距離を取るまでは、少年たちからは目を離さなかった。
「そういうわけだ」
往人は目の前の二人を見据えたまま、ゆっくりと立ち上がる。
「悪いが、俺たちは別行動を取らせてもらう」
「そうか、残念だよ」
往人の言葉に、少年はわずかながらに微笑んで言った。
「下手な言い訳だったね。僕たちがついて行く、って言ったらどうしたの？」
数瞬の沈黙。そして、往人はぶっきらぼうに返す。
「結果オーライだ」
少年は立ち上がると、ゆっくりと往人の方へ歩み寄る。
後ろの郁未は、ただその様子を見守るだけだ。
往人も、こちらへ来る少年をじっと見つめたままで動かない。
そして、少年は往人の前まで来ると、すっ……と右手を差し出し、こう言った。
「再会を願って。……待っているから」
往人は冷ややかな目で少年を見る。
「握手ぐらい、いいだろ？　君は借りをつくったんだからさ」
微笑んでいう少年に、往人はしばしその手を見つめる。
やがて、自分も右手を差し出すと、その手を軽く握る。
「本音を言うと、もう会いたくない」
握手をしたまま、往人は言った。
「もし再び会った時に、また死体が転がってたら」

その言葉の続きを察しても、それでも少年は微笑んだままだ。
「――今後こそ、お前を殺さないといけなくなる」
――その瞬間。往人の視界に入ったものは。
腹を押さえる少年。
そして、鮮血の朱。
『だから、もっと信じてみようよ、この人達も、他の人も』
そうだったのかもしれないいな。観鈴。
……もし、信じることで全てが上手く行くのなら、俺は信じ抜いてやるよ。
例え、その格好がどんなに無様だったとしてもだ。
――だが、今はだめだ。
何故かって？
この肩に食い込んだ弾丸。この激痛に耐え、生き延びないといけないからな。

これで、いい。

少年が軽く吹き飛び、往人が肩を押さえうずくまる様子を、フランク長瀬は満足そうに眺めていた。
先程まで構えていた狙撃銃を辺りに放置し、傍に置いてあったリュックを拾い上げる。

あの偽典とかいう、謎の反射兵器を腹に仕込んでいたか。

フランクは、少年たちの居る場所からやや離れた茂みから、狙撃銃で弾丸を一発放った。
それは寸分違わず少年の腹部を襲い――がいん、という大きな音と共に兆弾する。
――次の瞬間、弾丸は往人の肩に喰らい付き、鮮血を飛び散らせた。

これでも、いい。

反射兵器を腹に仕込んでなければ、奴はそのまま悶え死んだだろう。
そのときは、この狙撃銃で五体全てを射抜き、苦痛にのた打ち回りながら死ぬ姿をゆっくり眺めるつもりだった。

だが、この状況ならば。
先程去った女たちが騒ぎを聞きつけて戻ったとき、女たちはどう思うだろうか？
そして、肩を撃たれた男は？
仲間割れでも、いい。――奴が傷つき、力尽きていく様が見れるのならば。
ようは、最後の止めが刺せればいいのだ。
奴に絶望と恐怖をプレゼントできれば――それで、いい。
フランクは注意深く立ち上がると、リュックを背負う。
その瞳には、朱が宿っていた。――復讐に燃える朱が。

627 クリムゾンレッド

――アンッ

遠くから、そんな音。
刹那。少年の身体に、衝撃。
押し出されるように、息が飛び出す。意味の成さない声。
全身が弾け飛びそうになる。強烈な打撃。なまじ、貫通した方がいいくらいだ！
撃たれた。誰かに、〝遠くから〟。
弾き飛ばされた弾丸は、目の前に居た住人の肩に食らいついた。コンマ数秒の出来事。いや、それにも満たない程の。
愕然とした顔。何故、とその目は言っている。

違う。違うんだ。僕達は銃を持ってない。
君を撃ったのは僕達じゃない！
答えたい。
……答えられない。
頭を地面に打ち付けられる。再び浮遊感。次に顔を打ち付けられた。
抗いようの無い浮遊感。そしてそれも終わる。
何故——何故。誰が。どうしてこんな時に！

——どくっ

嗚呼。まずい、〝来た〟のか？　なんて最悪な。
参ったな、本当に。
頼む。郁ミ。

——どくん

頼ム、今は。ニげてくれ——逃げてくれ！

まずイコトになリソうなンダ。いや、なる！
だから。

けど、声は出なかった。

ガキィンッ！
「ごぉっ‼」
「……っ！」
遠くから聞こえてくる、銃声。
甲高い音。何かの弾ける音。苦悶の声。鮮血。
風。
郁未の横を何かが通り過ぎる。
目の前にあった筈の少年の姿が消えている。
一瞬の間。
咄嗟に振り向くと、少年の身体が人形のように転がっていくシーンが見えた。
……は？　何で、あなたがいきなり転がってんの

よ。
二転三転。止まる。
――起き上がっては、こない。
幻でも見ていたかのような顔だった郁未が、無意識のように立ち上がる。
包丁を握り。泥塗れで、うつ伏せに倒れ伏したままの少年に駆け寄った。
「だっ――大、丈夫？」
三秒。
さらに五秒。
返事無し。
瞬間。郁未は、心臓をきつく締め上げられるような感覚に襲われた。
何。え？　まさか――死んでる？
余裕のありそうな顔で。いつもの顔で、返事を返さない少年。
それは、郁未にはあまりにも非現実的過ぎる。
ごく、僅かに残った平静さが、少年の身体を地面に転がす。反転させた。
目が、閉じていた。
咄嗟に、少年の口に耳を近づけた。押し当てたかもしれない。
――。
ようやく捉えたのは呼吸音。ひゅうぅ、と風が漏れたかのようなか細い息。
それでも、生きている。郁未は、僅かばかりに安堵する。
腹部を見やる。両手が当てられている。
無理矢理それを剥がすと、服に円形の穴が空いているのが見えた。
穴の縁が、焼けたように黒い。弾痕には違いない。だが、本当ならそこから出ている筈の血は流れていない。
服を引き剥がす。人目など気にしない。こんな状況に道徳を持ってきてる場合か？
それで、そこにあったものは。

「……紙」
腹部を覆うように、何枚かの紙が糸か何かの植物の茎で括り付けられている。
こんなもの、いつの間にやったのか？
ともあれ、その糸のようなものを包丁で切り取った。
へこんだ紙。汗でへばり付いているらしい。
剥がすように取り除いた。少年が、痛みで呻く。
――痣。
大きな痣。真ん中の辺りを中心として、赤黒い色に変色している。痛々しさに、目を背けそうになった。
しかし。なるほど。どういう原理か、この紙のお陰で弾丸は通らなかったらしい――
――弾丸？
銃。
そうだ、撃たれた。誰に？
――。

なるほど。
めくり上げた少年の服を、戻す。郁未が、ゆらりと、立ち上がる。
血の臭い。
振り向く。先程歩いていった筈の晴子と観鈴の姿。
往人を囲むように。
晴子。ベネリM3を両手に。
観鈴。シグ・ザウエルショート9㎜を。そして、往人の右肩がべっとりと血に塗れている。
全ての銃口は自分達に。――だが、観鈴だけは、震えていた。
晴子と、往人。傷の痛みか、怒りからか――仕留め損ねたからか。忌々しい表情を浮かべている。
確信。
平静を欠いた彼女の心理。平静を欠いた状況。
導かれる、最低最悪の予想。
〝裏切り〟。
「あんたが――」

殺気が走る。紫電を放ちかねぬ程に。風が起こりかねぬ程に。
血が巡る……巡る。
「あんたらが、撃ったのね——？　最っ低……最初からっ、このつもりで……!!」
歪んだ。
どうも、少年の願いは届きそうにない。

628　Pain

閉めきられた小屋の中、些細なことで熱くなった熱気も相まって、室温は異常に上昇していた。
「まったく……暑いわね～……ふぅ～……」
結花が服の胸元をパタパタと扇ぐ。
「……（じぃー）」
「……（じぃー）」
「コラ、そこの男二人！　見るなぁっ！」
その胸元へ注がれる視線に気づいてそこを手で覆い隠す。実際は特に何が見えたわけでもなかったが。お世辞にも、結花の胸は扇いだ程度で覗ける程豊かとはいえない。
「頼む……水をくれ……」
記憶を失ってるので正確には分からないが、かなりの間水分補給をしていない気がする。
祐一が覚えている限りでも、かなりハードに動いていたわけで。喉の渇きは頂点に達していた。
「仕方ないわね。はい……と言っても北川君、あなたのだけどね。一応武器は抜いてあるから」
祐一と北川の前に軽くなった鞄を放り投げながら、結花自身もまた自分の分の水分を補給する。
「お、サンキュ」
北川が鞄から自分の分のペットボトルの封を開けると一気にラッパ飲みでそれを飲み干す。
本来はそんなことをしている余裕などないのだが、体は正直だった。
「なあ、北川、ガサツ女、ちょっといいか？」

「なんだ、相沢？」
「誰がガサツよ……」
「俺に、どうやって飲め……というのだ……」
祐一は、手を縛られている。
「ヨガの使い手でもない限りこの態勢で水を摂取することなど不可能だ」
「仕方ないなぁ……口を開けて上を向け！　相沢！」
「へっ⁉　いや、俺が言いたいのはいいかげん縄を解いて欲しいってことなんだがって……ガボッゴボッ！」
「覚悟、相沢っ‼」
そう言いながらも律儀に上を向いて口を開いたのが運の尽きだった。
開け放たれた口に容赦なく注がれる水の雨。
「ゴボッ……ゴボッ……ゲボッ……（北川……やめでぐれ〜）」
口から、目から、鼻から、水が溢れては祐一の体に染み込んでいく。
「あんたたちってバカよね……」
「ああ、そうだ……結花、さん？」
「なによ？」
「その……さっき見てた本を見せてくれないか？」
北川が、空になったペットボトルで肩を叩きながら、そう切り出した。
「本って……参加者名簿のこと？」
「この状況でラブリーな恋愛小説が見たいとでも思うか？」
「あんたならやりかねないけど……まあ、いいか」
ポン……と北川に投げられる名簿。
先の飲料水の時もそうだったが、結花はまだ決して無防備に二人に近付く、ということはしなかった。
（それって、悲しいこと……だよな）
祐一は思う。
（少なくとも俺は、あいつ、いや、この三人の少女

達を信用できなかった）
いきなり気が付いたら縛られていて……他に危害を加えられてない（軽く殴られたが）とはいえ、信用しろ、という方が無理な話だ。
だけど――
「おい、北川……」
「なんだ、相沢」
結花に聞こえないような小さな声。
だから、北川もまた同じようにそう返す。
「できたら、あいつらを信じてやりたい……って思うのはやっぱりこの島じゃ甘い考えなのかな……」
悲しみを胸にしまって。ただ生きる為に殺す、ではなく、みんなで生きて帰ろうと前に進みはじめた少女達を。
「できたら……信じてあげたいと、思ってる」
記憶を呼び戻したら、そんなことは言っていられなくなるのかもしれない。だけど――
「……」
「やっぱ、甘いか？」
結花から渡された本を開きながら、
「さあな……甘いといっちゃ甘いけどな。……だけど、人間として間違っちゃいないと思うぜ」
「……サンキュ」
「だけど、この状況は、打破しないとな」
この、捕まっているといっても過言ではない状況を。
パラパラと本をめくる。
「ああ、こいつだ……」
一つのページで北川の指が止まる。
「何？」
「俺達を襲った男だよ。……ほんとにいきなり襲いかかってきやがった。長瀬祐介か……特殊能力が電波？　何だそりゃ？　頭が電波ってことか？」
祐一と結花に、その顔写真を見せびらかす。
本当にどこにでもいるような一介の男子高校生といった風貌だった。

「長瀬、ねぇ……」
　ここには結花しかいなかったが、芹香やスフィーがいればまた違った反応があったかもしれない。
　それは、今の祐一達には分からないことだった。
「まあ、いいか……。とりあえずそいつは要注意人物ってことね」
「そうなるな……（これでよしっ、っと……）おい、相沢！　お前も見ておけよ。……何か思い出すかもしれないだろ？」
　全員の死角になっているところで何かをしながら、北川は祐一に本を渡す。
「……ああ」
　あまり気が進まない風に本を受け取る。
「あのさ、一応私たちの本なんだから足でページめくらないでよね……」
「仕方ないだろ、縛られてるんだからさ……そろそろ解いてくれよ……」
「……」

　肯定も否定も。それに対する返事はなかった。
　ア行——一ページ目に自分の名前があった。一番相沢祐一。
（この名前に引かれた赤線は、死んだってことなんだろうか……）
　自分と、五番天野美汐の間に載っている、眼鏡の女、そしてその次の母子の内、母と思われる女性の名前には赤線が引かれていた。
　それが死人だとすると、ア行にはずらりと死人が並ぶ。
　自分や結花を含めて五人。それ以外の名前に引かれた赤線の意味を想像して、軽く眩暈がした。
　カ行——カ行の人間は多かった。
　生き残りも多ければまた、犠牲者も……
　ある二つの名前で、祐一の手が止まる。
「どうした、相沢……？　何か思い出したか？」

「分からん……この親子の顔を見てると……何故か心が騒ぐんだ……知らない奴なのにな」
「神尾晴子と神尾観鈴か……お前の記憶を取り戻す鍵かもな」
「いや、そんなんじゃなくて……いや、なんでもない」
　漠然と胸に込み上げる嫌悪感を振り払って祐一は再び次のページに目を通す。
（舞……佐祐理さん……）
　舞と佐祐理の——赤線の引かれた名前を見つける。
　舞達は結花らと一緒に行動していた……という。
（もしかしたら……あいつらが途中で佐祐理さんや舞を……）
　どす黒い思いが祐一の頭の中をよぎる。
（いや、そんなはずない……よな？　……こんなことばかり考えてたらいつか俺が壊れちまう……）
　その二人に引かれた赤線は異様によれていた。
（さっき、できたら信じてあげたい……と決めたじゃないか……たぶん、彼女達はこの線を引くのをためらったに違いない。第一そんなことする奴等なら俺達は今、ここで生きてるはずがない）
　利用する為……という可能性だってあるにはあるが……無理矢理そう思い込む。
　張り裂けそうな悲しみを振り払って次のページをめくろうとした祐一の手が再び止まる。
「どう……した……？」
　そのページに倉田佐祐理の名があることを考慮してか、今度は幾分遠慮がちに北川が訊ねてくる。
「……こいつ……知ってるか？」
　低い声。
　倉田佐祐理よりも二つ程前、男子三十三番、国崎往人の顔を指差しながら祐一が呟いた。
「知ってるのか？」
「いや、知らん」
「おいおい……」

「だが、記憶を失う前の俺は知っていたのかもしれない……」
その男の目を見ているだけで浮かび上がってくる奇妙な、だけど確かに込み上げてくる激情。
（なんで俺はこんなことを考えている……？　これって……憎悪……なのか？）
よく分からない。力無く、祐一が首を振った。
北川と、祐介に殴られた傷が痛む。
「なんだか……気分が悪い……な」
この島に来て、いや、この島で覚えている限りでは今までで一番激しい頭痛が祐一を襲う。
（この本すべてに目を通してしまったら……俺は本当に壊れてしまうんじゃないだろうか……）
たとえようのない漠然とした不安が祐一の全身を包み込んでいく。
「大丈夫か？」
「ああ……心配かけてすまない……」
「国崎往人……ねぇ……あんた達からその名前が出るなんて意外だったわ……」
「……お前は知ってるのか？」
「いや、知らない」
「おいおい……」
再度、北川が同じ台詞を吐く。
「いろいろあってね。今そいつ探してるのよ」
「いろいろ？」
「分かんないけど。その写真だけで芹香さんのハートをゲッチュした人……かな？」
「ゲッチュて……」
「そいつ、危険なの？」
「分からない……」
祐一が頭を再び横に振った。
「あんた分からないばっかりねぇ……頼りになんないなぁ……」
確かに、祐一はここ最近頭を縦に振った記憶がない。
「頼りにしようと思うなら、せめてこの待遇を改善

してくれ」
「……悪いわね。悪気はないんだけど……もう、私の大切な友達を失いたくはないのよ。……分かって」
「……まあ、とにかくこいつも危険そう……だよな……特殊能力は法術？　なんかの儀式みたいなもんか？」
その話題を逸らすかのように、明るく北川が言った。
「そいつ悪そうだから、私はあまりそいつを探すのは賛成してないんだけどね。あんた達みたいに素直に捕まるようなマヌケには見えないし」
「ほっとけ！　っつーかそいつもまた縛るつもりなのか？」
「信用できないから……ね。私だけならともかく、スフィーや芹香さんまで危険な目にあわせたくないし。もう、仲間を失うのは……たくさんなの」
「……」
北川の話題を逸らそうという意図は、果たせなかった。
つまり、祐一と北川のこの処遇はすべて結花の独断で取り決めたこと……という話。
（……まあ、気持ちは分かるけど……な）
「最初は、違ったのよ。最初の頃の私はそんなんじゃなかった。最初から……初対面の人を疑ってかかるなんて……してなかった。だけど今は——私ももしかしたら……もう狂ってしまってるのかもしれないね」
それに対する男二人の答えはなかった。
四十番坂神蝉丸——
長いカ行を終え、サ行へと目を通す。
（……）
真琴までは知らない名前が続く。
さっと読み飛ばす——はずだった。
（……四十三ば……ん……里村……あか…）
パタッ!!　乱暴に足で本を閉じる。

「どうした相沢⁉　もういいのか？」
「……ああ……」
全身から冷や汗が滲み出る。
黙っていても気だるい暑さだというのに、いきなり冷水を浴びせられたかのように体が冷え切っていった。
まあ、この状況で本当に冷水を浴びたら気持ちいいだろうが……今の気分は最悪だった。
（今のは……茜？）
昔、一年もの間、同じ時を過ごした幼馴染み。
本当に好きだった人。
（いる……はず……ないよな……）
無理矢理肩で額の汗を拭う。
（そうだ……よな……。いるはずが……それに同姓同名だって可能性も……）
だけど、一瞬見えたその写真は、確かに昔見た茜だった。
「すまん……少しだけ……寝かせてくれ……」
「お、おい、相沢？」
ゴロン……というよりは、バキッっという音を立てながら床に寝転がった。
（そうだ、いるはずがない……いちゃならないだろ⁉　だけど……）
現実に、そこに茜の名前があった。まだ、赤線の引かれていない茜の名前が確かにあった。
（会いたい……茜……）
なんとかしてこの状況から脱出をしよう。
すぐにでも飛び出したい気持ちを押さえ、下唇を強く噛み締めた。
「すまん、俺も寝るわ……結花さん、本ありがとな。後、見張りヨロシク」
「ちょ、ちょっと……」
北川もまた、本を結花へと投げてよこしながらゴロンと寝転がった。今度は、本当にゴロン、だ。
「なんて呑気な奴等なのかしら……ああ、頭が痛い……」

「おーい、相沢……起きてるんだろ？　相沢～‼」
祐一の目の前で、北川の口だけがそう動いた。
「……ああ」
本当は返事する気にもならない気分だったが、無視するわけにもいかない。祐一もまた軽く口だけをそう動かす。
「へへ……なんとかしてこの状況だけは打破しないとな……」
カリカリ……ペンを紙に走らせる……
「おい、北川、いつの間にそんなもん持ってたんだ？」
『ペンは水分補給した時に鞄からくすねておいた。紙はさっきの本の遊び紙から一枚ちょいと……な』
同時に何枚かのＣＤを見せながら……紙に書かれていく文字。
「……そういった悪巧みにかけてだけは天才的だな」
『ほっとけ。ＣＤはとりあえず今は気にするな……紙のスペースは有限なんだ、あまり無駄なこと書かせるなよな』
お前が勝手に書いてるんじゃないか……と言ってやりたかったが、本当に紙の無駄なので黙っておいた。
『なんとか、ここから脱出しよう』
コクリ……結花に気づかれていないことを目の端で確認しながら、祐一が頷いた。
「ちょうど俺もそうしたいと思ってた。俺にも……会いたい人がいる……こんなとこでいつまでもＳＭごっこをやってるわけにはいかない」
真実を、確かめなくてはならない。あゆや名雪達みんなのこと、自分の記憶のこと。
そして、茜の名前があったことも。
いるはずのない、いると思いもしなかった茜の存在を確かめるために。
『もちろんだ……ＳＭはお前だけだけどな。とりあ

えず、この状況をなんとかして覆さないと』
サラサラと、音を立てないようにペンが進む。
『俺だってこんなことしてる暇はない。どんな状況に置かれてても、最悪の事態にならないよう最善を尽くさないとな』
レミィのことを思い浮かべながら、北川が文字を綴る。
「最悪の事態って……なんだ？」
その祐一の問いに、北川は幾分躊躇したが。
『最悪の、事態さ』
ただ、それだけを書いた。

629 会議

よう坂神、御堂だ。まだ生きてるか？
まあ、お前が死ぬわけねえよな……俺以外のやつ相手によ。既に待ちくたびれてたりは、してねえだろうな？
悪ぃがよ。ちょっとしたチャンスだったからよ。遅刻覚悟で、寄り道させてもらってるぜ。ここは前から気にはなっていたんだが、もっとやばい所かと思っていたんだよな。ところが実際入ってみると、歯ごたえのある奴なんか、さっぱりいねえ。あの硬ぇろぼっとの片割れぐらいはどっかにいそうなもんだが、施設内まで入っちまえば、飛べやしねえからな。多分外にいると思うのさ。
ちょいと見た限り、ここの構造はそんなに複雑でもねえ。三本の筒を立てて、地面に埋めたようなもんだ。数階ごとに連絡通路が通してあるが、基本的にはそれだけだ。
そういえば、軍部が本土決戦のために用意した指揮所も地下にあったよな。そういった場所は薄暗いじめじめした場所って相場が決まってたもんだが、この建物は空調も完備されていやがるし、廊下は煌々と電灯で照らされてるんだから、現代科学って奴は驚きだぜ。

ああ、話が逸れたな。それで、だ。
俺達は通気口から地下一階に侵入して、B練って筒の一本を下へ下へと制覇してきた。そんなに大きくはねえから、今では最下層って寸法だ。

「あー……倉庫ぐらいか？」
見取り図を前に、重要そうな部屋をあげつらう。やはり物資の補給は現地調達に限る。占領行政なんざ無関係だから、気を使う必要もねえ。
「ねえ、したぼく」
「げぼくね」
「げぼくだよ」
「げぼくだ」
……詠美のバカは、相変わらずバカだ。
繭ってガキと梓って赤毛にまで日本語を修正されてやがる。
「あたし、思うんだけど」
「げぼくよ」
「げぼくだって」
「げぼくだっつうの」
バカは死ななきゃ治らねえってのは、本当なんだな。
……どうでもいいが。
「ふ……ふみゅーん……げ、げぼくぅ……これなんだけど……」
さすがに三人がかりだと、コイツの減らず口もちったあマシになるようだ。修正かましてやろうかとも考えたが、涙目になってやがるから大目に見てやって、仕方なく詠美が取り出したブツを見てやる。
それは銀色の円盤だった。
しーでー、とかいうやつだ。
「それが、どうした？」
「これは、コンピューターとセットで使うものなのよ」
ガキもいつの間にやら取り出して、円盤をひらひらさせる。

「だから、ここにも寄って欲しいのよ」
ガキは、そう言って〝まざーこんぴゅーたー〟と書かれた一室を指差した。

若干強めの空調に逆らうように、その部屋は放熱を続けている。いくつものファンが、わずかな風切り音を重ねて不快なコーラスを作り上げていた。
中央に位置するマザーコンピューターを介した、ひとつの端末で、男は陰気に作業を始めている。
「くそ……御堂は……どこだ？」
三名を候補に上げたまま、放置してあった端末を使い、今ようやく御堂の仲間を確認し終え、内部の捜索作業に入り始めていた。
今になって、先ほどの三名がどうにも気になる。しかし、そちらに手間をかけている暇はなかった。普段はメイドロボ達にまかせっきりのセキュリティ関連作業を、源五郎は今、自分でやっている。
レーダーに従い、点在するカメラを使ってＢ練を上から虱潰しにチェックしていく。とりあえず、御堂は自分の居る地下三階を通り過ぎて、さらに地下へと進んだようだ。
もちろん死角に居なければ、なのだが。
とは言え、それでは根本的解決にはならない。更に下の階へと捜査の手を進めようとしたとき、何度目かの呼び出し音が鳴り響く。
「……源之助さん、か？」
正直、出たくはない。そう思って躊躇ったが、よく見れば内線だった。
「もしもし――？」
「……構造から言って、最重要施設はマザーコンピューターなのでしょうね」
千鶴が腕を組んで意見する。地下三階の渡り廊下は三角形の各辺を担う通路だけではなく、三角の中央に向かって伸びる通路も存在している。その中心には、件のまざーこんぴゅーたーが構えてるって寸

法だ。
　確かに、そこだけは特別な部屋のようだった。どうせ倉庫を抜けて、通気口に戻るまでの通り道にある部屋だから、行程上も問題はねえ。
「じゃあ、倉庫を荒らしたあとにでも寄るか」
　A練、と書かれた筒を指でなぞって進路を定める。ところが、千鶴がC練の一室を指差した。
「ここなんですけれど……」
　C練のその場所を通るには、A練の倉庫を通った場合、三階の渡り廊下まで到達し、そこから再度降りなければならなかった。千鶴は、露骨に面倒臭そうな顔をした俺に向かって話を続ける。
「わたしたちは仲間の他に……ある怪我人を捜しています。だから、この医務室に寄りたいのです」
「千鶴姉、それって……」
　姉妹で何やら裏がありそうなことを言いやがる。
「余計なお世話なんだろうけど……危険要素の、排除にもなるわ」
　千鶴は赤毛に言い聞かせるように、〝排除〟という言葉を使った。
「……何のことだ？」
　キナ臭さを感じて、俺は二人に尋ねた。

　医療機関特有の、鼻につく消毒液の刺激臭を漂わせた中に、おびただしい血の臭いを撒き散らす存在があった。どうにか縫合止血を終え、骨折部分にギブスを当てて、ベッドに身を沈めたまま、怒りに声を荒らげている。
　メイドロボ達に当り散らすも、いたって常識的な反応しか返さない彼女達では満足がいかなかった。やがて男は内線電話の存在に気付き、引き千切るように受話器を掴み、叩き付けるように番号をプッシュする。
『もしもし――？』
「源五郎かっ！　俺だ！　源三郎だっ！　よくも俺

を見捨てやがったな！」
『見捨てるも何も、あなたが勝手にやった事でしょう？　そもそも私が、この計画自体に賛同していなかったのも、ご存知のはず。どこに、あなたを助ける義理がありますか？』
　理路整然と答える相手に血圧を上げてしまい、せっかくの止血も意味がない。撒き散らそうとした不満を、かえって積み上げてしまう結果となっていた。
『それと……御堂が、侵入していますよ』
　駄目押しの一言。何を隠そう、源三郎自身が勝利者になると予想した相手が御堂だった。
「な……に……」
『あなたの予想が正しければ、あなた生きてはいけないでしょうね。では、お互い命があったら文句の続きを聞いて差し上げます——ご愁傷様』
　ガチャン、と乱暴な切断音が響いて通話が閉ざされる。
「ぐ……く……」
　わずかでも安心感を得ようと、無事な方の手に持っていた銃を確認するが、既に弾切れであった。
「う、ううう……」
　今では原形を留めていない顔の、かろうじて残った頬肉を自ら掻きむしり、長らく迷った末に懐へ手を入れ、ペン型注射器を取り出す。蛋白同化のみならず、原細胞の合成から分化異化までも強力に促進し、筋力や再生能力を爆発的に増進する薬物がセットされている。
　しかし同時に、癌化やアポトーシス、ネクローシスまでも増進する恐れがあり、よもや使うまいと思っていた、この悪魔の契約書にサインをするべきかどうか——。
　——源三郎は、確実な死と恐怖の狭間で迷いつづけていた。

「ようするに、だ」

執事だった男は……坂神と勝負した後、仲間に殺された。殺した方の男は、怪我人としてこの施設に居るかもしれない。そしてこの施設にいる、あの硬ぇろぼっとを仕掛けた源五郎って奴は、坂神と勝負した男の息子。
「……ってことだろう？」
そう言って確認すると、赤毛が頷いた。
「ああ、そうだね。仇討ち無用とは言われているけど、放っておくには危険すぎると思うんだよね」
それは赤毛にしては、まっとうな意見だった。後顧の憂いを取り除くのは、行軍の常識だ。
「そんじゃ、まあ……」
殺気を抑えて、頭を掻きながら千鶴の隣に移動する。ここで裏拳でも、と思った俺を鎮めるように、女は言う。
「御堂さん……試すのは、やめてくださいね」
底冷えするような静けさを保ちながら、呟く。
……やはりこの女、俺達同様に〝イケるクチ〟だ。

「そうかい……じゃあ、お互い心配は無用ってことだろ？」
「どういうことですか？」
「俺達は倉庫に寄る。あんたらは医務室に寄る。ついでに俺は、どっちかって言えば、源五郎の方に興味がある。先に行っちまってもいいだろう？」
要するにA練を俺達が上り、C練を千鶴達が上ればいい。だが、千鶴は反対した。
「別行動は構いませんが……コンピューター室は、危険じゃないでしょうか？　もし一箇所だけ警備するなら、出入り口かコンピューター室だと思いますから」
なるほど、筋は通っている。
結局、中間を取るように、あまり本気でもなく確認を取った。
「じゃあ地下三階で待ち合わせって事にすりゃあ、いいだろうがよ？」

「ねえ、おじさん？」
斜め後で、袖を引っ張りどおしのガキが、上目遣いで睨んでいやがった。
「三階で、また会おうね？」
「あー、そうだな」
適当に返事をしてやる。
「絶対、だよ？」
「あー、そうだな」
いつになく、しつこい。
いまだに袖を離そうとしない。
「約束、だよ？」
「あー、うるせえな！」
堪忍袋の緒が切れる。
手を振りほどいて、いつものように叫んでやる。
「……バカ野郎、俺が死ぬわけねえだろうが！　解ってるよ、俺がこのバカや幼児が先走りしねえように抑えて待っててやりゃあ、いいんだろうが！」
「ちょっと、先走りしそうなのはアンタでしょ！　したぼくの癖に生意気よ！」
「動物じゃあるまいし……」
俺はその言葉を聞き流して、詠美のバカに言い返していた。
「じゃあなんだ！　倉庫に桃缶があっても俺がいいと言うまで取るんじゃねえぞ！　おあずけだぞ！」
「どうしてそこに、桃缶が出てくるのよ！」
「動物じゃあるまいし……」
動物じゃあるまいし、先走りなんかしません。
……思えば、そういう意味だったんだよな。
そうさ。
俺はこのとき、獣どもが入り込んでるだなんて……思いもよらなかったのさ。

630　青い鳥

「北川。おまえ、手が真っ赤じゃねえか」

「そこ、いいかげんうるさい」
「はい。結花お姉さま」
「その呼び方やめなさい」

レミィは北川を捜した。
なにかに取り付かれたように、大声で北川の名前を叫びながら。
だが、必死に走り回っても北川を見つけることはできなかった。
突然、行方知らずになった思い人を捜す。まるで、映画とかによくある紋切り型のはなしだ。
そして、無事に見つけだし、涙ながらに熱い抱擁で愛を確かめあう。そんな筋書きだ。
だが、これは現実。
ようやく見つけたときには、物言わぬ骸になっているかもしれない。
捜している途中で何者かに襲われ、志を半ばに死

「いまさらのようなツッコミありがとう。祐一君」
「いや、冗談じゃなくてな。なんかいろいろあったんで。悪い、気づかなかったんだよ」
「別にいいけどな」
「そんなカオすんなって。マジでどうしたんだよ。止血しているシャツが血だらけじゃねえか」
「ん？　ちょっとぶつけちまってな。ひどく見えるかもしれんが傷口はそんなに大きくないぞ」
「そうか、それは良かった」
「……良いのか？」
「不幸中の幸いってやつだよ。もうちょっと小さなしあわせを噛みしめろよ」
「……祐一。青い鳥って話、知っているか？」
「なんだ、急にマジなカオになって。幸せを呼ぶ青い鳥って童話だろ。探しに行ったら実は近くにいましたぁ、ってマヌケなはなしな」
「……そうだな、マヌケだな」
「だから、それがどうしたんだっての」

ぬかもしれない。
そう、彼女がいるのは現実。
狂った、非日常的な現実。

レミィは荒い息をつき、トボトボと山道を歩いていた。
その足に何かがぶつかる。
思わずバランスを崩す。そして、それは彼女のポケットからこぼれ落ちる。
パックに入ったもずく、だった。
レミィはそれを胸元に愛おしく抱きしめる。ほんの少し前まで、普通と感じていた非日常の中の日常に。
レミィにとって北川は『麦藁帽子』であると共に、幸せを呼ぶ『青い鳥』だったのかもしれない。
それは、遠くに離れてからようやく気が付いた。本当の幸せが、すぐ近くにあったということを。
今まで当たり前のように存在した、北川がレミィに与えた非日常の中の日常。一緒にもずくを食べたり、一緒に他愛のない話しをしたり。一緒にスーパーに潜り込んだり……。
それは多くの命が散っていったこの島に作られた虚構なのかもしれない。
その虚構が崩れ去ったとき、レミィは突きつけられた非日常に恐怖した。
そしてレミィは求める。再び『麦藁帽子』が戻ってくることを……。
こぼれそうな涙をこらえ、レミィはふと、目に入った大きな倒木。そして、それに付いている、赤いもの。
血、であろうか。
それはその倒木を起点に地面に点々と付着している。
レミィはその跡を追っていった。

「あれ、無いや」
「どうした、北川」
「いや、腹減ったんで常備しているもずくを食おうと思ったんだが……。ポケットに入れたやつを落としちまったらしいんだ」
「そうかい。っていうか、おまえ、よく飽きないな」
「まあ、なんだ。今の俺はもずく依存症でな。もずくが無くなると手が震えるんだよ」
「また、そんな、くっだらねぇはなしを」
「いや、マジだって。もずくが無いとなんか現実感が希薄になっていく感じがして、なんか不安になるんだよ」
「ふーん、ああ、そうかい」
「幸せが逃げていく、ような気がしてな」
「なに、わけわかんないことを」
「うるさい。あんたたち」
「「はい。結花お姉さま」」
「だから、それやめなさいと何度言えば分かるの？」
　先ほどから漫才を繰り返す二人を見ていると、見張りをしている自分が馬鹿らしい。そう結花は思っていた。
　いくつかの死線をくぐり抜けてきた。身を守るためとはいえ、人も殺した。
　そんなことはしたくはなかった。でも、自分が生き残るためには仕方がなかった。
　自分は生きる。どんなことがあっても。そして、スフィーや芹香たちと普通な生活に戻る。そのためには安易に人を信じてはいけない。引き金をためらってはいけない。それは多くの人の死を乗りこえてきた結花が学んだこと。悲しいことだが、それが彼女にとっての現実であった。
（でも、あいつらを見ていると、そんなマジになってる私が本当に馬鹿みたいよね）

漫然とそんなことを思っていると、何者かが小屋のドアを荒々しく叩く音が聞こえた。
そして、
「Help!　来るの！　あいつが来るの！　開けて！ここを開けて!!」
切羽詰まったような少女の声が小屋の中に響く。
「レミィだ！」
北川が思わず立ち上がる。
「レミィ？　あなたと一緒にいると言った？」
「そうだ！　レミィが俺を捜しにきたんだ！　それで！」
そして、玄関に向かおうとするが結花に止められる。
「私が行くから、あなたたちはこの部屋にいなさい」
「でも！」
「忘れたの？　あなたたちは捕虜なのよ。言うとおりにしなさい」
「……はい。結花、お姉さま」
結花にそう言われ北川は唇を噛みしめる。だが、ここで言い争っても仕方がないことを悟り、腰を落とした。
結花は玄関に向かった。だが、
「？」
先ほどまでうるさいほど叩かれていたドアの音が、不意に止んだ。
（まさか……）
結花は急いで鍵を外し、片手で銃を構えながらノブに手をかけ、ドアを開ける。
刹那。
ドアが思いっきり引っ張られ、ノブを握っていた結花もつられて外に放り出される。
そして、
「樽の中の魚を撃つようなものネ」
そう言って結花の頭に釘打ち機を押し当てたのはレミィだった。

631　主のいない神社にて

結花たちがいる小屋から少し離れた所を、スフィーと芹香は歩いていた。
二人が外に出たのは、単に周りの様子を偵察するためだったのだが、十分ばかり歩いたところで、急に芹香が立ち止まった。
「……」
「芹香さん？」
「……」
芹香はゆっくりと坂上の方を指さす。その先には、いささか古ぼけた鳥居が立っていた。
「あ、あれ……。もしかして？」
「……（こくこく）」
「うそっ」
「……！」
スフィーは芹香の手を引いて、その鳥居へと急いだ。
「あれだけ懸命に探してもわからなかったのに、見つかる時は結構あっさりだね」
「……」
急な坂道を駆け上がった先にあったのは、まさしく彼女たちが探していた神社。
リアンや綾香たちと共に結界の主と対峙したものの、南の裏切りによって目的を果たせぬまま散り散りになった、あの神社だった。
しかし、芹香は感じていた。あの時とは違うと。
この島に来てからずっと感じていた圧迫感、すなわち結界の力は依然衰えていない。
しかし、あの時この古びた社に満ち満ちていた、悲しみにあふれた空気が今はないのだ。
つまりここにはもう結界の主――かんな、だっただろうか――は、いないのか？
芹香が思いを巡らしている脇で、スフィーはひとり舞い上がっていた。

「ねぇ、どうしよう？　結花を呼んでくる？　それともすぐに結界を……って、聞いてる？」
さすがにスフィーも芹香の様子に気付いたようで、
「あのぉ……」
芹香の顔を覗き込む。
「……」
「えっ？　う〜ん、そう言われてみれば……」
あたりをキョロキョロと見回して、
「なんかあの時と違うね。あ、でも、何が違うかと聞かれても……」
「……」
「えっ？」
「……」
「ってことは……」
「……」
「そんなぁ……」
それまでのはしゃぎ様から一転、スフィーは思わずその場に座り込む。
「あ、ってことは、もう結界もなくなったの？」
「……」
「それもないんだ……」
今度は、パッタリと仰向けになった。
「あ〜あ、結局振り出しに戻っちゃったね」
仰向けのまま、スフィーは誰に言うとでもなくつぶやいた。
「……」
その隣にしゃがみ込んだ芹香が、そっとスフィーの頭をなでる。
「それで、これからどうしよう？」
「……」
「うん、あの人を捜すのはわかるんだけど、当てはあるの？」
「……（ふるふる）」
スフィーは、「ふぅ〜」と大きなため息を付くとむっくり起きあがった。
「何はともあれ、とりあえず結花に報告しようよ」

「……（ふるふる）」
「まだ何かあるの？」
「……」
ちょっと待って、と言って芹香は一旦その場を離れると、しばらくして鞄を一つ抱えて戻ってきた。
「その鞄は？」
「……」
「あ、そうか。芹香さん、あの人と戦ったときに鞄を置いてきてたもんね」
鞄の中身はほぼ残っていた。理由は解らないが、注射器と白い粉だけがなくなっていたのを除いて。
「……」
「うん、はやいとこ報告しなきゃ」
二人は早足で坂道を降りる。結花の待つ小屋に向かって。
もちろんその小屋がただ事でなくなったことなど、二人に知る由はない。

632　誰がため

恥ずかしくて死にたいのはやまやまだがまだ死ぬ訳にいかないのが現状である。自分たちは生き残るために戦うのだ。恥ずかしいくらいで逃げてはいけないのだ。青くなった顔をなんとか白色に戻した七瀬彰は、小さく息を吸って心臓の鼓動も落ち着ける。
「――ともかく、話を進めよう」
そう言う柏木耕一に従って彰は柏木初音と並んで椅子に座る。
「お前が寝てる間にも一応色々話し合っていた筈なんだけど――まあ皆どれくらい真面目に聞いてたかは怪しいもんだな」
じろりと部屋を見回す耕一の目を直視出来る人間は誰もいない。皆が俯いて気まずそうな顔をしている。坂神蝉丸さえもである。耕一は溜息を吐いて、
「もう一回判りやすいように説明する。腹の中の爆

弾が解除されて、長瀬も殺して、もうこれ以上殺しあう理由が俺達にはない。だからこれから俺たちがすることは、脱出手段の方法と、島に生き残っている人間を集めることだ」
そう言った。皆が真面目な顔に戻り、耕一の声に聞き入ったところで彰は大切なことを思い出す。
「脱出手段は今のところ見つかってないが、留美ちゃんの話によれば何かアテがありそうな感じではあるんだ。——って、聞いてるのか？」
勿論聞いていなかった。彼の頭が今処理していることはただ一つ。今朝、自分の前に現れた一組の男女のことだった。
島に生き残っている人間のこと。
——長瀬祐介と天野美汐のこと。
自分の横に座っていた七瀬彰が突然立ち上がって、呆けた表情で窓の外を見ている姿に、わたし——柏木初音はやはり不安を抱かずにはいられなかった。
精神が不安定なのだろうか。自分が与えた鬼の血によって彼の身体の傷は癒えた。けれど精神は、身体のように安定してはいないようだった。
「——おい、どうした？　彰」
怪訝な顔をして耕一も訊ねる。自分を含めた全員が、彼のその奇矯な様子に目を奪われる。呆けた表情のまま彰は答える、
「忘れ物をしていました。けして忘れてはいけないものを忘れていたんです。だからちょっとその忘れ物を捜しに行きます」
茫洋とした眼差しで、茫洋とした声で彰は言う。そして誰かがその言葉の真意を尋ねるその前に、彰は自分達に背中を向け、足を引きずりながら部屋を飛び出した。右足の状態からして歩くのすら苦痛を伴う筈なのだ。なのに彼は止まらない。
「待って！　彰お兄ちゃんっ！」
事態を最初に呑み込んだわたしは彼に続いて部屋を飛び出した。彼の真意はわからない。けれどわた

しにだって彼の心が不安定な状態であることは判る。わたしが止めなければ、彼は何処までいってしまうか判らない。
　部屋を出て廊下を見回す。彰はまだ廊下だったけれど、それなりの速さで走っていた。体力の戻りが異常だと思う。そんなことを考えているうちに彰は玄関を飛び出してしまった。慌てて自分も追いかける。自分の後ろから他の皆も飛び出したのが判る。
　忘れ物とは何のことだろう。個人行動で迷惑を掛ける事を判っていながら、何故何も話さずに行ってしまうのだ。何故わたしに何も言ってくれないのだ。わたしは混乱する。
　判っているのは、自分がすぐに追いつかないと彼がまた遠くに行ってしまうということ。初音は走り玄関を飛び出し、飛び出したところですぐ傍に立っている彰に気付く。
「ごめん――また、何も言わないで行って、君に心配を掛けるところだったね」
　そう言って、彰は微笑む。強い風と穏やかな陽光の下で、七瀬彰は笑っていた。茫洋に見えた眼差しは陽光の下では逆に明瞭に初音の心を射抜く。
「お兄ちゃん、」
「大丈夫。忘れ物をしただけさ、本当に。本当に大切なものを今まで忘れていたんだ」
「大切な、もの？」
「そう。この島にいる二人の、生き残り続けた友達だよ。彼らを生き残らせたい。僕はそう思うんだ。だからここに連れてきたいと思う」
　その眼差しとは裏腹に、明瞭な声だった。自分の頭に手を置いて、すぐ戻るから心配しないでと彰は囁く。その声がいつもみたいに優しくて温かだったから、わたしはそれ以上追及できなかったのだろう。
　後から考えれば、もう少し自分がこの時しつこく追求していれば良かったのだろうと思う。なのにわたしは追求しなかった。止められなかった。これが全ての崩壊に繋がることもまだ知らずに、

「――すぐ、戻ってきてね」
わたしは何故、そう呟いてしまったのだろう。
言うと、判ってるよと彰は呟く。
「無理もしちゃ、駄目、だよ、身体、まだ、治ってないんだから――」
「僕は君を守るためにいるんだ。必ず帰ってくるよ」
彰は微笑う。微笑ってわたしの頬を撫でると、小さな声で行ってくるねと言った。
大丈夫だとは思うのだ。もう敵はいない筈だし危険はない。それにわざわざここで待っていてくれたことからも、わたしを置いて遠くに行ってしまうなんてこともない筈だ。
「それじゃあ、皆にもよろしく言っておいてね」
わたしの頭は勝手にそう判断して、身体に命令を送る。「頷け」という命令を身体に送る。
わたしの首肯を見て彰はもう一度微笑い、そして今度こそ自分に背を向けて走り出した。足を引きずりながら、それでも走る。送り出したところでわたしは、ようやく強い喪失感に襲われる。自分の行動に不備はなかったか。彰を送り出したことは間違いではなかったか。そんな声が底から聞こえるのだ。彼に二度と追いつけないような予感がする。彼が自分の届かない場所に走っていってしまう予感がする。
あくまでただの予感なのだ。そんなことが実際ある筈がないのだ。彰は自分のことを守ってくれると言ってくれたのだ。彼が嘘を吐く筈はないのだ。なのに涙が流れ出す。自分の心が判らない。
「彰くんは――」
いつの間にか自分の後ろに立っていた柏木耕一が尋ねる。わたしは涙を拭って笑って応える、
「友達を、探しに行ったんだって」
「――本当に？」
「本当、だよ」
耕一は苛々した顔つきで頭を掻き、そして、
「じゃあどうして初音ちゃんは泣いてるんだよ

っ!!」
そう叫ぶ。叫んで気まずそうな顔をして、耕一はそっぽを向いてしまう。傍には七瀬留美や巳間晴香もいて、耕一のその叫び声を聞いて怪訝な顔をしていた。しばらくの沈黙の後、わたしは囁くような声でやっと言った。
「なんとなく不安になったからだよ。でもよく考えたら大丈夫に決まってるのにね」
それだけをわたしは言った。それ以上は喋れる気力もなかったし、喋ってもしどろもどろになるだけだと思った。

目の前で涙を拭い笑う初音を見て、耕一は大きく溜息を吐く。僅かに自己嫌悪を覚えている自分に気付く。初音ちゃんを責めるべきでないのは判っているのだ。初音ちゃんが止められなかったのを責めるのは自分勝手だと。それに彰にだってちゃんとした考えはあったのだろうとは思うのだ。

耕一だって頭の中では大丈夫だと判ってはいた。戦闘は殆ど終わったようなものだし、今度は初音に行き先を告げてもいる。だから、そんなに不安を抱くような事はないのだと思う。
だが。
耕一の不安は七瀬彰の目の色にあった。彼は先に鬼の血を飲んでいる。身体の状態が回復したのは結構なことだが、同時にアレは精神に支障を来たす可能性もあるのだ。
杞憂だとは思う。思うのだ。けれど、それでも不安が拭えないのだ。耕一は無理矢理不安を底に沈めて見えないところまで隠しやると、
「すぐ帰って来いよ――ったく。俺だって千鶴さんたちを探したいのにさ」
呟いて耕一は初音の頭に手を乗せる。
「ごめんな、初音ちゃん。大きな声を出して。大丈夫さ、きっとすぐ帰ってくるよ」
初音が頷くのを確認して耕一は笑って空を見上げ

る。少しだけ白くなっている空に、心の底で燻っている不安の塊が震える。

七瀬彰は走る。走って走って走る。彼らがどこにいるかはよく判らないが、少し探せば見つかるだろう。彼らのような奴らを安全な場所に帰してやりたい。その思いだけで彰は走る。

自分の勝手な行動で他の皆に迷惑をかけるかも知れないが、優先するべきは人の命だと思う。あそこにいる連中にはもう危険なんて訪れない筈なのだ。それよりも長瀬祐介と天野美汐を探すべきだ。

多分自分は間違っていないと思う。

彰は走る。痛めた足を引きずって走っているのに身体が軽い。二十年の人生の中でも抜群に身体が軽い。

633 朱と蒼の螺旋

螺旋。交わらず。繋がらず。くるくると落ちていく。

落ちていく。

——ガキィンッ!

背後から、金属音。鉄が弾けるような。

続いて、何かが倒れ込むような音。明らかな異変。

咄嗟に、神尾晴子は振り向いた。

「居候——!?」

二人の姿。膝を付き、深紅に染まった右肩を押さえる男。仲間の国崎往人。

もう一人。天沢郁未。狐につままれたような顔で、右手の方へ駆けていった。

何があった? 状況を理解するより早く、隣から

少女が駆け出している。
神尾観鈴だ。当然ながら、晴子も自分の娘に続いた。
「往人さんっ――」
「居候、どないしたんやっ！」
「撃たれた――くそっ」
黒いシャツは、袖まで血に濡れていた。傷は二つ。右肩の、前と後ろ。貫通している。
紅い肉。血を吹き出し続けるその傷口に、観鈴は一瞬気を遠くする。だが、倒れてる場合ではない。
そうだ、止血。
布が要る。……当然、布など無い。服を破る他には。
早速、制服のスカートを引きちぎ――
既に晴子が袖を破っていた。右の袖を。観鈴は何となく、うなだれた。
硫酸で焼けた傷口が見えた。思わず、目を逸らした。脇の上をきつく縛り付ける。往人は、痛みを感じない。
「……我慢しときや」
痛くないけどな。
血は止まる。縛り付けられた右肩は迂闊に使えない。失血死よりはマシ、か。
「ったく、あいつらもけったくそ悪いことしよってに。……居候、銃借りんで」
「……おい、勝手に使うなよ」
「一発ぐらいなら変わらんわ」
ベネリＭ３を晴子が握る。重い。手に掛かるずっしりとした感覚。
鉄の重み。それは確かな「強さ」を伝えてくれた。これなら。
「敵が、何処にいるかは、分からない。注意しておけ」
「――？　敵なら、目の前におるやろ」
事も無げに。晴子の言葉に、往人は顔を青ざめた。まさか、お前。

あの少年が撃ったと思ってるのか――？
「ほら、あのガキならそこに転がっとるわ」
やっぱり、勘違いしてやがる。くそっ！
「晴子ッ……ォッ！」
声を出した。――突然、右肩の傷が激痛を。……息が、吐けない！
「往人さん、じっとしてて……後で、ちゃんと診るから。ね」
「……観鈴」
ああ、観鈴……聞いてくれ。聞こえるか？
……声が出ない。
痛い。痛い。くそ、傷が熱くなってきた。さっきまで痛くなかったのに！
晴子が、立ち上がる。観鈴も立ち上がった。……いつの間にか、往人は倒れている。目は虚ろ。
ショックで知覚出来なかった痛み。戻ってきたそれは、彼の精神を叩き潰す。
暗くなる。まずい。気を失ってはまずい。言わなくては。伝えなくては。違うと。
違うんだ。あいつは。あいつは、撃ってはいないんだ……！
……伸ばした手が、落ちた。
「……往人さん」
「観鈴、構えとき……アンタが頑張らんと居候が死ぬで」
「……」
唇を噛む。歯痒さ。どうして、こうなるのか？
誰も傷つかないで終わる筈だった。共に行けずとも、それだけで十分だった。それなのに。
裏切るだなんて――。
シグ・ザウエルショート９㎜の銃口が持ち上がる。
狙うは、目の前の二人。
――撃てるのか？　いや、撃たなくては。……護る為に。
銃口は、かたかたと揺れている。
対して。ベネリM３の銃口が揺らぐ事は無い。

ゆらり――。少女が立つ。まるで幽鬼の様に。
――包丁持っとるわ。鬼よか山姥っちゅう方がベターやな。
晴子を見た。続けて観鈴を。観鈴の銃を。晴子の銃を。往人の肩を。
酷く、明確な殺意を込めた目。本性を現したか。
晴子が、一歩、前に出た。途端、吹き付ける、まるで風の様な殺気！
髪が後ろに流れるかのような錯覚。背中が冷や汗で滲む。おぞましい。山姥の方がよっぽどマシだ。
「あんたが――」
包丁の刃が返る。日の光を浴びて、銀の光を、妖しい光を、日に返す。
ただの包丁が、鋭いナイフか刀の様に見えた。
……あれに千切りにされるより早く、散弾を叩き込むには？
打開策は考えつかない。しかも、疑問はもう一つ、やってくる。
「あんたらが、撃ったのね――？　最っ低……最初からっ、このつもりで……！」
……。は？
思わず、そう返しそうになる。何言うとんねん、こいつ。
「……逆恨みもええとこやわ。人のツレの肩、ブチ抜いてよぉそんなん言えるなっ！」
「――ふざけんじゃないわ。私達、銃なんて一丁も持ってないのよ」
――下手な嘘を――。
郁未が前に出る。晴子は、反射的に一歩だけ下がった。観鈴達もそれに呼応する。
さらに一歩。下がる。
一歩。下がる。その度に、少年の姿が少しずつ遠ざかっていく。
なるほど。セコい作戦やわ。
次の一歩――の前に、ベネリM３の銃口が郁未を

捉えた。観鈴が、目を見開いた。悪いが、無視。
「はっ！　嘘吐きは、コソ泥の始まりやで」
コソ泥には、地獄行きの切符をくれてやる。

634　赤い瞳のレミィ

——時はわずかに遡って。

（ステイツでは……）
レミィは考えた。
誘拐された人間と再び生きて逢うことのできる確率が極めて低かった。
つまり、誘拐された人間は様々な交渉の末、結局最終的には殺されてしまうのだ。
もちろん、ここはアメリカではない。
しかし、ここはそれ以上に危険な島だった。
北川を一刻も早く探しだし、合流しなくてはならない。
これ以上、大切なものは失いたくなかった。
ましてや、レミィにとって北川は今、最も大切な存在だったのだから。
残された血の跡を必死に追い、そして見つけたこの小屋。
この小屋の中に北川が居るかもしれない。しかし、必ず北川が居るとは限らない。
無謀な行動で、自らの命を危険にさらすことにもなりかねない。
けれども、『自分が躊躇している間にジュンの命が失われてしまったら……』と、レミィは思った。
「一か八か……やってみるしかないヨ」
二度と大切なものを失うことのないように。
『自分がどうかしていればそれを失うことなどなかったかもしれない』などというような、そんな後悔を味わうことが無いように。
相手が複数いることを想定して、レミィは考え得る限りの作戦を立てた……。

そして潜入を試みた。

――現在。

「動かないで！　動くとこの電動釘打ち機がユーの頭をぶち抜くネ!!」
澄んだ蒼色をしていたその瞳を、赤く血走らせてレミィは言った。
結花は銃を握っていたはずの右手を見やる。
そこには空になった自分の手があるばかりで、銃はドアに引っ張られたときに取り落としてしまっていた。
「中に、ワタシの探している人がいるかどうか、見るだけヨ」
そういって、結花に釘打ち機を突きつけたまま、レミィは体を小屋の入口前に移そうとした。
「ジュン!!」
北川の姿を認め、歓喜の声を挙げたレミィ。
「レミィ!!」
北川も、やや意外だったレミィの状況――結花に釘打ち機を突きつけていることだ――に驚きつつも、この再会に喜びの声を上げた。
直後、レミィは背後の草むらから何か物音がしたのに気を取られ、一瞬だけ結花から目を離した。
草むらから顔を出したのは野ウサギだった。
「What's!?」
レミィの一瞬の隙をついて、結花が拳銃に手を伸ばそうと駆けた。
「Freeze!」
レミィの制止の声を、結花は聞かなかった。
「Freeze!!!」
結花の手が拳銃に間もなく届く。
レミィはついに引き金を……引いた!!

635

あたし達の決意

　もともと、これと言って決定的な打開策があるわけでもない。会議は進まず、七瀬彰は席を外した。
　残る全員が腰掛けている輪から少し離れたところで、愛刀と共に壁に寄りかかりながら、晴香は見るともなく各々の反応を見ていた。
（ちょっと早いけど……頃合い、ね）
　つい、と七瀬に視線を投げかける。しばらく場の雰囲気に飲まれて下を向いていた七瀬だが、ふとした拍子に目が合った。
　あたしは七瀬の視線を受け止めると、当り前のように頷いた。七瀬は少しばかりの迷いを残していたようだが、やがてはっきりと頷いた。
「ちょっと、いいかな？」
　刀を拾い、輪の中に入っていく。
　蝉丸さんが整備したもので、まだ返却していないものや、使えないと思われるものが、輪の中央に積んであった。
　あたしは別に、刀でなくてもいい。剣捌きが上手いわけでもないから、近付いたときに使えるものなら何でもいい。できれば銃器がひとつあると、なおいい。
　そう考えながら、マナの大ぶりなナイフを手に取る。
「これ、あたしたちが持っていってもいいかな？」
　何気ないふりをして、聞いてみた。
「構わないが……あたしたちが持っていく、とは？」
　蝉丸さんが睨みつける。
　さすがにごまかしは効かないようだ。ナイフを捨て、肩をすくめながらも、更に希望を付け加えておく。
「できれば銃も欲しいし、ナイフよりも……あなたの刀のほうが、いいんだけどね」

怒っているわけでも無さそうだが、厳しい顔のまま蝉丸さんは予測する。
「……つまり彰くんに続き、七瀬くんと共に離脱する、ということか？」
すばらしく的確だ。離脱するとは言え、見殺しにしたいわけではないだけに心強い。
「留美ちゃん？　……どういうことだい？」
耕一さんが眉を顰めて、七瀬に尋ねる。今度は迷いを見せることもなく、七瀬は答えた。
「高槻の言っていた潜水艦……探してみようと、思うの」
ざわ、とほぼ全員が反応した。信用できない人間の言葉を信じて、在るかどうか解らない物を、探す。
確かに批難されても仕方ないのかもしれないが……。しかし、意外な人物が行動で賛成してくれた。
「持って行くがいい」
ひょい、と七瀬に向かって投げられたそれは、刀だった。鞘に入っている状態では解らないが、抜けば緑色の怪しい光をたたえた刀だ。
「……恐らく毒が塗ってある。気をつけて使えよ」
周囲の驚きをよそに、蝉丸さんは淡々と解説する。
「ニューナンブM60、中華キャノン、彰くんのサブマシンガンなどは弾切れだ。七瀬くんのショットガンも残弾一発な上に、歪みが入っているので、念のため使えない山に置いてある。鉄パイプも粉砕してしまったし、もちろん金ダライやハリセンも使えないものだな」
「そりゃそうね」
「ジッポライターとダイナマイトは、大掛かりな破壊活動をすることになれば必要になるだろうから、残しておいてほしい。レーザーポインターは……合図にでも使うか？　銃器は初音くんのワルサーP38、葉子くんと俺のベレッタM92F、マナくんの銃は……これに載っていないが、彰くんがグロック26とか言っていたと思う」
アイテムリストで確認しつつ、銃器の型式からハ

リセンまで説明するあたり、軍人というのは神経質だ。
とりあえずレーザーポインターを七瀬に渡してもらい、銃に目を向ける。少しだけ考えて、いや……もとから欲しかった銃がひとつ、ある。
「……初音ちゃん？」
「……え？」
「初音ちゃんの銃、いいかな？」
それは、良祐の銃。
そして、七瀬の友人を撃った銃だ。

「じゃあ、葉子さんをよろしくね」
「ああ」
耕一さんが苦笑いをする。七瀬とお別れの言葉を交える姿を見ながら、あたしは考えた。きっと耕一さんにも、やりたいことはあるのだろう、と。
（でも、あんたは、初音ちゃんを放っては行けないでしょう？）
……言うまでもないことだったから、黙っておく。
「千鶴さん達に会ったら、俺達は元気だと伝えてくれ」
「うん、わかった」
彼らには、守るべき仲間がいる。だから、自由なあたしたちが積極的に動くべきなのだ。
「助言と、頼みがある」
いつのまにか蝉丸さんが横に立っていた。彼のおかげで大きな反対にあわずに、あたしたちは出発する事ができる。もちろん耳を傾けたのは、それだけではないけれど。
「もし会えたら、だが……御堂という男がいる。危険な男だが、頼りになるはずだ。徒（いたずら）に挑発しなければ助けになるかもしれん。それと怪我人が出たので待ち合わせには遅れる、と伝えて欲しい」
「ええ、わかったわ」
そうした予定など、あたし達には何もない。だから、あたしたちは振り返らずに行くことができる。

最初に高槻達の死体を調べ、そこから何か解らないかを考える。方針はそれだけ。あたしたちと一緒にいた仲間は、みんな、みんな死んでしまったから。
だから、あたしたちだけで道を切り拓いてみせる。
それは命を賭けた、博打かもしれない。
あたしは……いや、あたしたちは、きっと勝ってみせる。
そして最後に、笑ってみせる。

636　もう、届かない

ビスビスッ!!
奇っ怪な、何か肉を刺すような音が響いた。
「あ……」
「な、な……」
ゴトリ……何かが音を立てた。
「な……なにしてんだよ！　レミィ!!」
「アッ……」
幸せは、手の中から逃げていってしまった。
こんな島でも、確かに心を拠らせることのできた暖かい場所。そんな幸せが逃げてしまっていったことが、あまりに悲しくて。
取り戻そうと、もがいた。
「どうして……なんで!!」
北川の絶叫が響く。
「ジュン……ワタシ……ワタシ……」
声の聞こえた方へ、目を向けると、そこにはレミィが望んでいた場所が広がっていた。
「何で、こんな……」
祐一の声が、どこか遠く聞こえた。
幸せは、形あるもの。だから、いつだって取り戻せる。探して見つければ、いつだって幸せは手に入るものなんだ、と。
レミィは思った、思っていた。

飛び立っていった青い鳥も、必ず取り戻せると信じて。
「いきなり……撃つなよっ！　なんでっ！」
祐一と北川からは、ことの一部しか目撃できなかった。レミィが小屋へ侵入し、結花に狙いを定め、そして逃げようとした結花を躊躇なく撃った。
それは悲しいすれ違い。……それでも、結花が撃たれ、倒れたことはまぎれもない事実。
「あ……ワタシ……ワタシ……」
形のあるものは、すべて壊れてしまう。

ドン！
銃声が響いた。
「ア……」
「ガハッ……」
息も絶え絶えに、最後の力を振り絞って。
胸から真っ赤な血を滴らせた結花が、レミィに銃を向けていた。

「あんた……なんか……に……」
「ア……ジュン……ワタシ……」
「れ、レミィ！」
腹を押さえて、一歩、二歩、扉の方へと……
ドン！
また、銃声が響いて、レミィの背中が跳ねた。
「結花に……何するのよぉっ!!」
震える体で振り向いたら、小さな女の子の影。
スフィーの瞳の中には、銃を構えて立ち尽くすレミィと、血を流して倒れている結花の姿だけが映っていた。
幸せは、形なんてなかった。
青い鳥がいたとしても、幸せになんかなれやしない。
北川を一瞬だけ見て。
（幸せは、私達の心の中にいるんだヨネ？　ジュン……）
形あるものはすべて壊れる。幸せに形なんてなか

ったから。
幸せは手の内に仕舞ってしまえば、ずっと壊れることなんてないと、思っていた。
だけど、幸せが壊れるのは一瞬だった。
(ジュン、ワタシ、幸せだったカナ？　……ワタシはね、幸せだったたって……)

――――レミィーーっ!!

暗転する視界の中、最後にそう聞こえた。
それは、ワタシの求めていた幸せのかけら。

九十四番　宮内レミィ　死亡
【残り25人】

637

美しき破壊神　再び

オオオオオオオオオオオオォ……

空気の流れる音だけが響く渡り廊下を進む三人。
目指すはこの先にある倉庫だ。
「ねぇ、何で倉庫なんかに行くのよ？」
「……周りをよく見てみろ。警備の兵どころか人っ子一人いねェだろ？」
「そんなの見れば分かるわよっ！　だいいち、それと倉庫、何の関係があるのよ！」
詠美の問いに答えたのは繭であった。
「これはあくまで私の憶測だけど、警備兵のほとんどがマザーコンピューター周辺に集中的に配置されているの……だから、他のフロアの警備が手薄なのよ。つまり、この先の戦闘はさらに激しく、危険なものになる……それを踏まえた上で、オッサンは倉庫で物資を確保しようと考えたのよ、違う？」
今度は繭が御堂に問いを投げかけた。
「あぁ、ズバリその通りだ。ガキの癖に頭の回転だけは速ぇんだな、お前もろぼっとなんじゃねェの

か？」
「その言葉、褒め言葉として受け取っておくわ」
お互いに鋭い視線を交し合う二人……そして、状況把握が出来ていないのが一人……
「？　……イマイチよくわかんないんだけど……」
「お前は理解しなくていい」
「ちょっと！　どういう意味よ！」
御堂は詠美の抗議をシカトし、繭と話し込む。
「で？　オッサンは何が欲しいの？」
「そうだな……とりあえず社で拾った銃と同型のものをもう一丁、予備の弾倉、手榴弾をいくつか……それと、お前らと梓、千鶴、あゆの五人分の銃火器だ。はっきり言ってお前らの武装じゃあ銃弾の餌食になるのが関の山だ。しかも素人だ。拳銃より、機関銃を持たせてやった方が確実だろう？」
「へぇ……オッサン、顔は般若だけど思いやりがあるのね……」
「バッ、バカ！　そんなんじゃねえよ！　ただ、お前らに犬死されるのが胸クソが悪りぃだけだ！」
「あらそう……どうでもいいけど詠美ちゃんが沈んじゃってるわよ」
それを聞き、御堂は視線を詠美に移す。詠美は二人から少し離れたところをトボトボ歩いていた。
「ふみゅ～ん……いいもん。どうせあたし……バカだもん……」
「……ったく、面倒くせぇ奴だ」
御堂は自分のディパックから桃缶を取り出し、いつものナイフで蓋を開ける。
「ほらよ、これやるから元気出せよ」
「……え？　でもこれって、アンタの分なんじゃないの？」
言葉とは裏腹に、詠美の顔には『マジで!?　らっきー！』と書いてあった。
「そんな事ぁどうでもいい、お前に拗ねられるよりはマシだからな。ホレ、早く食え」
「な、なかなか気が利くじゃない。いいわ、アンタ

がそこまで言うんなら食べてあげてもいいわ、感謝しなさいっ！」
　詠美は桃缶を受け取ると、ウキウキ気分でスキップまででした。
「オッサン、この扉かしら？」
　繭の方を見ると、御堂は見取り図と扉の位置を確認し、彼女はやや大きな扉の前に立っていた。
「あぁ、そこだ。ホラ詠美、着いたぞ。桃缶は倉庫の中で食え」
「そうね、廊下で立ち食いなんか、お行儀悪いわよね♪」
　すっかり機嫌が良くなってる。桃缶一つでここまではしゃぐ人間は彼女くらいであろう。
「扉……開けるわよ」
　扉の青いパネルに繭の細い指が触れる。

　ィイイイ…ン

　扉が微細な機械音と共に開く……その刹那、倉庫の奥の暗闇で『何か』が鋭く光った。
「チッ！」
　反射的に御堂の体が動いた。詠美を抱きかかえ、扉の前の繭の腕を引っ張り、『何か』の視界から離脱させた。
　詠美の手からは、一口も食べていない桃が入った缶詰めが滑り落ち、繭は一瞬、何が起こったか理解できなかった。

　ズダダダダダダダダダダダダダダダダダァン!!!!

　桃缶が銃弾の雨によって跳ねあがり、弾け飛び、ズタズタに引き裂かれた。
　……あの時、御堂が警戒を怠っていたら、彼らがああなっていただろう。

　チリンチリンチリーー……ン

俳莢された薬莢が倉庫内部の床で踊る音がする
――機関銃での攻撃だった。
「奇襲……失敗……シマシタ」
聞き慣れた事務的な声が響く。
……間違いない、アイツだ。
御堂は腰の愛銃を抜き、身構える。
「あたしの桃缶……」

御堂からもらった詠美の桃缶　死亡
【桃缶全滅】

638　スカイブルー

「それじゃ、行きましょうか」
「そうね」
私達は高槻達の死体がある場所へ向けて出発した。
何か手がかりがあるといいんだけど。
「ねぇ、晴香。何か手がかりあると思う？」
「まぁ、無かったらその時はその時よ」
「ま、それもそうね」
晴香とそんな軽口を叩きながら歩いていた。
ふと空を見上げてみた。
青い空。流れる雲。まぶしい太陽。
まるでこの島で起きてることが嘘みたいに穏やかな空。
それでも今の状況は現実でその証拠にあたしのトレードマークだったお下げはもう無い。
いつも折原にいたずらされて、それでもちょっとだけ構ってくることが嬉しかったあの頃。
もう、取り戻せない日々。
『浩平を守ってあげられる七瀬さんのことがうらやましいよ』
そう言ってた瑞佳は最後に折原のことを守って死んでしまった。その折原もここに来る前に同じクラ

スだった里村さんに殺された。
里村さんを恨んでいないと言えば嘘になる。
もしあたしが里村さんのことを話していればあいつは死なずに済んだかもしれない。
それでもあいつは言っていた。
『……すまない七瀬、茜を許してやってくれよ……』
分かっていたことだけど、あいつはやっぱりバカだった。自分のことよりも他人のことを優先するバカだった。
ナイフで刺されたのに自分のことよりも里村さんのこと、そしてあたしのことを気に掛けていた。
「どうしたの？　七瀬？」
隣にいた晴香が声を掛けてきた。
「ううん。何でもないわよ」
「そう？」
そう言って晴香はそれ以上何も聞いてこなかった。
そんな晴香の優しさに今は甘えることにした。
あいつの言葉を思い出す。
『柚木詩子とそれから祐一ってヤツを探してくれ』
『茜を頼むって伝えてくれよ、俺じゃどうも駄目みたいだ……』
今は無理だけど、もしどこかでその人達に会えたらちゃんと伝えなきゃね。
それが折原の最期の頼みだったんだから。
繭のことも見つけられたらいいな。
どこかで泣いてないといいけど。
ひょっとしたら繭はあたしのことが分からないかもね。だっていつも繭が引っぱっていたお下げはもう無いから。
代わりに折原がくれた瑞佳のリボンをつけてるけど。

もう一度空を見上げてみる。
どこまでも高く、すいこまれそうなほどに純粋な青。
もし天国がこの空の上に在るとしたら。
折原と瑞佳はあたしの事を見守ってくれてるのかしら。
二人ともバカがつくほどお人好しだったから。
それとも見ているこっちが馬鹿馬鹿しくなる会話を繰り広げてるかもね。
安心しなさいよ、二人とも。
あたしは大丈夫だから。

「七瀬、もうすぐ着くわよ」
晴香に声をかけられてあたしは現実の世界に引き戻された。
さあ、感傷に浸るのはここでおしまい。
センチメンタルな気分に浸るのも乙女って感じで悪くは無いけれど。
そんなことは帰ってからでも出来る。
今は晴香と、そしてこの島で知り合ったみんなと生きて帰るために。
失った日常はもう取り戻せないけど。
それでもこの非日常の世界から抜け出すために。
自分に出来ることからやっていこう。
『お前は生き残ってくれよ……七瀬』
分かってるわよ、折原。
なめないでよ！
七瀬留美なのよ、あたし！

639　凶弾の正体は

「はっ！　嘘吐きはコソ泥の始まりやで！」
その声と共に、ベネリM３から幾重もの銃弾が吐

き出される。
ドン！
だが、その弾丸が屠ったものは郁未ではなく、ただの——地面。
「クッ！　何処に消え——」
ヒュン！
一瞬、空気を裂く音が聞こえた後、晴子の左腕には、いつの間にか移動したのか、死角に立っていた郁未の包丁が深く突き刺さっていた。
「あぐあっ……」
「お母さん！」
腕を抑え、苦痛に顔を歪ませる晴子。
母の腕に刺さった包丁に驚く観鈴。
二人の注意は完全に郁未から外れていた。
（今だ！）
そのまま少年の所に駆け、その体を持ち上げ、肩に担ぐ。
（うっ……やっぱ重っ……）
それなりの体格とはいえ、やはり担いでいる対象は男、郁未にとって少年の重さは予想以上だった。
（でも……そんな事言ってらんないわ……早くこの場を離れないと）
確かに、少年を傷つけたあの三人は郁未にとって殺してやりたい程憎い、だが考える。
向こうの武器は、ショットガンと銃が一丁ずつ。
それに対してこっちは頼りない包丁一本。
不可視の力が使えたら何とでもなっただろうが、この島でそれは無理だ。
ならば残された選択肢は一つ。逃げることだ。
そのためには、何処でもいいから一撃で相手が混乱するようなダメージを与える。
だから最初の一撃を躱し、唯一の武器でである包丁を投げてでも相手に『当てる』必要があった。
そして偶然か、思い通りに事が運んだ。
一気に攻めればそのまま三人を倒せたかもしれなかったが、今の状況で『賭け』ともいえる行為はす

るべきではない。
　自分達にとって一番重要なのは、逃げ出すことなのだから。
（覚えてなさい……必ずこの借りは返すわよ……）
　少年を担ぎ、そのまま力の限り走りつづける。
「アカン!?　あいつらトンズラする気や！　……追わんと――」
「ダメだよお母さん！　まだ血も止まってないんだよ！」
　立ち去ろうとする二人を晴子は必死になって追おうとするが、いかんせん腕の痛みが酷い。
　少し動かすだけで、焼けるような痛みが走る。
　それを見ても観鈴は、ホッとしていた。
　誰も死なないことに。
　母がその手を汚さなかったことに。
「うっ……ぐう……」
　その時、肩の傷を抑えながら往人が目を覚ました。
「往人さん。大丈夫？」
　心配そうに観鈴が顔を近付ける。
「ああ……無事だったか、二人とも」
　どうやら痛みのために往人の意識は覚醒したらしい。
「俺の事より晴子、その傷は、まさか!?」
「そのまさかや――女の方にやられたわ」
　見当外れの返答に往人は頭を抱える。
「馬鹿な、最初の銃弾は――ってオイ！　あの二人はどうした!?」
「そこにおるで」
　百メートルくらい先に、少年を引き摺って歩く郁未の姿が確認できた。
「男の方はまだ意識が無い筈や、追うで！　居候！」
　その声に対し、
「バカ！　何言ってんだ！　アイツが起きてないって事は――」

そう、まだ郁未は気付いていない。彼らに向けられた本物の殺意に。

「ハア、ハア、ハア……」
息を切らせながらも、郁未は走る。
(もう少し……あとちょっと！)
前方に見えるのは、深い森。
見れば、あちこち植物が生い茂ってる所だ。
植物に紛れることができれば、追跡を撒くのも難しくはないはずだ。
(このままなんとか逃げ切ってみせる……！　絶対追いつかれるものか！)
森まであと十メートル。
ふと三人のほうを見ると、こちらに向かってきているようだ。
(もう遅い！)
あと五メートル。
銀髪の青年が走りながら何か叫んでいる。
何を言っているか良く聞こえなかったし、聞く気も無かった。
あと一メートル！
(やった！　勝った！)
郁未の口元に笑みがこぼれた。
その瞬間。

ズガガガガガガガガ！

その音と共に郁未の足に何発か、銃弾が当たる。
「ううっ……」
痛みに耐え切れず、郁未は地面に倒れこむ。
——あの三人に撃たれた？
(違う！　今のはマシンガンみたいな銃！　って事は！)
その時、茂みから男が現れ、困ったような表情を見せる。
「やれやれ、同士討ちを期待してたんだが……。ま

あ、仕方が無いか……」
　手に持っているG3A3アサルトライフルが、不気味な光沢を放つ。
「さあ、絶望と恐怖をプレゼントしてやる」
　少年は未だ、動けない。

640　見敵

　白を基調に、無機質な清潔さを誇っている一室。
　少し前までは、喚くような大声が鳴り響いていたのだが、今ではそこそこの静けさを保っている。
　そこに、三つの人影があった。正しくは二体と一人の影、なのだが。長瀬源三郎と、彼の治療のために派遣されたメイドロボが二体である。
　源三郎への治療行為は実質終了しているのだが、興奮し暴れるため止血がままならず、本来既に施設の維持作業に戻っているはずのメイドロボ達は、いまだに医務室に残留していた。
「もういいと言っているだろうが！　戻れ！」
「声紋パターンエラーにより命令無効です」
　何度か発せられた源三郎の叫びも、ことごとく無視されてしまい、命令すること自体諦めざるを得ない。
（くそっ……御堂が来たところで、こいつら指ひとつ動かさないということか……？）
　忌々しげにメイドロボを睨んでみるが、彼女達は動じることもなく、壁際に立っている。源三郎は腹立ちを抑えるために、目を瞑り心を静めようとした。
　……そのとき。

　ダダダダダダダダダダァン……

　銃声、そして轟音。続いていくつかの騒音が遠く流れてくる。
（ついに、御堂が――！）
　慌てて自動扉の覗き窓から外を窺うが、誰もいな

いようだった。
ここに来て、何度うろたえただろうか？　競馬の対象と変わらなかったそれが、今では明確な恐怖の対象として近くにいる。
人間が馬を追い抜けるだろうか？　自問してみる。……無理な相談だ。しかし、追い抜かなければ命はない。手に握り締めた、忌避すべきものだけが、彼にとって最後の希望だった。

「千鶴さん、今の音……!?」
「まったく、顔の割に派手なおっちゃんだよ……」
別れて間もなく、御堂さんはどこから見つけたものか、戦闘相手に遭遇したようだった。時に断続的に、時に連続して、不快な低音が施設の中を駆け巡っている。
「わたしたちも、急ぎましょう」
位置的に、倉庫へたどり着く方が時間がかかりそうだと予想していたのだが、用心して進むうちに、手馴れた御堂に抜かれてしまったのだろう。かと言って警戒を怠るわけにもいかず、三人は御堂に遥かに及ばぬ速度で歩いていった。
「やっぱり警護がいたのかな？」
「倉庫が、ただの食料庫や物置じゃなかったってことでしょうね」
「例えば？」
梓が気にする風でもなく尋ねてくる。しかしわたしは、今では別行動をとったことを少し後悔していた。
「……例のコンピューターの資料とか、それとも島のデーターが保管してあるとか。施設の位置が明記されていれば、かなりの重要資料だろうし。詠美ちゃんや繭ちゃんが持っていたようなＣＤ媒体なら、あってもおかしくはないでしょう？」
「そっか」
「兵士詰め所がないから、装備品自体は少ないのだと思うけれど、武器もあそこにあると思うしね」

だからこそ、御堂さんに行ってもらったのは正しい選択だったと思う。
……全員で、行くべきだったかもしれないけれど。
千鶴達が医務室についた頃、気が付けば銃声は聞こえなくなっていた。おそらく倉庫での戦闘が、終了したのだろう。
（何も、なければいいけど……）
そして、一呼吸。
ようやくたどり着いた医務室にある自動扉の覗き窓から、中を窺う。メイドロボが見えるが……非武装だろうか、手に包帯を持ったままなのが見て取れた。
心に巣食う不安を祓って、目前の対象に意識を集中する。
「いくわよ」
小声で、短く一言。応じて梓とあゆちゃんが頷く。
タイミングを計って突入しようとした、まさにその時。
横に開くはずの自動扉が、強烈な金属音を響かせて、私のほうへと吹き飛んできていた。

641　殺人

ドガガッ！

短い衝撃音と共に、注視していた扉と、千鶴姉が同時に視界から消える。
振り向けば、ラグビー選手の体当たりでも受けたかのように、廊下の反対側近くまで吹き飛んだ扉の下に、千鶴姉が倒れている。
「千鶴さん！」
あゆが駆け寄る。
あたしは、振り向く。
振り向いた先には……鬼が、いた。
「なっ!?」

よく見れば、鬼ではない。
しかし膨張した筋肉と、狂ったような殺気が連想させるものは、まさしく鬼の雄性体だった。無造作に振り上げられる右腕を、棒で押さえる。
……いや、押さえようとして、そのまま両腕ごと万歳するように跳ね上げられる。危うく棒を投げ飛ばしそうになりながら、あたしは無様に後ろへ転がった。起き上がったときには、間合いを取ることすらままならず、既に相手は目前まで踏み込んでいた。今度は左脚が唸りを上げて飛んでくる。直撃すれば今度は天井まで飛ぶかもしれないな、などと頭のどこかで考えながらも、体はまったく動かない。
(くっ！)
衝撃に耐えるべく、どうにか身体を緊張させるが……
バシン！
……衝撃はなかった。
またもや、扉が飛んできていたからだ。千鶴姉が鬼へ向かって投げ飛ばしたために、攻撃が止まったのだ。勢いは先ほどのものより段違いに弱いとはいえ、無視できない程度の威力はあったようだ。
扉が落ちる虚ろな音か鳴り響き、一時の静寂が訪れる。
「長瀬……源三郎さん、ですね？」
「御堂かと思えば……貴方達でし・でしたか。な・何故、いい・生きて生きて生きているのですす・すか？」
冷静な思考と、暴走する身体がせめぎ合うように、不気味な台詞を繰り出してくる。ひび割れささくれた添え木と、千切れながらも纏わりつく包帯が、鬼の体毛のようでもあった。
「あなたに、教える必要は……ありません」
その言葉が合図だったかのように、再び緊張感が高まり、二人は正対する。

オヤジの右側にあたし。千鶴姉の斜め後方にあゆ。
あたしは、無言であゆに発砲を促す。殴り合いを始めてしまえば、銃の出番はほとんど無いが――今なら、当たる。
「うぐぅぅぅぅ……」
銃を手に、あゆは低くうめいて震えていた。
(やっぱ、こんなんでも人間相手は無理か……)
銃をあゆに持たせたのは失敗だったかもしれないな、と苦々しく反省するが……一方であゆに人殺しをさせたくないと思う矛盾もあった。
「ぐおおおおおおっ!」
吠えるように叫んで、オヤジは千鶴姉に襲いかかった。繰り出した右腕の下に潜り、脇から外へ抜けながら切り裂く千鶴姉。
「さすが!」
的確な速さに感心しながら、あたしは怯んだ相手の顔面に棒を叩き込む。
もんどりうって転倒する化け物。

「……どうだ!?」
そのまま様子を窺いつつ、二人で軽く攻撃を放つが、あまり効果がない。そして起き上がった時には……出血がほとんど収まっていた。
「そこまでして……」
「信じらんない……」
二人で驚き、呆れる。
「こここ・殺す! 貴様らも! みみ・御堂も!」
潰れただみ声と、ふいごのような呼吸音を撒き散らしながら、オヤジが突進してくる。
千鶴姉が爪を振り、太腿の筋肉を斬りながら右にかわす。
あたしは左にかわしながら、即頭部を痛撃してやるが、わずかに揺らいだに過ぎない。
ぐらり、と崩れたバランスを取るために、向きを変え踏み出した足の先には……

……あゆが、いた。

「ここ・小娘！　貴様からだ貴様からだ貴様からだ!!」
貴様からだ！　と連呼しながら。
泡を吹いて再び突進するオヤジが、あゆの目前に迫る。
「ぅぐ！」
目があって硬直するあゆ。
「あゆちゃん！」
千鶴姉が叫び、突き飛ばす。かわりにオヤジは千鶴姉を横から捕らえ、そのまま両者ひと固まりとなって壁に激突した。
ずだん、という地味な衝撃音から、速度を落としたのが解ったが……千鶴姉は完全に捕まっていた。
「……か……は」
ぎりり、と引き絞る音すら聞こえてきそうな、強力な締め付けに声すら出ない。
「このおっ！」
あたしは背中から棒で殴るが、どうやら蟷螂の斧でしかなかった。
「……あ……熱……」
化け物じみた治癒能力が、熱気と激しい呼吸を導き出している。距離を置いたあたしにまで、熱気が伝わっていた。
そこから予想される怪力で抱きしめられては、遠からず内臓や骨がやられてしまう。解っていても、何も出来ない。無力さを嘆いても、何も起こらない。
それでも、叩くしかないあたしの背後から、声がかかった。
「あ、梓さんっ！」
振り向けば、そこに。
あたしは驚いて身を伏せる。

タタタ！
タタタタタ！

軽い連射音が二回。

オヤジの背中にばらばらと弾丸が吸い込まれていく。そして、化け物は千鶴姉を抱いたまま、膝をついた。
しかし、倒れはしない。
「くっ……」
苦痛にうめく千鶴姉。
「う、うううう！」
あゆが涙目のまま、引き金を絞る。
再びタタタ、と連射音が響いて……
……ようやく、腕がほどけた。
のろのろと千鶴姉は身体を引き抜き、爪を振りかぶる。もはや動かないであろうオヤジの首を、深々と、そしてゆっくりと切り裂く。
大量の血が、ポンプで放ったように跳ね飛び、あたしたちは熱湯のような返り血を浴びた。
「うぐうぅぅ……」

銃を構えたまま硬直しているあゆちゃんの方へと、わたしは歩いていった。
「源三郎さんは……死んだわ。殺したのは、わたしよ」
人を殺す、という恐怖を乗り越える前に行動してしまった代償として、彼女は錯乱していた。
「あゆちゃん、銃を——おろしなさい」
血塗れのまま微笑んでも、恐ろしいだけかもしれないけれど。それでも、わたしのために戦った彼女を、救ってやらなければならない。だから、痛む身体を黙らせて、わたしは手をさしのべる。
あゆちゃんがぽろり、銃を落とす。
「うううううっ！　ち、千鶴さんっ！」
そう叫ぶと、がば、と抱きついてきた。
よくよく——抱きつかれる日のようね、そんな風にぼんやりと思った。
やっぱり身体は痛かったけれど。

苦痛では、なかった。

長瀬源三郎　死亡

642 end of the breakdown

闇は深く。
それはまるで、海の底の様。彼は一人、漂っている。その中を。
――鼓動。それは深い闇に、延々と響く。
〝それ〟は不可視の力。抑えきれぬ破壊の力。
溜まりに溜まった暗黒。それは今、彼の身体を壊さんとしている。限界が近い。
どうせ、長くは保たない。分かってる。そんな事は。
――一人ならば。押し寄せる崩壊の予感に、とうに気が狂っていただろうか？
だが今は。狂ってはならないのだ。誰の為でもなく。彼女の為に。

――どくん。

微かな〝うねり〟。闇は蠢く。
何かが始まった。それは彼自身も聞いていた。闇も。
スガガガガガガガッ――
聞こえる。遠くから。水の中から聞くように。
銃声。それと、悲鳴。悲鳴だったが、聞き慣れた声。郁未だ。撃たれたのか？
参ったな、助けないと……。

――どくん。

外に出んとする。闇はさらに蠢いて。
力を抑える方法。それは己ごと封じる事。眠る様に。

だが、今はそれどころではない。郁未が危ないのだ。起きなければ。
だが、起きるということは。つまり――
――これで。これで、最後かもしれないってことかな？
力が彼と同化する。交わるように。
……ああ。本当は、君と一緒に出るつもりだったんだけど。すまない、郁未。
外が近付いていく。覚醒は近い。
最後に――
厚かましいかもしれないけど――彼女を頼むよ。
国崎君。

微かな、硝煙。火薬の臭いが鼻を突く。
フランクが茂みから姿を現す。本来、殺すだけなら姿を現さずともよいのだが。
理由はただ一つ。彼の目的だ。
少年に絶望と恐怖を与える事――。
恐怖は難しい。飄々としたあの様子。何があろうと恐れはすまい。死んでも、だ。だが、絶望なら？
その為の要素が、今、目の前にいるじゃないか。
天沢郁未――
奴の何かは知らぬ。だが、恐らくは大切な何か。恋人か。それとも。
フランクの顔に笑みが浮かぶ。絶望を与える術。それが思いつく。とても、とても残虐な術。
少年の目の前で、彼女を。
その為に。まずは少年を起こさねばなるまい。蹴るか。それとも撃つか。
天沢郁未が森へと引いていく。少年の身体を引きずりながら。
撃たれた足が痛い。涙目だ。それでも尚、その顔は使命感を帯びて。なんと強い女。

だからこそ、だった。
ズガガガッ！
銃声。四発。その内の三つが、少女の左肩に穴を穿つ。
「うあぁぁアアッ……！」
悲鳴。半狂乱になって、もがく。遠くから、怒号。
そして悲鳴。うるさい。
振り向いて、撃ち放つ。五発。
駆け付けんとする銀髪の男、確か国崎往人、が足を止めた。当たってはいない。
――片手でショットガンは撃てまい？　静かにしていろ。
振り返る。少年は未だに目を覚まさない。これでもまだ、目を覚まさない気か？
そうか、なら、次は右肩でも――
びしっ。
妙な音。それは、まるで、何かが弾けるような。
――びしっ。びちっ。

少年の身体から血が噴き出す。目覚めたか？　しかし、何故血が出るのだ。
――いや。これは？
ぐうううウゥウゥウゥ。
何だ、この声は。待て。〝これ〟は何だ――⁉
「――」
郁未は、声すら上げない。上げられない。
強烈な重圧？　いや、プレッシャー。それは、今立ち上がった者から。
「――イ――ク――ミ――」
声。辛うじて、呼ばれたのだと気付く。……何？
続きが無い。その代わり、溢れんばかりに浮かび上がった、不可視の力が――消えていく。
そして。
「――すまない、郁未」
最後は、酷く静かな声だった。

643　虚無感

物言わぬ肉塊と成り果てた金髪の少女。
それが誰だったかなんて、もはや重要でもなんでもないし、どうでもいい。
大事なのは、結花が撃たれて、倒れた。
それだけ。
血だまりの中を走り、駆け寄る。
「結花……結花ぁ！」
抱き起こし、必死に呼びかける。
その呼びかけに応えたのか、ゆっくりと、あたしの手に、結花の手が重ねられる。
恐らくは、やがていなくなってしまうその人の、最後の……温もり。
だけど、あたしは……あたしは……それを認めたく、ない。
だけど、これは、紛れも無い現実。
自ら吐いた血によって真っ赤に染まった結花の口が、微かに動く。
「スフィー……ごめん……ね……」
普段の結花からは想像も出来ないくらいに、その声は弱々しく擦れてて。
魔法の使えないいまのあたしには何も出来なくて。
どうしようもなく、心の中の絶望感や喪失感が膨れ上がって。
とめどなく、涙が溢れた。
「やだよぅ……結花……死んじゃ……死んじゃやだ……」
ぽたぽたと、重ねた手に雫が跳ねる。結花の瞳が微かに動き、それを見た。
そして結花は、それを見て、笑った。真っ白を通り越して、蒼くなった顔で、確かに笑って、言った。
「私は、魔法も使えなかったし……結局、足手まといになっちゃったけど……これくらいなら、しても……いいよね？」

震える手をそっと、背中に回し、弱々しく、けれどやさしく、あたしを抱きしめる。
「ずーっと……こうしていたいわ……」
いい。ずっと、ずっと抱きしめていてくれてもいい。
そう言いたいのに。嗚咽が邪魔をして、言葉にならない。
「ずーっと……こうしていたいけど……ちょっと、無理……みたいね」
瞬間。結花の口から、血の塊が、一気に吐き出される。
「結花ぁっ！」
「……っ、ごほっ……」
もう、助からない。
だけど、それを認めたくない。
「結花っ！　死んじゃやだよ、結花ぁっ！　……けんたろもリアンも、もういないのに……結花までいなくなっちゃうのは……やだよ…」

結花の眼はすでにあたしを見ていない。もう、殆ど見えてない。
小刻みに震える手が、あたしの頭に乗せられる。
真っ赤に染まったその手で、結花はあたしの頭を撫でる。
そして、
「　　　　　　　　」
その手が、ぱたり、と落ちた。
その声は聴こえなかったけれど。
何を言ったかは、痛いくらい分かって。
あたしは、もう一度、泣いた。もう動かない、その人の胸の中で。
『ごめんね……スフィー……』
あとに残ったのは果てしない虚無感。そして——

焼け付くような痛み。こんなのは、何度も見た。思い出せぬ記憶が訴える。
違う、そんなものは知らない。そう、いつもの様に訴えようとして。
止める。
事態はそれどころではなかった。北川が、立ち上がる。その手に釘打ち機を握って。
「……北川？」
「悪いな、相沢。話は後だ」
祐一に背を向け、言葉を返す。その顔は見えない。泣いているのか？　それとも。
だが、その雰囲気。祐一に、予感めいたものを伝えてくる。これは――危険だと！
「北川、お前まさかッ……！」
「………」
答えない。だが、北川は、迷わず開いたドアから外へ出た。その先は見えない。
その行動は、一つの結論を導いた。

九番　江藤結花　死亡
【残り24人】

644　二つの悲劇、二つの殺意

「レミィ……」
ぽつり、と呟かれた一言。血の香りの中、微かに漂い、消えていく。
北川は、レミィの亡骸を抱えて。泣きもせず、もはや叫びもせず。
祐一は黙ってそれを見ている。縛られてさえいなければ。くそっ。
でも、俺に何が出来るんだ……今の、北川に。
小屋の外からは啜り泣く声。結花を呼ぶ声。何が起こっているのか？
それも、やがて泣き声しか聞こえなくなった。
……死んだのか。
悲劇だった。今、目の前に広がっているのは。

「北川！　北川ァッ！」
　声は届かない。
「お前――あの二人を殺す気なのかっ!?　答えろ、北川っ！」
　――返事は無い。ただ、最後に見た背中は。
　確かに、そう、言っていた。間違いなく。
　泣き声。血の量すら少ないが、状況は同じ。小屋の中と、同じ。
　少女が泣いている。少女が倒れている。それはまさしく悲劇。
　それでも――許す気はない。
「……」
　泣き声は止まった。特に直接何かをしたわけでない。いや、したか。
　釘打ち機は、確かにスフィーの頭を捉えている。それは何かを語る事無く。
　ただ、〝死〟を語る。
「お前が、レミィを殺したのか？」
　淡々と。北川の目には、狂った様子も見られない。狂っていないからこそ、狂ってないとも言える。まさしく、そうなのかもしれない。
　返事は無い。釘打ち機の狙いが変わる。こいつじゃないとすれば、こっちか。それだけの理由で。
　黒帽子は、無表情で北川を見ていた。答えは無い。
「……あたしが撃ったよ」
　声。それはまさしく、スフィーのもの。芹香の危険を、察知したからか。
　釘打ち機の狙いは、また元に戻る。
「結花を撃ってた……。何があったかは知らないよ。でも、だからあたしも、撃った」
「……そうか」
　無表情な会話。ただの事実の確認のように。
　ああ、レミィ。何でお前は撃ったんだ？　撃たなきゃ、お前は死ななかった。
　俺が居ない間に何があったんだ？　……くそっ。

北川の顔が歪む。悔やむ。己が離れてしまった事を。こんな事になると知れていれば、死んでも離れなかった――。
「ひょっとしたら、結花が最初に撃ったのかもしれない。でも、そんなの分かりっこない……。……レミィさんだっけ？　あの人、貴方の仲間だよね」
すぅ、と立ち上がる。地に横たわる、結花の姿。
そして、少女が握るのは――
拳銃。
「俺が、レミィの仲間だから……殺すのか？」
「――芹香さん、下がってて」
答えない。ただ、その言葉は、十分過ぎる程の返事だった。
芹香は、一瞬躊躇ったものの――
「すぐに行くから……」
その言葉で、右手の方へ駆けていった。北川は、芹香を撃たなかった。撃つ気も無い。
静寂。満ちる、殺気。いつ、銃が上がるとも知れぬ、その空気。
――北川！
その中に、一つの声。祐一の声。小屋の中から、空しく響く。
「お前は、レミィを殺した。だから殺す。十分だろ？」
――北川ァッ！
静止を求める声。もはや誰にも届かない。ただ、響く。
スフィーは答えなかった。
――北川、止めろ！　北川ァァッ!!
――皮肉にも。
静止を求める、その絶叫が、合図となった。

645　この狂気の戦場で

銃声と、何か鋭いものが射出されるような音とが、

同時に響く。
「え――」
「な……？」
北川とスフィーが、共に驚愕の表情を浮かべる。
互いが、互いを撃ち殺そうとした。
撃つべき相手は、正面にいる、自分に凶器を向けている相手。
大切な者を殺された、仇である筈だった。
だが――

「……あ……相沢…………」

惚けたように、北川が呟く。
レミィの仇である赤い髪の女を遮るようにそこにいる、彼の視界に写るのは――
いくつかの釘と銃弾をその身に受け、未だ後ろ手で縛られたままの、祐一の姿だった。
「やめろって……言ってるだろ……二人とも……」

呆然とする二人の間で、そう言いながら、ゆっくりと仰向けでその場に崩れ落ちる。
「あ、相沢っ！」
「……」
北川が、祐一に駆け寄る。
スフィーまでもが、拳銃を構えた姿勢のまま、呆然としていた。
殺す筈で撃ったとはいえ、そこに倒れているのは、違う人間。
撃つつもりの無かった相手なのである。
少なくとも、今は。
人はそう簡単に、冷酷になったり、狂気に陥ることはできない。
想像外の相手を撃ってしまったことによって、スフィーの心は混乱していた。
「おい！　相沢、しっかりしろ！」
北川は、自分を殺そうとした少女のことなど気にも留めずに、祐一に呼びかける。

「もう……やめろよ……殺すだの…………殺されるだの……」
掠れるような声で、空を仰ぎながら言う祐一。
もうその瞳は、何も捉えてはいない。
「相沢……」
「訳もわからないまま、疑われて、捕らえられて……人が来ても、また疑って……殺し合って…………そんなの、おかしいだろ？」
北川とスフィーは、まるで独り言のように続ける祐一の言葉を、黙って聞いていた。
「この殺し合いが、強要されてるものなら…………何故、みんなで協力して、打開しようとしない……何故、人を信じようとしない……何故、抵抗しようとしないんだよ……そうしなかったら、この〝殺し合い〟を管理してるやつの……思うツボだろ……」
それは、この狂気の戦場で、皆が忘れていたこと。
いつか死んでいった、白い女性が、己の死と引き換えに、皆に訴えたこと。
祐一が記憶を失ってしまったからこそ、思い出せたこと。
「その現実から逃げちまったらしい俺が、言う台詞じゃ……ないだろうけどな……」
ぼんやりと、視界に広がる空。
掠れて、よく見えない。
遠くから……いや、実際は近いのだろう、北川の声がする。
何を言っているのかは、もう、聞き取れない。
（……どうして、こんなことしたんだろうな、俺は）
祐一は、刹那と久遠が混在する瞬間の中で、ふと思った。
自分だって、命が惜しい。
わざわざ二人の前に出なくたって、止める方法は、あった筈だ。

（……俺は……死にたがっていたのか……？）
そうかもしれない。
なにせ自分は現実逃避して、記憶を失ってしまった程だ。
無意識に死にたがっていたとしても、不思議はないのかもしれない。
（だとしたら……さっきのは、本当に俺が言えた台詞じゃないな……）
祐一は、心の中で軽く笑った。
こんな状況でも、皮肉屋祐一は健在らしい。

急に、今まで出会ってきた人たちの思い出が、心の中をよぎる。
これが走馬燈というものなのだろうか？
（名雪……秋子さん……あゆ…………みんな……）
この島で、未だ〝殺し合い〟をさせられてる、或いは、もう死んでしまったと聞かされた、大切な人たち。

特に、名雪と秋子さんのことを思うと、心が苦しくなるのはどうしてだろう……。
そして……。
（茜……）
祐一は、中学の頃に出会った、好きだった女の子のことを思い出した。
参加者名簿に載っていた、同じ名前。
あの名前が、自分の知っている里村茜と別人であることを、願わずにいられない。
（茜……お前は……違うよな……こんな酷い世界で、殺し合いなんて強要させられないで、今もあの空き地で、待ち続けているんだろ……？）
祐一は、気づかなかった。
心の中に映る茜の姿が、自分の覚えているものよりもずっと、成長しているものだったことに——

「……っ」
スフィーは、涙を流していた。

今、この人が言ったこと。
当たり前の事だったのに――
分かっている筈だったのに――
それを忘れずにいられてたなら――
きっと、結花も、あの金髪の人も、
死ぬことはなかったのに――
そして、この人も――

「相沢！　相沢っ!!」
友人に呼びかけられながら――
「相沢ぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
大切なことを思い出させてくれた、その人は――
「……みんな……負けるなよ………………俺みたいに…………な…………………」
そう言って、ゆっくりと目を閉じた。

一番　相沢祐一　死亡
【残り23人】

646　やわらかな指

中天へと昇りゆく太陽の熱のみが、その場所を支配していた。
じりじりと身を灼く光に晒されながら、言葉を発せぬまま、あたし、スフィーは返り血を浴びたまま呆然と立ちつくす。
嘘みたいに冷たくなった結花のからだ。
そのそばで、不思議と安らかな表情を浮かべて、眠っているかのように倒れ伏すレミィ、という少女のからだ。
(結花を殺した、ぬけがら)
(……あたしが殺した、ひと)
事実を反芻して両の握り拳をぎゅ、と固める。銃はとうに地面に落ちていた。
拾い上げる気は、起きなかった。

祐一と呼ばれていた少年のからだは、もう一人の少年の腕にきつく抱き留められている。
北川というらしい彼の瞳からは、まるで機械のように涙だけがこぼれ続けていた。
逆に、さっきあれほどに泣いたのに、今はもう身体中の水分が吸い取られてしまったように、あたしは泣けない。
瞼が酷く、眩しさで熱いのに。その熱以外の温度は、あたしの中からなくなってしまったみたいだ。
代わりとばかりに脳裏を駆け巡るのは、ただひとつだけの言葉。
(――――こんなはずじゃ、なかったのにね)
そう、こんなはずじゃ。
絶対になかった。
ねえ、リアン。どこからあたしたちは間違っていたんだろう。
結花を、金髪の子を、祐一という少年を、どうして死なせてしまったんだろう。
あなたとはぐれて、南さんを恐れたとき、初めて他人を疑ったときから、何もかもがおかしくなっていたのかな?
舞さんと佐祐理さん、あなたと綾香さんを助けられなかったのを知ったとき？
髪の長い女の人に襲われて、初めて目の前で結花が人を殺すのを見たとき？
それとも……けんたろが死んだんだって知ったときから、あたしは笑顔で不信をごまかすようになったのかな？
あたしたちには、次にするべきことがある。
生き残ること。祐一が残した言葉。意志。
とても簡単なように見えて、とても、むずかしい宿題。
誰も答えを出してはくれない。自分で必死に考え

て、解くより他はない。
今でも、憎くないと言ったらそれは嘘になる。
結花は撃たれた。結花はもう笑わない。おいしいホットケーキを食べられない。
最後のあの店との繋がりを、なくしたくなかったのに。
それを壊した人間をめちゃめちゃにしたいと思う。
けれどそれは目の前で亡骸を抱える北川にしても、同じこと。
あたしを何度殺しても、足りないはずだ。
辺りに立ちこめる濃い血の匂いに包まれて、レミィを殺したあたしはただ立ちつくす。
祐一を殺した北川潤は、ただ涙を流し続ける。
人殺しのあたしたちには、祐一への答えを考えることしか許されない。

――――いつまで？

そう自嘲気味に自分に問い返した、刹那。
がさり。
はっきりと、草むらを踏み分ける音があたしたちの耳に届いた。
芹香が、悲しい瞳をして戻ってくる。
足取りは確かだけれど、唇がごめんなさい、と動いたように見えた。
何もできなくてごめんなさい、と。
そして芹香は、ゆっくりと二人の少年の元へと歩み寄る。
放心したような北川の両目の涙を指でつつっとぬぐって、懐から出したハンカチで更に拭き取る。
優しいしぐさで、何度も、何度も。
「…………」
そのたびに、芹香の口元が動く。
「…………」
また。
「…………」

もう一度。
涙が、完全に拭い去られた。目は真っ赤だけれど、もう頬を濡らす水はない。
それを確認して、芹香の手が移動する。
『ありがとう……あなたのこころ、受け取りました』
一切の澱みのない声で、凛とした表情で言って。
芹香は北川の腕の中の祐一に手を伸ばし、彼の頭をくしゃりとなでた。
くしゃり、くしゃりと、まるで母親が子供にするときのように。
もう動かない祐一を、ひたすらに撫でつづける。
その姿はまるで母親のように見えて、ひどくあたしの胸を刺した。
北川の眼からはまたひとすじ、涙がこぼれていた。

647 Don't say good-bye

「……俺は、相沢と一緒にいた椎名って子を探すよ」
三人の埋葬を済ませるなり、北川は強い声でそう言った。
一度、一軒家で会ったきりの彼女がどうなったのか、北川は知らない。だが、祐一がいない今、彼女の身が心配だった。
さらにあの明晰な少女なら、遺されたこのＣＤについて何か知恵を貸してくれるかもしれない、そう考えたのだ。
芹香の口が、お気をつけて、と言うふうに動いた。
そしてスフィーが、初めて北川に対して口を開く。
「……許した訳じゃないわ。あなたも同じだと思う。だけどね、まだ、死んでなんかやらないから。必ず生き残って、出来ることをやり遂げて、元の生活に

戻るまではね」
頷く。
「お前らも、国崎って奴に頑張って会えよ」
それだけ言って、北川は踵を返して小屋をあとにした。
決して、振り返りはしなかった。

俺、もう一度せいいっぱい生きてみる。
香里の、祐一の、レミィの想いを胸に抱いて、一緒に生きてやる。

彼はまた歩き出す。
道は分かたれているけれども、必ず行き先には何かがあると信じて。

――祐一にも、レミィにも、芹香たちにも。

さよならは、言わずに。

648　舞台裏　～長瀬～

ふと、目が覚めた。
瞬間、彼は今まで自分が見ていたのがただの悪い夢であったか……と儚い想いを抱きかけたが、その期待はあっさりと裏切られた。
ここは彼の寝室でもなければ、見慣れた彼の店の内装、暖かみを感じる骨董の並んだ場所でもない。
どことも知れぬ洋上の島。そのさらに上空に浮かんだ一隻の飛行船。機械に囲まれた無機的な一室。
目の前には、一人で使うにはいささか大きすぎる円形の卓が一つ、仰々しく鎮座ましましている。
全てが始まった頃には六人で囲んでいたその卓も今は彼、長瀬源之助一人を残すのみ。
「……眠ってしまいましたか。いけませんね」
誰へともなく呟く源之助。だが、その呟きを聞き咎める相手は既に誰一人として存在しない。

彼と共にこの殺戮ゲームの管理を担っていた他の『長瀬』の者は皆、自らの意思でこの場所を立ち、それぞれが己の胸のうちに従い、一人、また一人とゲームの会場である名もなき島へ降りていった。
「ふぅ……」
同胞の去りゆく姿を一つ一つ思い出しながら、源之助は静かに深く深くため息を吐いた。

「源四郎殿は、来栖川綾香の死をきっかけとして、己の戦場を求め」

幾度目かになる定時放送が終わった頃だろうか。
長瀬源四郎がおもむろに立ち上がると、そのまま足先を部屋の出入り口へと向けたのは。
「どこへ行くつもりかな、源四郎さん」
と、無音無言のままに場を立とうとした源四郎に目を留め、誰何の声を浴びせたのは長瀬源三郎だ。

その声にぴたり、と足を止め——だが振り向きはせずに、淡々と、そして堂々と源四郎は宣言した。
「私は現時点を以て管理者権限の全てを放棄する」
あまりに無責任に過ぎる突然の発言に、どよめく『長瀬』達。だが源四郎は彼らの動揺を意に介そうともせず、最後に室内を一瞥して部屋を出た。
互いに目を合わせる『長瀬』たち。
「ということは……どういうことだい？」
「管理者を辞めるってことでしょうね、父さんも」
すっかりと憔悴しきり顔の長瀬源一郎の言葉に、やれやれと顎を撫でながら返したのは長瀬源五郎。
その言葉に対しての疑問が上がる前に、源五郎は源之助に向けて次の言葉を放っていた。
「源之助さん、おそらく無駄になるでしょうけれど父さんを追いかけてください。あの人を引き止めることができる可能性があるのは貴方だけだ」
「うむ……そうだな。では、一旦ここを頼む」
頷き、ゆるりとした動作で立ち上がる源之助。

確かにこの場において源四郎に対して意見できるのは、年長者である源之助をおいて他にはいない。
――しかし。
源五郎の言う通り、他人にどうこう言われた所で信念を曲げるような源四郎ではない。
結局それから程なくして、源四郎は島へと降り、傷貌の武人と凄絶な格闘を繰り広げることとなる。

「源五郎殿は、高槻の後任という名目で、施設管理のために」

源之助が源四郎との別離の会話を終え、元の部屋へと戻ってきたとき、場の雰囲気は明らかに先ほどとは異なった、一触即発の緊張状態にあった。
「ああ、戻ってきましたね源之助さん」
その重苦しい雰囲気を意にも介さずに、ただ一人普段と変わらぬ様子を見せているのは源五郎だ。
彼が源之助に追わせた源四郎に関し、言及は一言もなかった。元より彼自身が言っていた通り、説得など無駄であることはわかりきっていた風だ。
しかし、続く源五郎の言葉が源之助を驚かせる。
「僕も島に降りることになりました。すみません」
よくよく見れば、白衣に身を包んだ源五郎の姿は先ほどまで椅子に座っていたときのものではなく、この場を退出する準備を進めていたかの様子。
そして事実、源五郎は島に降りようと言うのだ。
「いえね、先ほど高槻を放逐しちゃったでしょう？　そうなると、どうしたって施設を管理するのに、新しい人が要るじゃないですか」
眉を寄せ、困ったような顔をして――いや、元々源五郎はそんな顔だったか。肩を竦めながら笑う。
「そう提案をしたら、皆さん快く賛同してくれて」
ぎりっ、と歯を軋らせるような音がしたのは気のせいか。場の不穏な空気が一気に膨れ上がる。
確かに賛意は得たようたが、どうやら快く、とは

到底言い難いやりかたで言質を取ったらしい。
「……なるほど」
頷く源之助。ここに来て源五郎の仕掛けた細工を全て理解したものだが、敢えて叱責は飲み込んだ。
代わりに、大きくため息を一つ吐いてから呟く。
「無闇に敵を増やすものではないだろうに」
「憎まれ役は慣れてますよ。それに——」
そう言って、源之助の脇を通り抜け、部屋を出ようとする源五郎。その顔は作り物のような笑顔。
去りゆく背を向けて、源五郎の哀しげな言葉が、源之助にだけ聞こえる程度の大きさで届いた。
「僕のかわいい娘たちは、二度と笑いませんから」

「源三郎殿は、正義感の強さ故に修羅の道を選び」
源四郎が去り、源五郎が去って、それでも長瀬は何事もなかったかのようにゲームの管理を続ける。

いや、何事もないはずはない。
その証拠に、またも席を立つ『長瀬』が一人。
がたん、と大きな音を立て、椅子が倒れ転げる。
「許せませんな……なんて、何て身勝手なのか」
源三郎。普段の飄々とした風体からはらしからぬ憤りを見せ、ワナワナと全身を震わせている。
ダン、と卓に拳を叩きつけ、俯いて呻く。
「今更降りたあの親子が……ここで安穏としている貴方たちが……そして、何より、この私が！」
——ぽたり。
一滴、卓上に落ちたのは源三郎の血か涙か。
そして彼はそのまま足先を出入り口へと向ける。
「行ってしまいますか、貴方も」
源之助の言葉に、それでも彼は足を止めた。
だがそこまで。最早説得が通じる段階ではない。
「源五郎さんの言葉を借りるわけじゃあないがね。あの二人が降りて、私が駄目という道理もない」
そう言い放ち、それでも足は止めたまま。

顔を向けず、背を向けたままで言葉を続ける。
「私は動けなかった。私の部下が、柳川が死んだ、その時に動こうともしなかった。――それが長瀬の責任だから、ってな。ところがどうだ！　来栖川の娘が亡くなった途端に、源四郎さんが、降りた」
ぎり、と、先程聞こえたような歯軋りの音。
身を震わせ、必死に激情を抑えている源三郎。
「悔しかった、羨ましかった……ありがたかった。それでもやはり許せなかった。全て私の身勝手だ」
そこまで言うと、再び歩を進める。
と、その背に声が掛けられる。
「身勝手は、皆一緒だよ」
今の今まで、揃って無言を貫いていた残り二人、その片割れたる長瀬源一郎の声だ。
「俺たちは、だからここにいる。違うか？」
「……喋りすぎました。まあ、これが最後です」
源一郎の問いには答えずに、源三郎はただ、別れだけを告げる。その手には一包みの頓服薬。

「それじゃ失礼。たとえ次に会うことがあっても、私は今の私じゃ無くなっていることでしょう」
そう言って、部屋を出てゆく源三郎。
残された者に、それ以上かける言葉はなかった。

「源一郎殿は、背負った罪の彼なりの精算の為に」

既に三人が去り、残ったのもやはり三人。
無言を貫く残る二人に、源之助が水を向ける。
「源一郎殿フランク殿、お二人も降りては如何か。参加者を爆破するようなことはもうないのだから、減った兵士の分を手伝うくらいはよいでしょう」
もはや『長瀬』に管理者としての枷はない。
各々が、好きなように勝手を決め込んでいた。
だからこその提案だ。
対して、すっと手を挙げる男が一人、源一郎だ。
「悪い。それじゃあ、俺も降りていいか？」

「構いませんとも」
どうぞお降りなさいとの提案に、本当にいいのかと聞き返す。それが彼、源一郎の性格である。
だからこそ彼は、いまだに無言を貫いている最後の一人、フランク長瀬と共に、最後までこの狂ったゲームに反対の立場を取っていたのだ。
島への指示、高槻との連絡、その他諸々の仕事はほとんどが源之助と、既に島へ降りた三名の仕事。
残る彼らは顔を顰めながら雑用をしていただけ。だからといって罪が軽くならないことは、彼らが一番よく知っている。
「疲れたよ、もう。ここで黙って見てる事には」
どっこいしょ、と重そうな腰を上げる源一郎。
力ない足取りで、出入り口へと歩みを続ける。
今更それを止める意味もない。それでも源之助は一つだけ、他の長瀬たちへ掛けたのと同じように、ため息を吐くと共に、一言だけ、声を掛ける。
「まさかとは思いますが、死ぬ気ですか？」
その質問に対し、源一郎は力なく、だがはっきりとした意志を持って首を横に振った。
「源之助さん。俺たちがやってきた事に——自分を裁く権利なんてものが、残ってると思うのかい？」
言葉に詰まる源之助。寂しげに笑う源一郎。
「俺はそこまで傲慢にはなれないよ」
そして源一郎も、完全に部屋の外に出た。
「小言は、戻ったときにいくらでも聞くよ」
「……どうか、言わせてほしいものです」
「そしてフランク殿は、不信と不満、罪悪感が故に全てが許せなかった」
最後の最後まで、フランクは沈黙を貫いていた。
確かに彼は普段から無口である。が、ことここに至るまで無言で全てを見ていたというのは、それはそれで不気味なものがある。

源之助はその視線から明確な不信を感じていた。
「……フランク殿、貴方はどうするのです？」
問いかければ、その不信の視線がぎょろりと動き何を今更、とばかりに彼の反感を明確に物語る。
無言のままに立ち上がるフランク。
「行くよ。その方が都合がいいんだろう？」
ぼそり、と漏れた声は、苦々しさで溢れていた。
源之助に対するその言葉に、同胞への共感は無くただ明確な拒絶と敵意だけがある。
その視線に対し、哀しげな表情を見せる源之助。
だがフランクはそんな彼の様子に眉も動かさず。
「茶番はもうたくさんだ」
「茶番」
ぼそり、と呟いたその言葉に、驚いたように瞳を見開く源之助。思わず息を呑む。
動かぬフランクの表情。それは本気で言っていることを明確に示している。一片の嘘すらない本心。
「この腐ったゲーム、俺は反対したよな。開催じゃない、彰と祐介を参加させることに。俺だけじゃない、源一郎も……だが、認められなかった」
フランクは過去を悔やむように一瞬瞳を閉じる。
「それでも、長瀬だから仕方ないと受け入れていた。それなのに、無責任にも管理を降りる、だと？　これが茶番でなくて、なんだというんだ」
「フランク殿」
延々と無言でいたからこその、溜まりに溜まった怨嗟の言葉。らしからぬ長台詞はそのまま彼の負の感情の深さを表しているかのようである。
そして最後に部屋を出てゆくフランクの、口元。
自嘲するようにぐにゃり、と歪んで。
「……エゴだな」
と、呟いて、そして源之助の視界から消えた。
「…………」
目を開く。そこにはやはり誰も居ない。

源一郎、源三郎、源四郎、源五郎、フランク。
一人一人の顔を思い浮かべつつ、源之助は椅子の背もたれにゆっくりと体重を預けた。
きしり、と椅子がきしみ、電子音だけが響く暗い部屋の内を耳障りにかき乱す。
結局のところ、長瀬たち全員が全員、心の底ではこの企画に賛同などしていなかったということか。
源一郎やフランクだけではない。事実、何人かがいくつかの配給品に細工を加えた様子があった。
そして死地に向かう刹那、覚悟の段に至っての、心情の吐露。フランクは茶番と決め付けていたが。
「疑心暗鬼には勝てない、ということですか」
長瀬が一致団結してこのゲームを止めていれば。
そう後悔するのも、今となってはもう遅い。
遠い目をしつつ、モニターをぼんやりと見つめる源之助。誰かが映っていたり、島の風景しか映っていなかったり、何も映していなかったり。
……それに関してはどうでもよかった。

「自分で死に場所を選べるのは、羨ましい」
うっすらと目を細め、口元を緩める源之助。
その顔は、優しく穏やかで……そして哀しい。
「私はここから決して動きません。動いてしまえば全てが終わる。今までの犠牲の全てが無駄になる」
誰へともなく、ぽつりと口に出す。
あるいは、それは自分への戒め、不退転の決意、言葉という名の呪いというものか。
「私がここにいなければ、皆の何もが無駄になる」
己を抑えつけ、その身に誓いの鎖を巻くように。
源之助は、拳をぎりりと握りしめた。
老い、節くれだった指の隙間から、深紅の液体がぽたりぽたりとしたたり落ちた。
「他人を死地に送るなど、誰がしたいものですか。それでも……全てが滅びのうちに沈むよりは……」
ふと、源之助の瞳がある感情を以て、空を映した部屋の片隅のモニターに移る。
先程までからりと晴れていた空が、俄かに黒雲で

かき曇りつつある。耳を済ませば遠雷も聞こえた。
「スコールですか……いささか遅い涙雨ですね」
源之助自身、そして他の長瀬たちが敢えて捨てたともいえる、そして死者が流すことのない涙。
今、彼らに代わり泣こうとばかりに、島は徐々に昏い翳りに包まれていった。

――定時放送は、近い。

649　駆ける者達

G3A3アサルトライフル。その、無骨なデザイン。手に掛かる、確かな重み。
それは、恐らく、確実に、目の前の〝そいつ〟を蜂の巣にするであろう。
拮抗。静かな、対立。
少年と、フランクは対峙したまま、動かない。
それを少し遠くから見やる、往人。貫かれた右肩が痛む。
だが、それどころじゃない。
少年の後方に倒れ込んだ少女の姿。
天沢郁未。
(どうする？　俺達は勘違いされたままだ。助けるのか……？)
「居候！」
背後より、声。後ろには、少し遅れてやってきた晴子、観鈴。
「往人さん……」
「……お前ら」
口を開く。だが、そこから続けるより早く、晴子は、言い放つ。
「引くで、居候」
「なっ……あいつらはどうする気だ!?」
「……」
答えない。だが、目に宿るのは非情の光。それが答えか。

晴子の左腕は、切り裂かれている。——例え、事の起こりの誤解が解けたとしても。彼女は郁未を許すまい。
右の手には、観鈴の腕が掴まれていた。走り出さないように。決して離さぬように。
その効果はあった。観鈴は、郁未を見ている。だが——走り出す事は、出来ない。
「……っ」
左手に握られた、ベネリM3。ついさっき、晴子から取り返したばかりの銃。
握る手が、汗に滲む。
(くそっ。俺は、こんな時に……!)
あの少年がどうなろうが往人には知った事じゃなかった。いや、あの少年はもう〝助からない〟。
それは予感。今にも消え失せんとする、その雰囲気。少年からは、それが僅かに感じ取れる。
だからこそ、あの少女だけは——。
——その時、不意に、左手が涼しくなった。風が、左手の熱を奪う。そこには何も無い。
振り向く——ベネリM3は、観鈴の手にあった。首を振る。行ってはいけない、と。
見捨てるのか?
だが、目に、顔に浮かぶ、悲痛な表情。それは、本当なら助けに行きたいと語っていた。
だけどそれは、大切な二人を死に追いやるかもしれない行為。悲痛な命の選択。

——往人の顔が、歪む。畜生。

気付けば、往人の身体は一歩前に出ていた。先にあるのは、一触即発の事態。
そこは確かに、死が在った。行けば、死ぬかもしれない。
恐い。当然だ。死にたいなどと思った事はない。
……だが。
…………。

「おい」
後ろを見ず、呼び掛ける。晴子は、脂汗の浮かぶ顔を、往人の背中に向ける。
「観鈴を連れて、反対の方へ逃げてくれ。……後で追う」
「――居候⁉」
「頼んだぞ」
そして、駆ける。観鈴が伸ばした手は、往人を捉える事は出来なかった。

動かぬ事態。変わらぬ対峙。依然として、〝奴〟は動かない。それは、もはや怒りや絶望、そんな感情に囚われている訳では無いだろう。
〝こいつ〟は、獣だ。
撃ち落とし。引き裂いて。叩き潰す。それだけだ。
……死を以て、償わせてやる。
きりきりと、張り詰めた空気。何か、一つ、きっかけでもあれば弾け飛ぶだろう。

背後にへたり込んだ少女。服を、靴を、血に染めている。放っておけば死ぬだろうか……。
――。
その時。不意に、何かが近付いてくる音。駆ける音。叫び声。名を呼ぶ声。
居候！　往人！
……往人？
あの銀髪の男か！
振り向く。ライフルの銃口が、向きを変え、銀髪の男を捉える。
邪魔だ。撃ち殺す。
だが、一瞬早く、影が回り込む。それは確かに、少年の姿！
しまった――！
「ぐおおおおオォォォッ！」
ズガガガガガガガガッ！
咆吼！　続く銃声。放たれた弾丸が、〝それ〟を叩き落とさんと、空間を貫く。

当たったか？　いや、当たる筈が無い。
くそ！
だが、一発の弾丸が奴の表面ではぜる。舞い散る血の軌跡、奴の腹を打ち抜いた。よし。
それでも、その疾さは失われてはいない。
――化け物め。
バックステップ。奴の姿が、森へ消える。逃がすか。
フランクは、再び森の中へ駆け込んだ。手負いの獣を、叩き落とす為に。
……その一瞬の戦いが、男の存在を忘れさせた。

一か八かの賭け。往人は、郁未に向かって、一直線に駆けた。最大の懸念であるライフルの驚異は今のところ無い。男は少年に注意を取られている。
ならやる事は一つだ。
倒れている郁未の元に辿り着く。郁未は、睨み付けるような視線を往人に向けた。
肩を貫かれ、足に穴を穿たれ。だがその眼光は、衰えていない。やれやれ、気丈過ぎるぞ。
「あんたっ――」
聞いてる場合か。郁未を抱え上げる。幸い、軽い。左手一本で、何とかなった。
振り返り、駆ける。
脇に抱えた郁未が何やら叫ぶ。無視。
このまま行けば、こいつだけは何とかなるかもしれない。
――だが、そんな希望も儚く。

がさぁっ！

後ろから、何かが躍り出る。草葉を揺らし、飛び出す影。獣？　違う！　あの少年か！
あの野郎、追ってきてるってのかッ――！

650　脈動

――ドックン――

（お前は人間じゃない）

（なんだ？）

十分も走った頃だろうか。彰は何かが聞こえたような気がして立ち止まった。

いや、聞こえたのではない。何かを『感じた』のだ。

――ドックン――

（人間があんな怪我の後にこんな元気でいられるか？　お前のその賢いおつむなら分かるだろ）

鼓膜の振動で聞こえる声ではない。

まるで自分の内面から湧き出すような『何か』

（なんだ⁉　誰だ⁉）

――ドックン――

自分の心臓の音がやけにはっきりと聞こえる。

（お前は人でなくなった）

（そうだ。なんで僕はこんなに元気なんだ？　ちょっと前までは半死半生。気力で動いていたというのに……）

彰は賢すぎた。それが彼の不幸。

――ドックン――

（お前は人でなくなったんだ。あの女のせいだ。あの女は、今のお前と同じ気配がしただろ？　奴がお前を化け物にしたんだ）

（僕は元気になった。怪我も気にならない。横には初音ちゃんがいた……）

寝ている間の出来事は分からない。推理するしかない。

推理は彰の得意とするところ。

見たくない『映像』ばかり浮かんでくる。

ガン！

苛立ちを紛らわすために、そばにあった岩を殴りつけた。

彰は驚愕する。
岩が……。少しではあるがヒビが入っている。
「なんだ……？　なんだ!?　これ!!」
『人の操る人外の力』には結界は効果が高い。
しかし『人でないものの操る人外の力』には結界の効果は薄い。
彰は知らなかったが、耕一が自分の体験から立てた推測だった。
そう。身体が化け物であり、そして心も化け物になってしまえば……。
それはもう人ではなくなったということ。

彰を一人にできた。
彼にとってこれは幸運。
促したのは彼自身だが、こうまでうまく行くとは考えてなかった。
出番はもっと後だと思っていた。
男どもが消耗した後。その後の方が安心してヤれる。
しかし機会を前に黙っていられるほど、彼は気長ではなかった。
(初音はウラギリモノだ)
「黙れ!!」
彰が『何か』に向かって叫ぶ。
(お前にも見えただろう？　お前の賢いおつむがはじきだした『映像』が)
いけしゃあしゃあと言う。それを想像するように促したのは彼だ。
「黙れ！　黙れ黙れ黙れ黙れぇぇぇ!!」
叫び、地面を殴る。
(わかったわかった。俺はお前だ。お前が望むのなら黙るさ)
「くそ！　くそ！　くそ!!」
辺りのものに苛立ちをぶつける。その結果による破壊。
それは、少なくとも彰のような一般人のつくれる

跡ではない。
（まぁ落ち着けよ。でもお前も思うだろ？　自分以外の男は邪魔だと）
ガン!!
今までで最大級の衝撃を樹木にみまう。
『何か』が沈黙する。
（落ち着くんだ彰！　冷静に、冷静に。そう落ち着け。落ち着いて冷静さを取り戻すことこそが……）
自分の呼吸を整える。
そして歩き出した。
ゆっくりと。
初音達の元へ『時間をかけて』戻るために。
（祐介達はどうしたんだっけ……？　えっと、そう……。残念ながら会えなかったんだよな）
必死になって探し回った『映像』が『思い出される。
なぜか彰の頭から『奴』の存在はすっぽりと抜け落ちていた。
（大きな改竄は力を使いすぎる……な……）

651　分析

かこん、からん、かん、かかん。
一瞬前まで、全ての幸福を象徴するかのように、芳しい香りを振り撒いていた桃缶が、その人生を終え床に伏したとき。無愛想なまでに何の飾りも無いまま続く廊下に、アクセントを与えるべく、無数の銃弾が壁面に喰らいついていた。
犯人は、倉庫の中。
弾薬ベルトを背負い、暗いオレンジ色の照明を浴びて、無感情に立つＨＭ―13。その作られた瞳孔の奥に、ときおり輝く恐ろしげな光だけが、今も作動している事を示していた。
御堂たちは一連の銃撃をかわしきり、なんとか倉庫内に転がり込んでコンテナの陰に隠れている。
（あ……あたしのあたしのあたしのも、ももも桃缶

が桃缶が！）
桃缶が桃缶が桃缶が！
リフレイン。青ざめて虚ろに叫ぶ詠美。
（桃缶ひとつで発狂してんじゃねえ！）
（あなた、そういうキャラじゃないでしょう……）
御堂が吠え、繭が呆れる。それでも一応、みんな小声だったりする。

水平に、正確に水平に首が廻り、機械あたりを窺う。その鋭敏な聴覚で、下らぬ会話を捉えたようだが、共鳴が酷く位置を特定できないのだろう。測るように左右に首を振る動きが、やはり機械である事を証明している。
（ふみゅーん……したぼくぅ）
（げぼくだっ！……つうか遊んでる暇はねえんだよ。とりあえず俺の銃は使えるとして、ガキ、お前ぇは何を持ってんだ？）
こそこそとコンテナの裏を駆け回りながら、打開策を練るべく御堂が確認を取る。
（硫酸銃と、替えのタンク。秋子さんが持ってた機械と、CD¾。他は水と食料ね。置いてきた物は、オッサンも知ってるでしょう？）

ワックスの光沢が目に眩しく反射する中、動物たちは猛烈な勢いで走りはじめた。この島に来てからというものの、すっかり馴染みとなった銃声に引き寄せられ、二匹が疾走し一羽が飛翔する。
「クワ、カァーカァー？」
『本当に、こっちなのですか？』
「ぴこぴこぴっこり。ぴこぴっこり」
『この騒音からして間違いない。嗅覚など使うまでも無いな』
「うにゃにゃ？　うにゃん」
『さっそく始めているというわけか？　困った連中だ』
「ぴこぴこ、ぴっこりぴこぴこ」

『人間どもが愚かなのは、今に始まった事ではないぞ』
「カァ。カァー」
『確かに。早く行きましょう』
「ぴっこ、ぴっこぴこぴこ。ぴこぴっこり」
『俺たちが居ないと、奴ら何回死んでるか解ったもんじゃないからな。世話が焼けるぜ』
　距離をおいた冷静さを装いながらも、人情味に溢れた会話をしながら、動物達は転がるように倉庫へと突進していた。

　ズダダダダダダダダダダダダダダダダァン!!
　再び射線が合ってしまい、御堂たちは危ういところで逃れた。首を竦め、三人して転がるように逃げ回る。とにかく相手の火力が強すぎて、この直線的な倉庫内では、応射することさえ危険だった。
　御堂たちの代わりに犠牲になったコンテナから、じょろじょろと濃い液体が漏れ出している。その特有の臭気があたりを埋め尽くす中、液が身体にかかるのも構わずＨＭ―13は移動し、にちゃり、にちゃりと不快な足音を立てながら、顔色ひとつ変えずに目標へと接近していった。
（ＣＤ4/4と、ポチよっ！）
　大きく遅れて、詠美が宣言する。激しく、いまさらである。
（お前ぇにゃ聞いてねえよ……とにかく、こっちが有利なのは数だけだな。分かれて、挟むしかねえ）
（そうね、このままじゃジリ貧よ）
　老けた男と幼い子供が冷静な会話を続け、年頃の少女が落ち込むという、奇妙な光景がそこにあった。
（コラ、イジケてんじゃねえよ、お前ぇにも大役を授けてさしあげるってんもんだ）
　こつん、と詠美の頭を叩き、意識を自分のほうに向けさせる。ちょっと借りるぜ、と繭の硫酸タンクを二つ取ると、一つを詠美に渡した。

（ああいう相手には手榴弾が最適なんだが、贅沢は言えねえ、コレを使う。奴の長所は火力、速くて精密な射撃、鋭敏な索敵能力、ってとこだな。それを踏まえて、だ……）

小声で御堂が指示を与える。
人事を尽くし、天命を待つ。
常にそれを行う限り、人は能力に見合った結果を得ることができる。

——たいていの、場合は。

652　接近、遭遇

何一つ無い。それがこの男を表す言葉。
共に歩む者は無く。その手に釘打ち機一つ握りしめて歩くのみ。
レミィ。祐一。

思えば。彼らは、彼のこの島に於ける『存在意義』だったのかもしれない。
この何もかもが狂った島で共に日常を過ごした少女。遙か遠い学園での日常を、共に過ごした友人。
彼はその二人を一度に失った。一人は悲しい勘違いの末に。一人は己の手で。
……。
やる事はあった。
「椎名という子を探す」
会ってそれからどうなるのか、正直先の目途は立たなかったが、何か目標がなければこのままつぶれてしまいそうだった。
彼は足の向くまま歩き続けている。
それもそうだ。彼女がどこにいるかなんて知らなかった。
とりあえず、何か手がかりになる情報が欲しかった。
（誰かと会うか？　……いや、それは危険だな）

といっても、誰にも会わなければしかたないのも事実である。それに、
(今更何も怖がる事も無いしな)
もう、祐一と共にいた椎名という娘以外に知り合いはいない。守るべき人も無い以上、たとえどんなミスをしても、危険にさらされるのは彼自身だけである。
彼は楽観的であった。自分自身だけなら、なんとかなるであろう、と。
(死ぬ訳にはいかないしな)
友人達が残した想い。それに応えるまでは、たとえ殺人者に遭遇したとしても生き残るつもりであった。
見てろよ、レミィ。相沢。俺はバッチリお前らの分まで生きてやるぜ。
遠き空から。彼らは、北川に、笑いかけてくれたのだろうか。

行くあても無く島内を彷徨い歩く。
所々戦闘が行われたであろう箇所があり、そこにはいくつか落とし物が落ちていた。
「ゴミは拾えって、学校で散々言われただろう? 全く、みんな物を大事にしろよな」
だが、この落とし物は正直嬉しい授かりものである。主な品目は、ナイフ、クロスボウ、そして——死体。
苦笑。
「……はは。ジョークにしちゃ、ちとブラック過ぎたな」
見覚えのある死体。無論、北川がそれを忘れる筈が無い。高槻。このゲームの、支配者。いや、『元』支配者か。
あの放送を知らぬ北川ではない。高槻が、処分された事などは知っていた。
ただ。あの頃は、どうしても、実感が湧かなかった。命を賭けたサバイバルゲーム。その中に、自分

が居るという事。血生臭い現実。
　人が殺し合うという事。それは、あまりにも非現実的過ぎた。
「俺は、いつの間にか、逃げてたのかもしれないな、現実から……」
　逃避。空虚な空想に逃げようとした。殺し合いというゲームから、いつもの日常へと。
　そこで出会う。レミィに。
　眩しいばかりに明るい少女だった。下らないジョークだって、彼女となら楽しかった。
　そして。それは、いつしか、自分の心を空想につなぎ止める、大切な何かに。
　……それはもはや失われた。もう、現実から目を背ける訳にはいかない。
　ナイフを拾い上げる。三十センチ程もある、大型のナイフ。十分な武器だ。
　高槻の死体から、鞘を抜き取った。刃を隠し、ベルトに差す。武器入手、と。
　そして、クロスボウ。一応、飛び道具だ。しかし、拾い上げようとして気付く。矢が、無い。
　その辺の木をあてがって使うことはできるかもしれないが、実用の程はお察し下さいといったとこか。
　……捨てとくか。もったいないけどな。
　後は大した物は無いようだった。
　日が高い。心なしか暑さが増している。そろそろ放送の時間だろうか。
　日陰にでも、行くか。北川は、そんな事を思って、森へと足を進めた。
　が。
　……がさっ。
「え？」
「あ」
「あ？」
　突然、森から出てきたのは――侍？
　そう、勘違いしても仕方ない。遭遇した二人は共に刀を携えていた。もっとも、その雰囲気は、侍と

いうよりは落ち武者といった風であったが……。
ともあれ、ブレザーを着た侍はいないはずだ。
それにしても、二人とも気の強そうな女であった。
ううむ、俺はどちらかと言えばおしとやかなほうが好みなのだがな……。
そんなこと考えている状況では無いのだが、どんなときでも皮肉めいて考えてしまうのは彼の性分だった。
「……真っ正面から人の事をじろじろ見るなんて、失礼な人ね」
「全くだ。レディに対して失礼極まりない行いだな……」
溜息混じりに、北川は首を振る。もちろん紳士的に。
「それにしても、レディにそんな物騒な物は似合わないと思うな……よければ、しまって話し合わないかい？」
冗談めいた口調。だが、その裏に潜む、ひやりと冷えた空気。
女は——しかし答えない。
長髪の女の持つ刀の刃は襲いかかる蛇の鎌首のごとく北川の首に狙いを付けている。
北川も、手に持つ釘打ち機を既にその女に構えている。
だが、もう一人の女は他人事のような様子で、二人の対峙を眺めていた。抜き放たれた刀を持った手は折り曲げられ、刃で肩をとんとんと叩いていた。
随分と、場慣れしている感じだ。実のところ戦場をほとんど経験していない北川にとって初のピンチといっていい状況であった。
（……さぁて、どうすっかな……？）
北川の顔に、不敵な笑みが浮かぶ。

653 掌の上

……一触即発というのは、こういう状態を言うん

『生きるために殺す』

この島では正しい理論。
でも、俺にとって正しい理論かは別だ。
生きるために殺す。それは、相沢の言う「主催者側の思うツボ」じゃないのか？
そう。レミィも、結花も、相沢も、みんな、みんな奴らの掌の上で踊らされていたんだ。
……ふざけんな。
俺一人でも、抗ってやる。
たとえそれが、釈迦の掌の上で得意げに飛び回る孫悟空の行為そのものだとしても。
それでも、俺が道を示せれば、きっと可能性は出てくる筈だ。
俺は、この島のルールを壊さなくちゃならない。参加者同士で殺しあうことを放棄しなくちゃならない。
つまりは……

だろう。
俺の首には、刀身が。
彼女の喉には、釘打ち機が。
予備動作が要らん分、俺の方がやや有利とは言えるが、それも一対一の場合。
ここでもし下手を打ったら、遠くから鋭い目線で睨みを利かせているショートのおねーちゃんが黙っていまい。
だが、距離があるというのは幸いだ。
手早くロングのおねーちゃんを始末出来れば、距離を詰められる前に……

ちょっと待て、違うだろ俺。
俺は、殺し合いが、したいのか？
違う。俺はこの状況を打開したい。少しでもいい方向に。
そして、生きるんだ。

左手を開く。握られていた釘打ち機が落下し、がしゃりと音をたてる。
唐突な俺の行動に反応したのか、首筋に狙い定められた刀身が微かに動く。危ねえ。
格好よく誓ったその次の瞬間に死んでは余りにも格好がつかないな。
「……何のつもり？」
地面に横たわる釘打ち機に一瞬だけ視線をやり、ロングの娘が口を開く。
依然、その冷たい刀身は俺の首筋に向けられたまま。まずは、身の安全の確保から。説明は、あとからゆっくりでいい。

「降参だ」

……そんなこんなで、また捕虜である。縛られているわけである。決して趣味ではない。
俺は殺さなかったし、死ななかった。それが大事。
死んでから他人の信頼を得たって、遅いんだから。
さて、ステップ2。実際に信頼されなければならない。基本はやっぱり言葉のキャッチボール、会話だよな。
「……というわけで、お互いの親睦を深め合うために自己紹介と行こうか」
明るい声でフレンドリーなイメージをアピール。友達百人も夢じゃない。
「……」
夢でした。あからさまに不信感を抱いた視線が痛いです。
えぇい、くじけるな俺！　突撃あるのみ！
「俺、北川潤って言うんだ。気安く潤と呼び捨てにでもしてくれ。あぁ、勿論ダーリン、でも構わんぞ。ハートマークは忘れるな！」
ロングの娘が刀を構えなおす。
「ごめんなさい、ですからその刀を仕舞ってくださ

い」
　仕舞わなかった。
「まさか本気デスカ⁉　ヘルプ！　そこのショートの美人、ヘルプミー！」
　突然の呼びかけに不意を突かれたのか、ショートの娘が顔を上げる。視線が一瞬ぶつかり、すぐに逸らされる。
　……おや？　何か変な感じ。
「はぁ……巳間晴香よ」
「はい？」
　しまった。ショートの娘に気を取られて、間抜けな返答をしてしまった。二度目の生命の危機を脱した瞬間に三度目の生命の危機。
　深呼吸をひとつ、ふたつ……怒りを押し込めて、紫髪の娘が改めて名乗る。
「……巳間晴香よ、北川君」
　是非ダーリンと呼んでくれ、と言おうと思ったが、キリがないのでやめておいた。次やったら本当に危なそうだし。
　で、その晴香さんがもうひとりのショートの娘のほうに向き直り、
「ほら、あんたも自己紹介しなさいよ……一応」
　一応ってのが引っかかるが、ありがとう晴香さん。ところがあのショート。
「げっ」
　と来たもんだ。「げっ」って何だよ「げっ」て。そんなに俺が嫌いですか？　初対面の相手だってのに……。
　いつまで経ってもうじうじと名乗らないショートの娘に、晴香さんもご立腹。
「ちょっと、名前忘れたってわけじゃないんでしょ？」
「うん、そりゃあ、まあ、そうだけど……」
　なんとも歯切れの悪いショートの娘。晴香さんはその態度に痺れを切らしたか、改めて呼びかけようとする。

「だったら早く自己紹介くらいしなさいよ、なな」
「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
…………な、なんちゅう声出しやがるんだあの女！　こっちは耳も塞げないんだよ！
「ちょっと！　何いきなり叫んでるのよ！」
「あ……、ゴメン」
反省するショートの娘。意外と素直だ。
……しかし、名前を聞かれたくない理由でもあるのか？
むぅ……なな……なな、何だ？
「名無しさん」
「違うわっ！」
……沈黙。
「……あ」
慌てて下を向くショートの娘。
……と、いうか。
髪型違ってたし、多少時間が経ったからか、顔立ちとかも違ってきてて、分からなかったけれど。

「……もしかして、七瀬さん？」
「……う」
……どうやら、当たっていたらしい。
まがりなりにも知り合いという事で、俺の縄は解かれた。
武器類などは返してもらえなかったが、まあそれは仕方ない。今後の努力次第？　ってことだ。
「まさか、七瀬とあんたが知り合いとはねぇ」
「こんな所でこんな奴に会うなんて……あぁ悪夢、悪夢だわ……」
ちょっと七瀬さん、その台詞はないんじゃないですかー。流石にムッときましたよ。
なので、仕返しを企てることにする。
「そう言えば、七瀬さん」
「な……何よ」
「まだやってるの？　あれ」
「？　何、北川君、あれって」
よし、計画通り。晴香さんが釣れた。

「ちょ、ちょっと晴香……」
「いや、それがですねえ、晴香さん。我が高校にいた頃の七瀬さんはですね」
「北川ぁ！　それ以上言ったら殺すわよ！」
場所が場所なのでなかなか真実味に溢れた台詞ではある。
「あー大丈夫大丈夫、七瀬は私が抑えておくから是非続きを語って」
晴香さんが手早く七瀬さんを抑える。かなり慣れてるな、こういうことに。
「コホン。んじゃあ遠慮なく。我が高校にいた頃の七瀬さんはですね、常日頃から『乙女』となるべく、修練を重ねていたのですよ」
沈黙。
七瀬さんの顔がみるみる真っ赤に染まってゆく。ごめん七瀬さん、君の過去を売って俺は現在の信頼を買う。
「あ、あははははは！　乙女！　乙女って……今時！」
思わず爆笑した晴香さんの手が緩み、七瀬さんが弾ける様に飛び出してきて、物凄い速さで右手を振り上げ、
「北川ぁぁぁぁぁぁっ！」
鈍い音が頭の芯まで鳴り響いた。

「いやぁ七瀬……あんたって、案外面白いのね……」
晴香さんのフォロー（らしきもの）も、ところどころに（笑）が挟まっているのでまったく効果が無い。
「ひぐっ……だからコイツには会いたくなかったのに……」
マジ泣き度百パーセントである。……しまったやりすぎた。
「ゴメン七瀬さん。この話でこんなに傷つくとは思ってなかった。……でも、安心したよ。七瀬さん、

変わってないし」
「北川……」
七瀬さんが顔を上げる。お、もしかしてフォロー成功か？
「うん。さっきのパンチだって以前のまま、いやむしろ威力が上がったとも思えるよ。あの熊殺しパンチ」
「殺せんわボケぇぇぇぇぇぇッ！」
その七瀬さんの台詞とともにマッハで飛んでくる拳。
また余計な事言ってしまった……とか考えつつ、俺の意識は闇に……
沈もうとしたその時、俺の意識を一気に現実に引き戻す出来事——そう、放送が、始まった。

654　引火　銃撃　腐食

倉庫と呼ばれる胃袋……コンテナから滴る液体は、彼らを消化するかの如く、ゆっくりと広がりつつあった。
その中では鋼鉄の死神が鎌を構え、御堂達の隠れている一番奥のコンテナに狙いを定めていた。
（いいか、作戦はこうだ、テメェらは奴の足元に硫酸の容器を投げつけろ。俺はその容器の側に爆弾を転がす、その爆弾を打ち抜けば……）
（なるほど、爆弾の炸裂の衝撃でボトル内の硫酸を浴びせかける……そうでしょ？）
（え？　え？　どういうワケ？）
（……つまりだ、ろぼっとの足元に『それ』を投げればいいんだよ……）
（なぁんだ、簡単じゃない）
（バカかお前は。この状況でそれができるか！）

（へ？　何で？）
（……見てろ）
詠美そう言うと御堂はスッと、手を上にかすめた。
それを待っていたかの如く、
ズダダダダダダダダダダダダダダダダダァン!!!!
先程、御堂が手を伸ばした空間に鉛玉が飛び交った。
（ほらな。この状況で立ってその容器を投げつけるなんざ、自殺行為同然だ。そんなことも分かんなかったのか？）
（ち、違うわよっ！　私だってだいたいそうだと思ってたんだけど、いちおー確認とっておこうかな〜って、思っただけよ!!）
（お前なぁ……いい加減、そうやって屁理屈こねて自分の失敗隠そうとするなよ……）
御堂はあたかも彼女の父親のような口ぶりで詠美を叱った。
（う、うるさいわねっ！　私には女帝としてのプライドっていうのがあるのよっ！　アンタなんかとは格がちがうんだからぁ！）
（だから、そういう――――――）
（……オッサン、今思ったんだけど、爆弾なんて何処にあるのよ？）
蘭がいぶかしげな表情で御堂と詠美の口喧嘩に割って入り、尋ねた。
（何？　爆弾？　けっけっけ、テメェもやっぱりガキだな）
蘭はガキという言葉にムッとして、御堂に再度尋ねた。
（いいから、何処にあるのか教えなさい。作戦に支障をきたすでしょ？）
（あるじゃねぇか、とっておきのがここに……よっ！）
ドン！
御堂はそう言うと自分の腹に拳をねじ込んだ。
（ちょっと！　アンタ何やってんのよっ!?）

（……なるほど、オッサン、意外と頭いいじゃない……）
　御堂の行為に対して対照的な反応を見せる二人……そして御堂の口から銀色の球体が零れ落ちた。
（へへ……こいつだ……これも立派な爆弾だろ？）
（爆弾のことは分かったわ。……でも、その前に私達がローストビーフになるかもね……）
（何？）
　鼻をつく異臭……倉庫内に充満した揮発性のガス……そう、はじめ御堂達が隠れ、ＨＭ―13の弾丸によって打ち抜かれたコンテナに入っていたもの……それはガソリンであった。
「……倉庫内部、ガソリン充満。火気厳禁、火気厳禁。至急退却後、ターゲットヲ、倉庫ゴト破壊シマス」
　メイドロボも異変に気付いたらしい。彼女はゆっくりと後退していく……この危険地帯から逃れるために。
（はぁ……何てこった……待ってりゃ火あぶり、進めば蜂の巣……状況悪化だぜ）
（え？　何？　なんなの？）
（もう……おしまいね）
　無知なことは幸せである典型な詠美、冷ややかな顔をして絶望する繭……。
　しかし御堂は、まだあきらめていなかった。勝負は最後まで分からない……戦うためだけの存在である彼だけはそれを知っていた。
　この部屋の守護神は今、守るべきものと共に御堂達を葬るため、扉の開閉パネルに手を伸ばした。
　イイイ……ン
　この後、倉庫に銃弾を二、三発撃ち込めば任務完了……のハズであった。
「ぴこーーーーーーーーーー!!」
「カァァァァァァーーーーーーッ!!」
「うにゃあーーーーーーーーーー!!」
　彼女が扉を通るよりも早く、二匹と一羽が倉庫内

に飛び込み、思いっきり彼女にぶつかった。
ドンドン、ドン！
「⁉」
その瞬間、メイドロボに隙が生じた。わずかに、本当にわずかに動物達の存在に驚き、御堂達が潜むコンテナから目を離しただけであった。
だが、御堂はその一瞬を見逃さなかった。
(あの獣共が！　おいしいところ持って行きやがって！)
腰のナイフを抜き、地を蹴り、信じられないスピードでメイドロボとの距離を縮めた。
「‼　ターゲット捕捉！　攻撃――」
賢明なロボット……彼女はあえて発砲しないで、M60を御堂の頭部めがけて振り下ろした。自己防衛のためである。
ガチィン！
御堂のナイフと、メイドロボの銃がぶつかり合い、軽快な金属音を奏でる。
メイドロボの振り下ろした銃身を、御堂が受ける形となった。
ギギギギギギギギギ……
だが、上と下では圧倒的に下のほうが分が悪い。御堂はジワジワと押されていた。
さらに力を込めるメイドロボ……体重が一気に御堂のナイフにかかった。だが、御堂はこの瞬間を待っていた。
「よぉ、お嬢ちゃん……そんなに力むとケガするぜ……」
シュッ！
「⁉」
いきなり御堂はナイフを銃から離した。力の均衡が失われ、バランスを崩すメイドロボ。
さらに御堂は彼女の持っている銃に手を回し、
「いいモン持ってるじゃねぇかよ、よこしな！」
ザムッ！
M60を吊るすベルトを切り裂き、鋼鉄の死神の手

から強引に奪い取る。極めつけは、
ドン！
体当たりである。
そのまま出入り口までメイドロボごと押し進む。
だが、扉が閉まっている。とっさに御堂は近くにいた獣達に向かって叫んだ。
「扉を開けろぉ!!」
その言葉に反応したのは……毛糸玉だった。
「ぴこっ！」
毛糸玉は飛び上がり、開閉パネルを押す。
ィイイイ……ン
廊下へ繋がる扉へ突進し、倉庫から脱する御堂と鉄人形。
倉庫から出ればこっちのものだ。銃を撃っても倉庫内の揮発したガソリンに引火する恐れはない。
御堂は先程強奪したＭ60で遠慮なく撃った。
ズダダダダダダダダダダダダァン!!
銃弾を至近距離から受け、メイドロボは吹き飛ばされた。
タイミングよく、詠美と繭が倉庫から飛び出してきた。
「アンタばっかり、活躍してんじゃないわよっ！」
「オッサン！　爆弾、ちゃんと撃ち抜いてよね！」
カコン！　カコン！
二本の硫酸ボトルが鋼鉄の死神の後方に転がる。
御堂はそれを確認するとピッ！　と、ナイフを持った手の親指から体内にあった小型爆弾を弾き出した。
そんな事は気にも止めず、ゆらりと立ち上がり、マカロフと呼ばれる拳銃を取り出すメイドロボ……
「ターゲット……ホ……ソク攻撃……シマス」
「倉庫に戻れ！　早く!!」
詠美と繭は慌てて御堂の言葉に従い倉庫に戻る。
「扉を閉めろぉ!!」
「クワァ！」
鳥類がクチバシで器用に開閉パネルを小突いた。

ダゥン！　ダゥン！　ダゥン！
メイドロボの放った銃弾の二発は扉にめり込み、一発が御堂の右足を捉えた。だが、御堂は動じない。
「へたくそ」
ドゥン！
　御堂のデザートイーグルが火を吹いた。弾は生き物のように爆弾へ向かってゆき、
　バグォォオォン!!!!
　炸裂。側にあったボトルからはあらゆる方向に強酸を撒き散らした。
　バシュウウウウウウウウウ……
　メイドロボは後ろから濃硫酸をかぶり、背中から煙を噴出させた。体をガクガク揺すり、膝をつく。
「背部に……腐食性ノ……エキタ……イ……フチャ……ク……防弾……装甲……七十九パーセント……損失……ナオ……モ……シンコ……ウ中……」
（自分が死にそうだってのに被害状況を報告してやがる……軍人の鑑だな）
　御堂は彼女の最期を見届けず、倉庫へ戻った。

655　正しい脱出のススメ

「人数は減ってしまったが、今後のことを決める大事な会議だ。俺達だけでも先に進めるぞ？」
　蝉丸は確認するように言い、部屋の中を見回した。
（現在部屋に残っているのは耕一、初音、マナ、そしてあとは妙なお面だけだ）
「(TДT)妙なお面なんてひどいよ、蝉丸ぅ～!!」
（つい呟いていたらしい）
「すまん」
「(´Д`)月代って呼んでよぉ～」
「……すまん、月代」
「(;´Д`)ハァハァ、蝉丸、もう一回、もう一回呼んでぇ～」
　調子に乗ってすがりついてくる月代に、蝉丸は軽く当て身を加え、『それ』を再び静かにした。

「不憫だ。本当はこのお面の呪いも、早々に解いてやりたいのだがな……」
蝉丸と月代に怪訝な視線を向けた三人に、言い聞かせるように呟く。
その場はそれで上手く収まった。
蝉丸は場が静まるまでのほんのしばらくの間だけ、この場にいない人物のことを思い浮かべていた。
（葉子は二階に寝かせてある。彼女の部屋のすぐ外には、窓への進入を容易にするような樹木の類が無いことを確認してある。外敵の進入は難しいだろう。だから、俺たちは彼女のことを考えるよりも、今は冷静に会議を続けるべき時間だ。……それにしても……）
一同がこの建物の中でも一番広い部屋に陣取っていることもあるのだろうが、幾人か――晴香、留美、彰達のことだ――が席を外した今、室内は随分と寂しげな印象に変わってしまったな、と蝉丸は思った。
（しかし、それもしばしのこと。また元の、いやそれ以上の人数になる。してみせる……）
場が十分に静まったのを確認し、蝉丸は再び口を開く。
「負傷者の傷がもう少し癒えるまで、施設の攻略は先送りにしようと思う。脱出の鍵はあそこ以外にもあるかもしれないし、ほぼ確実に危険が待っているあの施設の攻略以外で、今の俺たちが出来る何かをしよう。そして、潜水艦のことはあの二人と、先行している例の少年、さらにそれを追っていった、郁未という名の少女に任せたい。心苦しい選択だが、今は出来るだけ多くの可能性を模索しなくてはならない時なのだから……」
そこで蝉丸は言葉を切った。
……が、皆に先を促され、先を続ける。
「さて、先程話しかけていた、脱出の規模のことだが……。実際、今もって殺る気のある人間がどれだけいるのか、ということの方が問題だと思うんだ。しかし、俺達が今までに遭遇した殺る気のある人間

は、道中で確認したように、もう全てこの世の者ではなくなっている。それ以外の不幸な死を遂げた者達と同様に……」
蝉丸はそこで軽く目を瞑り、うつむいた。
今まで出会い、別れてきた人間のことを思い出しているのかのように。
それを見て、皆もそれぞれの過去を振り返るような表情になる。
今まで、どれだけの人間と逢い、そして、その死に向き合ってきたのだろう。
単純には言い表せない、出来事、想い。
(きよみ……)
蝉丸は最後に、杜若きよみの姿を思い浮かべた。
(一度は失われたと思っていた。そして、今度こそ完全に失われた、己の思い人……。皆に正しき道を生きるよう、身を呈して主張した彼女、きよみ。その思いを、死なせはしない……)
蝉丸はゆっくりと口を開いた。
「実際のところ、脱出までに残っている障害はもう少ないと思う。潜水艦さえ見つかれば、乗員の上限が少なくとも、それで往復することも考えられるし、今は仲間を集めることこそが、一番大事な俺達のするべきことなのではないかと考える」
蝉丸は皆の様子を伺う。異論はなさそうだった。
「そのために、俺は島内全域に行き渡るような呼びかけを行いたい。皆の中にも、きよみが命を賭したあの演説を聞いた者も居ると思う。島の全域に放送出来る手段を見つけて、あれと同じことをしたいと考えているんだ」
もう、殺し合う必要はない。一緒に脱出の手段を講じよう――そう参加者に伝えるのだ。
「……皆はどう思う？」
「基本的には賛成よ。もう、こんな意味の無い殺し合いは終わらせるべきだもの……けど、体内の爆弾が爆発しないって本当なの？　もし、そうじゃなかったら、演説した蝉丸さんは……」

心配そうにマナは問いかけ、蝉丸はそれに余裕を持って答えた。
「あれはあの高槻とかいう男の独断だったはずだ。それに彰くんの言葉を信じるならば起爆装置は彼の手によって破壊されている。だから、今回は管理者側が介入出来る余地はないはずなんだ。それに、もしものことがあったとしても、犠牲になるのは俺だけだ。損失は少ない。もし、万が一のことがあったなら。……そうだな、それを皆に知らせるために……」
そういいながら蝉丸は、そばにくずおれている月代を見やる。
「月代を連れていく。耕一君達にはここを守っていて欲しい。皆が再び集まる、そのための……この場所をだ」
耕一は何か異論を挟みたかったようだが、蝉丸の言葉に口をつぐんだ。
自分もついて行きたいのか、マナもまた得心のいっていない様子だったが、『マナ君には看病の続きをお願いしたいんだ』と、蝉丸に言われると断れなかった。
「分かったわ。そこの半端病人を含めて、きっちり治療して待ってるから！」
そういって、耕一を指さすマナ。
「みんなで、誰一人欠けずに待ってるから、あんたも、早く仲間を集めて帰ってきなさいよ!?」
「……うむ」
所在なげな耕一をよそに、頷く蝉丸。
「では、荷物をまとめてくる……」
「おい、ちょっと、俺の意志は!?」
今度こそ不当な扱いを受けたという風に、耕一は抗議の声を挙げた。
「半病人は大人しくしてなさい!!」
マナの伝家の宝刀、すねキックが耕一に炸裂する!!
「いってぇー!!」

ナ。
「大人しくしてないからよ！」
半ば無理矢理に元気良く叫んで、腰に手をやるマ
蝉丸はそれを後目にしつつ、月代を担いで部屋を
出ていった。
「遅くても、夜には帰りたいと思ってる……」
その蝉丸を腕を腰にやった姿勢のままで見送った
マナは、そのまま室内へ視線を走らせた。
視界にはいるのは……。
がらんとした部屋。
すねを抱える耕一。
……そして、うつむいたままの初音。
「まずはこの子を何とかしてあげなきゃね……」
軽く、耕一に向けて呟くマナ。
「へっ？」
すねを襲う激痛に耐えていた耕一には、マナの言
葉は届かなかった。
「ちょっと聞いてんの!?　貴方、初音ちゃんのお兄
さんでしょうがっ」
「ウゲェッ!?」
再びすねを抱えながらうめく、奇妙な服装の耕一
がそこにいた。
「俺ってこんなキャラだったっけ……？　それに、
こんなに蹴られてたら、ここに来たときより具合悪
くなりそうなんだが……なんか、祟られてる？　神
社で厄払いでもしてもらった方がいいのか？」
「私だってこんなキャラじゃないわよ。男だったら
ぐだぐだ言わないの！　また蹴るわよ!?　そもそも、
その変態みたいな格好を何とかしなさいよ!!」
（彰お兄ちゃん。どうか無事に帰ってきて……）
三者三様の室内。
太陽は、今しも中天に差し掛かろうとしていた。

……そして。
整理しなければならない膨大な情報に埋もれ、幾人かの記憶から外れていった中に重要なものがあった。
『千鶴達が、何故今も生きて活動していられるのか』
その生存の喜びに気をとられたか、処理すべき現実が多すぎたのか。
胃の中の爆弾。
吐き出しても爆発はしないという、その事実が……。

656　施設最終戦　～最深部へ～

ピリリリリリリ……
けたたましく鳴り響く電子音。
おそらくは、彼が聞く最後の電子音。
もはや端末をいじることもなくなった男が、その音に顔をあげる。
「そういえばもうすぐ放送ですな……」
気だるい口調の声が漏れる。
恐らく通話口の向こうの相手は、源之助か源三郎か……だが、今の彼にはどちらでもいいことだった。
カチャ……
備え付けられた受話器を軽く、そしてわずかに持ち上げる。
ガチャンッ……!!
そして、勢いよく叩きつけた。
鳴り響いていた電子音の余韻が頭の中でリフレインする。
「もはや、これまでかもしれないな……」
暗く、淀んだ感情をその顔に宿らせながら、もう一度モニターを見つめた。
もはや虱潰しに御堂達を探す必要など無い。
マザーコンピューターへと続く地下三階の通路だけはすべてに常時モニターがついている。そこに、三人の影。……余計な動物が見えた気がしたが、あ

まり気にしなかった。
「さて……と」
ここで待てば、敗北は必至。かといって、迎撃に出たとしても、負けは濃厚だった。
ならば、せめて自分のやりたいように行動しよう。
軽く、首を振って、ゆっくりと席を立つ。
一度だけ名残惜しげにコンピューター室を見て。
玩具のような銀色の銃と、リボルバー拳銃、そして一枚のＣＤを懐に、部屋の扉をくぐる。
切り札のある場所で、詰問者を待つために。
その誰もいなくなった部屋に、電子音が響き渡ることはもうなかった。

ヒタヒタ――倉庫を出て、しばらく。一行は地下三階の最深部へと進む。
あとは、千鶴達と待ち合わせている場所へほぼ一直線、だ。
既に、身を隠して進めるような通風口なんかない。

「……誰もいない」
「……だな」
御堂は、詠美の不安そうな呟きに素直に賛同してやる。彼女の言葉に皮肉の一つも無く頷くのは割と珍しい構図だった。

通常の人間と比べれば屈強な兵士、ＨＭ―13に護られていた倉庫。
その倉庫から武器を予定通り入手すると、一行は先へと進んでいた。
入手した武器は七つ。
まずは手榴弾を幾つか。
御堂の持つ銃と同型のデザートイーグルを一丁、さらにその予備マガジンを幾つか。
詠美、繭にはそれぞれ素人でも狙いがつけやすい機関銃。
――素人が扱うにはいささか重量がある武器かもしれないが、狙いをつけて撃つハンドガンよりはマ

シだろう、という御堂の判断だった。少なくとも御堂と行動を共にする内はそれで充分だ。
『本当はレーザーサイト付きの銃があれば一番なんだけどね』
その時、澄ました顔で恐ろしいことをサラリと言ってのけた繭に、若干ながら戦慄を覚えたのもつい先程。
（こいつが戦闘訓練を受けていれば、心強い戦友になれたかもしれねぇな……）
同様に、千鶴達の分の武器もデイパックの中に詰め込んである。

「……これで本当にこの先が施設内で最も重要な場所……ということみたいね」
見た目とは裏腹に、極めて理知的な赤毛の少女、繭がそう切り出した。
「そうだな。……何故そう思ったんだぁ？」
御堂も繭と同意見だった。ただ、その結論に行き着くまでの思考は違うかもしれない。
先の見取り図を覚えていれば、そこがマザーコンピューター室だということが確実に分かる。構造を考えても、恐らくはそこが最重要の拠点だとは推測はできる。ただ、本当にその部屋が最重要かどうかは、行ってみなければ分からないことだからだ。
声を潜めながら、あえてその真意を聞いてみる。
「そうね……まず、この三角形型の場所がほとんど一本道だからよ。ここに到るまでの道が広くないながらも比較的迷いやすいように造られていたのに、急に簡潔な通路になった理由。単純な構造である方がその拠点に行き着くのが簡単なのは当たり前ね。でも、裏を返せば、必ずその道を通らなきゃならないってこと。敵が侵入した時、その方が迎撃しやすいって所かしら？」
同じように、声を潜めて返す。
「ふん、……ガキのくせに頭が回るな」
その回転の早さは、今この施設内で別行動してい

るもう一組のグループのリーダー格、千鶴より上かもしれない。
「ふみゅ～ん……よく分かんないけど……千鶴さん達もここを通ったってこと？」
一人だけ、声がでかかった。しかも、見取り図はもう覚えてないらしい。
「それはないわね。千鶴さん達のルートは別の道を……確かあっちの方から別の渡り廊下が伸びてて、そこから来るはずよ。当然向こうも途中から一本道になってたわね。目的地で道が合流することになると思うわ。仮に千鶴さん達が道に迷って、ここを通ることになったとしても、まだ辿り着かないわね。方角、距離、私達の通ってきたルートから考えれば、私達より早くここを通ることはありえない。確実に私達の方が先に目的地に着くでしょうね」
「？　……？？　……？？？」
「……まあ、それはこの先何事も起こらなければ……の話だけど」
若干溜息をつきながら、繭がそう締めくくった。
そして、繭の予想通り、何事もなく進めるはずはなく……。
「ぴこっ……」
地面に近い位置にいる動物達と、そして御堂がほぼ同時に気づいた。
「いるな……この先に」
三角形型に配置された通路、その廊下の曲がり角の先を見据えた。
その曲がり角の先の道は、外周部分と、中央のマザーコンピューター室へと続く通路の二つが広がっている。
御堂の耳は、すでにその先に存在する人の気配を捉えている。
その人物は、中央へと続く通路の真ん中にいる――
そこで待ち合わせていたはずの千鶴達は、まだい

ない。
だが、彼女達でない何者かの存在感。
それは、詠美と繭にとって圧倒的な恐怖。
(ゴクリ……)
閉鎖された地下空間の中、詠美の生唾を飲み込む音がやけに大きく響いた。
御堂を先頭に、ゆっくりと歩みを進めた。
(武器は構えてろ……)
曲がり角、その先の壁に映る長き人の影。
千鶴達と約束した場所へと続く最後の道に立ちはだかる男の影。薄暗い電灯が造りだしたそのシルエットは、確かにいつか見た影。
「はじめまして……とは二人には言えませんか……お久しぶり……ですね」
「長瀬……源五郎か……おめぇにはもう一度会いたかったぜぇ……」
お互いの姿が見えぬ内から、そう交わした。
「あなたには……やられましたよ。あなたは……たとえ結界内でも恐ろしい人物でしたね。でも、驚きですよ。あなたの通った道が……ね」
「……」
武器を手に、御堂が歩を進める。
「御堂、あなたは並みいる参加者をその手で殺し……蹂躙し、そして生き残る男だと思ってましたよ。あなたの経歴と、性格を見る限りではね」
「……そりゃ光栄だな。俺様がやられるとは思わなかったのかい？」
「さあ。どんな人間にもイレギュラーは付き物だからね。死ぬときは死ぬ。あなたとて例外ではない。最後に生き残るのは誰か……なんて誰にも分からないことですよ。初めて会ったときから……正直意外だったんですよ。あなたが一番こちら側に近い人間だと思ってました」
「……」
「前にも聞きましたが……もう一度答えてくれませんか？　……あなたは躊躇なく人を殺せたはず。殺

人という行為自体を楽しむことができた。一人生き残る自信すらあったんじゃないですか？　今のあなた……やっぱりらしくないんじゃないですか？」
「ふん……」
一度、今の会話を聞いていた詠美と繭の表情を目の端で確認する。
――軍部はあなたを必要としなかった……でも今はあなたを必要としてくれる人がいるじゃない――
いつか聞いた台詞が頭をよぎる。
「源五郎さんよぉ……おめぇ、勘違いしてねぇか？　軍人として軍部に従っていた俺が言うのもなんだがよ……」
一度、言葉をくぎる。――その間、源五郎からのレスポンスはなかった。
「俺は指図されるのが一番嫌ぇなんだよ。自分の好きなことだけ考えて、自分の好きなように行動して、自分の好きなように生きる。――それが俺だ」
「踊らされるのは嫌というわけですか」
「ふん、踊ってるのはおめぇじゃねぇのか？」
「……」
源五郎との距離が徐々に縮まっていく。
通路の向こうに、よれた白衣が見え隠れする。
（おめぇらはここにいろ……俺は源五郎とちょっくらやってみてぇ……邪魔にならないようここにいな……）
詠美達を再度手で制しながら、立ち止まる。
興味を持った相手とは一人でやってみたい。千鶴にも止められはしたが、御堂の悪い癖だった。
結局、その衝動は抑えきれなかった。
「御堂、あなたは……いや、お前は今は何の為に動いている？」
最後の問い。
「とりあえずは、だな、気にくわねぇ奴をぶっ倒すってところか？」
「シンプルでいいな、御堂……」
通路の向こう、長瀬源五郎の苦々しく笑う表情が

見えた。
　この男はたった一人で、御堂達六人を相手するつもりだったのだろうか。
　源五郎の実力を測りかねるように、値踏みしながら御堂は言った。
「今度は物騒な護衛がいねぇんだな……死にきたのか？」
　カチリ……
　デザートイーグルを源五郎の左胸へと向ける。
距離は約十メートル。御堂にとっては絶対にはずさない距離。
「戦闘型メイドロボの片割れはもう破壊されましたよ。坂神をはじめとする参加者達にね。こんなことならこの施設すべての通路に機関銃でも設置しておくべきだった。まあ、後の祭り……だけどね」
「本当におめぇ、坂神と互角に戦ったっていうあの男の息子か？　いやに弱っちぃじゃねぇか……」
　覇気のない源五郎の声。その期待はずれの答えに、御堂が顔をしかめる。
「そりゃあねぇ……肉弾戦なんてできませんよ。科学の虫でしたから」
　軽く首を竦める。その仕草がひどく小さく見えた。
「このゲーム、最初からお前に手出ししなければ良かったよ。メイドロボを差し向けたときから、こうなる運命だったのかもしれない。だけどね……もう私も後には引けないんだよ。退く気もない。後がないからね」
　スッ……と源五郎の手が白衣の懐にのばされた。
同時に、御堂が一度銃の照準をはずす。
「抜きな、どっちが早いか……ってヤツだぜぇ……」
「……」
　一瞬の静寂が訪れる。
ちょうど、源五郎から死角になっている位置から御堂を見ていたにも関わらず、その緊張の瞬間に、二人の少女の喉がはっきりと動いた。

「――死ね！　御堂!!」
「前にも言ったよな？　おめぇを殺るのに躊躇はしねぇってな」
ドンドンドン!!
御堂の銃が三度、火を吹いた。
源五郎が懐から手を出す間もなく、心臓を正確に貫いた――はずだった。
ピッ――
衝撃で体をくの字に折らせながらも、源五郎の懐から赤い光が飛んだ。

657　施設最終戦　～血戦～

「ゲッ……？　なんだっ!?」
御堂の体を刺し貫く赤いレーザー光線。
腹から、背中へと突き抜けて、壁を照らした。
「お、おじさん!?」
その光景に繭と詠美は、御堂へと反射的に駆け寄る。
すべての音が、消失した気がした。
源五郎がよろめきながらも御堂を見据える。
「御堂……さては……お前――死んだな!?　……クソッ!!」
顔を苦痛に歪めながら、口元から血を滴らせながら、前方へと体を滑らせる。
「……!?」
銃弾の命中した衝撃でちぎれた白衣の下から、黒いチョッキが顔を覗かせる。
恐らくは全身タイプの高性能の防弾服。
「馬鹿野郎！　来るんじゃねぇ!!」
御堂に手を伸ばした二人を目の端で確認すると、狂ったように下がれ、と腕を振った。
御堂を刺し貫いたレーザー光線は御堂に何の害も及ぼさなかった。
そして、『お前、死んだな!?』という台詞の意味。
繭がその時初めて理解した。

（もしかして今のレーザー光線は……体内爆弾を……？）
そして、自分が、自分だけが置かれている状況を。
滑るように前へと進む源五郎の瞳が、曲がり角から姿を現した繭と詠美、そして動物達の姿をとらえる。
「死ねっ!!」
銀色のレーザー銃を、今唯一の生き残り、繭へと向けた。
その玩具にもみえる銃は、ほとんど重量がないのだろう。その手に何も持っていないかのように、片手で軽々と彼女の腹へと照準を合わせる。
「ちぃっ……!!」
御堂もまた、そのレーザーの意味を理解した。
刹那、一気に一足飛びで後方へと体を流す。
先の一撃で倒せなかったのは、いわゆる西部劇の抜き撃ちを真似た御堂の失態だった。
——それでも頭を狙っていれば確実に倒せたのだが。
御堂の油断、慢心が呼んだ大失策。
本人は気づいてないが、その過信こそが光岡に、岩切に、そして蝉丸にどうしても実力が及ばない決定的な理由だった。
源五郎を再度撃てば確実に倒せる時間はあった。
だが、それをしてしまえば、先程のレーザーの反応速度から考えて、繭は確実に死ぬ。
以前の御堂であれば、繭を見捨てて、源五郎を殺していたのだろう。
今の御堂は、考えるよりも前に体が動いていた。
「死ね、女！」
「ガキ！　悪く思うなよ!!」
ほぼ同時だった。どちらが早いかは常人には判別できないレベル。
ドスッ……
「あっ……」
着地と同時、後方に体を流したそのままの勢いで、

繭の腹に渾身の肘打ちを見舞った。
そして、繭を刺し貫くレーザー光線。
赤い光が繭の体を貫通し、背後の壁へと高速で走り抜けた――。
グラッ……
繭は、前のめりに声もなく倒れ――
カラン……
一瞬遅れて、金属音。
「キャッ……」
詠美の悲鳴だけが短く響いた。
爆発音は、ない。
「……御堂ぉ～っ!!」
源五郎が銃の引き金を押しっぱなしのまま腕を下へと滑らせる。
通路を刺し貫いたレーザーが、サーベルのように地面へと突き刺さる。
そして、それは一気に爆弾へと向かった。
繭を光が刺し貫いた時から、その間わずか一秒。

御堂は殴りつけた格好から流れるように、倒れゆく繭の制服の襟を引っつかむ。
「詠美！　おめぇらもだ!!」
さらに、詠美達を壁際へと突き飛ばし、そのまま繭をも投げっ放す。
「にゃっ!?」「ピコッ？」（バッサバッサ？）「きゃあっ!!」
御堂自身もむりやり後方へと体を流す。
後方に一足飛びしてから、そこまでで一連の動作だった。
その同時に発せられた三者の叫びが終わらない内に、ビームサーベルと化した赤い光が、真っ二つに切り裂くかのように爆弾と交錯した。

ドガーーーン!!

爆音。
御堂の体の位置は、爆心地から約三メートル。

小さいながらもそれなりの威力を誇ったその爆風にきりもみしながら吹き飛び、壁へと叩きつけられた。
「ゲェ〜〜ック!?」
火に強い火戦躰とはいえ、結界の内部では常人のそれとほとんど変わらない。
逃げ遅れた下半身に鋭い痛みを感じる。

カチリ……
爆音に紛れ、何かのスイッチが押される音。
「ぐぅ……!!」
なんとか上手く着地し、態勢を立て直す。
着地の衝撃で、焼けただれた足がジュクリとイヤな音を立てる。
「くそが……」
爆風の向こう、源五郎の姿を見据え——たと同時に、御堂は転進した。
立ちこめる爆煙の向こうに見えたシルエット。それは……
「おのれ、御堂っ……!」
壁に隠されていたスイッチを手の甲で叩きつける。
ウイーン……
青銅色の床が開き、中から黒い物体が迫り上がってくる。大型の回転式機関砲(ガトリングガン)。
源五郎がここで御堂らを待ち構えていた最大の理由。戦闘型メイドロボ達が倒れた今となっては、この施設最大最後の切り札。
「……私はここでもう終わりだ……だが、せめてお前も挽肉にしてやる……!!」
壁に叩きつけられもんどり打っていた詠美を半ば無理矢理立たせる。
「ふみゅっ……!!」
「逃げろっ!!」
それはほぼ絶叫に近い。繭を担ぎ、詠美と動物達を促す。
「……っ!!」

この時ばかりは、機敏にそれに従った。
詠美にとって、御堂の初めて見る焦燥だったから。
詠美が走り出したのを確認してから、御堂が繭を反対側の通路へと投げ捨てた。
詠美、繭、それぞれ別方向の通路へとバラけてしまったが、それぞれ源五郎の持つ切り札からは届かない場所へと退避したこととなる。あとは、御堂自身だった。
戦闘力皆無の二人（と三匹）を無理矢理弾き飛ばした、そして全身を痛めつけられた状態では、御堂にも勝ち目はなかった。
普通の軍人よりもはるかに強いとはいえ、今の御堂はただの人間であったから。
銃を撃っても、手榴弾を投げても……この態勢からでは、あの武器相手に相打ちに持ち込めればいい方だろう。
しかも応戦すれば御堂を含めこちらは全滅するのは確実だった。

「軍部は滅んだ……それでもお前はのうのうと生きるというのか……数多くの人間を殺したお前は私と同じ穴のムジナだ……お前達だけでも……殺してやる!!」
手塩にかけて育てた娘はもういない。施設も御堂達によって半ば機能を失ってしまっている。
もう、長瀬としても存在価値などありはしない。
失うものなど、何もなかった。
「今ここで散れ！　御堂っ!!」

658　施設最終戦　～一瞬の勝負～

ガガガガガガガガガガガガガガガガ——
繭を安全圏へと無理矢理投げ捨てていた御堂は、わずかに逃げ遅れた。
回転式機関砲（ガトリングガン）から放射された弾丸のシャワーが御堂を襲った。
「がっ……」

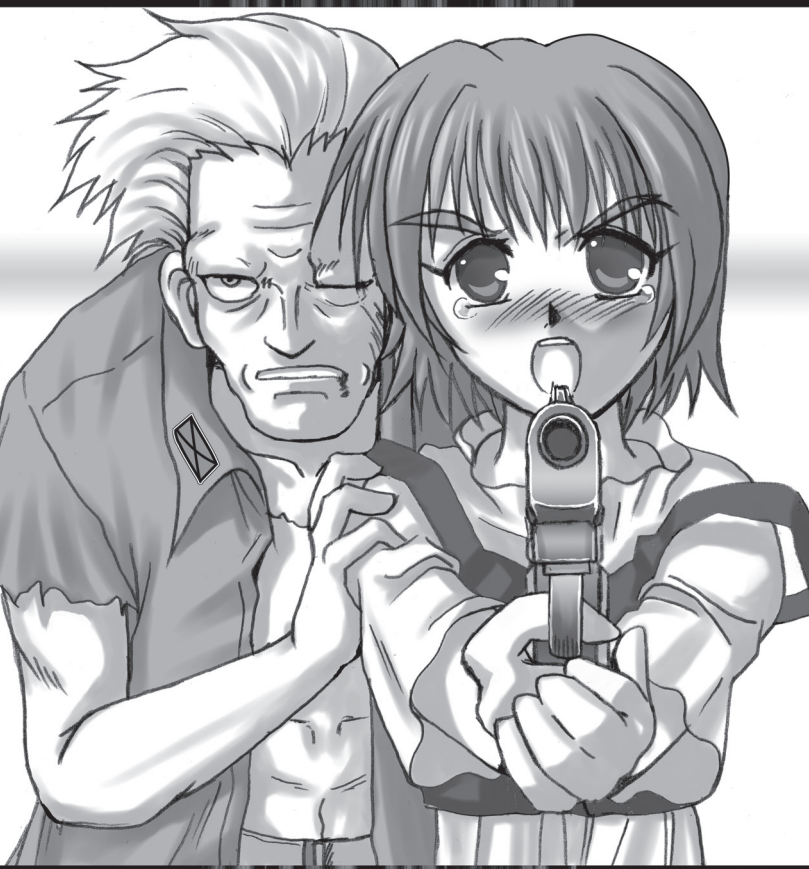
わずかに逃げ遅れただけとはいえ、無数の弾丸が御堂の背中に、足に突き刺さる。
すぼめた御堂の頭にそれが当たらなかったのは奇跡であったかもしれない。
震える手で、懐から手榴弾を二つ取り出すと、ピンを抜いて、源五郎の方へと放った。
それが勢い良く爆発する。
当たるとは思えない。ただの時間稼ぎだ。
手榴弾の爆音を聞きながら、なんとかシャワーの届かない通路へと転がりこんだ。
「ぐうう……」
もう、ガトリングガンの射程距離からは全員が逃れていたが、未だシャワーが壁を穿つ音が響いている。
感覚のなくなった足で、ただ進む。それは来た道をゆっくりと歩いたときよりも遅い足取りだった。
「……!!」
御堂が逃げ込んだ通路は、詠美、そして動物達のいる方の通路。
ちょうど、詠美、御堂と、気絶した繭は弾丸のシャワーで寸断された形になっていた。
目の前で、血相を変える詠美の姿が、歪む。
「ちょ、ちょっととっ……」
御堂の背後に、おびただしい量の血が溢れ、地面に小さな赤い川を作り出す。
「どじっ……たぜ……くそが……」
壁へと背中を預ける。もう、痛みなど微塵もなかった。
「し、しっかりしてっ!! おじさん!!」
「けっ……下僕、いや、したぼく扱いはしねぇのか……?」
「そんなことっ……!! ねっ、はやく逃げなきゃっ……!?」
「俺は……くそ、体が言うこと聞きやがらねぇ……」
御堂の体からはすでに大半の血が体外へと流れ出

ていた。常人ならば確実に死んでいる出血の量。
仙命樹の力はほとんど失われているとはいえ、わずかに残されたその力が御堂の命をつないでいた。
だが、今この瞬間に結界が解かれるならばともかく、このままではあまり長い間はもたない。
壁に付着した血で滑るのにまかせて、そのままずりずりと座り込む。
「おめぇは……逃げろや……」
「あんた置いて……繭ちゃんを置いて……逃げられるワケないでしょ⁉」
詠美の視界が、涙で滲んでいく。
「死ぬぞ……」
「置いていくよりマシよ！　前みたいにっ……‼」
釣り橋で、身を挺してまで自分を助けた由宇。
自らの浅はかな行動で、命を落としてしまった和樹と楓。
あの時の自分のとっていた行動がもし違っていたら、未来は変わっていたかもしれない。

だが、それはもう過去にあった確かな現実。流れゆく時が逆行することだけは、けしてない。
「もう、二度と後悔なんてしたくないっ……‼」
「じゃあ……戦うか……？」
かすれた御堂の声とほぼ同時に、ガトリングガンの銃声が止んだ。
「……源之助さんは、恨んでいるのでしょうかね……たった一人、重荷を押し付けられて」
ガトリングガンは固定式の為、移動させることはできない。
射程距離外へと逃げてしまった御堂にとどめを刺す為の最後の武器であるリボルバー銃を手にすると、白衣を翻して前へと進む。大量の血が流れるその先へと。
「戦うか……？」
呆けたような口調で、だが、目だけは真剣に詠美

を見据えて、そう言った。
　ゆっくりと、その意味を噛み締めながら、頷く。
「自分から、現実から逃げて……後悔は、したくないから」
「相手を……殺すっ……てことだぜぇ……」
「……うん」
「しく……じれば……おめぇが死ぬ。……それでも……か？」
「……うん」
「生きて帰れば、死ぬよりもつらいかもしれないぜ……罪を……背負うってなぁ……そういうもんだ……」
「覚悟してる」
「逃げるより……後悔するかも……しれない……未来が……あるかも……」
「それも――覚悟してる」
「……」
「……」
「けっ……おめぇなら、大丈夫だ……戦え。機関銃ではなく、ポチ（Cz75）の方でな……」
「うん……」
「俺様を、背負え」
「えっ？」
「はやくしな……もう、ヤツがくるぜ……」
「う、うん……」
　戸惑いながらも、御堂を背負う。その体は、悲しいほど軽くて。
「通路の向こうへ、下半身に力を入れて銃を構えろ……」
　言われたとおりに、両足で踏ん張りながら両手でポチを構える。
「こ、こう？」
「そうだ……」
　震える手で、御堂が詠美の手に自らの手を重ねる。
「一発勝負だ……俺……が照準を合わせてやる……」

全身防弾服を着込んだ源五郎に、非力な詠美では機関銃は分が悪い。
あえて、拳銃での一発に賭けさせた。
本来なら御堂が撃つべきなのかもしれない。
だが、もはや照準を合わせ、防弾チョッキに覆われた源五郎に致命打を与えること、そして、銃の反動に耐えられる力はない。……引き金を引けるかどうかも怪しい。
「もっと……腰を……落とせ……腕はこう……」
「うん……」
「狙うのは眉間だ……俺が撃て……と言ったら……撃て……覚悟は……」
「できてる」
「そうか……。いいな……撃て……と言ったら……引き金……を引く……だけで……いい……」
「ぴこ……」
「にゃう……」
(ばっさばっさ……)

寂しげに、動物達が御堂のそばを回る。
「離れてな……」
獣を一度見て、力なく、笑った。
「これが私の最後の仕事だな……規則違反な上、任務放棄状態だが……まあ、それもいいだろう」
マザーコンピューター室に残した最後のメイドロボが気がかりではあったが、もう、それらを顧みる時間はない。
「最後まで駄目な親だったな」
リボルバーに弾を込め、シリンダを回す。
源三郎には大分劣るとはいえ、射撃の腕はそこらの戦闘員よりは上だ。
傷ついた御堂相手ならば互角以上に戦える。
「さあ、決着をつけようか、御堂……」
詠美の視界の先、三つの通路が重なり合う中心部、源五郎の影が近付いてくる。

震える詠美の手の上に重ねられた御堂の手が心強く感じる。
これが、最後の――そして一瞬の勝負。

659　乾いた心

……暑いな
照りつける太陽が私の体を蝕んでいく。
いつもならこんな暑い日は木陰でぼんやりしているところだ。
けれど今の私は太陽に照らされながらただひたすら時が過ぎるのを待っている。
……私なにしてるんだろう？
少し熱でボーっとした頭にそんな考えが浮かんだ。
あの人達の誘いを拒んだのに何故私はここに居るのだろう。
彼らに言った言葉が頭の中で駆け巡る。
――……みんな……知らないんだよ……仲間なんて……本当は……薄っぺらい関係なんだ――
そう、仲間なんて薄っぺらいもの。
その証拠にこの島ではみんな殺し合っているじゃないの。
私はどこか壊れてしまったのかもしれない。
あの子が消えてしまったときから。
どこか普通の人間とは違う感じの子で、凄くいい顔で笑う少女だった。
あの目つきの悪い青年に懐いていて、私の目から見ても微笑ましかった。
何故あの子がこの世から消えなければならなかったんだろうか？
それがこの島に来たときからあの子に定められた運命だったんだろうか？
私には分からない。
思えばあの子が消える前までがあの喫茶店で幸せを感じられた唯一の時だった。
秋子といういつも微笑みを絶やさなかった人も、

名雪という周りをほのぼのとさせる空気をもった子も、琴音という優しかった子も今はこの世に居ない。
失ってしまったものはもう二度と戻らない。
だから私はもう何も欲しがらないことにした。
そうすれば何も失わずに済むから。
それなのに私は出会ってしまった。あの騒がしい人達に。
失いたくないと思える人達に。
でも、それは無理なこと。それがこの島で私が学んだこと。
それでも私は待ち続ける。
彼らが戻ってくるのを。
期待などはしていない。期待すれば裏切られるから。
けれど、もし彼らが戻ってきたなら。
もう一度信じてみてもいいのかもしれない。
スッと日が陰る。
空を見上げてみると今まで雲一つなかった空に雲が出始めている。
一雨来そうね。
そんなことを考えながら私は彼らが消えていった場所を見つめ続けた。

――白ヘビの『ぽち』施設の外にて

660　さよなら

鼓動。
あたしのものである筈のそれは、酷く大きく聞こえて。
背中に感じる、感触。ぬくもり。
それは、この島で一番長く一緒に居た人。そして、今まさに命が失われようとしている人。
……。
おじさんは今まであたしを守ってくれた。
無愛想で意地悪だったけど、おとうさんみたいな

やさしさであたし達を守り続けてくれたんだ。
そんな、おじさんがあたしに最期にしてくれるこ
と。いつも、ダメダメだったあたしを守るために最
期の力であたしに残してくれる想い。
だから、わたしはそれに応えたくて。
それが、人を殺すということであっても。
不思議とそのことについて怖いって気持ちは無か
ったんだ。
……なんでだろう？
ううん、そんなこと解ってた。
銃を構えるあたし手に被せられている、大きな手。
ごつごつして暖かくて、とても心強かったから。
最後の一撃を。
……最期の一撃を。
あの男に、叩き込む。
銃が想いに応えてくれるのなら。
この一発は必ず当たるだろう。
ありったけの気持ちを銃にこめて。

体の全てを銃と一つにして。
心の全てをおじさんと一つにして。
長い、長い、一瞬。やたらと、響く足音。
廊下の先に見える影。そして、無防備にあらわれ
る白い男。その瞳がこちらを見やり、銃を構える姿
はやたらスローモーションに思えて、
「撃てっ――！」
声。

――轟音、二つ。

やがて、糸の切れた操り人形のように音を立てて
それは倒れる。長瀬源五郎。
放たれた銃弾は、その額に穴を穿ち。肉を破り、
骨を砕き、脳を蹂躙し、引き裂き、吹き飛ばした。

そして――

グシャァッ！
なにかが顔に叩きつけられる感触と共に、あたしは、壁に叩きつけられた。
背中のおじさんのおかげで衝撃は少なかったけど、おじさんは苦しい思いをさせてしまったかもしれない。
ショックで目の前がくらくらする。
……あたし、どこ撃たれたんだろ？
衝撃があったのは頭、だけど……
銃で頭を撃たれて無事っていう話は聞いた事無いなぁ。
いや、ひょっとしたら、もう当たっててあたしは死んでいるのかもしれない。
もしかしたら、今のあたしはゆーれーなのかも？
だって、思ってたより全然痛くないし……
……。
……？

もしかして、外したのかな？
詠美は大分定まってきた視界で、周りを見回してみた。
そして、すぐに理由を発見した。
詠美の目の前で、びくん、びくんと体を震わせる、何かが。
目は虚ろ。一瞬で致命傷だと解りそうなくらい、白い体毛が赤く染まっている。胴の真ん中には赤い穴。そこからは未だ血を吹き出し続けている。
それは犬――ポテトだった。
……へへ。へへへへ。
笑う。心の中でか？　それとも、ちゃんと笑えてるのか？　そんな事、知ったこっちゃねぇ。
女の顔が見えた。ぽかん、と気の抜けたような顔してやがる。ま、無理もないか。
ああ、痛ぇ。何やってんだろうな、俺。

気が付いたら、飛んでた。犬をナメたらいけねぇ。男の銃が、女の眉間を貫く事など、すぐに分かった。
あとは……このザマだ。くそ、痛ぇ。……なんか痛くもなくなってきてるな。
あぁ、逝っちまうのか、俺。人間の為に命張っちまって、それで死んじまうのか？
やれやれだぜ！
……。
……ああ、女が、泣いてる。泣くんじゃねぇよ。せっかく　助けてやったのによ。ったく。
あ、見えなくなった。なんかもう痛くもねぇな。とうとうオシマイか？
……。
抱き、上げられてるのか。血が付くってのに、よ。お構いなしかよ。
……でも、暖けぇ――な。
……ああ。こんな、死に方も……悪くねぇ、かも、なぁ……。

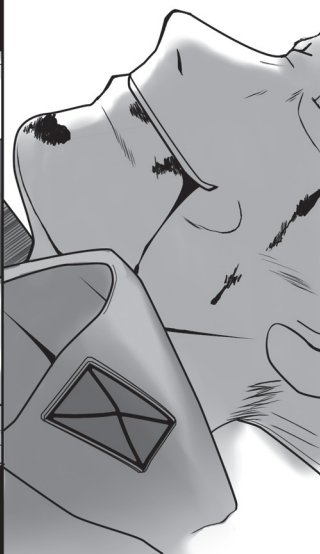
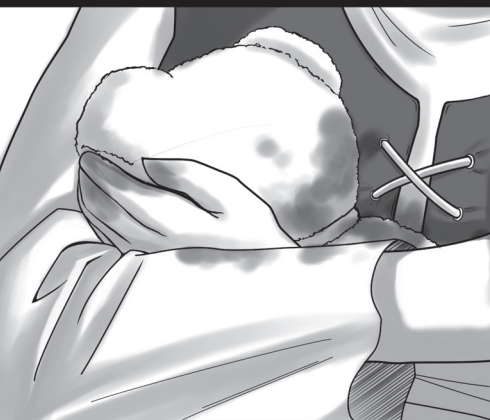
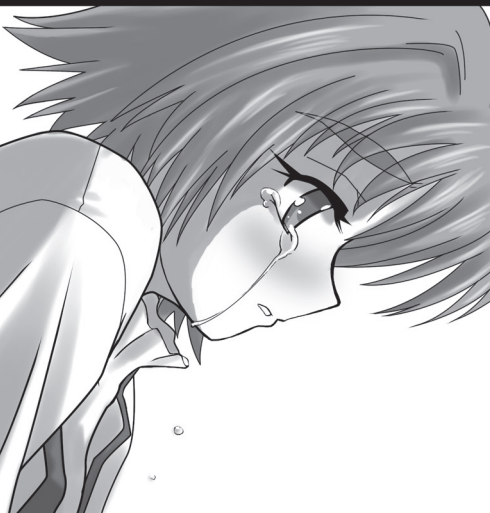
「その、獣が、おめぇを庇ったたってぇのか」
「……うん」
「……けっ。たかが獣のくせに、大したことしやがるじゃねぇか」
笑う。笑えば、笑う程に口から血は吹き出して。もはや笑う事すらままならない。
……それでもいい。死ぬのは分かってる。
顔。顔。記憶の中に埋もれたそれが、走馬燈のようにぐるぐると回る。
蝉丸――ああ、結局奴には勝ち逃げされんのか。けっ。……まぁ、しょうがねぇ、か。決着は地獄でつけるとしようか。どうせ、俺達軍人が天国に逝ける筈もないんだしな。
あゆ――っていったか？　あのガキ。俺の頭の中でさえ泣いてやがる。ガキが。しけた顔してんじゃねぇよ。くそ。そういやあいつのせいでこんな事になっちまったのか。……呪うか？　けっ、面倒くせぇ……止めだ。

ぐるぐる。ぐるぐるぐると回る。くそ、こんな所で死ぬなんて、よ。
——生きたかった。だから、何よりも、まずは生き残ろうとした。最初は、その為に他人を蹴落とすことなんて苦でもなかった。
——それなのに。今じゃ、死ぬ前に笑おうってんだからなぁ……。けっ。腑抜けてやがる。とりあえず、そう、ぼやく。だが、心の何処かで——それでもいいと。そう思っているのである。自分は、変わったのだろうか？　白衣の男も言った。らしくない、と。
それに対して自分は言った。踊らされるのは、嫌だと。
……自分は、自ら、これを望んだというのだろうか。本当に、これを望んでいたのか。
これが。これが、本当の、俺なのか……？
詠美——この馬鹿、いつまでも泣いてんじゃねぇよ。お前はこれから一人で生きていかなきゃいけねぇんだ。それなのにそんなんでどうする？
「……泣いてん、じゃねぇぞ」
細く、細く。声は、虚ろに響く。
それでも、詠美が泣くのを止めたのが見えた。そう、それでいい。
「泣いているのは、おめぇらしく、ねぇ、からな……」
「——」
「笑って——笑って、バカやってろ。そうじゃねぇ、と、おめぇらしく——」
がふっ。
血が舞った。吐き出された血が、俺の死が近い事を示していた。もう、これまでか。
いや、もはや、目の前すら暗くなりつつあった。瞳孔散大。やれやれ、俺の体ももう限界だとさ。強化兵もあっけないもんだな……
「……ぁっ」
何を言っているのか？　いや、そもそも、何か言

ったのか？　それとも自分が聞こえてないだけなのか。
「――」
自分も何かを返す。いや、返した、筈だ。どちらかなんてもう解らない。
目も。耳も。もはや全てが死に絶えようとしている。それでも、口だけが動いていれば。少なくとも、それなら、あのバカは……寂しがらねぇだろう。
――そして、もはやそれすらも、動かなくなって。
……最期に、思った。らしくねぇな……と。
確かにそうだ。だが、それでも、
――満足だった。

八十九番　御堂　死亡
ポテト　死亡
長瀬源五郎　死亡
【残り22人】

661　焦り過ぎた故に……

――それは北川が出発してからすぐの事だった。
「北川さん、行っちゃったね」
「……」
「私達もそろそろ荷物まとめて出発しないとね」
「……（こくこく）」
私達は荷物を整理していた。使えるもの、使えないものの仕分け。弾数の確認。
女の子二人では持っていける量も限られるので必要のなさそうな物や、私達では使えなさそうな物はここに埋めていくことにした。
そして分別がおわり出発しようとしたときスフィーがついにアレを見つけた。
「あれ……このキノコたしか……」
「……」

「え、このキノコがどうかしたかって？　このキノコね、私の国で実験用に昔作られたキノコにそっくりなの。この見た目といい独特の香りといい。そのキノコは性格反転キノコっていうの。私のご先祖様でとっても内気な人がいてね、その性格を直すために作られたの」

――内気な性格を直すために作られたの――
――内気な性格を直すために作られたの――
――内気な性格を直すために作られたの――

芹香の頭の中でリフレインされる台詞。
自分の意志を周りに伝えることが出来るようになるキノコ。綾香も浩之も居ない今、それは彼女にとって起死回生の品に思えたのだ。
だから、芹香は次の言葉を聞き終わる前にキノコの一つに噛み付いていた。

「……その内気な女王様はね、確かに内気な部分は治ったんだけど――思慮深い部分まで反転してしまったの」

【キノコ　残り二つ】

662　空の継嗣、黒の啓死

「すまない、郁未」
私、天沢郁未の意識を繋ぎ止めたのはあいつのその言葉だった。
そして、その言葉と同時に、私の中で何かが膨れ上がる。
それは、憎悪、恐怖、絶望、戦慄、怒り、悪意、狂乱、殺意、黒いもの、熱く滾るもの。

――不可視の力。

まずい、これはまずい。

私の怪我なんてどうでもいい。
本能が鳴らすこの警鐘に比べたらどうでもいい。
ライフルを持った男なんてどうでもいい。
目の前の、確かに私が好きな人が放つ、この畏怖感に比べたらどうでもいい。
気がつけば、あの銀髪の男が私を抱えていた。

——なんてきたの！　馬鹿!!

そう叫ぼうとして、でも私は震えるだけだ。
男、往人の方も聞く耳はないらしい。なんとか林の中へ離脱しようとする。
でも、それは甘い。あれはそんなことを見逃さない。
音も立てずあいつは恐るべきスピードで私達の後ろに回ると、その手が鋭い風きり音とともに振り回される。
「がっ!?」
「はうっ!?」
私と往人はその一撃を受けて別々の方向へ弾き飛ばされる。ベネリが転がる。
恐るべき一撃だった。間違いなく不可視の力が込められていた一撃だった。
本来なら私達はその一撃で肉塊に変えられてだろう。
そうならなかった理由はただ一つ。
私が、不可視の力でガードしたからだ。
「……何やってんだよ!?　あんた!!」
かろうじて意識をつないだらしい往人が叫ぶ。
「俺は、あんたらを助けようと……」
だが、そこで往人は口をつぐんだ。
気づいたのだ。もはや少年がそんな言葉の通じないところにいる事に。
おそらくは、そのことはライフルの男の方も本能で気づいていたのだろう。

だがライフルの男は、本能よりも理性のほうを優先させた。
「……動くな……」
私の頭に銃口を突きつけ少年に警告する。
普通の状況ならば、確かにそれは最善の行動だ。
だが、今の状況はまさしく異常。
人の理性で対処できる範疇にはない。
少年は男のことを歯牙にもかけず、つぶやいている。
「……消えて……いく……」
うつろな声でつぶやきながらこちらに手を伸ばす。
「僕が……消えて……いく……呑まれていく……」
ぶおん、という耳障りな音が次第に大きくなっていく。
こちらに向けた少年の手のひらの上の塊が次第に大きくなっていく。
それは力の塊。私にしか見えない不可視の力。
それは、視覚以外の何かで男にも感じる事が出来たらしい。
「グッ……」
その表情はひとつの疑問をうかべていた。
それは私の持つ疑問と同じもの。
なぜ、少年は力が使える？
なぜ、私は力が使える？
この島にきてから感じていた抑止力は、結界は、今も確かにあるというのに。
呼応している。私の中の何かが少年に呼応している。
かつて少年が私に教えてくれた事。
不可視の力は少年と性行為をする事で、対象者の中に少年の分身が植え付けられる事で、授けられるという事。
だからなのだろうか？　だから、私も少年の影響を受けて……。
「なくなってしまう……僕が……」
分からない。もう、なにも分からない。

ただ、はっきりとした喪失感が私を満たしていく。大切な人が目の前で消えようとしている、そういう確信が私を満たしていく。
はっきりとした恐怖が私を満たしていく。化け物が目の前で私を殺そうとしている、そういう確信が私を満たしていく。
相反する感情が私を満たして、あふれようとして。私はもうパニックを起こすしかなくて。
「銃を置いてください！　撃ちますよ!!」
いつのまにか、観鈴がベネリを構えてライフルの男の頭に突きつけていた。
「わ、私、本気ですよ!!」
観鈴が叫ぶ。
「馬鹿!!　観鈴、逃げろ!!」
往人が叫ぶ。
「何やっとんねん、早くこっちへ!!」
晴子が叫ぶ。
「……」

突きつけられたベネリにも注意を払わず男がうめく。
「うあああああああっっ!!」
私が叫ぶ。
叫んで、コントロールもおぼつかない不可視の力でシールドをはろうとする。
その中で少年のうつろな呟きだけがやけにはっきりと聞こえた。
「……呑まれていく……神奈に……」
そして、力が放たれた。
すさまじい爆音があたりを轟かし、私のからだを衝撃がおそい、
薄れていく意識の中で、
「助けて……イ……ク……ミ……」
そんな声が聞こえたようなきがした。

……闇の中、私は夢を見る。

それは、私の夢じゃない。
夢なのにそれは、はっきりと分かっていた。
それは、少年の記憶、私の中の少年が見せる夢だ。
「成功だ！」
その声とともに数人の白衣の男達が歓声を上げる。
その胸にはＦＡＲＧＯのロゴがついている。
「ようやく、力の結晶化が達成したな……」
それは計画。ＦＡＲＧＯが空に浮かぶ少女、呪われた少女、意識を持つ闇を纏う少女を発見した時から始まっていた計画だった。
「やれやれ、あの茶番劇にも意味はあった訳だ」
一つの島に集められた人々。殺し合いを強要される人々。
彼らは贄だ。
空に浮かぶ呪いは、更なる呪詛を求める。
それは、悪意、絶望、恐怖、殺意、怨恨。それが求める呪詛。
殺し合いが進むうちに生まれる贄達の呪詛は、空に浮かぶ呪いに更なる力を与える。
そうして、ＦＡＲＧＯはその力を掠め取る。掠め取って結晶化させたのが……
「しかし、これに擬態と偽装人格など必要なのかな？」
「擬態は必要だろう。正視に耐えんよ。この姿は」
「偽装人格も必要ではあるさ。力の植え付けには被験者との性行為が必要だからな」
それが、少年だった。

さわやかな風が私の頬をなで、草の匂いが私の鼻腔をくすぐる。
「う……ん」
「やぁ、ようやくめがさめたようだね」
覚醒した私の耳に、少年のいつもの穏やかな声が届く。
私は、ゆっくりと目を開け、周りを見ようとして

立ち上がろうとして、崩れ落ちた。
「ああ、まだ動かないほうがいいよ。結界内で力を使った反動がきてしまっているしね。大体、郁未の受けた傷は決して浅いものじゃないんだ。手当てはしておいたけどね」
言われて私は、肩を、足を見る。確かに手当てがなされていた。
「ありが……と」
そういって私はゆっくりと首を回す。
側には二人の人間が倒れていた。栗毛色の髪の少女、観鈴と、ライフルを持った男だ。
二人とも草の中で眠っている。
「……なんで、草原なの？　ここ」
確か、林の近くにいたはずよね。
「ああ」
少年は苦笑した。
「結界内で無理に力を使っちゃったからね。しかもろくにコントロールも出来ていない二人が力をぶつけ合っちゃった訳だから力が暴走しちゃってね。島の中のどこかに転移しちゃったらしい。僕ら四人だけ」
「へぇ……大変だったんだね」
けだるく私は返事した。
「何だよ、もっと驚くことなんじゃないかい？」
「だって、どうでもいいもん」
私、知ってしまったんだもん。
何もかも知ってしまったんだもん。
その声は変わらず穏やかなままなのに、その表情は変わらずひょうひょうとしたままなのに。
私が心から大切に思っていた人はもういないって事を。
「あなたが、ジョーカーだって事を、知ってしまったんだもん」
そっと、草原に風が吹き抜ける。
「……そうか、知っちゃったか」
少年は変わらない調子で続けた。

「君は僕の継嗣だからね。意識がつながってしまったようだね」
「……いつからそんな風になっちゃたの？」
「君と会うちょっと前ぐらいからかな、姫君と意識が交わりはじめたのはね」
「もっとも僕、いや僕という偽装人格はそれを自覚していなかったけどね。姫君の事は忘れるように偽装人格は施されていたから。実際おかしな話だったんだ。僕だけが結界内で他の人よりも力を使えていたんだからね」
「なんで、そんなことになっちゃったの？」
「長瀬たちの不注意のせいさ。どういう事情があったか知らないが姫君をその力を封じてある社から別の社へ移動したらしい」
「……社？」
「そう、姫君の力を結界という抑止力のみに使うようにするためのものさ。もちろん、移動中も結界の効力が続くように、何らかの法術は用いていたらしい。結界がなくなってしまったらこの大会そのものが成り立たないからね。ただ、その間にわずかながら姫君の封印が弱くなってね。僕と意識をつなぐことに成功したんだ。だが、意識が融和するさいにFARGOに施されていた偽装人格が邪魔になってしまった。そのせいで、僕の力が暴走してしまったんだ」
「そして、側にいた私もその影響を受けてしまったわけだ？」
「そういうことになるね。影響を受けたのは多分側にいた君だけだろう。結界内で暴走した力二つが激突すればただで済むはずが無い。転移程度で済んだのは幸運だよ」
私は手のひらを見て、そこに意識を集中させた。
「……今はもう力はつかえないわね」
「姫君が再び別の社に封じられてしまったからね。もう不可視の力を使うことはできない」
私は寝転んだまま腕を顔の前に持ってきて表情を

隠すと、さらに尋ねた。
「あなたは、もう、いないの？」
「偽装人格の話をしているのなら、もういない。本来僕らには我という考えはないんだ。結局僕らは姫君の分身だからね。ＦＡＲＧＯのもうけた偽装人格は先程、姫君の意識に飲まれて消えてなくなったよ。もちろん便宜上、独自の思考能力と、偽装人格が持っていた記憶は残っているけどね」
「……悲しく、ないの？」
「そういう主体性は、僕にはないね。まあ、本来ならあるべき形に戻れたのだから安心すべきなんだろうけど」
「これからどうするの？」
「うん？　もちろん姫君の望むとおりこの大会を進行させてもらうよ。確かにこれは贄としては最上のものだからね、ただ……」
わずかに、少年の瞳が鋭くなる。
「今回は、今までとは様子が違うな……。人外の力の持ち主が多すぎる。管理もあまりに杜撰だ。前回の大会で弱体化したＦＡＲＧＯではなく長瀬一族が主催しているというのが気になるな……何を考えているんだろうね？」
少年は肩を竦めた。
「結局、偽装人格には感謝すべきだろうね。僕と姫君とのつながりを隠す、いいカモフラージュになってくれた。ＦＡＲＧＯとの関係は確かに蜜月のものだったけど、長瀬一族はまた別の意図をもっているようだ。彼らの真意は確認する必要があるね」
「……なぜ、私を殺さないの？」
それが、最後の質問だった。
「……想像はついているだろう？」
「確認したいのよ。もう、甘い期待はしたくない」
「そうか」
少年はうなずいた。
「君は、僕の継嗣だ。僕とつながっている。即ち、君たちは姫君とつながっている。姫君の分身が君た

ちの中にある」
「いつか私達も、あなたのように意識を侵食される
というわけ?」
「そういう事になるね。君たちには僕とちがって我
がある。変化は僕よりは緩慢だろう。けれど、姫君
の意識はいずれ君の我を飲み込むだろう」
なんで、そんなことが平気で言えるのよ。
さっきまで。ほんのさっきまで、私達恋人だった
のに。
私、こんなに悲しいんだよ。張り裂けそうなんだ
よ。
なのに、なぜ笑っていられるの? あなたは。
そして、なぜ私は。壊れないの?
「一つだけいっておくわ」
私はかすれた声で言う。
「あなたが、偽装と呼ぶあなたは。姫君とかいうや
つが殺したあなたは。本物だった。本物だったのよ。
あなたは本気で怒ってた。私と同じ名前の少女が
殺された事に本気で怒っていた。
あなたは本気で心配してくれてた。私の事本気で
心配してくれてた。
あなたは本気で悲しんでいた。この島で殺し合い
がおきている事を本気で悲しんでいた。
あなたは本気で照れていた。私のいたずらに本気
で照れていた。
あなたは本気でわびていた。私に本気ですまない
っていっていた。
あなたは本気でおびえていた。消える事におびえ
ていた。私に助けを求めていた。
だから私は」
それは誓い。お母さんの時には果たせなかった誓
い。
「あなたを助けるわ。それができないなら。あなた
を殺してあげる」
少年は、しばらく私を見て。
「そうだね。君ならそう言うだろうと、思っていた。

強いよ、確かに君は」
そうだろうか。
こんなに悲しいのに、それでも壊れる事ができないって言うのは、とても、絶望的な事じゃないだろうか。
「こいつの荷物と、僕の荷物はおいていこう。僕には偽典があれば充分だろう」
少年は男を担ぎ上げると一度もこちらを見ないで立ち去っていった。
私も、少年の方を見なかった。
泣いていた。涙を止める事ができなかった。
どうして、どうしてなんだろう。
どうして、私の大切な人は、私を裏切るんだろう。
初恋の人も、お母さんも、少年も。
わたし、あいしかたをまちがえているのかなぁ
……。

663　涙雨が誘う物（第八回定時放送）

今までの晴天が嘘のように曇りだした。そして雷鳴……。島を包み込む涙雨。
スフィーは雷が彩る光と影の中何も言えず見つめていた。
——変わってしまった彼女を——
蝉丸は『それ』を背負いながら雨を見つめていた。
——水の嫌いな戦友の無事を祈って——
初音達は祈るような眼で雨を見つめていた。
——出て行った仲間の無事を願って——
北川達はその雨を哀しげに見つめていた。
——今は亡き友を想って——

そしてこの島には似合わない優しげな声が島を包み込んだ。
「定時放送を行う……。

一番　相沢祐一
五番　天野美汐
九番　江藤結花
四十三番　里村茜
四十六番　椎名繭
四十七番　篠塚弥生
六十四番　長瀬祐介
七十九番　牧部なつみ
八十九番　御堂
九十番　水瀬秋子
九十四番　宮内レミィ
九十九番　柚木詩子

それでは健闘を祈る」

その放送を聞き終えると同時に走り出す影（ぽち）があった。それは乾いた心に染み込んだ雨のせいかも知れない。

664　突き刺す雨

「雨、か……」
晴れの空から一転、突然降り出した滝のような雨に、マナは物憂げに窓の外を見やった。
この島に連れて来られてからは初めての雨。
森を歩いてる時に降られなくて良かったわ——場違いなことを考えている自分に、自然と笑みが浮かんだ。
「……頭の病気か？　怖いぞ、急に笑い出したりして」
「うるさいわね」
窓から見えるのは突き刺すような雨の筋とどす黒

い雲だけ。空が一瞬光り、雷鳴が轟く。もしかしたら嵐になるのかもしれない。
（いかにも何か起きそうな天気ね……そう、ミステリーなんかではこんな日に人が死ぬんだわ。この状況だと、私たちは同じ部屋にいるから安全として……葉子さんがナイフで刺されてたり、とか）
不謹慎な想像が徐々に形になりかけていることに気づき、マナは軽く頭を振ってそれを追いやった。
それでもまだ何となく不安だったので、思わず葉子の様子を窺いに行こうと腰を浮かせかけたが、耕一にバカにされそうだったので止めた。
「なんかさっきから挙動不審だな」
「……あなた、半病人のくせに口数多いわね。私に構ってる暇があったら可愛い従妹の心配でもしてあげたら？」
マナは初音の方を顎でしゃくった。耕一がキュッと唇の端を噛んだ。
雨が降り出す前から初音は窓の外を見つめたっきりだった。どこか遠い目で外の景色をじっと眺めていた。
もちろん、初音が見ているのが景色などでないことは二人とも十分にわかっていた。
「見てて痛々しいわね。……あーあ、妬けちゃうなー」
「なんだ、マナちゃんにはそういう相手はいないのか」
「……」
言った瞬間、耕一はしまった、と思った。ひとときの平和な時間が、自分たちの置かれている状態を忘れさせていた。
耕一は口をつぐんだ。謝るのは余計に失礼だと思ったからだ。この後、当然予想されるべき気まずい沈黙にも耐える覚悟はあった。
しかし、マナはあっけらかんとして答えた。
「ふーんだ、彼氏の一人もいなくて悪かったわね。どうせ私はナマイキで可愛くないですよーだ」

「……」
今度は耕一が黙る番だった。しげしげとマナの顔を見つめる。
「ちょ、ちょっと、変なとこで黙んないでよ！　大体、女の子にそんなこと聞くなんてサイテーなんだから！　はっきり言ってデリカシーゼロよ。あーあ、死んでもモテないタイプね、あなた」
慌てて目線を逸らすと、マナは早口でまくし立てた。
それを観察するように見ていた耕一だったが、やがてゆっくりと口を開いた。
「……うん、客観的に見て可愛くないってのはウソだと思うぞ」
マナの頬にサッと赤みが差した。
チラリと横目で見た耕一の顔が真剣そのものなのを見ると、さらに頬が熱くなるのがわかる。
「な、なによ！　お世辞なんか言ったって何も出ないわよ！」
「でも致命的にナマイキだからな」
耕一がニカッと笑ったのと、マナの蹴りが耕一のスネに炸裂したのが同時だった。
「ぐおぁぁぁぁぁっ！　痛ぇ！　うああ……」
「……ほんっと女の人に縁のなさそうな――」
ザザッ……
マナの言葉を遮るように、外から雨に霞んだノイズ音が飛び込んできた。
(放送……！)
反射的に身が硬くなる。そして――
『定時放送を行う』
(……あれ？)
外のスピーカーから発せられている声は、好む好まざるに関わらず聞き慣れてしまった声ではなかった。
少なくとも、あの不愉快な高槻の声でないことは確かだった。その声が、淡々と死者の名前を読み上げて行く。

「……良かったっちゃ良かったんだけどね」
　静かに目を伏せ、マナは耕一の足元に座り込んだ。
　それは以前からずっと思っていたことだったが、なんだか今不意に口に出してみたくなったのだ。
　マナは耕一の足に手を伸ばすと、スネ毛を一本引っつかみ、ピッと抜いた。
「いてっ！」
「ああやって名前読み上げる時、自分の知り合いがいないとつい……気をつけてても、不謹慎だなって思ってもついホッとしちゃうのよね。そういうのってやっぱりなんだかなーって思うわけ。自分がヤになって仕方ないわ」
　言いながら、スネ毛をプツッ、プツッと抜いていく。
　かなり痛かったが、耕一はマナを制止することができなかった。うめき声をこらえて、一言呟く。
「っ……そうは言っても……なぁ」
「わかってるわよ、ただちょっと愚痴ってみたかった。
（もう、今さら緊張して聞いたってしょうがないんだけどね）
　マナにとって大切な人たちは、既に全員この島で殺されていた。
　だが、実は夜中に出会い、傷の手当てをし、そして自分の在り方を考える契機となった男女――長瀬祐介と天野美汐という名前の二人がその中に含まれていたことは、マナには知る由もなかった。
――放送が終わると、耕一は無言でマナの方に視線を向けた。マナも同じく無言のまま、首を小さく横に振る。
　耕一は安堵したように息をもらした。
「そっか、お互い知り合いは無事か。良かった」
　無事でも何でもないのだが、マナは敢えてそれに口を挟もうとは思わなかった。
　ただ一つだけ、どうしても聞きとがめたことがあった。

ただけ。ごめんなさいね」
深刻になりかけた耕一をフォローするように、しかしスネ毛を抜く手は休めずにマナは言った。
しばらく、部屋の中では外の嵐の音、そして時折もれ出る耕一の声しか聞こえなかった。
「でもまぁ、実際仕方ないとは思うんだけどな」
ややあって、耕一が口を開いた。照れ隠しか、目はあらぬ方向を見ている。
「そんだけ身体がちっちゃいんだ、そんな全部しょい込んだら潰れっちまう。自分の心配できる分だけ心配すればいいいんじゃないかな。誰かのことは誰かが考えてくれるさ。少なくとも俺はそれでいいと思うんだ」
「……」
ちっちゃい、と言ったことでまた蹴られるかなと思ったが、それはなかった。代わりに、スネ毛を引っこ抜く手が止まっていた。
マナは顔を上げて耕一の顔を見ると、ふっ、とバカにしたように微笑んだ。
「……ふふっ。私もあなたくらい単純だったらなー」
「ちぇっ。大きなお世話だ」
「あなたくらい身体が大きいと、さぞかしたくさん背負い込んじゃえるんでしょうね。これまでのところ、チビで困ったことは特にないけど……ちょっと羨ましいわ」
「ま、デカいのだけが取り得みたいなもんだからな」
「まったくよ」
二人は顔を見合わせて笑った。
——目も眩むような稲光とともに、天を揺るがすような雷鳴がすぐ近くで爆発するように轟いたのはその時だった。
『キャ―――――――――――――ッ！』
絹を裂くような悲鳴が唱和する。マナと初音だ。
「大丈夫だよ初音ちゃん、落ち着いて……と」

耕一は自分の足にギュッとしがみついている少女を見てニヤリと笑った。
「ふぅーん、マナちゃんは雷が怖いんだ、そっかー」
「なっ……！　こっ、怖くなんかないわよ！　ただちょっと、そう、驚いただけよ！」
自分が何にしがみついているのかに気づき、マナはガバッと飛びすさるように離れた。
「そっかー。へぇー。へぇー」
「この男っ……！　半病人はおとなしく寝てなさいよっ！」
「いやぁ、デカいのとついでに丈夫なのも取り得ですから」
「ム、ムカつくわ……」
背中越しに聞こえる賑やかなやり取りに、静かに雨に煙る景色を見つめていた初音はこっそりと微笑んだ。
雷はマナたちのいる家のすぐ側の木に直撃していた。
だから、その凄まじい雷鳴にかき消された『その音』を聞いた人間はその場にはいなかった。

665　雨がやむとき

ん？　雨が降ってきたみたいだな。
少しずつ薄れていく意識の中、雨粒の存在を感じた。
「うわっ！　雨！」
「仕方ないわね。多分通り雨でしょうからどこかで雨宿りするわよ」
って俺置いてきぼりっすか!?　マジっすか!?
「置いて行かれたくなかったらさっさと立ちなさいよ」
いや、そんなこと言われても。あの熊殺しのパンチを受けたらたとえ矢吹丈でも立ってられませんよ、

姐さん。
「誰が熊殺しよっ！」
あれ？　さっきから何で会話が成立してるんだ？
ひょっとしてエスパー？
「何言ってるのよ。さっきから口にだしてるわよ」
う〜む、またやってしまったか。
「いいからさっさと立ちなさいよ。私濡れたくないのよね」
「了解しました。晴香お姉さま」
確かに婦女子をこの雨の中立たせて置くわけにはいかないからな。
俺が立ち上がろうとしたとき、例の死亡者放送が流れてきた。

取りあえず俺達は木陰で雨宿りをすることにした。
放送があった後、二人とも一言も喋っていない。
誰か知り合いの名前でもあったのだろうか？
ま、今はその方がありがたいけどな。
今の俺に話しかけられても、『いつもの北川君じゃない！』って言われるのがオチだからな。
未だ降り止まぬ雨をぼんやりと眺めながら俺は考え事をしていた。
全く相沢のやつ。難しい問題残して逝きやがって。人を信じるっていうのは難しいことなんだぜ、特に今のこの島では。
ま、それでも俺はこの島で生きてる限りこのスタンスを貫くけどな。
それが……相沢を殺した俺があいつにしてやれることだからな。あの世で親友に顔向け出来なくなるようなことはしたくないしな。
相沢が言ってたようにこの殺人ゲームは馬鹿げている。主催者の鼻をあかしてやるためには出来るだけ多くの人間で生きてこの島を脱出することだな。
そのためには……取りあえずあのＣＤの謎を解き明かすことだ。
頼りにしていた椎名っていう子はさっきの放送に

よると死んでしまっているようだった。結構頭の良さそうな子で、見た目も将来が楽しみな子だったのになぁ。

っと考えがそれてしまった。つまり俺一人であのCDの謎に挑戦しなければならないということだ。でもなぁ、調べるためのパソコンは壊しちまったからな。

多分この島にマザーコンピュータがあるとは思うけど、マザコンがある場所は警戒が厳重だろうな。

今のところマザコンで調べるという案は没だな。

「………せめてパソコンがあればなぁ」

思わず口に出てしまった。

「パソコンならあるわよ、確か」

「ふぇ!?」

七瀬さんのその言葉に思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。漢北川、一生の不覚。

「七瀬さん！　それ本当か!?」

「う、うん。確か蝉丸さんが持ってたわよね、晴香」

「さぁ、私は知らないわ」

晴香さんは興味が無さそうな感じだった。だがそんなことは今の俺にはどうでもいい。

前に調べたときはあまり収穫が無かったけどあの後に護がやってた事を少しだけ思い出した。

あの通りにやれればもう少し詳しいことが分かるかもしれない。

「でも、何でパソコンが必要なのよ？」

俺は七瀬さんにCDの事をかいつまんで説明した。

「ふ〜ん、そのCDの事が分かればこの島から脱出出来るかもしれないってわけね」

どうやら晴香さんも少しだけ興味が沸いてきたようだ。

「そういうことです、ハイ」

「でもさ、何でそんな物が参加者に渡されてるの？そんな物があったら簡単に逃げられちゃうじゃないの」

「うぐ!?　痛いところをつきますね。晴香さん」
そう。そのことが俺が一番引っかかっていたことだ。
この殺人ゲームの目的はよく分からないが参加者が逃げるようなことがあったらマズイはずだ。
優勝者一名ならこのゲームの口止めも可能だろうが何人もの人が逃げ出して殺人ゲームのことをぶちまけたら主催者はおしまいだろう。
「それでも、調べてみる価値はあると思う。というわけでその蝉丸さんとやらのところに案内してくれ」
「いやよ」
「ち、ちょっと晴香」
「私達は私達でやることがあるのよ」
「よし、分かった。じゃあその蝉丸さんのいる場所を教えてくれ。俺一人でそこに向かうから。あ、後取り上げた武器その他も返してくれ」
「ダメ」
「何で!?」
「あなたのこと完全に信用したわけじゃないもの。あなたに武器を返したら蝉丸さん達を殺しに行かないとも限らないでしょ」
「晴香！　言い過ぎよ！」
「黙ってて！　七瀬！」
「俺は……俺は人を絶対に殺さない！」
「そんな言葉で信用できるわけないでしょう。現にあなた私と最初に会ったときに武器を私に向けたじゃない」
「う!?」
「それにもし誰かがあなたを殺そうとした時にも人を殺さないって言えるの？」
「俺は……俺は誓ったんだ。親友を……相沢を失ったときにもう人は殺さないって誓ったんだよ！」
「『相沢って相沢祐一のこと？』」
「あ、ああ。二人とも相沢のこと知ってるのか？」
「私は名前だけしか知らないけどね」

「そんなことより今の言葉一体どういう意味？」
俺は二人に話した。
相沢に会ったときに記憶喪失になっていたこと。
相沢を俺が殺したこと。
そして相沢の最後の言葉を。
「………あのヘタレ」
ポツリと晴香さんがそんな言葉をつぶやいた。
「だから俺は人は殺さない。そして今島にいる人みんなで生きて帰りたいんだよ。頼む！」
俺はその場で土下座をした。
雨でぬかるんだ泥が体に付く。
今の俺はきっともの凄く格好悪いだろうな。
そんな考えが頭に浮かぶ。
いいさ。どんなに格好悪くても構わない。相沢に顔向け出来なくなるよりはずっとマシだ。
「……顔を上げなさいよ」
そう言われて顔を上げた俺が見た晴香さんの顔はさっきまでの厳しい顔では無く、少しだけ優しい感じがした。
ちょっとだけ惚れたかも。美坂に少しだけ似てるしな。
「ほら！」
「うわ！」
突然荷物を投げられた俺はその荷物に潰されてしまった。カッコワリィ。
「何やってるのよ、情けない」
うわ！　そんなはっきり言わなくても……。
「でもさっきも言ったけど私達はやることがあるから蝉丸さんのところには一人で行ってよね」
「ＯＫ！」
「まったく、調子いいわね。取りあえず雨が止むまで待ちなさいよ。わざわざ濡れることもないでしょ」
そう言って晴香さんはそっぽを向いてしまった。
「ゴメンね、北川。晴香素直じゃないから」
「ちょっ！　七瀬！　それどういう意味よ！」

「どういう意味も何も言葉通りよ」
二人のやりとりが面白くて思わず笑ってしまった。
「あんたも何笑ってるのよ！」
「わ！　晴香さん！　落ち着いて！　真剣はやばいって！」
「うるさい！　そこにじっとしてなさい！」
「じっとしてたら死んじまうだろうが！」
俺は晴香さんから逃げ回りながら少しだけここに来る前の日常を思い出した。相沢と俺と水瀬さんと美坂の四人でふざけあっていた日々を。
もうあの日には帰れないけど今はこの幸せを楽しもう。

雨は未だ降り続けている。
だがいつか雨は止むだろう。
その時にみんなで心から笑える日が来る。
そうだろ、相沢………。

取りあえず今は晴香さんを落ち着かせる方法を考える方が先決だけどな。

666　目的

力と力の干渉。
どこか遠くの場所で沸き上がった異質な力を、『俺』は感じ取っていた。
そしてそれを、自分の力で潰してみたいとも思った。
生命が散る間際の炎ほど美しいものはない。
その命が強大な力を持てば持つ程、その輝きは映えるのだ。
女達を犯すことの他、もう一つの目的が出来た。
あの力を持つ者と戦い、命の灯を摘み上げること。
破壊は美しい。
性欲。殺戮衝動。生き物は皆、本能こそが真なる姿。

理性などというものは、必要ないのだ。

放送がかかる。
長瀬祐介、天野美汐の名を聞いた『理性』が激しく揺れ動くのがわかった。
さすがに強靭な精神力を持っているために、それでも一筋縄ではいかないようだが。
焦らず、焦らず時を待つ。
すぐにでも暴れ出してやりたいが、今の力でそれは出来ない。
まぁ、いい。
俺は気が短いが、おとなしく辛抱するのもまた一興。
その期間は、後に残った愉しみのための、最高のエッセンスとなるだろう。

雷鳴がする。
空に広がる黒雲は、『俺』に壊されるこの島の連中の未来のように思えた。

667　今語られる真実

この大会の作られた理由、それは——贄——
不条理な理由で殺されたことによって生まれる様々な感情。
悪意、絶望、恐怖、殺意、怨恨。
空に浮かぶ呪いの求める呪詛。
飽きる事を知らぬ呪いの欲望を満たす為、そしてその力を掠め取るため。
その計画を考えついたのは『ＦＡＲＧＯ』
しかしその力を結晶化するにはあまりに技術不足であった。だからＦＡＲＧＯは援助を求めた。
『長瀬』のトップ、長瀬源之助に。

空に浮かぶ船の中、老人は独り思う。

始めは好奇心だった。これほどの呪詛を秘めた物はグエンディーナでも見たことは無かった。新たなる生命を生む悦び、未知なる物に挑戦する快び、それは魔術師としての性。

己の力を過信していた、たかが呪詛程度簡単に消去できると思っていた。

しかし、その力のごく一部を結晶化するのに成功したとき、自らの過ちに気がついた。周りの科学者どもはただ浮かれていた、実験の成功に酔いしれて。

私には『力』があるが故にその秘められた力に気がついていた。気がついたときには手遅れだった、封印の中で奴は確実に力をつけていた。

すでに私が相手を出来るレベルでは無くなっていた。封印を破らないのは餌が手に入るからだ、上質の贄が。

決着は自分の手でつける、他の全てを犠牲にしてでも。

それからは奴を弱体化するための手段を探し回った。様々な禁呪にも手を伸ばした。各方面に援助を求め、長瀬としての力も付けた、各地の能力者とのパイプも作った。

計画に気が付いた高槻を処分してＦＡＲＧＯの力を削いだ。実権はすべて長瀬へ。

この計画は二つの鍵で成り立っている。

一つは人選。空に浮かぶ呪いは呪詛を求める、それゆえにあるものに弱いのだ。それは、愛情、友情、希望、自分の命を捨ててでも相手を守ろうとする善き心。それゆえに人選を長瀬の手にまとめる必要があった。

そしてもう一つの鍵があった、それは能力者。呪いを高めるのはさらなる呪詛、しかし魔術の力を高めるのは強き魂。

「神奈よ、今回の大会がお前の最後だ。準備は全て整った。この島はすでに血で汚れている、しかしそれを超える思いで満たした。そして世界でも最高ランクの能力者達の魂。長瀬源之助、生涯最大の呪文

でお相手しよう」
他の長瀬は死に場所を決められた、それは若さゆえの特権。しかし、源之助はそれができない、すでに命の使い道は決まってるからだ。

668　残悔

目の前が涙でふやけて、何も見えなくなっていたよ。
だけど、手に伝わる反動と、あの赤い色は、忘れないよ。
『殺したのは、わたしよ』
……ううん、ちがうよ。
わかってるよ。
腹立たしかったんだ。何も出来ない、ボクの弱さが。
怖かったんだ。大切な人を、失うことが。
悲しかったんだ。引き金を絞って、失った何かが。
だから、ボクは泣いていたよ。
悲しいだけじゃない、怖いだけじゃない、腹立たしいだけじゃない。
説明なんか、出来ないよ。
だから、どうしていいのか解らなくて。
ただ、千鶴さんにすがって、泣いていたよ。

どれだけの間、そうしていたのか解らないけれど。
涙が枯れて、ガチガチだった腕の力がやっと抜けたころ、千鶴さんがボクの腕をゆっくりほどいて、言ったんだ。
「行きましょう。御堂さんが、待っているわ」
そうだ。おじさんは短気だから。遅れたら、ボクたち怒られちゃうよね。
「あゆ、きっとまた怒鳴られちまうぞ？　チビ！
あれだけウダウダぬかして、俺様を待たせるたあ、

どういう事だ！　……ってさ？」
梓さんも、同じことを考えていた。
そうだよね。急がないと。
怒られちゃうよねっ。

……嬉しいよ。
みんなでまた笑えるなら、ボクが失った何かなんて、大したことじゃないよ。
「えへへっ」
また涙が溢れてきたけど。
ボク、がんばれるよ。
おじさん、ちょっと待っててね？

いったん止まったあゆの涙は、尽きる事を諦めないかのように、ぽろぽろと溢れていた。涙の雫が床に落ちるのと同時に、物音がした。既に無い扉の替わりを引き受けるかのように、二つの人影が立っている。

影は、二度と戻らぬ二つのものが失われた、この戦場を無機質な光をたたえて睥睨していた。
「……長瀬源三郎、生命活動停止。死亡確認。治療不可能ニヨリ、通常業務ニ戻リマス」
泣いているあゆをよそに、医務室の中から無表情なままメイドロボが出てきていた。
あたし達は、その出現に身構えたけど。
本当に何もしないで、彼女達は上へと向かった。
要するにあたし達は、命令の外にあるから無視された……というわけだ。ロボットの行動理由なんて、単純なもんだよな。それに比べて、あゆの涙には複雑な感情が入り混じっているのだろう……って事は解る。

人間は、やっぱり難しいよね。
でも、おっちゃんが待っているのは確かな事だ。
今は進まなきゃならないよ。
だからさ。涙は、おあずけだよ。

あゆの頭をくしゃくしゃと撫でて、みんなで頷く。
あたし達は、ようやく階段を上がる。
残るは執事さんの息子、源五郎だけだ。
執事さんのことを話せば、ひょっとしたら協力してくれるかもしれない。
あたしは……そんな甘い事さえ、考えていた。

……ドンドンドン……

そう、この銃声を聞くまでは。
さっきよりも遠い、微かな銃声を聞くまでは。
うん、転がるように、三人で走ったね。
メイドロボのボンクラどもを突き飛ばし、息を切らせて駆け上がった。
実際、ほんとに長い階段だったけれど。こんなに長い階段なんて、この世にあって良いわけ、ないじゃないか。

……ごめんな、おっちゃん。

669　弔い

「アンタとはいい加減決着つけなくちゃって思ってたのよ！」
「からかったのは謝るから真剣もって追いかけてくるのはやめなさいよー！」
女の子というのは全くもって強い生き物です。こんな島に居ても笑顔でじゃれ合うことができるのですから。
今の僕ではあんなに綺麗に笑うことはできません。この胸の傷がもう少し癒えるまでは。
太陽のような笑顔をしていたレミィ……
彼女が僕に笑いかけてくれない現実は、とてつもない寂しさと悲しさを僕の心にもたらします。
今は素直に笑顔に感謝すべき時なのに、彼女たちの笑顔で傷ついている僕はなんて愚かなのでしょう

か。
……あんまり落ち込んでいても仕方ないので、前向きにこれからのことを考えるとしようか。
とりあえずは、蝉丸さんって人に会ってなんとかパソコンを使わせて貰おう。ＣＤが揃ってない今じゃ何も解らないかもしれないけど、ふと思いついた時にパソコンを起動できるかどうかでは心持ちが違う。
それからは、やっぱりＣＤの回収であろう。
そのためには、参加者の仏さんの持ち物を調べるような真似も覚悟しなきゃいけないだろうな。
後はマザコンの場所だな……二人の話だと重要施設らしき場所があったらしいから後で行ってみるかな。
マザコン……何か嫌な響きだな。まるで誰かが俺のことを笑っているみたいだ。
はは、何言ってるんだろう。誰かが空の上から見張ってたりするってか？

……突っ込みが無いと寂しいよ。いつもなら横から口に出してるわよって突っ込み入るのに。
そういえば二人の声が聞こえないな、何かあったのだろうか？　……見てくるかな。

二人はちょっと離れた場所にいた。
二人が見ている先には見覚えのある顔があった。
そういっても直接会ったわけじゃないけど。
結花に見せてもらった参加者名簿に載っていたスフィー達の大事な人、宮田健太郎。
もう一人は長岡だったかな長森だったかな、そんな感じの名前の女の子だ。
雨と風にさらされて見るも無残なことになっていた。
「気分悪いわね」
「久しぶりに日常の気分を味わえたって言うのに、まったく……」
俺は二人が話しているのを無視して穴を掘り始め

た。
「……」
二人は黙って俺を見ていたがしばらくすると一緒になって穴を掘り出した。
……埋める前にやらなくちゃいけないこと、あるよなぁ。さっきの決意は、もう雨で流されかけていたが、それでもやらないわけにはいけない。
俺は二人に断ると二人の体を調べだした。
その間、二人は少し離れた場所で休憩するといって手伝ってくれはしなかった。
……まあ、当然か。だれも、こんなぐちゃぐちゃになった仏さんに望んで近づきたがる奴はいないだろう。
女の方を調べていたときに丸い懐中時計を大きくしたような装置を見つけた。……というより、その外見はまるっきり昔の有名アニメのあれだ。
「何だ、このドラ○ンレーダーモドキは？」
俺は何気なしにスイッチを押した。
すると機械のほぼ中央に一つの点がそして画面の端ぎりぎりのところに二つの点が映った。
「レーダーか……ありがたく使わせてもらうぜ。スフィーには俺が一言伝えておくから安心して眠れよ」
この島は悲しみに満ちている。何時かこの島も解放されて晴れる時は来るのだろうか。
島の様子を象徴するような雨雲は今だ晴れる気配はない。

670 失踪

彰、晴香、七瀬、そして坂神と月代も出ていった。
あれだけの人数がいたこの家もずいぶんと寂しくなった。
（雨……やまないな……）
降り続く雨を見ているとなぜか感傷的になった。

一月以上この島にいるような気がするが実際は一週間も経っていない。
いろいろあった。
この島に来てから出会いと別れを繰り返してきた。
死を目の前にして心がどんどんすり減っていくような思いがする。
藤井さん。お姉ちゃん。澤倉先輩。佳乃ちゃん。先生……。
私は何人もの人が死んでいくのをどうして耐えていられたのだろうか。
もしかして、私は狂ってしまったのか。
そう思ったこともある。
だけど、胸にこみ上げてくるものが、私がまだ正常だと安心させる。
涙は今、流すべきじゃない。
この島を抜け出たとき、そしてすべてが終わったとき。そのときに……。
「どうした表を見て。また雷観賞か？」
そのときに……。
『ゴスッ』
ああ……。
ごめんなさい、先生。
約束、ちょっと破りたいと思ってしまいました。
「そういえば、そろそろ葉子さんの様子を見に行かなきゃ」
のたうち回っているバカはほっといて、私は自分の仕事をしよう。うん。
別に泣きそうになった照れ隠しじゃない。
そして、私は水の入った洗面器をとタオルを持って葉子さんの部屋に行った。
ノックをしようかと思ったが、寝ていたら悪いので静かにドアを開ける。
「おじゃましまー……ん？」
そこには、かなりの怪我をしていた葉子さんの姿はなく、丁寧に折り畳まれた毛布がベッドに置かれていた。

（い、いない。どこに行ったの？　家の中？　それとも外？）。
布団を触ってみる。まだ少し暖かい。と、いうことは、まだそんなに遠くには行っていないはずだ。
急いで階段を下り、居間に駆け込む。そして、あわてている私を見て怪訝そうな顔をしている二人に言う。
「葉子さんがいないの！」
走る。
突然、降り始めた雨の中、鹿沼葉子は走る。
傷はまだ癒えていない。銃弾が貫通した腹部にはコルセットのように幾重も包帯が巻かれている。
足に巻かれた包帯はほどけて邪魔になったので捨てた。
髪が、服が、水を吸って重い。下着も濡れてしまい、肌に張り付く。
だが、そんなことは気にしていられない。

危険を予感させる胸騒ぎが止まらなかった。それが彼女を疾走させた。
先ほど感じた二つの大きな力。
間違いなく、不可視の力であろう。
しかし、一歩間違えれば暴走しそうな、そんな危うい力の発動であった。
もし、不可視の力が暴走してしまえば、辺り構わず破壊をもたらし続ける。
そして、それは使った本人が破壊されるまで続く……。
不可視の力というのは誰でも操れるというものではない。
葉子が知っている不可視の力の使い手は自分以外で二人。
天沢郁未と少年。
恐らく、その二人が使ったのだろう。
もしくは、彼女の知らない不可視の力を使える者がいるのであろうか？

生きている中で使えそうなのは、巳間晴香。序盤に高槻が行った放送で葉子、郁未、少年と共に呼ばれた者の中で生きているのは彼女だけだった。
そして、彼女がもう一つ腑に落ちなかったことがあった。
なぜ、封印されているはずの力が発動したのだろうか？
結界が無くなったのだろうか？
それはあり得ない。なぜなら、葉子の力は今でも発動できないからだ。
ならば、結界を凌駕する力、もしくは無効化する力を手に入れたのだろう。そう、葉子は結論づけた。
今の葉子では不可視の力に真っ向から対抗する術はない。それは本人もよく分かっている。
かといって、ベッドで一人震えているわけにもいかなかった。それは、不可視の力がどんなに危険なのかを知っていたからだ。
葉子は自分を助けてくれた人には黙って出てきて悪いとは思った。だが、出かけるのならば彼らを巻き込んでしまうかもしれない。だから、大した武器も持たずに走っている。
場合によっては、差し違えても彼女らを殺さなければいけない。そんな悲愴なことを考えているときだった。
不意に、背後から、
「誰だ！」
雨が地面や葉を叩く音を突き抜けてはっきりと男の声が葉子の耳に入る。
偶然か、それとも遠目で葉子を見つけ、隠れて通り過ぎたところを呼び止めたのか。どちらにしても迂闊だった。
そして、葉子は足を止める。男は銃を持っているかもしれない。
「鹿沼、よう、こ」
息も絶え絶えに、そう答えた。
そして、男は……

671　椎名繭は泣かない

繭は目覚めた。
「っ⁉　私、意識を失っていたの⁉」
カラスと獣の騒がしい鳴き声の中、誰かのすすりなく声がどこからか、小さく、しかしはっきりと伝わってくる。
Ｔ字路のちょうど交わるところ、薄暗い通路の片隅からその声は漏れていた。
そこには、一つの固まりがあった。
固まり、つまりそれは、御堂の体を抱きかかえるようにしてしゃがみ込んだ詠美である。
「ちょっ⁉　どういうこと、オッサン⁉　どうなってるのよ、あなた⁉　戦闘は⁉」
自分の置かれた状況がつかめない繭は、叫びながら体を起こす。
詠美はすすり泣きを続けている。

（……思いのほか体の節々が痛い）
繭はそんなことを考えながら立ち上がった。続いて体の痛みをこらえるようにゆっくりと詠美の方に歩み寄りながら、記憶の再生を必死に試みた。
（……ええと、あのメイドロボもどきが倉庫で襲ってきて、ピンチにはなったけど、それは何とか撃退して、それから、それから……）
戦闘の経過を思い出そうとするが、いまいち繭の記憶は混乱して、思うようにはいかない。
そうこうする内に、繭は詠美の間近にまで歩み寄っていた。
「ちょっと、あなた……」
改めて状況を確認しようとして、繭は言葉を飲み込む。
詠美に抱きかかえられた男、御堂は明らかに死んでいる様子だった。
抱きかかえる詠美の顔までがその血で真っ赤に染まり、凄惨な光景を醸している。

もっとも、詠美はその血で己の顔が、服が汚れることなどお構いなしの様子だが。
詠美はただひたすらに御堂を抱きしめ、何事かを呟いている。
「どうなって……」
もう一度記憶を辿ろうとした繭の頭の中で、ようやくそれが気絶直前にまでつながる。
「あの白衣の男!!」
はっとして前後を見渡す繭。
男の姿はない。
慌てて今度は横方向を確認する。
果たして、そこには例の白衣の男が倒れていた。
転がっていた自分のサブマシンガンを拾い直し、それを白衣に向けながらゆっくりと近づく。
(まさか死んだフリなわけ、ないわよね)
慎重に距離を詰め、その仰向けの顔を見て繭は一瞬吐き気に襲われた。
長瀬源五郎の額には、詠美と御堂が放った最後の弾丸が直撃し、見るに耐えない風穴が空いているのだ。
気を取り直しつつ、繭はもう一度周囲を見回す。
動く物の気配はない。
「戦闘は終わっているということ……?」
取りあえずの危機は去っているのだと認識し、繭は再び詠美に近づいた。
詠美のすすり泣きは終わらない。
さり気なく御堂の腕をとり、脈を診る。
予想したとおり、その腕から命の鼓動を感じ取ることはできなかった。
繭が意識を失っている間に、決着はついてしまったのだ。
御堂と、あの白衣の男の死をもって。
繭の胸がいっぱいになる
意識が悲しみに包まれる。
涙腺がゆるみ、瞳から透明な液体が流れ落ちる。
(……冷静にならなくては。管理者側の増援がいつ

やって来るとも限らないし、オッサンの死を悼んでばかりいるわけにはいかない。遺体にすがりついているところを、敵に狙われたら……）
そして、繭の平手が詠美の頬を音高くはたいた。
「しっかりしなさい。ここは敵地なのよ！　いつまでも泣いてはいられないわ。そうしていて敵の増援に殺されたくなければ、武器を手に取り、荷物を抱えなさい。そして周囲に気を配り、敵の接近に備えなさい。向こうに問題さえなければ、千鶴さん達も間もなくここにやってくるはず……」
決して大きな声ではないが、はっきりと言い放つ繭。
その頬には未だ涙が絶えず。
けれど、あまりにも無感情に聞こえる繭の言葉に詠美は耐えられなかった。
今度は繭の頬が音高くはられた。
「バカじゃないの!?　敵、敵、敵、敵、敵、って!!　したぼくが、御堂のおじさんが死んじゃったのよ!?　私たちの、そうよっ、あんたのせいなんだからっ。何を偉そうにぃ。頭が少しくらい回るからって、威張らないでよ。あんただって、結局何もできなかったクセに。あんたが足を引っ張らなけりゃ……。それに私が、私たちが二人の力であの男に勝ったんだから。私が泣いてあげないで、誰が泣いて上げるっていうのよ!!」
詠美の言っていることは滅茶苦茶だ。まるで脈絡がなかった。足を引っ張ったのは二人ともで、確かに決定打になったのは御堂が繭を庇ったからであったかもしれないが、あのタイミングでは詠美が繭の立場であった可能性も充分にあった。
理屈では、そうであった。
しかし、それでも繭には詠美の気持ちは痛いほど分かっていた。
（けれども、感傷で生きていけるほどこの島は甘くない。それは事実。それに、彼の犠牲を無駄にするわけにはいかない。だから……）

ハッキリと繭は叫んだ。
「だから、あなたはその感傷のために死んでもいいというわけ⁉」
さらに続けて叫んだ。
「それでオッサンが喜ぶというのなら、いつまでもそうしていればいいんだわ‼」
詠美もそれに応えるように叫ぶ。
「そういうことを言ってるんじゃないわよ！　私は、ただ、したぼくが……‼」
お互いの視線がジリジリと絡み合ったまま、緊迫した空気が辺りを包む。
（うみゅー……まずいわ。こんなにおおきなこえでさけびつづけていては……。こえをききつけるのがみかたならばいいのだけれど……。って、うみゅー？　みゅー？　まずいわ。まだ……あんぜんじゃないのに……。おっさんにもおわかれをいってないのに……。うみゅみゅー……。みゅ！　みゅみゅみゅみゅっ⁉）
「みゅーーーーーーーーーーーーーー」
ついにその時がやってきてしまった。
一度目の摂取で繭の体内に抗体が作られたせいか、キノコ自体の個体差なのか、はたまた爆弾を吐いた際にキノコの一部も吐き出されたものだろうか？
性格反転キノコの効力は、早くも繭の体内から消え去ってしまっていた。
「ちょっと、なによ、みゅーって‼　叫んでごまかしても駄目なんだからね⁉」
突然の様子に面食らいながらも、詰め寄る詠美。
しかし、ホンの僅かもすれば繭の様子がおかしいのは明らかだった。
「みゅーーーーーーーーーーーー」
「なに、どうなってんのよ。ちょっと、あんた⁉」
詠美は戸惑う。
だから詠美は繭に気を取られたまま、背後から聞こえてきたはずの駆け足の物音に気付くことができなかった……。

672　反転開始

「その内気な女王様はね、確かに内気な部分は治ったんだけど、思慮深い部分まで反転してしまったの」
　そうスフィーが言い終わるか言い終わらないかの内に、
「そんなの私には関係ないわ」
　今までの芹香からは想像もできない、はっきりした声が発せられた。
「？」
「何ジロジロ見てるのよ」
「芹香さん、もしかして食べちゃった？」
「ええ」
「えっ⁉」
　あまりに咄嗟の出来事にスフィーが驚いたのは言うまでもない。
　だが芹香はそれにはお構いなしに、
「さっ、往人探しに出発するわよ」
「ちょっ、ちょっと待って！」
「あ～もう、何モタモタしてるのよ！」
「あ、あの、放送が……」
　ゴタゴタに気を取られて、危うく放送を聞き逃すところだった。
（やっぱり、性格反転ダケだったみたいね……確かに思慮深いところも反転してるみたい……大丈夫かな）
　参加者名簿を片手に、スフィーは読み上げられる名前の場所に線を引きながら、
「この声、どこかで聞いたような……」
「知らないわ」
「う～ん……」
　やがて、『それでは健闘を祈る』と放送が締めくくられた。

「スフィー、終わった？」
「うん」
「はい、それじゃあ出発するわよ」
「ちょっと待って」
「今度は何よ？」
「雨が……」
放送の頃から、屋根を雨が打つ音が聞こえだしていたのだ。
遠くから雷鳴も聞こえる。
「雨なんか関係ないわ」
「でも、雨具とかないでしょ？」
「それはそうだけど」
「ここで雨に打たれて体を悪くしたら……」
「心配性ね」
その時、「ドーン！」と激しい音が鳴り響いた。
「きゃっ！」
スフィーは思わずしゃがみ込む。
「あなたの言うことも一理あるわね」
芹香は物怖じしない。
「雷に打たれちゃここまでの意味がないわ。仕方ないから付き合ってあげる」

673　樹上の男

潮騒。
そして、蝉時雨。

「暑ぃ……」
俺は、タクラマカン砂漠の追放者の如く、飢えと渇きに苦しんでいた。堤防の上で、乏しく温い夏の風に嬲られながら、劇的に行き倒れている。薄く包み込むような波の音が、頭蓋骨を攻め立てる蝉の声に締め出されていく。
「暑ぃ……」
こんな日は、冷たい飲み物が何より嬉しい。晴子が、俺に説教くれながら抱きしめる一升瓶の中身と

か。
　いや…ああいう生暖かさは、遠慮したい。
　そう思うやいなや、右手に清涼感が伝わる。
「おっ、気が利くな」
　観鈴か？　と思いながら、掴んだ腕を目の前に持ってくる。
〝どろり濃厚〟だった。
「……（ぽい）」
　捨てる。ざけんなよ、って感じだよな。
　そのまま太陽を凝視する。叩きつける日差しの強さに朦朧としながら、なぜか肩に痛みを感じる。暑さは、肩から伝わってるような気がした。

　これ以上ないくらいの明るさに、瞳孔が収縮し、視界が眩む。
　そのとき、俺は見た。
　光を纏った、羽の生えた女が飛んでいる。
　その光量は、太陽をはるかに越えていた。
　あまりの眩しさに、周囲が闇のように思えてくる。
　真夜中の月のように。
　すべての星を従えて。
　女は、笑った。
　美しくもおぞましい、寒気のするような、笑いだった。
　俺は一人震えて、彼女が西の空へ消えて行くのを見つめていた。
　それだけが、俺にできる全てだった。

　気がつけば、あの光に焼かれたかのように、蝉時雨が消えている。入れ替わりにざあざあと、耳障りな騒音が周囲を埋め尽くしていた。
　終わることなく、ざあざあと。
　右手に雫が落ちて、規則的に俺を叩いている。目を開けてもろくな事にはならない。そう思って長らく耐えていたが、限界はある。
「……うおっ!?」

俺は、草原の中で僅かに群生する、巨大な樹の枝の上で、絶妙なバランスを保って寝転んでいた。
高さを利して周囲を見渡す。しかし、どうやら俺はこの世界において孤独だったようだ。
雨が降っている。
雷が鳴っている。
世界は姿を変えて、俺を迎えていた。
「観鈴！　晴子⁉」
観鈴はいない。
晴子もいない。
さっきまで抱えていた、あの女さえいなかった。
「…くそっ」
枝を叩く。
震動で枝葉の纏っていた水滴が零れ落ちる。
続けて、不平を漏らす声。まるで気がつかなかったが、下には人がいたようだ。雨宿りをしながら、山のように詰まれた荷物を分配している。
「ちょっとあんた」
「いい加減にしなさいよね」
呼吸のように自然と湧き出る文句。真下に、三人いた。若いというのに、既に晴子のような横柄さを見せる女が二人。日本刀でのダブル突っ込みは強力そうで、あまり相手にしたくないタイプだ。
そして目を丸くした男が一人。妙に視線が熱い。あの目は俺がラーメンセットを見る時の眼差しだ。
「あ……あんた……」
なんだ、その熱い視線は？　俺はお前なんか知らない。知らないぞ。断じて、知らない。
「あんた、国崎往人、か？」
頑なに拒む俺を無視して、そいつは俺の名前を呼んだ。
目の前に、小山が出来ておりました。
我ながら感心するほどの荷物を、私北川の慈悲の光のもと、婦女子に分け与えております。間違っても搾り取られているなどとは、私の健康と幸せのた

めに申しませんですハイ。それでもどうにか、ＣＤとＭ19マグナム、そしてレーダーだけは死守しておりまして。携帯やハサミ、怪しい薬に水鉄砲、使えない弾、晴香様にお似合いのメリケンサックなどは、傍らに掘った小穴に惜しげもなく廃棄されていきます。

「呆れたもんね……アンタ、物欲の塊だわ」

ダイナマイトも捨ててしまいました。火種がないので構いませんが。

「物を捨てられない人って、本当にいるのね」

あなた方は捨てすぎだと思います。

……特に女らしさって奴を。

「「うるさいわね！」」

ガスッ！　ガスッ！

……婦女子は各々、刀を勝手に交換し手榴弾を強奪、いえ、お受け取りになって口々に感謝の言葉を下されました。男冥利に尽きるというものですハイ。

そして余ったクマさんと電動釘打ち器、そして大きなナイフを再度鞄に収めようとした時に、アンビリバボーな事件はおこったのです。

〝空から女の子が降ってきた〟んですよ。

いかがでしょうか？　ちょっとラッキーなイベントでしょう？　もちろん、体重百キロのジャイアンみたいな婦女子だったら、辞退させて頂きますけれども。

あのイベントは、今では私の心の傷ではありますが、忘れ得ぬ、夢のようなひとときでありました。

話がそれました。ついでに嘘です。降ってきたものが、今回は違います。

〝頭上から野郎が水滴をぼたぼた〟

いかがでしょうか？　これ以上ないくらい萎えるイベントでしょう？　これが小便だったら、某婦女子二名の性格から推測するに、続いて血の雨が降っていたことでしょう。平和万歳。マンセー。

そう、私北川は、野獣のような精悍な婦女子に左右を囲まれつつ、野郎の降り注ぐ聖水、いや水滴を

この身に受けたというわけなのです。
「熊とか野獣とか、動物ネタから離れなさいよ！」
「聖水って下ネタやめなさいよ！」
ガスッ！　ガスッ！
過剰な親愛のゼスチャーに唖然とする樹上の男。もろに引いています。当り前です。モテる男は辛いんです。
ですがこのままでは、何も収まりません。早期解決のためにも、この敏腕ネゴシエイター北川が一肌脱がねばならないでしょう。この境遇を分かち合う覚悟があるかどうかと、彼に聞いてみる必要があると思います。
「国崎さん、とりあえず降りてこないか？」
「ゆっくり、ね」
お二人様は相変わらず、お手が早くていらっしゃいまして、既に刀を抜いております。
わかっている、と冷静に答えて国崎さんは降りてきました。腕に怪我をしているのか、必要以上にゆっくりでしたが。
婦女子二人が彼の行動を見張っている間、私北川はちらりとレーダーを見てみたのです。
……光の点は、いつの間にか四つになっておりました。
神様、この怪しい男を、探していた二人の元へ導く事は、罪になるでしょうか？

674　暗黒

空を敷き詰める、灰色の雲。雨は鹿沼葉子の身体から容赦なく熱を奪っていく。
雨のカーテンが、男の姿を曇らせる。男——である事しか分からない。
男は返事をしなかった。棒立ちのまま、応えない。攻撃の意志はどうか。いや、そもそも——
「——誰、ですか」

当たり前の疑問。攻撃の意志が無いのなら、応えてくれても構わない筈だ。
だが、男は応えなかった。雨はなおも男の姿を曇らせている。
どうする？　近付くか。しかし、相手が武器を持っていたら危険だ……。
逡巡。武器が無いのが痛手だった。力の無い今、素手で男に勝つ事など不可能。
だが、逃げられる自信も無い。……まずい。絶体絶命……か？
「名前は無い」
ふと、返事があった。雨に掻き消されそうな程、軽い声。
聞き覚えのある声であった。つい最近聞いた。記憶違いでなければ……。
……いや、その返事こそが『誰なのか』を言い表している。間違いは無い。
溜息を吐いた。

「貴方、ですか」
雨のカーテンを潜り、姿を現すモノ。
少年。

「すまないね。驚かせてしまったかな」
「……全くです」
苦笑。浮かんだ笑顔は、いつもの少年と何ら変わりはない。
そう、何一つ、変わってはいなかった。
「……その人は」
「ああ、この男かい？」
少年は、肩に一人の男を抱えていた。だらりと腕を垂らしたその姿は、死人にも見える。
無論、葉子も死人かと思ったのは言うまでもない。
「管理者側の人間さ。ちょっと悪ふざけが過ぎるようなんでね——捕まえておいた」
「その男を、どうするつもりですか」
問い掛け。葉子の顔からは、厳しさが抜けていな

い。
　少年は、ふむ、と一つ考える素振り。目は、葉子を見ている。無表情な視線——
「——そうだね、管理側の情報を教えて貰おうと思ってるんだけど」
　何気ない様子で返す。しかし、それこそが、葉子の背筋にひやりとした感覚を与える。
　管理側の人間が、そう簡単に情報を漏らすだろうか？　否、漏らすまい。当然の話だ。少年もそれは知っている筈。だが、彼は『教えて貰う』と言った。それは、つまり。
　……無論、聞くまでもない事だ。
「……惨いことを」
「情けのつもりかい？」
「……」
　答えない。心の中で、いいえ、と答えた。
　その真意は。

　雨の中。髪を伝い、水滴が地面へと落ちる。顔に張り付く髪が、煩わしい。いっそのこと、切ってしまおうか。戦闘の時に邪魔になるとも知れない。
　しかしそこで、思い出す。郁未の顔。彼女の髪は、綺麗だった……少し、羨ましく思う程に。
　何となく、切るのを惜しく思った。
　……しかし、咄嗟に思い出すのが郁未の顔とは。少し自分を改めた方が良いかもしれない。
「さて……」
　随分と間を持って、少年が口を開いた。
「この辺に、人の多い場所は無いかい？　出来れば、武器を持っている人達がいい」
「何故、それを聞くんですか？」
「うーん、一人で行動してるとどうしても危険が多いからね。出来れば、多人数で行動出来る方がいい」
　当たり前だ。一人の辛さは、知っている。いや、知らされた、が正解か。

人が多いと言えば、今さっき出てきた所だろうか。多数の人の気配。飛び出してしまったが、あそこには何人居たのだろう。
教えられるとすれば、あそこしか無いが――
「……いいえ、知りません」
口から出たのは、そんな言葉。無論、操られているわけでもなく、自分の意志で言った事。
少年は、困ったな、といった顔を見せた。それを見ても、葉子は己の嘘を改める気は無い。
――違和感があった。それは、些細なもの。
目の前に立った少年は、一つ前に会った時と何ら変わらなかった。口調、雰囲気。そして笑顔。
だが、この状況に於いて、その違和感は致命的なものだった。
この島に来て、三日。狂った島に突然運び込まれ、三日だ。
その状況に於いて何一つ変わらない、そんな事が有り得るのか？　いや、そんな筈は無い！
違和感は、葉子の中で不信へと変わっていたのだ。
今や、彼女の目は、睨むような目に変わっている。
それを見てか――少年は溜息を吐いた。
「……まぁ、しょうがない、か。ゆっくりと探すよ」
くるりと踵を返す。雨の向こうへ、消えていく。
声だけが、雨を潜り抜けて届いた。
「君は、本当に賢い子だね――」
そして、雨の向こうの影が消える。
十秒。
それだけ待って、葉子は再び駆け出した。

675　雨の記憶

降りしきる雨の中、男は戦友の死を知った。
(御堂……俺と決着をつけるのではなかったのか？
……何故だ？　何故俺を残して……何故……)
蝉丸は少女が濡れないように気を配りながら背負

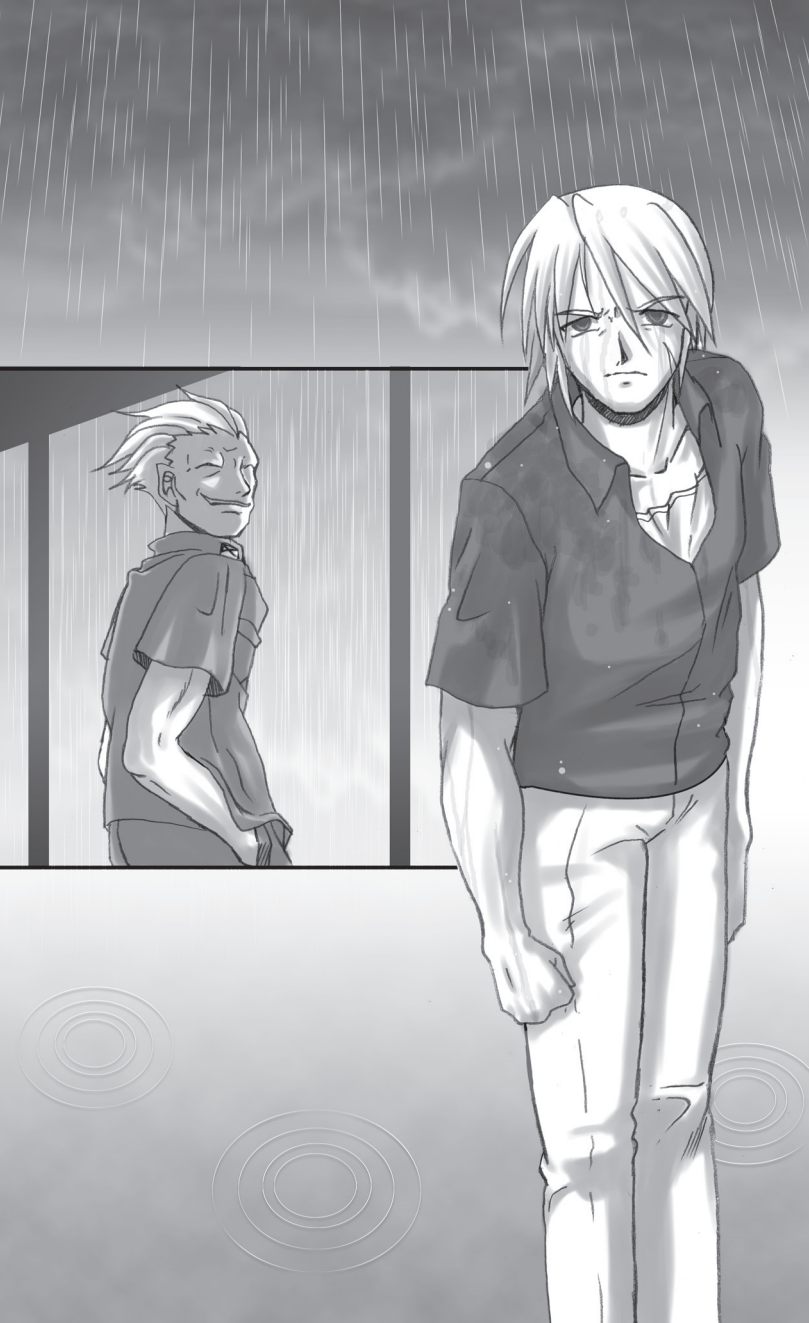
ったまま、住宅街を疾走しながら思考を巡らせていた。
光岡、岩切、きよみ、そして……御堂。彼が時間を共有した者は皆、死んでしまった。
ザァァァァァァァァァァァァッ……
(あぁ、そういえば、あの時もこんな雨の日だったな……)

——その時はその時考えりゃいいだろ!!
蝉丸は突然の雨に戸惑っていた。
降りしきる強烈な水の矢が運動場に突き刺さる。
「よぉ、坂神。テメェも居残りか？」
声の主は御堂であった。顔合わせは済んでいる。初日から喧嘩をやらかした仲である。
「健康審査だ。実験体としてふさわしいかの最終審査だった」
「奇遇だな、俺もだ。けっけっけ、楽しみだぜ。この審査に合格すりゃあ、いよいよ俺も強化兵の仲間入りだぜ。……坂神、テメェは嬉しくねぇのか？」
御堂は蝉丸の顔色を覗きこんだ。
「……実を言うと、不安で仕方ない。自分がどう変わってしまうか、自分が自分では無くなるのではないか、不安なのだ」
強化兵についての噂は、はっきり言って良いものが少ない。
発狂し、己の体を食いちぎり、絶命……手足が膨張、消し飛び、処分……暴走、三人もの研究員を殴り殺し、射殺……。
もし、自分がそうなってしまったらと考えてしまうと、蝉丸は不安でいっぱいだった。
「ハァ？　何言ってんだ？　そんなことグダグダ考えてたら前に進めねぇだろうが！　もしそうなっちまったら、なった時に考えりゃあいいだろうが!!　いいか、俺が手本を見せてやる、よく見てろ!!」
そう言うと御堂は豪雨の中に飛び込んだ。当然、彼の体は雨に打たれ、ずぶ濡れになる。

「ハハハハッ！　坂神!!　濡れちまうのも案外気分がいいもんだぜ!!」
「御堂、風邪をひいたらどうするんだ？」
「その時はその時考えりゃいいだろ!!」
「……そうだな」
　気がつくと蝉丸もまた御堂と共に雨に打たれながら運動場を走り回っていた。

　ザァァァァァァァァァァァァッ……

「(･∀･)……蝉丸？　泣いてる……の？」
「雨だ。泣いてなどいない」
「(･∀･)そっか、良かったぁ〜。蝉丸、急に悲しそうな顔するんだもん。心配しちゃったよ」
「そうか、気を遣わせてすまない」
「(･∀･)うん、いいよ。ねぇ蝉丸、アレ、何だと思う？」
　月代は赤いシャッターが目に痛い一件の家を指差して言った。仮面の視界からはよく見えないのであろう。
　蝉丸の目からはシャッターに書かれた文字まではっきりと読み取れた。
「文字が所々消えているが……『……島消……団』どうやら消防団の詰め所らしいな。……ふむ、消防団か……拡声機くらいならあるかもしれんな。月代、行ってみるか？」
「(･∀･)え？　……でも、あそこに何も無かったらどうするの？　それに鍵がかかって入れないかもしれないよ？」
「その時はその時考えればいいだろ？」
「(･∀･)……何かそのセリフ、蝉丸らしくないね」
「あぁ、そうだな。……やはり奴本人の口から、もう一度聞きたかったな」

　雨は降り続く。島内にも、男の心の中にも。

676　活きているモノ

長い長い階段を抜け、私たちはやっとたどり着いた。約束の地点へ。
そこに居たモノは。
「おじさんっ！」
あゆちゃんが駆け出す。その先に居たモノは。
「おじさんっ！　おじさんっ！」
「バカ、あゆ、走るな！」
梓が、駆け出すあゆちゃんを止めようとする。彼が殺られていたとしたら……危険にわざわざ飛び込むようなことは避けねばならない。
全身の感覚を集中させてみる。『敵』らしき気配はなかったが、迂闊な行為は自分だけではない、全員の危険につながる。
しかし、止める間もなくあゆちゃんは『彼』に辿り着いてしまった。

そこには。
彼を抱き抱え、血だらけの、ぐしゃぐしゃの顔で、戸惑う詠美。
人格が変わったかのようにみゅーみゅー泣きわめく繭。
無惨に脳天を撃ち抜かれた、白衣の男。
明らかに多すぎる血溜りの中で物言わぬ御堂。
そして。
私が追いついたそこには。
「おじ……さん……嘘……だよ……ね……」
呆然と立ち尽くす、あゆの姿があった。
「おじさん！　おじさん！　おじさんっ！」
「みゅー！　みゅー！　みゅーーー！」
「ちょっちょっと！　あんたたち重い！　重いってば！」
あゆ、繭、詠美が御堂の遺体を取り囲み。
そして、泣いていた。
みんな、血と、涙で、ぼろぼろ、だった。

「はは、おっさん、モテモテじゃんか……」
思わず、そんなことしか呟けなかった。

おそらくは相撃ち。
このガキどもを守るために、おっさんとブレーメンの毛玉犬は、犠牲になったんだろう。
おそらく、すべては終わってしまったんだ。――あたしたちが辿り着く前に。
妙に醒めた目で見れる私は、もう慣れてしまったんだろうか。
狂った現実に。

「おじさん！　おじさん！　目を覚まして！　死んじゃやだようっ！」
「やめな、あゆ！　おっさんは、もう……」
「そんなの、嘘だよ！　だって、約束したもん！　ここで逢おうって！　おじさんと！」
あゆがあたしに食ってかかる。
でも、今更、あたしたちに何ができるっての？
「あゆ！　今は敵地の中なんだ。ここで騒いで狙い撃ちになって、おっさんが喜ぶとでも思うか？」
「でもでも、おじさんのからだ、まだこんなに熱いんだもん。一生懸命手当てすれば、おじさんまた元気になれるよ。またボク、一緒にいられるよ！　もう誰も死なせたくないよ！」
それを聞くや、千鶴姉が驚いたようにあゆに問いかけた。
「……ねえ、あゆちゃん、『熱い』って、なぜ……？」
千鶴姉が、おっさんの死体に、手を近づけた。

『彼』……御堂の死因は、どう見ても明らかだった。
失血死。
致命傷と呼ぶほどの深い傷はない。大量の血液を失い、それでも敵を屠ろうとしたゆえの失血死だろう。

明らかに血を流しすぎた御堂に、体温と言えるものが、もう、残っているはずはなかった。
そう。『鬼』ではない、人間の御堂に……。
私は、御堂の冷たい腕に触れてみた。
脈拍、なし。
頸動脈にも触れてみる。
すでに体温と呼べるものはなく。
明らかに、御堂は息絶えていた。
そして、あゆの血だらけの手を退け、御堂の躯に触れてみた。
なに、これは。
明らかに、体温以上の、なにかの『熱』がある。
ヒトならぬ『鬼』である千鶴には、わからなかった。いや感じられなかった。
ちょうど御堂がその生命の終焉を迎えたとき、わずかの間、ヒトの力を制限する『封印』が外れたことを。
「不可視の力」すら抑える、結界がわずかの時間、解かれていたことを。
封じられた仙命樹の力が一瞬、一気に吹き出し、死んだ御堂の中で一瞬、息を吹き返した。
御堂は確かに死んだ。しかし、その中でなにかが『活き』ていた。

なにかは急激に、御堂の躯を再生した。
御堂の血液は出し尽くされたのではなく、出血が止まっていた。増血とともに、停止した心臓もいずれ鼓動を始めるのだろう。しかし、その『なにか』の力も急激に衰えつつあった。
このままでは、本当に危険な状態になる。——生き返ることなど、できない。
人として手を尽くさねば、この『活きているモノ』の力は発現せぬまま尽きてしまうだろう。
御堂とともに。
「……そうね、あゆちゃん。すぐ手当てしないと、御堂さんは助からないわ。手伝ってくれる？」

「うん！　千鶴さんっ！」
「お、おい。千鶴姉、正気？」
「梓、あなたも『鬼』なら、知っているでしょう？　世界には、尋常ではない生命力が、ごくわずかだけれど、存在している。御堂さんのなかには、『なにか』が『活きている』。もしかすればだけど、何時間かかるかはわからないけれど、大丈夫かもしれない……」
「何か、だって……？」
「私とあゆちゃんは、医務室へ行くわ。……闘いは、多分、終わっているから……。それじゃ梓、ここはお願いね」
「え、お願いって？」
そこに残されたのは、
あたし。
詠美。
みゅーみゅー泣く娘。
ブレーメンの音楽隊（マイナス1）。

長瀬のおっさんの、死体。
もしかして、ババ引いた？

677　偽りの形見

剥げた大地。粉砕された草木。頬を幾度と無く打つ、水滴。雨だ。
晴子はその中で目を覚ました。
痛みと、息苦しさ。草陰に、転がり込むようにして倒れていた。
すぐ隣にあった木が真っ二つに折れている。幹は三十センチもあった。
木が、身代わりになったのか？
少し首を巡らすと、折れた木の半身は案外すぐに見つかった。転がっていた。十センチ程に先に。
ぞっとする。一歩間違えば、自分がああなっていたのか？

だが、今生きている事には違いない。折れた木に、そっと感謝する。
立ち上がる。と、走る痛み。肩からではない。腕からでもない。足？
何となく見やる。なるほど、原因は知れた。折れた枝が突き刺さり、傷から一本の紅い川が流れている。
細い、細い枝だ。貫いてもいない。降りしきる雨に濡れている。抜き取ると、少し血が出た。
適当に縛り付ける。結局、左の袖も無くなった。
「――観鈴？」
呼び掛ける。何処にいるのかは知らない。倒れているのだろうか？　姿は見えない。
返事は無かった。
「居候？」
さらに呼び掛ける。図体も態度もでかい男だ。倒れていても、見える筈。
それでも姿は見えなかった。返事も無い。
それだけではない。少年も。あの少女も。そしてあの男も。
誰も居なかった。誰も。誰一人として、動くものは無い。虫一つ、見当たらない。
「居候？　……観鈴ッ！」
声は返らない。何処だ。何処にいる？
倒れているのかもしれない。万が一、傷を負っていたら？　自分は枝が刺さっていた。二人に何が刺さっているか知れたものではない。
細い枝でも、目に刺されば死にかねないのだ。自分は運が良かったに過ぎない。
名前を叫ぶ。観鈴の。往人の。決して届かない、叫び。次第に、その声は悲痛なものになっていった。
雨の水滴が喉を打ち、思わず咳き込む。ようやっと、悲鳴のような呼び声が止まった。
喉が痛かった。何度叫んだ？　知るか。数えてなどいない。

今が何時さえも解らない。自分が何処にいるのかすら解らない。
喉が痛い。ああ、目が、熱い。泣いているのか？違う。どうして泣くのだ？　何故？
……何でおらへんのやッ。観鈴！
喪失感。気が狂わんばかりの、焦り。もはや声など出なかったが、それでも名を呼んだ。
隣に居た者。護るべき人。狂気の中、狂気の島で、一つだけ、己のココロを繋ぎ止めた〝鎖〟。
あの子がいる。それだけで、晴子は〝普通〟でいられた。どんな時も、後ろにあの子が居たから。
何度も、自分の側から離れた。その度に感じた焦り。走り出したその背中が、死へと向かっているようで。
まるで、羽が生えているようで。
いつか、共に居た者が、泣いていた時。晴子は、観鈴の話をしてやった。往人の話をしてやった。
彼女は泣きやんだ。笑ってくれた。嬉しかった。

まるで、二人が、彼女を救ったようで。
だが、彼女はもう居ない。そして今、自分は、泣いている。
しっかりしぃ、自分。あさひちゃんに笑われんで。
それでも涙は止まらない。悔しかった。自分を殴りつけたかった。腹立ち紛れに、叫んでいた。
時折走るイメージ。血の海で、倒れる二人。お母さん、お母さん――苦しげに、名を呼ぶ声。
違う！　二人は生きている。そんな筈は無い。勝手な妄想だ。しっかりしろ。前を見ろ！
再び走るイメージ。無視だ。前を見ろ。名を呼べ。声を出せ！
白光。強烈な光。消えていく景色。光に包まれる、二人の姿。痛い程に鮮明なイメージ。
止めろ。ふざけるな。そんなものは見ていない。そんなものは見ていない。そんなものは見ていない。
二人は生きている。血も無い。死体も無い。何処かに逃げたんだ。そうだ。そうに決まってる。

黙れ！　溶けるわけがない！　止めろ。止めてくれ。観鈴。居候！　目が痛い。観鈴！

「――」

　もはや声など出ていない。口だけが、形を刻む。涙と、泥。歪んだ顔。

　血の滲む傷口。縛り付けられた布は、既に真っ赤だった。

　見えてくる、剥げた大地。既に三度も見た。ぐるぐると、同じ所を走っているのだ。

　もはやそんな事にも気付きもしない。怒り。焦り。そして、渇望。

　狂っていた。間違いなく、それは、狂っている。

　光を失った目が、何かを捉えた。草の中、雨に濡れて転がる物。

　シグ・ザウエルショート９㎜。

　ふらふらと、歩み寄った。既に走ってすらいない。一歩、一歩。倒れる寸前だ。

　ようやく、辿り着く。しゃがみ込んでそれを拾い上げた。

　やっと、見つけた。でも、それは観鈴ではない。観鈴ではなく。

「観鈴」

　ぽつり、と呟いた。声のない叫び声よりも、ずっと、ずっと明瞭な声で。

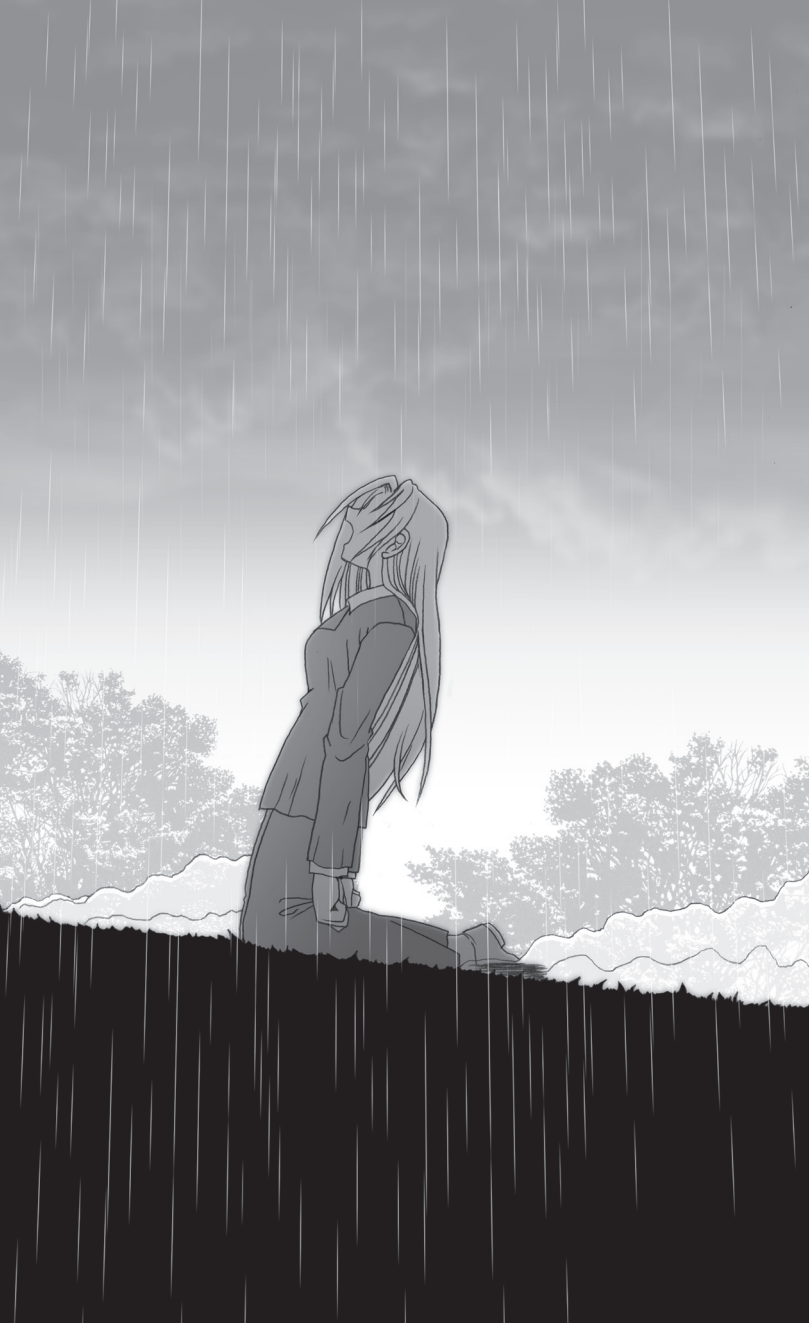
　持ち主は居ない。誰も居ない。たった一つ、一つだけ、残された銃。

　目が熱い。熱い。泣いているんだ。それだけ解った。

　立ち上がりもしなかった。ただ、ただ泣き続けた。泣き声が、雨の中に、消えていく。

　自分が、倒れていた事にも気付かなかった。落ちていく。奈落の底へ。

　そこで見た。思い出す、爆発の瞬間。白光。衝撃。そして、半身が溶け、消えた、愕然とした顔の、観鈴。

　それは明らかな、自分の記憶。間違えようのない、

記憶。
つまり、観鈴は死――
悲鳴。
最後に、晴子の意識は闇へと落ちた。

678　地下より香る誘惑の香り

「二人とももう死んでしまってたのか」
彰は降りしきる雨の中ただ空を見上げていた。
バラバラになりそうになる心を繋ぎ止める鎖、それは初音を無事に脱出させるという思い。
初音を思うということに関しては彰も内より生まれし鬼にも違いはなかった。
愛情と肉欲という致命的な違いはあったが……。
彰は思う。
すぐにでも初音の元に戻るべきか、それとも周辺をもっと探索して安全を確認してから戻るべきか。
鬼は思う。
初音の周りの男どもを始末するか、初音の安全を確保した上で狩りを楽しむか。
彰の中は初音を中心にまわっている、それは疑うことすら必要の無い事実。
『理性』と『本能』両方が認めた美しき花嫁。
しかし、その気持ちを揺さぶる事件が起きた。
それは雨の中、診療所に向かっていた時のことだった。
周辺の探索に変更するにしてもこのまま戻るにしても少々離れすぎていたためだ。
そして止みそうも無い雨を恨めしげに思っているときに岩穴を発見したのだ。
雨宿りと人が居ないかを調べるために岩穴に入ったときそれは見つかった。
「この床掘られた跡があるぞ……何が埋められてる

んだ」
『理性』の奴が独り言の抜かしてやがる、だがそんなことはどうだって良い。
この場所から微かに血と『女』の香りがする。同族の女の極上の香りだ。
余り深く埋められていなかったので比較的簡単に掘り返せた。
そしてそこに在ったのは……。
「隠し階段……、この下に何があるって言うんだ」
プンプン匂うぜ、間違いないこの下に『女』がいる。
しばらくはおとなしく辛抱して後から愉しむつもりだったのにな……。
この武装ではあまり無茶もできないしな、どうしたものか……。

679　策士

「この下。どうなってるんだろう？」
目の前にあるのは隠し階段。ぽっかりとその口を開けて彰を中へと誘っている。
彰はその好奇心を持って一歩を踏み出した。

奴は落ち着かない。
同族の女の香り。これほど喜ばしいものはない。
しかし奴は忌々しげに床を叩いた。彰の理性の檻。その床を。
力が足りぬ。
完全に表に出られるのならそれでよい。人間の理性に働きかける結界など、奴にはほとんど意味は無い。
本能で動く。本能で身体を動かす。本能で犯る。本能で殺る。

身体を乗っ取る程度でもいい。人間の力に毛が生えた程度のだとしても、奴には狡猾な頭脳がある。だが失敗した。依然として檻の中だ。
犯れぬ。同族の女を見つけてもこれでは犯れぬ。なんとか『彰』には堕ちてもらわねばならない。そのためにも、まずは犯りやすい。殺りやすい相手の豊富な診療所に戻るのが得策。
しかし意外だった。同族の女が他にもいたのだ。しかも熟成しているとみた。
なら未成熟な初音など、『彰』を堕とすために犠牲にしてもかまわぬかもしれん。

しばらく進むと明らかに人工物とわかる空間に出た。
清潔感のある白い壁。規則的に天井に張りついている電灯。
スプリンクラーに消火器。非常ベルらしきボタン。
なんともどこぞの大病院か研究施設のようだ。
冷房まで効いている。この島にあってなんとも豪華な。
彰が読む推理小説に、秘密の研究所などというチープなものは登場しなかった。
が、子供の時にＴＶで見た記憶から、ここを見てそう思わずにはいられない。
「つまり、あの施設の裏口ってとこかな……」
耕一が存在を予測した裏口のひとつ。場所もほぼその通りだった。
彰も作戦会議の中身をあとから聞いていた。耕一の推理力に少しばかり闘争心を燃やしたのを思い出す。
この場所を耕一に知らせた時の得意げな顔が目に浮かんだ。
(耕一さんか……)
初音のお兄さん。実際の兄妹ではなく従兄妹らしい。
——耕一お兄ちゃんが、髪が短くて、すごく逞し

い身体の、優しい人
――耕一、という男の名前を出した時、不自然なほど明るい声になった。
――多分、初音ちゃんが好きなのはその耕一という男なのだろう。
あの時の映像が浮かぶ。
黒い物が沸いた。
心の中にドロドロとした物が鬱積していくのがはっきりと分かる。
頭が、考えてはいけない事を勝手に考え出す。
(初音の心は本当に僕のものなのか?)
彰は自分を見る初音を思い起こす。
(あ……れ?)
その目はちゃんと自分を見ていた。
はず。
気がする。
気がした……。
だろう。
だといいな……。
いきなり自信が無くなった。
急激に愛し合った男女。その男など、一時でも離れてしまえばこうなってしまうのかもしれない。
彰の足が階段に向く。

人を操るのにたいした『力』など必要無い。
なにもかも、人の心を流し動かす策士の技なり。

680 復帰

ええ、えーと。
は、はじめましてですー(ぺこり)。
マルチと申しますう。
あのですね。
最新のわたしに事故があったみたいで、ここで復帰中なんですよー。いつもは来栖川の研究室で復帰

作業するはずなんですけれど。
　どうしたんでしょうね？

『はいはいはい！　それじゃとりあえず、荷物拾って！　繭！　あんたは飼育係！　そう、みゅーでもなんでもいいから！　こっこら！　ネコミミ引っ張るな！』
　大きな声が、聞こえますね。研究員の皆様とは違うような気がするんですが……。
『あー、解った解った！　ネコミミはやるから泣くな！　……名前はみゅー？　じゃそっちの鳥は？　は？　そいつもみゅー⁇　なのか⁇』
　なんだか動物さんがたくさんいるみたいですぅ。楽しそうで羨ましいですー。
『みゅー♪』
『……あー……もう、なんでもいいや……ホラホラ、行くよ！』
　はわわっ⁉　なんだかこっちへ来るみたいです！
　どどどどうしましょう⁉　と、とりあえず隠れましょうか⁉
（かっくん）
　……はうー……ラインが外せないみたいですー（涙。
　えーと、まだエネルギー管理ソフトが、ほとんどインストールされていないんですね。並列思考は、ほとんど完了してるみたいですけれど……ソフト全体の半分も入ってませんね。どうしてこんなところで、インストール中断しているんでしょうか……？
『ちょっと梓！　何であたしが荷物もちなのよ！』
『うるさいな！　じゃあお前、先頭きって突入するか⁉』
　……と、突入とか言ってますっ（汗。
『ま……まあ、あんたも、したぼくとして認めてあげるから、せいぜい努力なさい』
『だから、げぼくだって』
『みゅー、げぼくだよー』
『……（があぁぁん）』

あ、なんかすごく落ち込みムードが漂って来ますう。でも、わたしの辞書登録によると、やっぱり〝げぼく〟が正しいですねー。

（プシー）

自動扉が開くと同時に、身を低くして凄い速さで文字通り突入してきたのは……。

……なんとメイドさんでしたー。

ほ、本物ですよ！　わたし憧れちゃいますうー。でも、すごく物騒なもの持ってますね……本物のメイドさんって、厳しい仕事なんですね……。

「……誰も、いないね」

「ま、誰か居るなら、わざわざ大将がお出ましになる事もなかったろ」

「みゅ？」

はわわっ！

き、気付かれましたっ！

どどどどうしましょうっ⁉

681　画像

や、梓だよ。

その後どうなったか、気になるだろうから報告しとくよ。あたしは何とか動物と繭と詠美を纏め上げて、目的地に到達したんだ。

いや、ほんと大変だったよ…一匹増えてるし。動物は全部名前がみゅーみたいだし。わけ解んないよ。怒るとみゅーだし。悲しくてもみゅーだし。

……あーごめん。話が逸れた上に愚痴っちゃったね。

そんでさあ。マザーコンピューター室だけど。ほぼ確実に誰もいないだろうとは思ってたけど、それでも緊張して自動扉を抜けたんだよね。

何がいたと思う？　行動不能の、ぽややんとしたＨＭが一体だけだよ。

こう、何ていうのかな？　ＨＭってのはもっと真

面目なもんだと思ってたんだよね。
「はうー、わたし真面目ですようー」
……これだよ？　大体さ、〝はうー〟って誰が用法登録したんだよ。あたし社長ならクビだね、こんなの登録したヤツは。
おもいっきり脱力したところ、再び自動扉が開く音が聞こえてね。振り向くと、さっき追い抜いたＨＭがスタスタと歩いてきたんだ。ガラにもなく銃なんか構えてみたけど、彼女たちは無視したまま席についちゃったんだよね。
「通常業務及ビ維持作業ヲ再開シマス」
高らかに宣言すると、そのまま黙ってコンピューターとやりとりを始めていた。やっぱり、あたしたちのことは無視。
そうだよ、ＨＭってのは、こういうもんだろ普通。
「はわわー、やめてくださいー」
視線を流せば、繭に遊ばれて困っているぽややんがいる。
肩の力が抜けて、しばし呆けるあたしを引き戻したのは、詠美だった。
「梓、動かないなら放っといていいよ！　先にＣＤだよＣＤ！」
やけに張り切っている。解らないでもないけれど。これで何も情報が得られなかったら、おっちゃんも報われないもんな。
……でもあたし、コンピューターなんか解んないぞ？　詠美は大丈夫なのか……？
一抹の不安を抱きながら、とりあえず近場の椅子に腰掛けた詠美の傍らに立つ。
「とりあえずココにＣＤ入れて……」
「こ、これって!?　……ちょっと待ったあ！」
慌てて詠美を引き止める。
「この画面の隅にあるの……あたしじゃないか？」
「ほんとだ。あんた……無意味に胸デカイわねー」
「無意味ってゆーな！」
なぜか、画像は水着姿だった（いつ撮ったんだこ

れ!?)。
「隣は千鶴さんと、あゆちゃんだね」
画面をずらして、画像を前に持ってくる。麦藁帽子を被り、鶴来屋のはっぴを着て、アイスを売る千鶴姉。ダッフルコートを着て、たいやきを咥えたまま、全力疾走しているあゆ。うしろで出店の親父っぽいのが全力疾走しているような気がする。気のせいか?
……どうにも納得いかない画像ばかりだけど……たしかに、あたしたちだった。
「それは、データベースですねー」
振り向けば、繭にオモチャにされながら、ぽややんが発言していた。
「その番号と、あちらのレーダーの番号が対応してるんですよー」
その言葉に操られるように、あたしたちはきょろきょろと首を回していた。ぽややんの助言に従い、マウスを使って次々にページを変えて行く。
「梓達の画像に×がついてたのは……死亡扱いって事かな?」
「うん、偽装は上手くいってるみたいだね。
三人並んでたとこ見ると、疑われているんだろうけれど……詠美、あんたも付いてるよ、×印」
そこには、執筆中に寝てしまい、大口開けて涎をたらす詠美の姿があった。
「……なあ」
「なによ」
「無意味にデカイ口だな」
「う、う、うるさいわねっ! むかつくむかつくちょおむかつくっ!」
「喧嘩はだめですぅー」
「みゅーーーーー♪」

682　embryo

長瀬源三郎のいた、医務室。

私が殺した、狂った怪物。
今は、私たちがそこにいた。
人ならぬナニカとともに。
「おじさん、血だらけだよう。千鶴さん、早く、早く、助けてあげてよう」
人間としての御堂は、すでに息絶えていると言っていい。
私が、そしてあゆちゃんがここに来たのは、御堂の中に居る『熱』。その『ナニカ』がもしかしたら、御堂を助けるための何かだったら。
もうこれ以上、あゆちゃんを苦しめずに済むのなら。助けてあげたかった。
例え助からなかったとしても、納得させてあげたかったから。
自分たちは、最善を尽くしたと。
たぶん、偽善。
その、「何か」……少なくとも、すがる希望はあるのだ——　それが一体何であろうと。

人を救う過程で、あゆの、『ひとを殺した』意識が少しでも和らげば。
私たちは、人を救おうと、こんなにもがんばっているんだ。
偽善。

御堂の体は、確実に冷たくなってきていた。
ふたりで、少ない知識で、あり合わせの道具で、薬を塗り、包帯を巻き、失血を止めてやる。
何のために？
もう、流れるべき血など、わずかも残っていないのに。
「おじさん、どんどん冷たくなっていくよう……おじさん、助からないの？」
「あゆちゃん、……正直、御堂さんは、もう助からないかもしれない。でも、今はとにかく最善を尽くしましょう。お別れを言うのは、もっと後でもいいはずよ」

おわかれ、という言葉にあゆは反応した。
包帯を巻いているあゆにも解ったことだろう。一時は平熱以上の熱を持っていた御堂の体温が、確実に、屍体の『それ』に近づいていることを。
輸血。
造血剤。
解る範囲で、あらゆる手を打った。
しかし。
御堂の体は、ふたたびあの「熱」を帯びることはなかった。
もう、やめよう。
御堂にお別れを言い、私たちはここを立ち去るべきだ。
あゆはそれを納得できるだろうか？

「おじさん、頑張っ、て……ボクと、一緒に、戻ろう、よ……」
あゆは、幸いにも無傷だった御堂の胸をこすって、あたためようとしていた。
「おじさん、頑張って。ボクが、今度はボクが、助けて、あげる、から……」
何度も何度も繰り返して。懸命に。
あの熱が戻れば、御堂が生き返ることができると。
信じて。
信じようとして。
あゆは涙をぼろぼろ流して、
ひたすら息を切らせて。
それは、自分の命を、分け与えているようにすら見えた。
「あゆちゃん、もういいわ。おじさんはもう亡くなってしまった……梓たちのところに戻ろう？　最後におじさんにお別れしてあげて？」
正直、梓たちの無事が気になる。詠美も繭も、そ

れなりのショックを受けている筈だ。
特に藺。あの聡明だった娘が、壊れたように喚き叫んでいた。
一体何があったのか。御堂を優先して梓に任せてきたものの、いくらなんでも長居しすぎた気がする。
「いやだよ！　千鶴さん、まだまだ足りないよ！　今までボクはおじさんたちに助けられてばっかりだったから、今度はボクがおじさんを助けてあげなくちゃいけないんだよ！　おじさんを助けて、おうちに戻って、商店街も案内してあげたいし、ボクの学校も見せたいのに。もっともっと、おじさんと話したいことがあったのに。生き残れてよかったねって、ボクの知ってる人たちはみんな死んじゃったけど、それでも、おじさんや、千鶴さんや、他のみんなと、よかったねって、もう誰も死ぬのはいやなんだよっ！」
あゆはくしゃくしゃな顔をもっとぐしゃぐしゃにして、流れている涙はぬぐうのに追いつかなかった。
あゆちゃん……
あゆの涙が、かつて熱を持っていた御堂の体に、ぼたぼたと落ちていた。
その時。
あゆの落した涙が、光った。
光ったように、私には見えただけかもしれない。
たぶんそれが現実。
あゆの落した涙を受けた部分が、あかく光った。
それは、あのモノが発した熱と同じ。
なんて、風景。
奇跡。
まるで、……天使。
「ガキが、あんまり、世話をやかすんじゃねえぞ……」
「おじさん、やっと会えた……」
私はその時、知らず涙を流していた。
あるはずのない幻聴に。
その奇跡に。

「おじさん、助かるんだよね。また一緒にいられるんだよね」
「バカ、無理言うんじゃねえ。俺ぁもう駄目だ。全くらしくねえ。この島を出たら、俺は蝉丸を殺すか、俺が殺されるか、そのはずだった。それがガキを助けるために死んで、今またチビガキに呼び戻されるなんてよ。まったく、らしくねえぜ……」
「おじさん、もう、駄目、なの？」
「ああ。こうやってまたおめぇと話せるなんざ、……奇跡……みてえなもんだ。仙命樹の力ももう及ばねえ。最後の悪あがきってもんさ……まったくこの俺が、ガキによ……」
「おじさん……」
「いいか、あゆ。おめえは生き残れ。詠美も、そこの千鶴も、赤毛も、なんとしてもだ。俺にはもうなんの力もねえが、少なくともおめえらは今の今まで生き残れた。生き残れるさ。そしてなにもかも忘れて達者で暮らせ」
「おじさん……今までありがとう。ボク、おじさんのこと、絶対、忘れない」
「さよならだ。……あゆ、もしかしたら、お前は、俺の……」
消失。
何、今の……。
まるで……奇跡。
自分の涙に気づき、私は慌てて、それを拭う。
「あゆちゃん、今の……」
「千鶴さん、お待たせしてごめんなさい。ボク、もう行くよ。おじさんには、ちゃんと、さよなら言えたから」
奇跡。
幻聴。
なんでだっていい。
御堂は、安らかに旅立てたのだ。
あゆも、立派に、それを見送ることができた。
それだけだ。

ふと、気づいた。
もの言わぬ御堂の体の上、あゆが奇跡の涙を流したところに。
一粒の、小さな種。
いや、胚とでも言うべきモノ。
あゆちゃんはそれを、大事そうに両手で抱いた。

(おじさん……ボク、おじさんのきもち、受け取ったよ。帰ったら、皆に自慢するんだ。この何日か。ボクの近くには優しいおじさんがいて。顔はこわくて、そっけなかったけど。ボクを守ってくれていた。もう逢えないけれど、ボクはおじさんの気持ちを受け取ったから。それじゃ。さよなら……おじさん)

《葉鍵ロワイアル　第五巻　了》

端書

かくして、物語は佳境へと入って行くことになりましたとさ。

どうも、静かなる中条と申します。独自にプロモーションのフラッシュを作って、ハカギロワイアルを盛り上げている者です。別にサークルメンバーという訳ではないのですが、今回、書かせていただけることになりましたので、後記のページをいただくことに致しました。こんなところまで丁寧に読んでくださる皆さん同様、私も作品を楽しませていただいている、普通の読者の一人です。

この小説は、おそらく一生懸命に参加していた職人さんや読者のように、リアルタイムで追っていた方も多いと思います。が、私は、お気に入りのキャラが死んでしまった時点で読むのをやめた人の一人だったりします。残念ながら、作品が出来て行くのを追いかける楽しみはありませんが、奇しくもこうして、紙媒体化の恩恵を授かっている者の一人となっています。そんなわけで、実はまだ七巻の分を読んでいません。

ただ、もともとこの手の作品が好きということもあり、いつかは全部読んでやろうとは思っていましたが、きっかけも無かったために、こうして刊行されることになるまでは心の隅で「なんかあったな」程度にしか考えておりませんでした。もしかしたら、ずっと読まずにいたかも知れません。それが同人誌として出る、ということになったと2ちゃんねるで聞き付けたため、なんとなく応援……というよりは、洒落で宣伝のよ

うなことをやってみようかと思い立ちました。

元はといえばこのフラッシュ、こんないきさつでプロモーション「ごっこ」のつもりで作ったところ、セルゲイ@Dさんの目に止まりました。それでサークルを訪れて「本気でやっちゃってもいいですよ？」と言ったのが、去年の冬コミの時……　ちょうど一年前になります。それからは、あっという間に四作品ハカロワでフラッシュを作らせていただきました。もともとは一ファンの活動（今でもそのつもり）でしかなかったのですが、気が付けば同人ショップ様からも、公式扱いでフラッシュに直接リンクを張られたり、店頭でプロモーションムービーとして流していただいたりと、作品をお披露目させてもらえる場まで提供していただいています。

面白いもので、ネタのつもりが今や広告塔です。もう私も公式のつもりですが、ホントのところよく分かっていません。

そんなフラッシュ企画のリーダーですが、実際のところ、私は映像の編集をやっているにすぎません。このプロモーションフラッシュは音楽を依頼し、ＣＧを募集し、それらを使ってまとめることで作られている物です。音楽の作成依頼を受けていただいた方や、総勢三十人を越えるＣＧの作者の方々、ほかにもリアルタイムでテストしてくださる方などの力が無くてはまったく動かない企画です。それがこうして成功しているのも、ひとえにこういった「縁の下」の方々のおかげです。この場を借りて、改めてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。まだまだ至らぬところも多いかと思いますが、出来る限り頑張りますので、ご支援のほど、よろしくお願い致します。いつものみなさんのおかげで、今の私の立場があり

ます。

おそらくこの本が完結するときまで、私のフラッシュも続くことになると思います。五巻発表時に一つ出ていると思われるので……　残り二つ、よろしければ、ハカギロワイアル小説ともども、お付き合いいただきますようお願い致します。

最後に、このような場を与えてくださった、ハカロワ出版企画様と、こんなへんちくりんな文章まで読んでくださっている方々、ありがとうございました。

静かなる中条

【残り　2巻】

葉鍵ロワイアル　第五巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に

この場を借りて、お礼を申し上げます。

◎制作者一覧
制作協力：
111、JOYH-TV、L.A.R、MIU、Yellow 、#3-174、
いつかの書き手、独活大樹、葵原てぃー、久々野　彰、
冴村浩志、静かなる中条、真空パック、駄っ文だ、
ないしょ、ナナツさんだよもん、名無し達の挽歌、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、遥か昔の書き手、日向葵、
箕崎、観月、林檎、『。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、５、Alfo、Kyaz、NBC、命、感想スレＲの 142、
シイ原、七連装ビッグマグナム、フラスキ、暇人、
祐一＆浩平、名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、
訳あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様
（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（5）
二〇〇三年　一二月三〇日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：しまさらゆめき
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

9784210232498

ISBN4-70447-734-7

C0510

1922452381037

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE V

こんな奇跡、無い方が良かったのかもしれないね。

またひとり、想いを抱えたまま倒れてゆく。
生存者は残り28人。

彼らは生きる為の光明を見出しつつある。

だが、ゲームの管理者である長瀬一族が、
彼らの前に立ちはだかる…。
それぞれの思惑は交錯し、混沌を深めていく。

……何故、殺しあわなければならないのか？